

教育交渉史における日本教育観の形成と展開

(課題番号 11410075)

平成11・12・13年度科学研究費補助金

(基盤研究(B)(1))

研究成果中間報告書

平成13年3月

研究代表者 佐藤尚子

(広島大学教育学部教授)

は し が き

平成11年度より3カ年の研究でスタートした基盤研究(B)「教育交渉史における日本教育観の形成と展開」の第2年次における研究成果として、中間報告書を印刷する運びとなりました。研究分担者並びに研究協力者の尽力の賜として、あらためて感謝申し上げます。本報告書は、中間報告としてこれまで調査または収集した史資料の提示を中心に構成しました。第I部は西洋から見た日本教育観として、イギリス1件、フランス1件、アメリカ3件の成果がありました。第II部は東洋から見た日本教育観として、中国2件、韓国1件、インド1件の成果がありました。第III部は欧米語雑誌に見られる日本人の日本教育観として計6件の成果を収録しています。いずれも史資料収集の困難を克服し、調査・収集した貴重なものについての解題であります。なかには、解題を越えて論述まで進んでいるものがありますが、来年度の最終報告書では、この中間報告を生かした研究成果を予定しています。次に、申請の際の研究の目的を記して、本報告書の目的に代えます。

①研究のねらい

歴史を振り返れば、教育が変化する節目節目で、わが国は常に海外教育情報を摂取・導入してきた。したがって、日本教育史を教育情報の受容という側面から研究するものが多い。そして、外国教育受容における模倣性の強調や、外国教育の変容としての国風化、教育の国際化に反発する国粹化の指摘がなされている。しかし、より客観的にみれば、日本の教育は国際的な影響関係の中において成立してきたのであって、アジアの一つの小さな島国の特異な教育なのではない。本研究は、国際化が求められている日本の教育の特質と課題を見直し、自己革新力を回復するために日本教育史を再構成しようとするものである。日本の教育がけっして世界の教育から孤立して形成されたものでないことを明らかにするため、教育交渉史における欧米やアジアの国々の日本教育観の形成と展開をあとづける。

②研究の特色

現在、教育交渉史に関しては数多くの研究が進展し、また、その蓄積にもめざましいものがある。日本と欧米諸国の教育交渉史、日本とアジア諸国の教育交渉史の研究が近年相次いで成果をあげるようになってきている。すなわち、日本における欧米教育情報の受信の研究と、アジアへの日本教育情報の発信の研究とが進展している。しかし、欧米からの受信、アジアへの発信だけでいいのであろうか。一方向のみの教育交渉史の再検討が必要であろう。本研究の特色は、日本教育に関するこれまでの片務的な教育交渉史を修正し、教育交渉史をその名のとおりに、双方向の教育交渉史として構築しようとするところにある。

平成13年3月

研究代表者 佐藤尚子

共同研究組織 (五十音順、下線は中間報告書執筆者)

研究代表者	<u>佐藤尚子</u>	広島大学教育学部・教授
研究分担者	<u>鏡屋真理子</u>	国立教育政策研究所国際研究協力部総括研究官
	<u>阿部洋</u>	国立教育政策研究所・名誉所員
	<u>飯田史也</u>	福岡教育大学教育学部・助教授
	<u>稲葉継雄</u>	九州大学大学院人間環境学研究科・教授
	<u>岩田高明</u>	安田女子大学文学部・教授
	<u>大林正昭</u>	広島大学教育学部・助教授
	<u>蔭山雅博</u>	専修大学商学部・教授
	<u>久保田優子</u>	九州産業大学国際文化学部・助教授
	<u>橋本昭彦</u>	国立教育政策研究所政策・評価総括研究官
	<u>橋本美保</u>	東京学芸大学教育学部・助教授
	<u>平田諭治</u>	鳴門教育大学学校教育学部・助教授
	<u>弘中和彦</u>	筑紫女学園大学文学部・教授
	<u>藤井泰</u>	松山大学経営学部・教授
	<u>三好信浩</u>	甲南女子大学人文学部・教授
<u>森川潤</u>	広島修道大学人文学部・教授	
研究協力者	<u>楠本恭之</u>	広島大学教育開発国際協力研究センター・非常勤講師
	<u>小宮山道夫</u>	広島大学 50 年史編集室・助手
	<u>佐藤由美</u>	青山学院大学文学部・非常勤講師
	<u>高谷亜由子</u>	広島大学大学院教育学研究科・博士課程後期
	<u>竹本英代</u>	広島大学教育学部・助手
	<u>西川ひろ子</u>	中国短期大学・講師

目次

はしがき

第Ⅰ部 西洋

1. 「イギリスからみた近代日本の教育」に関する史料調査 …………… 藤井 泰 1
2. フランス語による日本教育情報文献解題 …………… 飯田 史也 7
3. International Kindergarten Union の機関誌にみられる 20 世紀初頭の日本幼児教育観
…………… 西川ひろ子 31
4. アメリカ国立公文書館における日米教育交渉史関係資料の概況
一 国務省記録を中心として一 …………… 橋本 昭彦 81
5. アメリカ国立公文書館所蔵国務省記録・日米教育交渉史関係文書件名目録
…………… 小宮山道夫・竹本英代 93

第Ⅱ部 東洋

6. 清末中国における日本教育視察—資料的考察— …………… 阿部洋・蔭山雅博 113
7. 『教育雑誌』にみられる民国前期の日本教育観—清末日本モデル観の変化—
…………… 佐藤 尚子 153
8. 韓国人留学生の日本教育観—留学生団体機関誌・学会誌【1905-1910】より—
…………… 佐藤 由美 167
9. インド「国民教育」史上の日本教育論 …………… 弘中 和彦 183

第Ⅲ部 日本—ヴェンクシュテルン『大日本書史』とナホッド他『日本帝国書誌』から—

10. 書誌および解題範囲について …………… 平田 諭治 213
11. 日本人・機関による日本教育関連の英語・ドイツ語・フランス語文献リスト
…………… 楠本 恭之 217
12. 個人執筆英語文献の解題（書籍類） …………… 平田 諭治 227
13. 個人執筆英語文献の解題（雑誌記事類） …………… 楠本 恭之 235
14. 諸機関執筆英語文献の解題 …………… 大林正昭・平田諭治 271
15. 個人執筆ドイツ語文献の解題 …………… 高谷亜由子 291

1. 「イギリスからみた近代日本の教育」に関する史料調査

藤井 泰 (松山大学)

はじめに

イギリスにおける日本教育情報に関する研究としては、H. ダイアーを中心とした三好信浩の一連の研究や平田諭治『教育勅語国際関係史の研究』（風間書房、1997年）などの優れた研究が存在する。だが、イギリスにおける近代日本の教育観の形成に関する体系的な史料調査は今後の課題として残されていた。

筆者もこれまでイギリス中等教育史および日英教育交渉史の分野でいくつかの研究に従事してきたが、本稿は、このような研究を踏まえた上で、本研究プロジェクトの開始後これまで行ってきた史料調査の一端を覚え書き風にまとめたものである。

なお、史料調査の枠組みとしては、橋本美保「米国メディアが伝えた幕末・明治初期の教育——西洋からみた近代日本の教育」教育史学会第44回大会発表レジュメ、2000年10月が参考になったことを付記しておきたい。

1. 政府文書

①Parliamentary Papers

近代日本の教育に関するイギリス政府の最初の文書（議会文書、刊本）は、次の文献であるとされている。*Report by Mr. Watson, Her Majesty's Secretary of Legation, on the present Educational System of Japan, December 29, 1873.*（未見）Parliamentary Papers.

「ワトソンの報告書を第1部とし、パークスが有用と認めた英文新聞からの抜粋記事を第2部としている。後者は『ジャパン・ウィークリー・メール』に掲載されたアメリカ人グリフィスの論説である。前半のワトソン報告書は、ワトソンからパークスへの書簡であり、日本における統計学の未発達、通訳の未熟さなどから情報収集に苦勞した旨が記せられている。日本教育の近代化が緒についたばかりのこの時期の教育状況について外国人の手による報告書が作られたことの意味は大きい」（三好信浩『ダイアーの日本』福村出版、1989年、107-108頁。）

これ以後、Parliamentary Papers に日本教育記事が掲載されているかどうかは、未調査である。Parliamentary Papers は刊本であるが、イギリス公文書館やロンドン大学などには全巻セットが所蔵されている。日本の図書館等で全巻セットが所蔵されているかは未確認である。

②教育院（Board of Education）——中央教育行政機関

19世紀末に中央教育行政機関の中に設置された海外教育情報室が出版した一連の報告書。1895年に教育局（Education Department）に設置された特別調査室（Office of Special Inquires）であった。初代室長はイギリスの比較教育学の創始者であるM. サドラー（在職期間は1903年まで）である。サドラーが退任後も、この特別調査室は存続して、海外教育情報の調査にあたっていた。

*報告書は、Board of Education, *Special Reports on Educational Subjects*, HMSO と

して刊行されている。この中にも、日本教育情報が収録されている。同書は、日本でもリプリント版が発行されている。

*Board of Education, *Japanese Educational Exhibition: Notes on the Organization of Japanese Education*, HMSO, 1907.

1907年に、伏見宮の渡英を待って、日本教育博覧会が開催された。これを記念して特別調査室が作成した20頁ばかりの小冊子。「(当時の)ヒース局長自らが菊池の講義を定期的に聴講して筆記し、そのノートを帰国前の菊池が校訂したものである。」(平田諭治、前掲書、286頁)

*M. Sadler, *Moral Instruction and Training in Schools: Report of an International Inquiry*, Vol.1 and 2, London, Longman, Green & Co., 1908. なお、サドラーは、自分の部下であったモラント(その後、事務次官になる)との確執もあり特別調査室長を辞任して、1903年から1911年にかけてマンチェスター大学の教育学教授をつとめていた。この間、道德教育の国際調査を手がけており、日本の道德教育にも関心をもち、渡英していた吉田熊次と菊池大麓の論説を報告書の中に収録した。

サドラーは、同報告書の序文に、日本の道德教育に対してコメントを行っている。このコメントは、当代一流の教育行政官、教育者であったイギリス人によってなされたものであり、重要であろう。

2. 一般雑誌

19世紀の英米雑誌件名索引には、W. Poole, *Poole's Index to Periodical Literature, 1802-1906*, New York, Peter Smith, 1882-1908 がある。同書を調査した橋本美保の研究成果がある(上記の文献)。

また *The Wellesley Index to Victorian Periodicals*, 5 Vols, 1989 も重要な情報源となる。

このような一般雑誌の日本教育記事を収集し、分析することは未開拓の分野である。もっとも、東田雅博『大英帝国のアジア・イメージ』ミネルヴァ書房、1996年という優れた研究がだされているので、参考になろう。東田は、ヴィクトリア時代の代表的な総合雑誌の論文を史料としている。その雑誌とは、*Quarterly Review*, *Edinburgh Review*, *Blackwood's Edinburgh Magazine*, *Westminster Review*である。

なお、必ずしも一般(総合)雑誌とは言えないが、科学という特定の分野に特化した雑誌である『ネイチャー』にはかなりの数の日本教育記事が掲載されている。この点については、ダイアーとの関連で三好信浩の研究がある。もっとも、イギリスの日本教育観の形成という観点から『ネイチャー』の記事を分析するのは、今後の課題であろう。

3. 新聞

18世紀末に発刊された『タイムズ』には、筆者の予備的な調査でも、日本教育記事が掲載されている。1905年までの記事索引は、最近出たCD-ROM版の *Palmer's Index to the Times 1790-1905* が便利である。それ以降は、タイムズ社が刊行している *Index to the Times News Paper* で調べるしかない。

今世紀になって『タイムズ教育版』 (*Times Educational Supplement*) が週刊で刊行されるようになった。教育関係者に広く読まれたものである。

このように索引があるので、『タイムズ』の日本教育記事を収集し、その内容を時系列的に分析することは可能であろう。

新聞ジャーナリズムの先進国イギリスには『タイムズ』以外にも、全国紙や地方紙が数多く刊行されている。『マンチェスター・ガーディアン』は全国紙として重要である。しかし記事索引が出ていないので、文献調査は極めて困難である。

なおイギリスの新聞は、ロンドン郊外のニュース・ペーパー・ライブラリーで閲覧・コピーが可能である。

4. 教育雑誌

19世紀から20世紀前半にかけてイギリス刊行された教育雑誌に関する包括的なリストを知る便利な情報源を見いだすことはできなかった。イギリス教育史の先行研究をみても、教育ジャーナリズム研究は手付かずの状況であり、未開拓の領域である。もっとも、教育関係者を対象とした民間の教育雑誌は19世紀から刊行されていたことも事実である。筆者がイギリス教育史研究を進める上で気が付いた教育雑誌には、たとえば、次のようなものがある。

- ・ *The School Board Chronicle* (19世紀後半の地方教育行政関係者のための雑誌)
- ・ *Journal of Education* (19世紀から刊行されていた教育雑誌)
- ・ *The Record of Technical and Secondary Education* (19世紀末の雑誌)
- ・ *Education* (20世紀初頭に発足した地方教育当局関係者のための雑誌)

(不十分な調査ではあるが、*Education* 誌には、“Technical Education in Japan”, April 16, 1909; “London Education at the Japan-British Exhibition”, April 29, 1910; “Women’s Congress at the Japan-British Exhibition”, May 27, 1910 の3件の記事があった。コピー入手済み。)

5. 著作

近代日本(の教育)に関する著作は、少なからずのイギリス人(とくに来日イギリス人教師や旅行者など)によって刊行されてきた。とりわけ、近代日本の教育の評価に関しては、ダイアラーの日本研究の成果、1904年刊行の『大日本』と1909年刊行の『世界政治の中の日本』

という2書はとくに重要であろう。

イギリス人による近代日本をテーマにした著作に関する文献一覧(解題)は、管見の限り、存在しないようだ。この種の文献一覧の作成のためには、たとえば、ロンドン大学のアジア・アフリカ学院(SOAS)図書館で文献調査をする必要もあろう。

6. 日本に関する書誌

広島大学日本東洋教育史研究室がヴェンクシュテルン(F. Wenckstern)およびナホッド(O. Nachod)の書誌を調査し、英米を中心とした日本人以外の著者によって英文で書かれた日本教育文献をリスト・アップしたものが付表である。重要な史料も含まれているので、いくつか文献解題を行う予定であったが、この作業は最終報告書に譲りたい。

発行年	著者	英題	雑誌名	巻号	発行所	ページ数
文献リスト・ウエブシテリルン『大日本書史』						
1878	Ballagh, J. C.	A Japanese School, Illustrated	Harper's Monthly Magazine	57	New York	663
1878	Chamberlain, B. H.	Educational Literature for Japanese women	Journal of the Royal Asiatic Society for Great Britain and Ireland	10(3)	London	325-343
1883	Groth, A.	Higher education in Japan	Chrysanthemum and Phoenix	3(1,2)	Yokohama	11-16, 62-67
1891.10	Meriwether, C.	A school ceremony in Japan	Nation	53	New York	445
1893	Wigmore, J. H.	Legal education in modern Japan	Green Bag	5	Boston	17-, 78-85
1902.4	Leonard, M. C.	Normal schools in Japan	Educational Review	23	New York	371-
1904.2		Nautical education in Japan	Nature	69	London	331-
1904.3	Simmons, A. T.	Education and progress in Japan	Nature	69	London	416
1904.5		What the people read in Japan	Review of Reviews, American edition	29	New York	577-578
1904.12	Dyer, H.	Education and national efficiency in Japan	Nature	71	London	154-
文献リスト・ナホド『日本帝国書誌』						
1907	Dennis, J. S.	Education as a National Asset of Japan	Princeton Theological Review	3		467-476
1909	Clinton, J. M.	Chinese Students in Japan	Chinese Recorder	Okt.		570-579
1910	Medley, Austin W.	Student Life in Tokyo	Japan Magazine	1		44-49
1910		The Imperial University	Japan Magazine	1		659-665
1915	Schneider, B.	Mission Schools and State Education in Japan	Chinese Recorder			164-169
1916	Brown, Frank L.	The Sunday School Situation in China, Korea and Japan	International Review of Missions	5		614-627
1916	Sailer, T. H. P.	Some Impressions of Education in the Far East	International Review of Missions	5		540-551
1918	Hicks, Charles R.	Glimpses of Nippon at School	Journal of Race Development	Jan.		328-345
1924		The Educational System of Japan	Japan Magazine	14(10)		352-355
1925	Armstrong, R. G.	The Japanese Government and Christian Education	Educational Review			127-134, 135-140
1928	Pickering, E.	How the Young Japanese Dream of Oxford	Hibbert Journal	26		484-499
1930	Reichauer, A. K.	Christianity and Women's Higher Education in Japan	International Review of Missions	19		75-86
1932.10		Waseda Observes 50th Anniversary	Trans-Pacific	20		10
1933.1	Crewson, W. S.	Teaching Unit in Japan	Journal of Geography	32		27-35
1933.1	Sherwood, H. N.	Far Eastern Crisis	Religious Education	28		88-91
1933.6		Educators Confer on Education Move	Trans-Pacific	21		12
1933.6		Head of University Submits Resignation	Trans-Pacific	21		13
1933.7		Government Plans Education Reform	Trans-Pacific	21		16
1935.3	Ponsonby, Richard	Japanese Education Viewed by an Englishman	Cultural Nippon	3		303-318
1935.3	Price, Willard de Mille	Schooled to Rule	Asia	35		156-163
1936	Anstice, E. H.	Japan's Educational System	Asiatic Review	32(112)		735-741
1937.3	Sinco, Vincente G.	A View of Japanese Thought and Education	The Philippine Social Science	9(1)		37-43
1937.9		The Address Delivered by Court Aysuke Kabayama at the General Meeting of World Federation of Education	Contemporary Japan	6		363-368
1937.12	Monroe, Paul	Tokyo Educational Conference and War	Social Frontier	4		81-84

2. フランス語による日本教育情報文献解題

飯田 史也 (福岡教育大学)

フランス語による日本教育情報文献解題 凡例

①本稿「フランス語による日本教育情報文献解題」については、開国期から太平洋戦争期にいたる時期のものについて、ヴェンクシュテルン『大日本書誌』およびナホッド『日本帝国書誌』（両書誌についての解説は、平田諭治氏の頁を参照）所収の記事のほか、つぎの3つの書誌に典拠して調査した。

1)松田 清、白幡洋三郎編集『国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録—1900年以前刊行分—』第2巻(1854—1886)、第3巻(1887—1900)、国際日本文化研究センター、1998年、(以下『日本関係欧文図書目録』2、3と略す)。

2)Patrick Beillevaire, *Le Japon En Langue Française -Ouvrages et articles publiés de 1850 à 1945-*, Société Française Des Études Japonaises, ÉDITIONS KIMÉ, 1993. (以下 J.E.L.F.と略す)。

3)「第一回日仏関係図書展覧会目録解説」(日仏会館学芸部編輯『日佛文化』第一輯)、白水社、1927年、(以下「日仏関係図書展覧会目録解説」と略す)。

上記の5書誌によらず、筆者において直接入手、複写したものは、その所蔵を記した。うち1900年に設立された Société franco-japonaise de Paris (パリ日仏協会)の紀要 *Bulletin de la Société franco-japonaise de Paris* については、横浜開港資料館ブルーム・コレクション(Blum Collection)所蔵のバックナンバーを調査し、また1927年より刊行された日仏会館の学報 *Bulletin de la Franco-Japonaise* (日本名:『日佛會館學報』)については、日仏会館図書室所蔵のバックナンバーを調査した。

②単行書のうち、構成の把握できたものについては、教育情報の記述されている部分の章・節・項などの見出し名称を 内容 として抜き出し、括弧内に和訳した。

③著者、著作等について、筆者において適宜解説を付した。

④括弧内は、すべて筆者による。

■ 1

- 著者 Laurence Oliphant (ローレンス・オリファント)
書名 La Chine et le Japon. 2 vols. (中国と日本 2巻)
出版社 Paris, Michel Lévy Frères, Libraires-Éditeur
発行年 1860
総頁数 Tome Premier 447p. Tome Second 453p.
内容 Chapitre III École japonaises à Nagasaki (第三章 長崎の日本人の学校)
Chapitre VIII École de Yédo (第八章 江戸の学校)
Talents linguistiques des Japonais (日本人の語学力)
Système d'éducation (教育制度)
Intelligence des Japonais (日本人の知性)
Chapitre IX Manière des Japonais de traiter les enfants (第九章 日本人の子どもの躰の方法)
典拠書誌 『日本関係欧文図書目録』 2
解説 川崎晴朗『幕末の駐日外交官・領事官』雄松堂出版、1988年、108-9頁によると、筆者オリファントは1860年駐日イギリス公使館一等書記官。61年7月、東禅寺事件で負傷、帰国。本書はオリファントの著作の仏訳。

■ 2

- 著者 Kobaudaisi (弘法大師)
書名 Zitu-go-kyau et Do-zi kyau: l'enseignement de la verite et enseignement de la jeunesse. (実語教と童子教：真理の教育と子どもの教育)
発行年 1876
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■ 3

- 著者 Georges Bousquet (ジョルジュ・ブスケ)
書名 Le Japon de nos jours. (今日の日本) 2 vols.
出版社 Paris, Librairie Hachette et C^{ie}
発行年 1877
総頁数 Tome Premier 428p. Tome Second 469p.
内容 Tome Second Chapitre XI L'Éducation National (第2巻 第十一章 国家の教育)
§ I La langue (言語)
§ II L'écriture (文字)
§ III L'instruction publique (公教育)

典拠書誌 『日本関係欧文図書目録』 2
解 説 1872年来日。司法省法学校で法学教育に従事した。
日本語訳には、野田良之、久野桂一郎共訳『ブスケ 日本見聞記』1、2みす
ず書房、1977年がある。

■ 4

著 者 E. Villetard (E. ヴィユタール)
書 名 Le Japon. (日本)
出版社 Paris, Librairie Hachette et C^{ie}
発行年 1879
総頁数 192p.
内 容 Chapitre IX -La Religion et les Cérémonies Religieuses
-La Langue Japonaise et l'Instruction Publique
(第IX章—宗教と宗教的儀式—日本語と公教育)
III La langue et l'alphabet (III 言語と文字)
Les écoles des nobles et écoles du peuple(貴族の学校と庶民の学校)
La littérature savante et la littérature populaire (学術文学と大衆文学)
Une langue rebelle (難解な言語)
Les jeunes Japonais et les langues Européennes(日本の若者と欧州諸言語)
Enseignement supérieur (高等教育)
École du gouvernement (公立学校)
Manufacture impériales (官営工場)

典拠書誌 『日本関係欧文図書目録』 2

■ 5

著 者 Tokyo École des langues étrangères (東京外国語学校)
書 名 Catalogue des Livres et du Matériel Scientifique. (書籍、科学教材目録)
発行年 1880
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■ 6

著 者 Pierre Bons D'Anty (ピエール・ボン・ダンティ)
記事名 "L'éducation des femmes au Japon." (日本の女性教育)

掲載誌 Annales de l'Extrême-Orient
巻号 V
発行年 1882-1883
掲載箇所 pp.302-307
典拠書誌 J. E. L. F., ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■ 7

著者 P. de Lucy-Fossarieu (P. de ルシー・フォサリユー)
記事名 “L' instruction au Japon.” (日本の教育)
掲載誌 Annales de l'Extrême-Orient
巻号 V
発行年 1882-1883
掲載箇所 pp.260-261
典拠書誌 J. E. L. F., ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■ 8

著者 Shyomou-Kiokou (商務局)
書名 Aperçu de l' Instruction Publique au Japon. (日本の公教育概要)
発行年 1883.
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■ 9

著者 Vidal Bey (ヴィダル・ベイ)
記事名 “De l' instruction publique au Japon.” (日本の公教育について)
掲載誌 Bulletin de l' Institute Egyptien 2nd Series
巻号 2
発行年 1883
掲載箇所 pp.107-117
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■ 10

著者 Raymonde de Dalmas (レイモンド・ドウ・ダルマス)
書名 Les Japonais -Leur Pays et Leur Mœurs. (日本人—その国家と習俗)
出版社 Paris, Librairie Plon, E. Plon, Nourrit et C^{ie}
発行年 1885

総頁数 338p.
内容 ChapitreXI Les Japonais (第XI章 日本人)
Le Japonais intellectuel (日本の知識人)
La mère et ses enfants (母親と子どもたち)
ChapitreXXII Instruction et Médecine (第XXII章 医学教育)
Instruction primaire et secondaire (初等・中等教育)
Écoles communales et préparatoire (公立小学校、予科学校)
Écoles spéciales (専門学校)
Écoles de médecine (医学校)
典拠書誌 『日本関係欧文図書目録』 2

■11

著者 Yasu-waru O-gawa (オガワ・ヤスハル)
記事名 “Ko-ko-wa-rai(La voie de la piété filiale).”(孝行往来(親孝行の方法))
掲載誌 Le Museon
巻号 5(2)
発行年 1886
掲載箇所 pp.143-154
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■12

著者 Paschal Grousset(André Laurie) (パスカル・グルセ(アンドレ・ローリー))
書名 Autour d'un lycée japonais. (日本のリセをめぐって)
出版社 Bibliothèque d'Éducation et de Récréation, J.Hetzl et C^{ie}
発行年 1886
総頁数 264p.
所蔵 横浜開港資料館ブルーム・コレクション
小説。なお本書挿し絵は、■26の フェリックス・レガメ (Félix Regamey) が描いたもの。
1895年に、Laura E. Kindallによる英訳版 Schoolboy Days in Japan., Boston, Estes and Lauriat Publishers. (日本関係欧文図書目録3に所収) が出版されている。

■13

著者 Tokyo Imperial Cabinet, Section of (1880年開館の「東京図書館」(帝

国図書館の前身)か)

書名 Catalogue des Livres Français. (フランス図書目録)
発行年 1887
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■14

著者 Émile Labroue (エミール・ラブロー)
書名 L'empire du Japon. (日本帝国)
出版社 Limoge, Marcharbou & C^{ie}, Imprimeurs-Libraires
発行年 1889
総頁数 327p.
内容 Troisième Partie (第3部)
Chapitre III Instruction Publique (第III章 公教育)
Instruction obligatoire et gratuite (義務・無償教育)
Districts académiques (学区)
Écoles normal (師範学校)
Écoles de langues (外語学校)
Écoles de médecine (医学校)
Les Facultés (学部)
La langue japonaise (日本語)
Caractères japonais. (日本人の特性)
École normale de d'Ehiohoko. (Ehiohokoの師範学校)
Rapport de l'Université de Tokio (東京大学報告)
Collation de grades (学位授与)
Quatrième Partie (第4部)
Chapitre III Médecine, Hygiène (第III章 医学、保健衛生)
Écoles de médecine de Tokio (東京医学校)

典拠書誌 『日本関係欧文図書目録』 3

解説 『日本関係欧文図書目録』 3 掲載の標題紙には、著者Émile Labroueは、元ボルドー(Bordeaux)のリセの歴史と地理学の教師、ボルドー地理学会名誉副会長(Vice-Président Honoraire de la Société de Géographie de Bordeaux)とある。

■15

著者 Charles Jules Layrie (シャルル・ジュール・レイル)

書名 La restauration impériale au Japon. (日本の王政復古)
出版社 Paris, Armand Colin et C^{ie}, Éditeurs
発行年 1892
総頁数 387p.
内容 Chapitre XIV L'Instruction (第XIV章 教育)
典拠書誌 『日本関係欧文図書目録』 3

■16

著者 Jean Baptiste Arthur Arrivet(ジャン・バプティスト・アーサー・アリヴェ)
記事名 “Enseignement des beaux-arts au Japon.” (日本の美術教育)
掲載誌 Revue Française de Japon
巻号 4
発行年 1893
掲載箇所 pp. 232-244
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』
解説 筆者は、1873年パリ外国宣教会派遣宣教師として来日、1878以降、東京外国語学校、司法省法学校、東京大学予備門などでフランス語を講じる。

■17

著者 M. L'Abbé G. Bruley des Varannes (ブリュレイ・デ・ヴァラン)
書名 Le Japon d'aujourd'hui. (今日の日本)
出版社 Tours, Alfred Mame et Fils, Éditeurs
発行年 1893
総頁数 368p.
内容 XVII Utilité de l'enseignement de la langue française au Japon
(XVII 日本におけるフランス語教育の効用)
典拠書誌 『日本関係欧文図書目録』 3
解説 著者は、M. L'Abbéとあるように教皇派遣宣教師(Missionnaire Apostolique)。

■18

著者 Jean Dhasp (ジャン・ダスプ)
書名 Le Japon contemporain. (現代の日本)
出版社 Paris, Librairies-Imprimeries Réunies
発行年 1893
総頁数 344p.

内 容 Deuxième Partie Université de Tokio (第2部 東京大学)
-L'enseignement (教育)
-Le professeur (教官)
-L'étudiant (学生)

典拠書誌 『日本関係欧文図書目録』 3

■19

記事名 “L'enseignement et la magistrature au Japon.” (日本の教育と行政官)
掲載誌 T'oung Pao. Archives pour l'histoire etc. de l'Asie Orientale
巻 号 4(5)
発行年 1893
掲載箇所 pp. 426-430
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■20

記事名 “Les “terakoya” ou anciennes écoles primaires du Japon.” (寺子屋 日本の昔の初等学校)
掲載誌 Revue Française de Japon
巻 号 2(19, 20)
発行年 1893
掲載箇所 pp. 232-244
典拠書誌 J. E. L. F., ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■21

著 者 D. Bellet (D. ・ベレ)
記事名 “L'enseignement technique au Japon.” (日本の技術教育)
掲載誌 Revue Scientifique
発行年 1896
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■22

著 者 Kakuzô Okakura (岡倉覚三), C. Braquehay (C. ブラケイエ)、A. Arrivet (A. アリヴェ)
書 名 L'enseignement des beaux-arts au Japon. (日本の美術教育)
発行年 1896

総頁数 24p.
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』
解説 A. アリヴェは■16のアリヴェ。

■23

著者 Eugène Verrier (ユジェーン・ヴェリエ)
記事名 “Les écoles au Japon.” (日本の学校)
掲載誌 Mémoires du Comité sino-japonais, tartare et indochinois. Séance du 11 novembre 1897. (1897年11月11日開催、民族学会:中国、日本、タター
ル、インドシナ部会記録)
発行者 Paris, Aux bureaux de la Société d'ethnographie, 1897.
発行年 1897
掲載箇所 pp. 97-102
典拠書誌 J. E. L. F.

■24

著者 Félix Martin (フェリックス・マルタン)
書名 Le Japon Vrai. (真実の日本)
出版社 Paris, Bibliothèque-Charpentier, Eugène Fasquelle, Éditeur
発行年 1898
総頁数 294p.
内容 Chapitre III Religions, Instruction et Justice (第三章 宗教、教育、司法)
L'Instruction (教育)
Dotation de l'enseignement primaire (初等教育歳費)
Situation misérable de l'instituteur japonais (日本の教師の悲惨な状
況)
Lente diffusion de l'instruction (教育の普及の遅れ)
Insuffisance de enseignements secondaire, supérieur et professionnel
(中等・高等・専門教育の不足)
Vice capital de l'enseignement japonais: intolérance et haine de
l'étranger (日本の教育の重大な不備: 外国人の排斥と嫌悪)
Impossibilité de l'adaptation de la langue japonaise aux idées
abstraites et aux sciences exactes (抽象的概念と精密科学への日本語適
用の困難性)
Décadence de la langue française au Japon (日本におけるフランス語の

衰退)

典拠書誌 『日本関係欧文図書目録』 3

■25

著者 Steichen. M. A. (スタイケン・M. A.)

書名 L'Instruction de Shimabara. (島原のインストラクション)

発行年 1898

典拠書誌 「日仏関係図書展覧会目録解説」

■26

著者 Tokyo Higher Commercial School (東京商業学校)

書名 Annuaire de l'École Supérieure de Commerce. (東京商業学校年報)

発行年 1898

典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■27

著者 Félix Régamey (フェリックス・レガメ)

記事名 "L'enseignement des beaux-art au Japon.

L'École Imperiale des Beaux-Art". (日本の美術教育; 東京美術学校)

掲載誌 Revue de l'art ancien et moderne

巻号 6

発行年 1899

掲載箇所 pp. 321-334

典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

解説 著者レガメは1876年来日。1877年まで日本、中国、インドを旅行し、スケッチをパリ万博に出品。『レガメ日本素描紀行』など。

■28

著者 Ministère de l'Instruction Publique (文部省)

書名 Notice sur l'organisation actuelle de l'Instruction Publique au Japon.

(日本の公教育の現在の機構概要)

発行年 1899

典拠書誌 「日仏関係図書展覧会目録解説」

■29

著者 Tokyo Fine Art School (東京美術学校)
書名 Notice sur l'École des Beaux-Art. (東京美術学校概略)
発行年 1899
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■30

著者 Tokyo Imperial University (東京帝国大学)
書名 Résumé du Calendrier de l'Université Imperiale des de Tokyo. (東京帝国
大学学事日程概説)
発行年 1899
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■31

書名 Notice sur l'École des Beaux-Art dans l'Ueno Park Tokyo. (東京上野公園
東京美術学校概略)
発行年 1899.
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■32

著者 Commission impériale du Japon à l'Exposition universelle de Paris, 1900
(1900年パリ万国博覧会日本派遣団)
書名 L'agriculture au Japon. (日本の農業)
出版社 Paris, Maurice de Brunoff, Imprimeur-Éditeur
発行年 1900
総頁数 117p.
内容 LivreIV Sériciculture (第IV巻 養蚕)
Chapitre II Enseignement et essais (第II章 教育と農業試験)
LivreVI Législation et Administration agricoles(第VI巻 農業法規と農政)
Chapitre III Enseignement agricoles (第III章 農業教育)
典拠書誌 『日本関係欧文図書目録』3

■33

著者 Félix Régamey (フェリックス・レガメ)
記事名 "L'enseignement du dessin dans les écoles des filles au Japon." (日本の
小学校における図画教育)

掲載誌 Revue des Art decoratifs
巻号 20
発行年 1900
掲載箇所 pp.113-125
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』
解説 著者 Félix Régameyについては■26参照。

■34

著者 I. Eggermont (I. エジェルマン)
書名 Voyage autour du globe. Japon. (世界一周、日本)
出版社 Paris, Librairie Ch. Delagrave
発行年 1900
総頁数 522p.
内容 VII TOKIO (VII 東京)
L' instruction publique au Japon (日本における公教育)
Visite des écoles (諸学校への訪問)
典拠書誌 『日本関係欧文図書目録』 3
解説 同じ著者の Le Japon Histoire et Religion. (日本、歴史と宗教) Librairie Ch. Delagrave, 1885. 標題紙によると、I. エジェルマンは、在パリベルギー公使館一等書記官 (Premier Secrétaire de la Légation de Belgique a Paris)。

■35

著者 Tokyo Blind and Dumb School (東京盲啞学校)
書名 Rapport sommaire sur l'École des aveugles et sourds-muets de Tokyo.
(東京盲啞学校概説)
発行年 1900
総頁数 41p.
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■36

著者 Tokyo Higher Normal School (東京高等師範学校)
書名 Notice sur l'École Normal Supérieur de Tokyo. (東京高等師範学校概略)
発行年 1900
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■37

著者 Tokyo Industrial School (東京工業学校)
書名 Résumé Historique et Statistique. (沿革、統計資料)
発行年 1900
総頁数 21p.
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■38

著者 Félix Régamey (フェリックス・レガメ)
書名 Le Dessin et Son Enseignement dans les Écoles de Tokio. (東京の諸学校における図画とその教育)
発行年 1902
総頁数 60p.
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』
解説 著者 Félix Régameyについては■26参照。

■39

著者 W.T.
記事名 “Le Conseil Supérieur de l’Instruction Publique au Japon.” (日本における「高等教育会議」)
掲載誌 Revue Internationale de l’Enseignement
巻号 44
発行年 1902
掲載箇所 pp.193-197
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』
解説 「高等教育会議」は1896(明治29)年に設置され、1913(大正2)年に廃止されて「教育調査会」に引き継がれた、初の文部大臣諮問機関。

■40

著者 George Weulersse (ジョルジュ・ヴァーレルス)
記事名 “Une grande école moderne à Tokyo. Le Keio Giudjikou.” (東京の壮大な近代的学校、慶応義塾)
掲載誌 Revue Internationale de l’Enseignement
巻号 45
発行年 1903

掲載箇所 pp.35-38

典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

著者のヴーレルスは、地理学者、経済学者。高等師範学校 (École Normale Supérieure)卒業。1900～01年に中国と日本を旅行し、それら経験をもとに、La Chine ancienne et moderne. (中国、古代と近代) 1904年や、後出書■41等を著した。

■41

著者 W.T.

記事名 “La reforme de l’organisation scolaire au Japon.” (日本の学事改革)

掲載誌 Revue Internationale de l’Enseignement

巻号 45

発行年 1903

掲載箇所 pp.309-310

典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■42

著者 F.Marre (F.マーレ)

記事名 “L’instruction publique au Japon.” (日本の公教育)

掲載誌 Correspondant

巻号 216

発行年 1904

掲載箇所 pp.252-275

典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■43

著者 Georges Weulersse (ジョルジュ・ヴーレルス)

書名 Le Japon d’Aujourd’hui—Études Sociales. (今日の日本—社会学的研究)

出版社 Librairie Armand Colin

発行年 1904

総頁数 359p.

内容 ChapitreVI L’enseignement (第VI章 教育)

所蔵 広島大学総合科学部

解説 1900～01年における日本旅行の記録。日本の教育について、初等・中等・高等の3部にわけて論述。著者ヴーレルスについては■38の解説参照。

■44

著 者 H. Gourdon (H. グールドン)
記事名 “La Chine et l’enseignement japonais.” (中国と、日本の教育)
掲載誌 Revue de l’Enseignement Colonial
発行年 1904
典拠書誌 ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■45

著 者 Société Impériale d’Éducation, Tokio (東京、帝国教育会)
書 名 Aperçu Général de L’Éducation au Japon. (日本の教育概略)
発行年 1905
典拠書誌 「日仏関係図書展覧会目録解説」

■46

著 者 Tetsujirô Inouye (井上哲次郎)
記事名 “Commentaire du rescrit impérial sur l’éducation.” (教育勅語注解)
掲載誌 Mélanges Japonais
巻 号 2(6,7)
発行年 1905
掲載箇所 pp.185-217
典拠書誌 J. E. L. F., ヴェンクシュテルン『大日本書誌』

■47

著 者 Théophile Gollier (テオフィユ・ゴリエ)
記事名 “L’état intellectuel du Japon.” (日本の学事状況)
掲載誌 Études
巻 号 XLII, CIII
発行年 1905
掲載箇所 pp.478-509
典拠書誌 J. E. L. F.

■48

著 者 André Bellessort (アンドレ・ベルソール)
書 名 Les Journées et les Nuits Japonaises. (日本の昼と夜)

出版社 Librairie Académique
 発行年 1906
 総頁数 312p.
 内容 1898年における日本の旅行の記録。京都、長崎、熊本、鹿児島滞在中に見聞した日本の児童・生徒や、教育に関する見解が散見される。
 所蔵 広島大学総合科学部
 解説 著者ベルソールは、高等教育教授資格(agrégation des lettres)をもち、古代ローマ詩人ウェルギリウス(Virgile)やギリシャ劇に関する評論活動で知られる。1935年にはアカデミー・フランセーズ(Académie Française)の終身書記長となる。本書『日本の昼と夜』については、拙著『近代日本における仏語系専門学術人材の研究』風間書房、1998年で考察した。

■49

著者 François-Désiré-Marie Harnois (フランソワ・デジレ・マリ・アルノウ)
 記事名 “Les relations des étudiants des deux sexes.”(男女の学生・生徒の関係)
 掲載誌 Mélanges Japonais
 巻号 3
 発行年 1906
 掲載箇所 pp.387-404
 典拠書誌 J. E. L. F., ナホッド『日本帝国書誌』

■50

著者 E. P.
 記事名 “Deux anciens traités de morale à l’usage des enfants japonais.”
 (日本の子どもを躾ける、2つの古い道徳的しきたり)
 掲載誌 Mélanges Japonais
 巻号 4
 発行年 1907
 掲載箇所 pp.364-378
 典拠書誌 ナホッド『日本帝国書誌』

■51

著者 Clive Holland (クリーブ・ホーランド) Traduit de l’anglais par Lugné
 Philipon (ルネ・フィリポンによる英語からの仏訳)
 書名 Au Japan Choses Vues. (日本にて見たもの)

発行所 Vuibert et Nony Éditeurs
発行年 1908
総頁数 198p.
内容 Chapitre III La Vie de famille au Japon (第三章 日本の家庭生活)
所蔵 広島大学総合科学部

■52

著者 Félicien Challaye (フェリシエン・シャレイエ)
記事名 “La morale japonaise.” (日本の道徳)
掲載誌 Bulletin de la Société franco-japonaise de Paris
巻号 13
発行年 1908
掲載箇所 pp. 44-46
所蔵 横浜開港資料館ブルーム・コレクション

■53

著者 P. Lebon (P. ルボン)
記事名 “L'Œuvre Pédagogique des Marianistes Français au Japon.” (フランスマリア修道会の日本における教育事業)
掲載誌 Bulletin Société Franco-Japonaise de Paris
巻号 11
発行年 1908
掲載箇所 pp. 17-38
所蔵 横浜開港資料館ブルーム・コレクション

■54

著者 Phillip Tissié (フィリップ・ティジエ)
書名 “Hygiène sociale. L'éducation physique au Japon.”
(公衆衛生；日本の体育教育)
発行年 1908
典拠書誌 J. E. L. F.

■55

著者 Vay Von Vaya et Graf Luskod (ヴェイ・フォン・ヴァヤ、グラフ・ルスコ)
記事名 “L'évolution de l'éducation au Japon.” (日本における教育改革)

掲載誌 Revue des deux mondes
巻号 5(44)
発行年 1908
掲載箇所 pp.191-215
典拠書誌 J. E. L. F., ナホッド『日本帝国書誌』

■56

記事名 “La situation sociale et l'éducation de la femme au Japon.”(日本の女性の社会的状況と教育)
掲載誌 Société Belge des Études Coloniales
巻号 10/11
発行年 1908
典拠書誌 ナホッド『日本帝国書誌』

■57

著者 Edward Peeters (エドワード・ピーターズ)
記事名 “L'Éducation au Japon. Coup d'œil général.” (日本の教育；一瞥)
掲載誌 Ostende: Nouvelle bibliothèque pédagogique
発行年 1910
総頁数 in-8°, 15p.
典拠書誌 J. E. L. F.

■58

著者 Noël Péri (ノエル・ペリ)
記事名 “Note sur l'enseignement en Chine et au Japon.”(中国および日本の教育概説)
掲載誌 Revue indo-chinoise
発行年 1910
掲載箇所 pp.429-446
典拠書誌 J. E. L. F., ナホッド『日本帝国書誌』
パリ外国宣教会宣教師。1889年来日。宣教活動ののち、東京音楽学校で和声学などを講じる。その後、能など日本文化を研究し、Mélanges Japonaisの刊行などに携わる。

■59

著者 F. Rocquain (F. ロクイアン)
記事名 “L’enseignement et l’éducation au Japon.” (日本の教育としつけ)
掲載誌 Compte-rendu de l’Academie des Sciences Morales
巻号 175
発行年 1911
掲載箇所 pp. 243-256
典拠書誌 ナホッド『日本帝国書誌』

■60

著者 Yosio Noda (ヨシオ・ノダ)
書名 L’enseignement de la morale laïque au Japon. (日本の世俗的道德教育)
発行年 1911
典拠書誌 ナホッド『日本帝国書誌』

■61

著者 F. Bernot (F. ベルノ)
記事名 “Écoles japonaises.” (日本人の学校)
掲載誌 Revue Pédagogique
発行年 1913
典拠書誌 ナホッド『日本帝国書誌』

■62

著者 E. Arcambeau (E. アルカンボー)
記事名 “À l’École de Étoile du Matin.” (暁星学校について)
掲載誌 Bulletin Société Franco-Japonaise de Paris
巻号 33
発行年 1914
掲載箇所 pp. 97-105
所蔵 横浜開港資料館ブルーム・コレクション

■63

著者 Joseph Dautremer (ジョセフ・ドートルメール)
書名 Chez Nos Alliés Japonais. (わが同盟国日本について)
発行所 Librairie Garnier Frères
発行年 1918

総頁数 296p.
内容 Chapitre III Mutsu hito et le Japon moderne (1868-1916) (第三章 睦仁と近代日本(1868-1916))
所蔵 福岡教育大学附属図書館
解説 第三章に近代教育に関する記事。

■64

著者 Henri Chevalier (アンリ・シュバリエ)
記事名 “L’instruction technique au Japon.” (日本の技術教育)
掲載誌 Bulletin Société Franco-Japonaise de Paris
巻号 50
発行年 1921
掲載箇所 pp. 41-48
所蔵 横浜開港資料館ブルーム・コレクション

■65

著者 Jean-Baptiste Duthu (ジャン・バプティスト・ドウス)
記事名 “Les écoles au Japon.” (日本の学校)
掲載誌 Bulletin de la Société des Missions Etrangères de Paris
巻号 II
発行年 1923
掲載箇所 pp. 15-22, 84-91, 338-345, 401-412
典拠書誌 *J. E. L. F.*

■66

著者 Paul de Champmorin (ポール・ドウ・シャンモラン)
記事名 “L’École de 《L’Étoile du Matin》 à Tôkyô.” (東京暁星学校)
掲載誌 Bulletin Société Franco-Japonaise de Paris
巻号 55-57
発行年 1923
掲載箇所 pp. 41-47
所蔵 横浜開港資料館ブルーム・コレクション

■67

記事名 “Histoire de L’Éducation au Japon(660A.D. -1602A.D.).” (日本の教育の歴

史 660年—1620年)

掲載誌 Ex Orient
巻 号 2/3
発行年 1926
掲載箇所 pp.138-154
典拠書誌 ナホッド『日本帝国書誌』

■68

著 者 A. Durieux (A. デュリユー)
記事名 “Les Universites au Japon.” (日本の大学)
掲載誌 Les Carnets de l'Aucam
巻 号 2
発行年 1926.
典拠書誌 ナホッド『日本帝国書誌』

■69

著 者 Elie Aubouin (エリー・オービン)
記事名 “I. L'enseignement supérieur au Japon, règlements et programmes.”
(日本の高等教育、規則と課程)
“II. Le type de l'étudiant dans le roman contemporain au Japon.”
(日本の現代小説における学生の類型)
掲載誌 Bulletin de la Maison Franco-Japonaise
巻 号 T. I, 2
発行年 1927
掲載箇所 pp.1-43
所 蔵 日仏会館図書室

■70

書 名 Aperçu sommaire sur l'enseignement à la jeunesse et aux enfants du Japon, de l'existence et des buts de la Société des Nations.
(日本の青少年教育概要、国際連盟の存在と目的)
発行者 Tokyo, Union pour la Société des Nations (国際連盟)
発行年 1928
総頁数 10p.
典拠書誌 ナホッド『日本帝国書誌』

■71

著者 A. Brou (A. ブロウ)
記事名 “L’université catholique de Tokyo.” (東京のカトリック大学)
掲載誌 Revue d’histoire des missions
巻号 A12
発行年 1935
掲載箇所 pp. 339-347
典拠書誌 ナホッド『日本帝国書誌』

■72

記事名 “Creation de l’Association Centrale d’Éducation Ouvrière au Japon.”
(日本における中央職工教育協会の創設)
掲載誌 Information Sociales
巻号 58
発行年 1936
掲載箇所 pp. 105-106
典拠書誌 ナホッド『日本帝国書誌』

■73

記事名 “L’Éducation ouvrière au Japon.” (日本の職工教育)
掲載誌 Information Sociales
巻号 61
発行年 1937
掲載箇所 pp. 138-139
典拠書誌 ナホッド『日本帝国書誌』

■74

記事名 “Projet de loi sur la prolongation de la scolarite obligatoire
au Japon.” (日本の義務教育延長法案)
掲載誌 Information Sociales
巻号 61
発行年 1937
掲載箇所 pp. 15-16
(2年延長昭和12年)

典拠書誌 ナホッド『日本帝国書誌』

■75

著者 Y. Tomoda (Y. トモダ)

記事名 “Organisation de la recherche chimique au Japon.” (日本における化学研究組織)

掲載誌 Chimie et Industrie

巻号 T. 37

発行年 1937

掲載箇所 pp. 602-603

典拠書誌 ナホッド『日本帝国書誌』

■76

記事名 “L’Orientation professionnelle dans écoles normales au Japon.” (日本の師範学校における職業指導)

掲載誌 Information Sociales

巻号 62

発行年 1938

掲載箇所 p. 492

典拠書誌 ナホッド『日本帝国書誌』

■77

書名 Rescrit Impérial de Japonais sur l’éducation et préceptes impériaux pour les armées de terre et de mer. (「教育勅語」および「陸海軍軍人に賜はりたる勅諭」)

出版社 Paris, Librairie du 《Recueil Sirey》

発行年 1939

総頁数 in-8° 17p.

典拠書誌 J. E. L. F.

3. International Kindergarten Union の機関誌に
みられる 20 世紀初頭の日本幼児教育観

西川 ひろ子 (中国短期大学)

1 研究の目的

海外における近代日本の幼児教育観は如何にして形成され、展開していったのであろうか。教育交渉史において、このテーマを考察するにあたり、看過出来ないのが、International Kindergarten Union(万国幼稚園連盟、以下 I K U と記載する)と Japan Kindergarten Union(日本幼稚園連盟、以下 J K U と記載する)との交流である。

I K U はスーザン・ブロー(Suzan E. Blow)が中心となり、欧米の幼稚園教育向上を目的に組織された。加盟国は、欧米に限らず日本や中国といったアジア圏まで及んだ。一方、J K U は、幼児教育に携わっていた在日外国人宣教師により明治 39(1906)年に組織された。J K U の事業内容のひとつに、「I. K. U (万国幼稚園連盟)との関係を確立する」¹⁾ことがあげられていた。J K U が発足された翌年(1907)の 5 月 3 日には、ニューヨークで開催された I K U の理事会において J K U は、I K U の名誉支部として承認され、会費納入免除という待遇をえている²⁾。

先行研究は、J K U の中心人物で頌栄保母伝習所創立者でもあったアニー・L・ハウ(Annie L. Howe)と I K U の中心人物でシカゴ幼稚園大学(National College of Education)の創立者でもあったハリソンとの交流は深く、ハリソンから J K U への影響は大きいと指摘している³⁾。だが、I K U への J K U の影響は明らかにされていない。そこで、I K U と J K U との交流を通して形成されていったであろう日本幼児教育観を明らかにすることを本研究の目的とする。I K U で形成された日本幼児教育観は、機関誌を通して全米の日本幼児教育観を形成する上で大きな影響を及ぼしたと推測されるからである。

資料として、I K U と J K U の双方がそれぞれ発行していた機関誌(報告書、時に公報)を活用した。I K U は、Kindergarten Review を、J K U は、Annual Report of the kindergarten Union of Japan を定期的に発行していた。J K U の会長であるハウは「万国幼稚園連盟の関心を呼んでいる問題に、私達は注目する必要に迫られたのです。なぜなら、そこでは幼稚園の仕事を大きく左右する問題が検討され、保守的にあるいは急進的に解決の手を差し伸べているからです。私達が調べなければならない、問題は次のようなものです。1 試験、2 海外通信、3 幼稚園という概念の普及、4 教材、5 指導計画、6 物語、7 遊戯、8 美術、9 自然学習。これらは現在アメリカの仲間たちが心を砕いている重要な関心事です」⁴⁾と記している。J K U の報告書は、会員相互の連携の役割を果たすことの他に、I K U への日本の幼児教育に関する情報を提供する目的を担った。この活動は、I K U に所属する海外支部が海外通信として行なうものであった。Annual Report of the kindergarten Union of Japan の記事などをもとに J K U に所属する会員によって、I K U の Kindergarten Review へ海外通信として発信されていった。

中間報告では、I K U の機関誌に注目し、そこで掲載された日本の幼児教育に関する記事を収集し、解題をつけ、最終報告にむけて 20 世紀初頭の日本幼児教育観の形成を検討することを目的とする。

3 解題

I K Uの機関誌は、いくつかの変遷を辿る。前述したように Kindergarten Review が当初の機関誌名である。後に、The Kindergarten and First Grade、The Kindergarten and First Grade、American Childhood: nursery-kindergarten-primary: the modern magazine for the primary teacher と機関誌名は変わっていく。創刊号は未確認であるが、The Kindergarten and First Grade の表紙によると、「幼稚園のニュースとして1893年に創刊」¹⁾されたようである。Kindergarten Review は、1915年の12月まで月刊誌として発行された。1916年1月より1924年6月まで、The Kindergarten and First Grade と誌名変更して月刊発行された。1924年9月から1926年3月までは、Kindergarten and First Grade Magazine となり、1926年4月以降は、American Childhood となり発行されていった。

I K Uの機関誌に掲載された日本の幼児教育関連の記事は21件であった。最初の記事はJ K U発足の1906年より10年程前のものであるが、記事が集中して発表されているのは、J K U発足の1906年前後である。

①Annie L. Howe “THE GLORY KINDREGARTEN, AT KOBE, JAPAN” Kindergarten Review (May, 1898, pp.559-562.)は神戸に在住するアニー・L・ハウ(Annie L. Howe, 1852-1943)より寄稿された。ハウは、マサチューセッツ州に、ハウ家の長女として生まれ、ロックフォード・セミナリーで音楽を専攻したのち、シカゴのフレーベル協会保母伝習学校に学んだ。9年間の幼稚園教師及び園長として活躍していた34才の時に、神戸の教会の婦人たちが幼稚園を開くにあたって、専門の教師を求めていることを知った。この事がきっかけとなり、1887年12月に開国間もない日本に赴任したという²⁾。後に頌栄保母伝習所や頌栄幼稚園を開設し、京阪神の幼児教育界の中心人物となった。ハウが不在の間、頌栄保母伝習所は、学生募集を停止し、幼稚園は、和久山きそに委ねられていた。この記事に出てくる「Waku-yama San」とは、和久山きそ(1865-1943)のことである。後に、和久山はI K UとJ K Uとの交流の中心人物となっていく。その和久山が、日本人の幼稚園教師の最初の一人として紹介されているのは、意味深いものである。和久山は、神戸英和女学校卒業後、同志社女学校の教師兼舎監を勤めていたが、頌栄保母伝習所開校と同時に第一期生として入学した。卒業後は、幼稚園保母および伝習所教員となり、ハウと協力し、ハウの引退帰国後は後任として園長、伝習所長を勤め、1934年に退職するまで、45年間にわたって頌栄と幼児教育にその生涯を捧げたという。その間、神戸保母会会長、J K U理事、I K U大会日本代表の責務を負い、保育研究会での講演や保育雑誌への投稿を通して活躍した³⁾。記事の内容は、一年半、日本を離れて、再び神戸に戻ってきた時のことが書かれている。頌栄幼稚園の様子や和久山さんとの再会の喜びを綴っている。和久山が如何に理想的な保母であるかということを保育実践を通して記し、「フレーベルがこの様子を見たら満足するでしょう」と和久山の保育を絶賛している⁴⁾。

② "PROGRESS OF THE MOVEMENT, Japan, Interest in Seed Leaf Kindergarten at Tokyo" Kindergarten Review (Oct, 1902, pp.191-120.)は、新しい部局の業務報告やニュースの為の項目であり、全米に限らずさまざまな国の幼稚園からのお願いが紹介されている⁹⁾。日本からの記事は、双葉幼稚園に関するものである¹⁰⁾。創立者の森島峰と野口幽香はアメリカバプテント派より洗礼を受けたキリスト教徒であり、貧しい地域の子供たちの為に幼稚園を開設したことと、幼稚園の様子が紹介されている¹¹⁾。また、名古屋の幼稚園のクリスマスを通してキリスト教理解を推し進めようとする実践が報告されている¹²⁾。

③～⑦の5件の記事は、いずれも1905年5月のKindergarten Reviewに掲載されている。あたかも日本特集であるような印象を受ける。

③ Frederic M. Noa "PROGRESS OF THE MOVEMENT Japan" Kindergarten Review (May, 1905, pp.515-519.)は、古代からの日本の教育について紹介している。明治以降の日本の教育の状況について詳しく言及している。東京大学、京都大学、帝国図書館等を紹介している¹³⁾。続いて、戦争における日本の驚異的勝利は、優秀な軍隊と培われてきた技術的組織力による当然の結果であったと指摘し、日本の教育制度の内容が掲載されている¹⁴⁾。幼稚園に関しては、次のようなものであった。3才から6才までの子供の為の幼稚園は、小学校に付設されている¹⁵⁾。また、通常の幼稚園教育の目的と共に教育実習の為に、幼稚園が多く設けられている事を紹介している¹⁶⁾。

④ Fannie Caldwell Macaulay "Work in a Japanese Kindergarten at Hiroshima" Kindergarten Review (May, 1905, pp.520-525.)は、四枚の写真を添付した本格的な日本の幼稚園に関する記事であった。幼稚園は、広島女学校保母養成科と附属の幼稚園と推測される。内容は、広島の幼稚園と保母養成である。価値観の違いと語学の壁に格闘しながら、保母養成を行なっていった4年間の模様を述懐している¹⁷⁾。一方、幼稚園では、子供たちの可愛らしさと遊びや恩物を用いた保育について紹介し、日本の子供は家庭でほとんど玩具を持っておらず、アメリカの子供のような明確に遊びだったりゲームだったりするほとんどやらないと指摘している¹⁸⁾。そこで、幼稚園では子供たちの興味を促すようなものを与えるべきであると思うと筆者は主張している¹⁹⁾。

⑤ "Japanese Cradle Song" Kindergarten Review (May, 1905, p.525.)は、日本の子守り歌の歌詞を英訳したものを紹介している。

⑥ Alice L. Coates "Letter From Japan" Kindergarten Review (May, 1905, pp.526-527.)は、名古屋の幼稚園のクリスマスを取り入れた保育実践が紹介されている。また、日本の元旦の様子を袴などを取り上げて、子供たちの可愛らしい様子を紹介している²⁰⁾。

⑦ Yone Noguchi “Japanese Babise” Kindergarten Review (May, 1905, p.527.) 日本人女性と思われる「Yone Nogichi」から寄せられた手紙であった。それ迄が、外国人宣教師からのものであったのに対し、今回は初めて日本人によるものであった。内容は、日本の子供誕生に関するもので、男の子が生まれたり、それが長男だったりすると盛大なお祝いがなされることを紹介した²¹⁾。また、生誕二週間後のお祝いやお宮参りや着物といった日本の風習などを取り上げている²²⁾。

⑧ Fumi Ogata “Note from the Kindergarten at Hakodate, Japan” Kindergarten Review (Jan, 1906, pp.306-310.) は、遺愛女学校に付設された遺愛幼稚園について紹介している²³⁾。筆者の「Fumi Ogata」は、遺愛幼稚園の保母であるらしく、子供たちとの写真を掲載している²⁴⁾。この写真の他に保育実践の写真を三枚載せている。一枚は「シーソー」、二枚目は「天皇誕生日」、最後の一枚は「ピクニック」であった。記事の内容は、幼稚園の園舎の様子や、神戸のアニー・L・ハウが実践しているフレーベルの思想を実践しようと努力していることや、園児の母親のこと、保育実践、まだ人々の多くは幼稚園への理解がないことなどである²⁵⁾。

⑨～⑭の6件の記事は、いずれもI K Uの大会報告や年間報告に日本幼児教育に関する報告が出てくる。筆者は不明だが、J K Uが結成された以降のものであるので、J K Uからの海外通信と推測される。この中で、日本の教育の一つとして幼稚園が広く認められてきていることが会員の通信から知らされたと紹介されていることから、海外通信が情報源であることが推測される。⑫と⑬を取り上げる。

⑫ “Seventeenth Annual Meeting of the International Kindergarten Union, Report of Committee on Foreign Correspondence” Kindergarten Review (June, 1910, pp.639-643.) は、ハウの主張が掲載されている。ハウは、J K Uのこと、日本では幼稚園への関心が拡大していること、幼稚園教育を海外で研修を受けることを希望する日本人女性がいること、自分の仕事が20年になったことなどを訴えた²⁶⁾。

⑬ “Twentieth Annual Meeting of the International Kindergarten Union” Kindergarten Review (June, 1913, pp.665-670.) は、アニー・L・ハウの日本での業績と、7年前にJ K Uを組織し、年次大会を開き、年間報告書をI K Uに送付していることを紹介し、日本には、80以上のキリスト教の幼稚園があることを記している²⁷⁾。年間報告書とは、I K Uの Annual Report of the kindergarten Union of Japan と推測される。

⑮と⑯は、日本幼児教育のみに焦点をあてた記事ではない。他の国との比較を通して日

本に触れている内容である。

⑯ Mary F. Ledyard “Kindergarten Housing and Kindertartens Around the Pacific’s Rim” The Kindergarten and First Grade (Dec, 1917, pp.401-409.) は、環太平洋の国々の幼児教育の比較の記事である。太平洋岸のアメリカの都市（ロスアンジェルス、南カリフォルニア、オレゴン）、ハワイ（ホノルル）、日本（神戸）、中国（広東）である。清潔で、芸術的であり、鮮やかな彩り日本の衣類（着物）と非常に見事な庭園について書き、ぜひい言う喘息患者のような時代遅れのオルガンと一緒に歌声が美しい幼稚園から聞こえてくることや、日本の障子についてなどを取り上げ、園舎内の環境構成の完璧さ美しさを讃えている²³⁾。

⑰ “Contribution from Japan” The Kindergarten and First Grade (May, 1919, p.206.) は、戦争で被害にあったフランスの子供たちへJKUに加盟しているキリスト教の幼稚園より寄付があったことを伝えている²⁴⁾。

⑱ “Report from Japan” The Kindergarten and First Grade (Oct, 1920, pp.350-352.) は、筆者が不明である。だが、内容はハウの頌栄保母伝習所と幼稚園からの報告書をもとにしたものである。これは、IKUの年次報告書である Annual Report of the kindergarten Union of Japan と推測される。内容は、保母養成に関するもので、ハウの功績を讃えていた。

⑲以下は、略する。

IKUの機関誌に掲載された日本幼児教育の姿は、ハウの影響が大きかった。IKUが組織されると、海外通信や年次報告によって着実に日本幼児教育の情報が伝えられていった。内容は、語学やキリスト教への理解や幼稚園そのものへの理解に悩みながらも、着実に根付く幼稚園の姿を紹介していった。特に、保母養成には多く取り上げられていた。日本幼児教育の姿は、欧米に劣らないほどの進展を見せている状況が報告されていったのであった。

注

- 1) "Constitution of Kindergarten Union of Japan" First Annual Report of the Kindergarten Union of Japan, 1907, p.26.
- 2) "Vote of International Kindergarten Union" Second Annual Report of the Kindergarten Union of Japan, 1907-1908, p.1.
- 3) 大戸美也子「J. K. U年次報告書の背景と今日的意義」キリスト教保育連盟編『Annual Report of the Japan Kindergarten Union 第7巻』1985、日本らいふらり、pp.383-384。
- 4) Annie L. Howe "President'Address" Second Annual Report of the Kindergarten Union of Japan, 1907-1908. (印刷不良のためページ数不明)
- 5) "CONTENTS" Kindergarten and First Grade Magazine, Sep, 1925.
- 6) 山中茂子訳『A. L. ハウ書簡集』1993、頌栄短期大学、p.6。
- 7) 前掲注、p.309。
- 8) Annie L. Howe "THE GLORY KINDREGARTEN, AT KOBE, JAPAN" Kindergarten Review, May, 1898, p.562.
- 9) "PROGRESS OF THE MOVEMENT, Japan, Interest in Seed Leaf Kindergarten at Tokyo" Kindergarten Review, Oct, 1902, p.191.
- 10) *ibid.*
- 11) *ibid.*, p.120.
- 12) *ibid.*
- 13) Frederic M. Noa "PROGRESS OF THE MOVENENT, Japan" Kindergarten Review, May, 1905, p.516.
- 14) *ibid.*, pp.516-517.
- 15) *ibid.*, p.517.
- 16) *ibid.*, pp.517-518.
- 17) Fannie Caldwell Macaulay "Work in a Japanese Kindergarten at Hiroshima" Kindergarten Review, May, 1905, pp.520-525.
- 18) *ibid.*, p.524.
- 19) *ibid.*
- 20) Alice L. Coates "Letter From Japan" Kindergarten Review, May, 1905, pp.526-527.
- 21) Yone Noguchi "Japanese Babise" Kindergarten Review, May, 1905, p.527.
- 22) *ibid.*
- 23) Fumi Ogata "Note from the Kindergarten at Hakodate, Japan" Kindergarten Review, Jan, 1906, p.306.
- 24) *ibid.*, p.307.
- 25) *ibid.*, pp.307-308.

- 26) "Seventeenth Annual Meeting of the International Kindergarten Union, Report of Committee on Foreign Correspondence" Kindergarten Review, June, 1910, pp.641-642.
- 27) "Twentieth Annual Meeting of the International Kindergarten Union" Kindergarten Review, June, 1913, p.665.
- 28) Mary F. Ledyard "Kindergarten Housing and Kindertartens Around the Pacific's Rim" The Kindergarten and First Grade, Dec, 1917, p.407.
- 29) "Contribution from Japan" The Kindergarten and First Grade, May, 1919, p.206.

4 資料

① Annie L. Howe "THE GLORY KINDERGARTEN, AT KOBE, JAPAN" Kindergarten Review,
May, 1898, pp. 559-562.

A DAY OFF.

By FRANK L. STANTON.

When a feller takes a day off—sets his soul to loafin' roun'
Where the hills climb up to heaven an' the rushin' rivers soun',
'Pears like the world is newer, with a good deal more o' light,
An' his eyes is seein' truer, an' his heart is beatin' right!

When a feller takes a day off, there is lots o' things to see;
I can hear the winds away off, jest a welcomin' o' me;
An' the violets peep so purty! an' the rose I uster miss
Feels the red a-rushin' roun' it, an' comes climbin' fer a kiss!

When a feller takes a day off, oh! he learns a lot o' things
From the very doves a-flyin', with the music in their wings;
From the hills an' from the valleys, where the dreams an' dews is foun,
When a feller takes a day off, an' his soul is loafin' roun'!

NOTE.—Used by kind permission of D. Appleton & Co., from *Songs of the Soil*, by Frank L. Stanton.
Copyrighted by the publishers.

THE GLORY KINDERGARTEN,

AT KOBE, JAPAN.

(Extracts from letters of Miss Annie L. Howe.)

THE WELCOME BACK.

It will always be a bright memory—the first sight which I had of the Glory Kindergarten on my return to it after a year and a half in America!

I had been traveling all night in the train,—a wearisome, jolting journey,—but as we neared Kobe, where it had rained the day before, the sun came out, and the hills and sea were beautiful to look upon. As it was just nine o'clock when we reached the station, I went directly to the kindergarten, wishing to surprise them all. In the hall I saw first my dear O Ba San, the

janitress who has been with us ever since the work began, and who is the same faithful, willing soul as ever. I pushed open the door of the Johnson room and stood still, looking in. There were the children seated in the morning circle, the teachers in their places, the room sweet, clean and attractive. Most exquisite morning glories were blooming in pots on the window ledge. Wakuyama San was at the organ. I could see no change anywhere except in the faces of the children, who were, many of them, strangers to me.

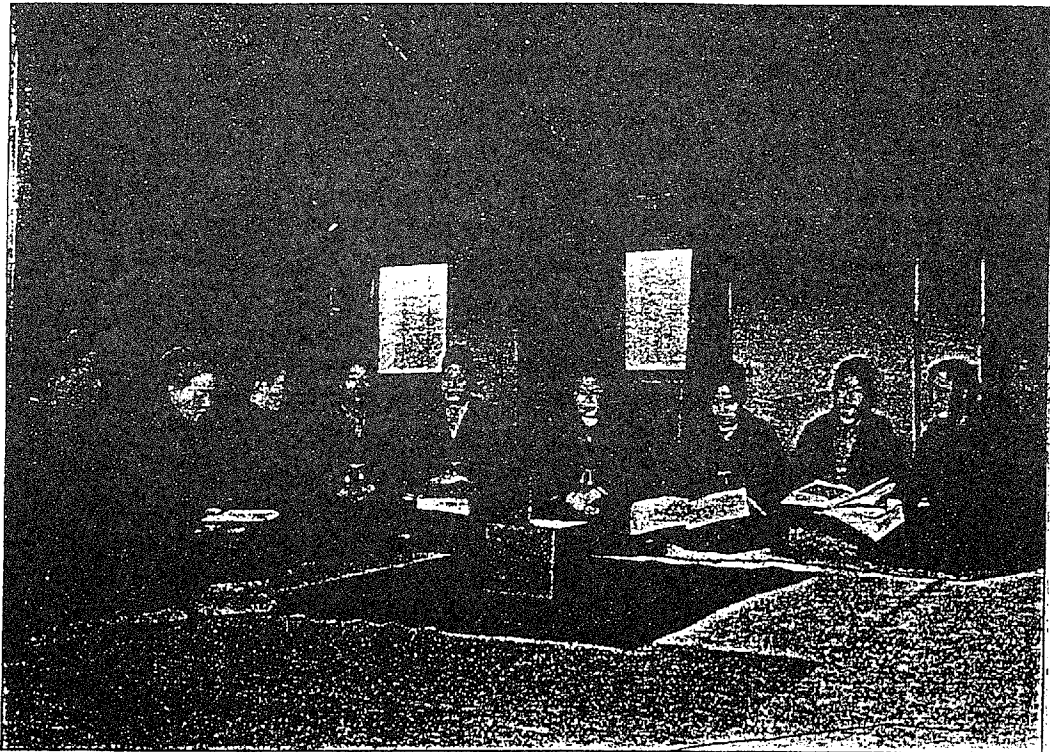
I went to Wakuyama San to greet

her, and then greeted the other teachers. It was very quiet and solemn for a moment. We could hardly speak. Wakuyama San, her voice trembling, turned to the children and said: "This is the lady about whom I have been telling you. Bow to her." So they bowed to me, and I began to see how many of the children I could remember; and soon all was as gay as possible.

In the afternoon the normal class

There is no trouble or friction anywhere; all is happy and prosperous, and every one so loving and true to me that I can never forget it as long as I live!

A few days later a beautiful meeting of welcome was given to me in the Johnson room at the kindergarten. The hour appointed was half past two, so I put on my mull dress and went down there at that time. I saw so many people whom I knew, that I began bow-



THE KINDERGARTEN NORMAL CLASS.

girls came up in a body to see me, and they agreed with me that it had been great fun,—my surprising them in this fashion! It did not seem as if I had been away a moment.

How can I express my thankfulness at the beautiful state in which I found the work! Wakuyama San and Mr. Yokota, the manager, who is just as faithful and loyal as ever, seem to have made it their study to keep everything as I had it. Nothing is changed.

ing and scraping with great gusto; but Mr. Yokota came to me in distress: "Please go and hide yourself until it is time to begin!" So I obediently disappeared, and then, when the guests had all arrived, Mr. Yokota came for me and led me in state to the room and the seat of honor.

A large number of people had assembled,—many of our former pupils, both boys and girls, and all of the present kindergarten children and a goodly

company of parents. The room was very pretty; and the singing and prayer and speeches were very soothing to the heart of the woman who had just come back to her adopted country.

The kindergartners from three other schools in Kobe took part in the welcome, one of them reading an address which ought to spur me on for twenty years to come. I send the English translation of the kindergartner's speech.

"With the opening of our country to the civilization of the Occident a more liberal way of education has been opened. On this subject the people of our empire are more than ever aroused, which shows how much the interest in all branches of education is increasing among them. Whether a little plant shall be crooked or straight in the garden must depend upon him who takes care of it. Just so it is that the bent of a little child depends upon the person who educates him. A habit formed in childhood would certainly make a part of his character. To think of it makes us feel more deeply the difficulty of our work.

"When you left us, we became just like a boat in the mighty ocean. All the while we have been longing for your return to us once more. Often we hear it said that a change must be made in the way of education, but really we do not know what change is needed or how to make the change, as there is no standard to look upon or to depend upon. This is why we longed for your return so much. A love for Japan, as well as for the work, has opened the way for your returning to us once more. Really, it is more than joy for us to have this welcome meeting. Now we are ready to receive the new ideas and teaching which you have kindly brought for us since we have been so very thirsty for them. Teach us and lead us in the way

in which we are all interested, so that we can make a new and mighty Japanese nation in the coming century. Thank Heaven, as well as your mother, for making a present of you among us again."

The whole meeting was delightful, but the event of the afternoon, for me, centered in the welcome given by four of the kindergarten children. I never saw anything sweeter in my life. The greetings from the four classes, given by one child from each, were as follows:—but the bare statement is very bare indeed. You should have seen the bright eyes, the gay dresses, the profound bows and the bewitching unconsciousness of the speakers.

Number one stood in front of me and bowed gravely, saying: "Teacher, we have waited a long time for you, and now that you have come we are all glad."

Number two, a small boy, said: "Teacher, please give us again your instruction."

Number three, a still smaller chap, said: "Teacher, your return makes things cheerful."

Number four, a mere tot, hardly more than a baby, came toddling up, and said: "Teacher, we are *glad* you are back!"

At the end of the ceremonies I thanked all for their cordial welcome, and then we had cakes and tea; after which I had the pleasure of speaking to one and another. Such an afternoon must always remain with me as a large part of the "hundred fold" promised to missionaries.

A MORNING TALK.

Wakuyama San is simply a poem in these days. I never, in any kindergarten which I ever visited, saw any one so beautiful in her morning talks.

Just now we are having frost, ice, snow, etc., to talk about; but the other morning she began:

"Now children, we will just postpone our regular talk until to-morrow, for I have something special to tell you about to-day.

"To-day is the third of December. Now remember! Well, five years ago, up in a little mountain village, there was a doctor; and this doctor was going to have a lovely present. It wasn't some fine clothes; it wasn't a fine house; it wasn't something nice to eat;—" and so she went on. Then she depicted in a most graphic way, the joy of this doctor and his wife as they waited for that present.

"At last it came;" (you could have heard a pin drop!) "and what do you think it was?"

She waited. Then the children, in pleased, quiet tones, said: "A baby."

"Yes, a baby." And then you should have heard her tell, in her beautiful way, how the father and mother rejoiced in their gift; how they cared for it; how the child grew, and how, at last, he was big enough to go to a place where there were many happy children playing together every day,—*"A kindergarten!"* shouted the children; and then, in her quiet, attention-compell-

ing way, Wakuyama San said, (surprising me as well as all the rest): "Yes! and that little boy is here to-day." And she spoke his name. "It was five years ago that he was given to that doctor and his wife, and this is his birthday!"

Oh! I wish you could have seen that child's face, and the face of every child in the room!

"Now," said Wakuyama San, "we did not have time to do much for this little boy, but Satsurin San has made him a trumpet. He will get it now." So Satsurin San, proud and happy, walked off into the next room, bringing back—a little trumpet made out of some of the kindergarten folding paper! A string was attached, and Wakuyama San told Satsurin San to put it around the birthday boy's neck. If he grows to be a soldier, decorated with medals, he will never be happier than he was at that minute!

Then Wakuyama San sang with them that beautiful birthday song of Reincke's, which I have translated and which is in one of our kindergarten singing books, and then the children separated. But I said to Wakuyama San, "If Frœbel sees *this* he is *satisfied*."

IDLE DAYS.

BY FRANCIS WILLIAM BOURDILLON.

Sing me a song of idle days,
 When rosy and white are the new-blown Mays,
 And rosy and white on the wanton breeze
 The petals fall from the apple trees,
 And under the hedge where the shade lies wet
 Are children picking the violet!
 Sing me a song of idle days
 When Spring is queen over woods and ways!

PROGRESS OF THE MOVEMENT.

Items of news and reports of the work for the news departments are solicited from kindergartners in all parts of the country. Copy should be received before the tenth of the month to insure insertion in the next issue.

Michigan.

Normal Training Course at Saginaw.

The Saginaw Kindergarten Association has arranged for a normal training course to be given under its auspices. The normal department will be under the supervision of the board of directors of the local association as follows: President, Mrs. C. H. Green; vice-presidents, Mrs. J. G. Macpherson and Mrs. Arnold Boutell; treasurer, Mrs. E. E. Curtis; secretary, Mrs. W. H. Coats.

Mrs. Eleanor Periam, who will this year have charge of the free kindergartens of the city, will be principal of the department. Mrs. Emma Tatham will be in charge of the department of ethics; Miss Bessie Grant of music and Miss Genevieve Bower of drawing.

Beside the regular corps of teachers special lectures will be given by Miss Elizabeth Harrison, principal of the Chicago Kindergarten College; Miss Clara W. Mingens, supervisor of Detroit kindergartens; Mrs. Mary B. Page, director of the Chicago Kindergarten Institute, and Mrs. Lucretia W. Treat, principal of the Grand Rapids Kindergarten Training School.

A New Kin- dergarten Home at Grand Rapids.

"Hermath," the new kindergarten home established for the comfort and convenience of the students of the Kindergarten Training School, was formally opened August 26. It is located at 111 Bostwick street, on the brow of the hill, and is efficiently presided over by Mrs. Maude Holcomb. Mrs. Holcomb was assisted in receiving her guests by Mrs. L. W. Treat, principal of the Kindergarten Training School, and Miss Clara Wheeler, secretary and treasurer of the training school; Miss Margaret Coffin, assistant director of Young Women's Christian Temperance Association; Misses Jessie Ridgley,

Lou West McClure and Sylvia Schlee. Sixty or more guests registered and every room was thrown open to their inspection. A more homelike place for girls could not be imagined. Not only their general taste has been thought of but the needs of the student carefully observed. Each room is provided with a small folding kindergarten table with a stool of comfortable size to fit it. Punch was served in the prettily decorated dining room by Miss Leonore Holcomb.

Japan.

Interest in Seed Leaf Kindergarten at Tokyo.

Mme. Saito, formerly Miss Mine Morishima of Tokyo (who received her kindergarten training from Miss Nora A. Smith), and Miss Yuka Noguchi, also of Tokyo, established in 1900 the Futaba Yochiyen (Seed Leaf Kindergarten) for the children of the very poor in a certain quarter of their city. The first building occupied by the kindergarten was an old wooden cottage with four extremely small rooms, only two of these being available for kindergarten use. The number of pupils was then sixteen. Now, however, a better building has been rented and forty-six children are accommodated. Miss Maehi Hirano has been the chief working kindergartner from the beginning, although Miss Noguchi and Miss Morishima have visited the kindergarten and given their help on alternate days. Children are invited to come every school morning as soon as they have finished their breakfast, that they may be kept off the street. As their parents wish to send them out early, they usually appear by seven or eight o'clock. They are taken care of at the kindergarten six hours each school day. During Miss Hirano's recent illness the kindergarten was closed for a time; but as soon

as the news was spread abroad, two kindergartners were sent over from the American Baptist Mission, having quarters near by, to carry on the work until further arrangements could be made. This Christian courtesy and help was greatly appreciated. While the kindergarten was closed the children were in the habit of going there about twice every day to ask whether it was not ready to open yet. The Japanese ladies write in their recent account of the work: "The other evening when we were out on a walk, some one was yelling 'Sen-sei! Sen-sei!' (reverenced name for teacher); and on turning round to see who it is, we found it was one of our kindergarten children. He ran after us and made us stop. He is a son of a bean-seller, and is always on the street with his parents, and whenever he catches our sight, it seems as though he cannot help himself of yelling out with joy. Isn't it cunning, indeed?"

Miss Alice Coates, kindergarten at Nagoya, gives the following little story of one of the Japanese children, showing how the kindergarten influence is extending into the home:—

In Japan the spoken and written languages are quite different, so that some of the kindergarten songs are too difficult for the children to learn. At Christmas time the kindergartner wrote a song herself for them about the Wise Men coming to Bethlehem and finding the baby Jesus lying in the manger. The children learned this song very well, singing it with great enthusiasm. A few days before Christmas one little fellow attempted to teach the song to his mother. He repeated it several times and then said:—

"Now we will sing it together."

"I cannot sing it yet," said she, "I don't know the words."

"Why, can't you remember it yet?" said he, "I can remember a song when my teacher has told me three times."

It was evident that he felt that this was a necessary part of his mother's education for this attempt to teach her had been the result of a conversation between them when he had said:—

"Mamma, Christmas is the very best and brightest day of all the year."

His mother asked, "What is Christmas?"

"Christmas is Kiristo sama's birthday."

"Who is Kiristo sama?"

"Why, he is the Son of God. He came down on earth and was born in a manger. It is not *learned* not to know these things."

Wisconsin.

Increase of Kindergarten through-out the State. A stimulus will be given the kindergarten movement in Wisconsin this year by the addition of three new kindergartens opened in connection with normal schools, six of the seven normal schools of the state now having kindergartens as a part of the model schools. These kindergartens will be used largely for purposes of observation by the normal students.

The kindergartners appointed for these new positions are: Miss Georgia Johnson at the Whitewater Normal; Miss Edith Snyder at Stevens Point; Miss Caroline W. Barbour at West Superior. All of these kindergartners have had successful experience. Miss Johnson, a graduate of the Milwaukee Normal School, has been in Milwaukee and Appleton, Wis. Miss Snyder, who is a graduate of the Chicago Kindergarten College, has had charge of the kindergartens of Dubuque, Ia. Miss Barbour is a graduate of the Chicago Free Kindergarten Association Training School and has recently had charge of the kindergarten training work and the kindergartens of Helena, Mont.

Four new public kindergartens have been opened this year at Janesville, also new ones at New London, Shawano, and Glidden.

The kindergarten department of the Milwaukee Normal School is still progressing under the leadership of Miss Nina Vandewalker.

Pittsburg, Pennsylvania.

The kindergarten college opened September 12 with a promising program for the year's work. During

the fall there will be a mothers' class of ten lessons in gifts and stories under Miss Tappan, assisted by Mrs. Edmund E. Kiernan and Mrs. Hartley Anderson. During the winter term there will be ten lessons in Mother Play under Miss Blanche Boardman, director of Highland Avenue Kindergarten. Miss Boardman has recently been added to the faculty.

KINDERGARTEN REVIEW

VOL. XV.

SPRINGFIELD, MASS., MAY, 1905.

No. 9.

Universal Education in Japan*

By Frederic M. Noa

THE remarkable advance of Japan in enlightenment is strikingly shown by the extremely modern and rigorously enforced system of universal education of that country. These facts are admirably brought out in two official reports presented by the Japanese Minister of Public Instruction to the Paris Exposition of 1900.

From the most remote period of her unique history, Japan has always paid close attention to the education of the masses. As early as 806 A. D., or nearly eleven hundred years ago, a Japanese sovereign decreed that all children, no matter of what caste, should attend school, thus establishing compulsory education when such a reform was not even dreamed of in the most enlightened part of Europe. Popular education, therefore, existed throughout her extensive territory when, in 1868, she opened her ports to the world, and freely began to assimilate western civilization.

*Compiled from *La Instrucción Primaria*, of Havana, Cuba, issue of December 10, 1904.

Education, up to that time, had remained virtually stationary in Japan. For centuries there had been no trained teachers, nor were they subject to examinations. Anyone who saw fit might open a school, and gather round him such children as he could find in the neighborhood. These institutions were supported either by feudal lords or through private initiative. The branches taught were exceedingly rudimentary and few, the principal being reading, writing, elementary local geography, the simplest operations of arithmetic, and obedience to the laws of civilization and morality.

Thus matters had remained for hundreds of years, when, in 1868, Japan, for the first time, permitted the entrance of modern ideas. Since then, in thirty-six years, or little more than a single generation, her educational system has been completely revolutionized, and to-day the great mass of her people stand among the most civilized and enlightened of

the world. She now possesses two great universities, the University of Tokio, founded in 1878, with a faculty and teaching corps of 219 professors, seventeen of these being foreigners; and the University of Kioto, established in 1897, which, after the lapse of seven years, is making encouraging progress, and had, in 1901, forty-eight professors and 204 students. Both the University of Tokio, with its 2,696 students, and the younger institution of Kioto compare most favorably with the most celebrated universities of Europe and America.

Under the vigilant and alert Ministry of Public Instruction, there is no department of knowledge, science, music or art which is not being vigorously and intelligently fostered in Japan. The entire territory of the Mikado is well endowed with public libraries. The most important is the Imperial Library of Tokio, founded in 1872, and containing, in 1899, 382,830 volumes, of which 188,205 were Japanese, 152,391 Chinese, and 35,814 European. It is constantly crowded with readers, no less than 11,630 persons frequenting it during the 334 days it was open; or, in other words, an average of 334 readers a day: during the year, 677,116 books were read. So many persons desiring to consult it had to be turned away daily, that a new, larger, and more commodious library building is now under construction. Hardly less valuable is the library of the University of Tokio, which, out of 266,200 volumes, has 107,273 European, in many different languages.

Within the last few years, the movement for free public libraries has wonderfully progressed. Besides the libraries of Kioto and Osaka, there were, in 1899, twelve public and twenty-five private libraries in Japan, admirably administered, and with a total of 358,352 volumes, and 51,678 readers, all of them Japanese.

The extraordinary successes of Japan in her present war are largely due to the excellent special naval, military, and technical institutions she maintains. No less attention is paid to commercial and agricultural schools, which, in no small measure, have contributed to her prosperity. In music and the arts, she shows a determination to keep abreast with the most advanced nations. In 1879, a special commission made a careful comparison of the traditional music of Japan and that of foreign countries. As a result of this examination, it was decided to preserve for the public and private schools of Japan the best of her native melodies, but to ingraft upon them songs from foreign sources. In 1887, the school of music, now called the Conservatory of Tokio, was founded. In 1897, it had a force of thirty-eight instructors, two of these from abroad, and 215 students. Its object is to serve as a normal school for the training of teachers and artists. The first year is devoted to a preparatory course, and is followed by another of two years for those who aspire to become music teachers. For such as desire to acquire special proficiency as artists and professionals, there is a severe course of five years.

The Academy of Arts, although as recently founded as the Conservatory of Music, has already attained a very high reputation. The course of study includes drawing, painting, sculpture, architecture, and industrial art. In 1899, there were 309 art students and forty-six instructors. In Kioto, there is a municipal school of arts, but it is much less patronized.

The foregoing achievements are extremely creditable, but the chief glory of Japan is the painstaking devotion she pays to disseminating universal education among the masses. Out of a school population of 7,695,554 children of school age, 4,301,483 or 56% attended public and private schools in 1899. Although merely nominal fees are charged, the farsighted statesmen of the Island Empire are seriously considering the question of establishing an absolutely free system of public schools, similar to that of the United States, as the poorest classes find themselves completely deprived of educational opportunities. Many a poor Japanese family, however, overcomes these obstacles by paying in produce or personal labor for the education of its children.

Primary and grammar schools in Japan are known as fiscal, municipal, and rural, according to the authority on which they depend, and there are, moreover, a number of excellent private institutions. Every city or rural commune is compelled by law to establish a sufficient number of public schools so that all children from six to fourteen may receive instruction, and to maintain them properly, as the

pupils pay only a small fee. All these establishments are subject to regulations emanating from the central Ministry of Public Instruction. The local prefects prepare and submit to the Ministry rules for the schools of their respective districts, and it is also their duty to supervise the erection of new public schools. Educational inspectors maintain a rigid supervision over all public schools. Each city has a school committee, a fourth part of whose members must be teachers. The local prefect appoints a director or superintendent of public schools from among the teachers of the district.

Primary schools are, according to the plan of instruction, of two kinds, common or superior, although both courses may be carried on in a single school. Each course extends over four years. The plan of instruction of a common school includes the following: Moral precepts, reading, writing, composition, arithmetic, and gymnastics, to which may be added geography and history of Japan, drawing, singing, manual training, and, for girls, sewing. In the elementary superior school, there is also added physical geography and the geography of foreign countries. Foreign languages, commercial methods, and agriculture are also admitted. For the last named branch, suitable grounds for practical experiments are placed at the disposal of the schools.

Sometimes, a kindergarten for children of from three to six years is annexed to an elementary school. There exists, moreover, a state or

normal kindergarten for the training of teachers in this special study, besides 172 public and fifty-six private institutions of the same nature. These children's gardens are a notable aid to primary schools, as they take care of the little tots until they are old enough to enter a regular school.

A good beginning has been made to provide for the defective classes of Japan. There are several educational establishments for the deaf-mute and blind, where the pupils, besides acquiring elementary knowledge, can learn some trade or profession which may some day enable them to earn their living. The blind learn music and massage, the deaf-mutes, drawing, wood carving, and artistic carpentry. In the year 1899, there were nine of these institutions in Japan: one, a state establishment, in Tokio, another, a public institution in Kioto, while five of them are private schools. This number is by no means sufficient to extend to all these unfortunate beings the benefits of instruction, for, in the above mentioned year, there were among Japanese children of school age 4,120 blind, 5,003 deaf-mutes, and eight blind-mutes; out of all these 9,131 children, only 456 received instruction. To meet the crying demand, new establishments are being planned.

In order to create a proper teaching force for the public schools, the central authorities established, in 1872, a number of teachers' seminaries, but, as these could not begin to meet the demands of the entire country, the various districts set about

founding others on their own account, and, with such success, that the Japanese government suppressed its own institutions with the exception of two, these being for men and women teachers in Tokio, and designed to serve as a pattern for all others. Since that time, the districts are intrusted with the duty of maintaining and providing teachers' seminaries.

These normal schools are divided into what are known as common and superior seminaries. Of the last named, there are only two, situated in Tokio, which are directly dependent on the Ministry of Public Instruction, and in which teachers and principals for the common seminaries are trained. As regards the latter institutions, there were in Japan, in 1899, forty-nine, with 9,009 male and 1,165 female students. Instruction is free, but the government exacts of the men ten years of active teaching in schools, and of the women, five years.

The age of admission to the seminaries is fifteen years for women and sixteen for men. Those who have not attended any preparatory institution must undergo an examination, and be placed on probation for four months; at the end of that time, they may be dismissed if they are plainly unqualified to become teachers. During the four years' course of study, every student is severely grounded in morality, pedagogy, Japanese, classical Chinese, general history, mathematics, physics, chemistry, natural history, writing, drawing, gymnastics, and music. In some seminaries, there are classes of foreign languages, com-

mercial science, agriculture, and manual training. For the women students, the course lasts three years, and is identical with that prescribed for men. Generally, the young of both sexes attend the same seminary.

After he has completed all the prescribed studies, the student of the seminary takes an examination before the school board of the district, and, as there are always a scarcity of teachers, he soon secures a position. Although he may not earn much of this world's goods, he at least has enough to live on, and a well-arranged pension system takes care of him in his old age, and provides for his family after his death.

Lack of space forbids us to enter into a detailed account of higher education for both sexes in Japan, including admirable apprentices' schools for artisans, technical academies, medical schools, commercial institutions, and highly equipped and organized agricultural colleges. In that Asiatic land of the rising sun, the desire for self-improvement and knowledge is so great that numerous voluntary educational associations and teachers' institutes extend, like a network, throughout its length and

breadth. The most important of these is, perhaps, the Imperial Association of Education, which has branches through the entire country, and possesses its own library. Allied to this association is the Academy of Tokio, which, to a certain degree, is an educational society, as combined with its mission to diffuse arts and sciences is that of exercising a beneficent influence upon public education. The academy, founded in 1879, through the initiative of the Ministry of Public Instruction, represents, with its forty members, fifteen of whom are appointed by the Mikado, and twenty-five chosen by the Academicians, the very cream of the culture of Japan. It has held 196 sessions since its foundation, and its reports fill twenty-nine volumes.

Such, then, has been the astonishing educational advance and revolution achieved in the lapse of hardly more than a generation by a nation which seems destined to continue to be a beacon light in the darkness and barbarism of the Far Asiatic East. While undoubtedly defects exist, and many reforms must yet be inaugurated, the results already attained are so extraordinary as to deserve most serious study and reflection.



“No race can rise higher than its mothers.” Japanese women are essentially a race of mothers, and the care and rearing of their children occupies so much of their time and thought that they are unable to have that extensive social life which their western sisters enjoy, even were it not for the etiquette which makes it actually fashionable for them to find their pleasures in their homes.

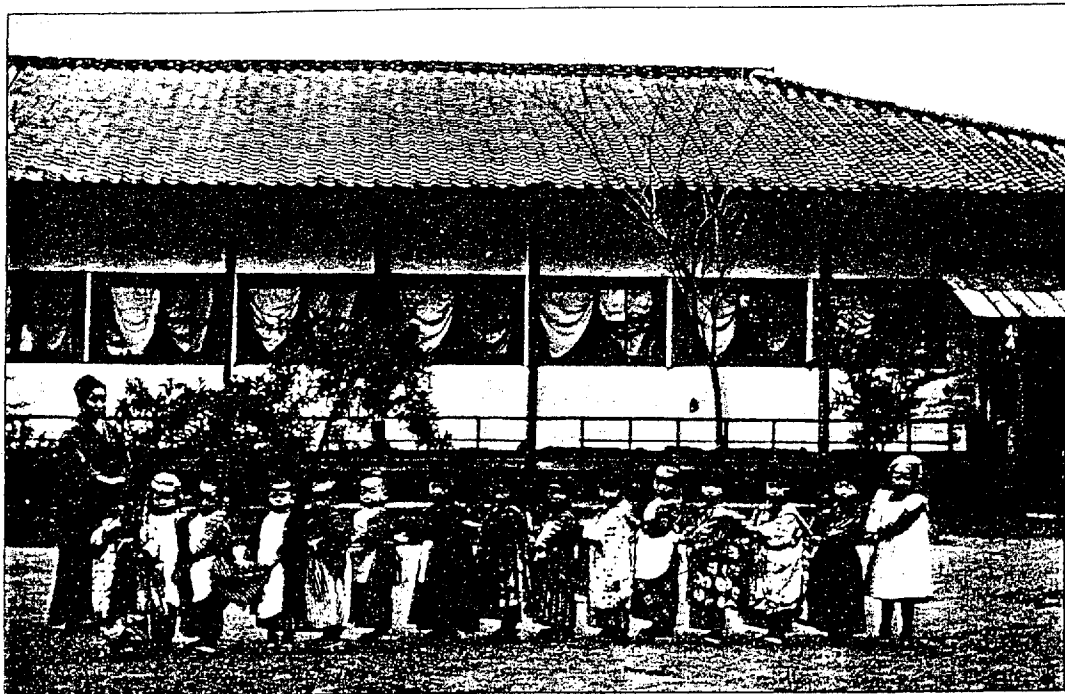
Onoto Watanna, in Home and Flowers.

④ Fannie Caldwell Macaulay "Work in a Japanese Kindergarten at Hiroshima" Kindergarten Review, May, 1905, pp. 520-525.

⑤ "Japanese Cradle Song" Kindergarten Review, May, 1905, p. 525.

Work in a Japanese Kindergarten at Hiroshima

By Fannie Caldwell Macaulay



HIROSHIMA KINDERGARTEN.

ON going to my desk I frequently find a queerly folded piece of very thin paper with this appeal written on it:—

“Dear Sensei (teacher). Please guess my heart. How am I, and how shall I find?”

Your lovely girl,
M.”

Then I know that my “lovely girl” is having a struggle, either with the next to impossible English language which begins at the wrong end of the book and reads across the page,

instead of from top to bottom as any sensible language ought to do, or else with an embarrassment of resources. This was something of my feeling when asked to give a little sketch of the kindergarten work in Japan. “Guess my heart. How shall I find?” is what I thought. It is not a matter of not having anything to say, being a woman, but what to choose from so rich and abundant a source as the kindergarten work in Japan.

For four years I have been intimately associated with the Japanese

girls in the training class and the children in the kindergarten. The experience has been like being turned into a storehouse of rare treasure, where one has only to choose to possess. Of course, the difficulties have been many, the obstacles seemingly insurmountable. For not only is the Oriental point of view different, but their English, as one student expressed it, is "stingy." It is, very, I assure you, and the history of these four years, of struggles and discouragements, of laughter and tears, of sunshine and shadow, would bring many a smile from those who understand. But, after all, the sunshine tipped the balance and we have gone on being happy in spite of it all.

The greatest difficulty, after bridging the gulf of two different languages, was to induce the girls to respond to questions asked in class. Their lessons were prepared, of course, but from their standpoint it would be very rude to assume, by giving an answer, that the student knew as much as the teacher! With folded hands, downcast eyes, and dumb lips, they would sit while their somewhat vigorous teacher would by turns coax, persuade, command, and entreat. All in vain. Finally it was decided to sit it out till some student grew bold enough to recite. The test came. Through one long, brilliant, autumn afternoon we sat—grim determination on one side, utter passiv-



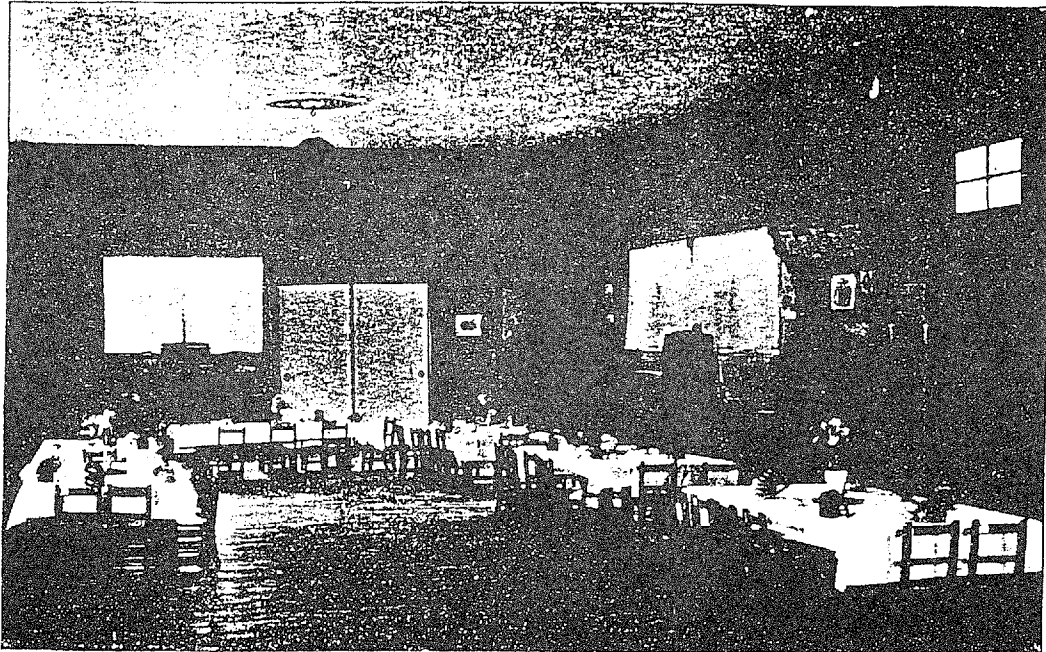
HIROSHIMA TRAINING CLASS OF 1905.

ity on the other. Twelve black heads all dressed in precisely the same style bent silently before me. Twelve pairs of hands folded at precisely the same angle lay immovable on smooth kimono covered knees. Outside the sun made pictures in the crimson maples and every breath of the fresh breeze called us to our daily walk to the blue mountains. Not a sound broke the silence of the room save the mournful cry of the fish vender on the street. Hours repeated themselves till the shadows of the mountains crept into the room and closed us in darkness. I had made it plain that we would stay till somebody recited and they were beginning to see it was not play. However, they never knew how the strain was telling on me, when, out of the depths of the darkness and silence, a soft voice with a funny little quiver in it said, "I will try." A pair of twinkling black eyes met mine, the recitation was made, and the day was saved by the God given power of a sense of humor. The struggle was over and there has never been a repetition. Faithfulness, loyalty, and an insatiable desire for knowledge have been the available materials since then.

My experience with the children has been the same. With two exceptions, I have never had to correct the same child for the same offense. Once led to conform to a law, that is the end of the struggle. Neither the children nor the students seem to lose one whit of their freedom, their spontaneity, nor their interest; but conformity to law seems to be a national characteristic and therein lies the se-

cret of their success. It makes difficulties and struggles worth while, to watch a silly, giggling, pigeon-toed girl, with round shoulders and ambling gait, transformed by kindergarten training and physical culture into a wholesome and unaffected young woman with a firm tread and straight back. The mother instinct is strong in Japanese girls and I often think, as I watch them hovering over the babies like birds over their nests, that there is many a lesson for those whose advantages are much greater, in the tenderness and patience with which these Japanese girls strive to guide the children. In the four years I have yet to see an impatient look or hear an unkind word in the Hiroshima kindergarten.

The girls are trained by custom and heredity to do things in a certain way and always in the same way. This has been a barrier to them to guide the children to self-activity or to any definite creative work. Another stumbling block was the universal idea that children, especially boys, must be a law unto themselves until a certain age. Thwarting the young tyrant's will in any way proved conclusively that the thwarter was not only a very unkind person but a very ignorant one. This point had been discussed in class till I thought there was n't a shred of it left to discuss. Imagine my feelings if you can, when, one morning, I went into the kindergarten room and found the morning march in process, and in the line five student teachers and the janitress, a very old woman, each with a young male dictator perched



LUNCH TABLES. HIROSHIMA KINDERGARTEN.

on her back, the teacher vainly trying to guide the long line of little ones with one hand and with the other hold the charging dictator on while he was pounding her shoulders vigorously, in lieu of a drum. Needless to say the despots were quickly deposed mid howls and screams, while the student teachers begged to be allowed to carry them, for they said with quivering lips and moist eyes, "You don't understand, Sensei; they *don't want* to walk." Alas, I understood too well, and that day in kindergarten will go down in history as a long, fierce struggle of one against many. But you see the one had right and Froebel on her side, and at night she could cry, "Hurrah for our side!" Now the students cry victory with

me and are the last to give in to the tyrannical demands of the new children.

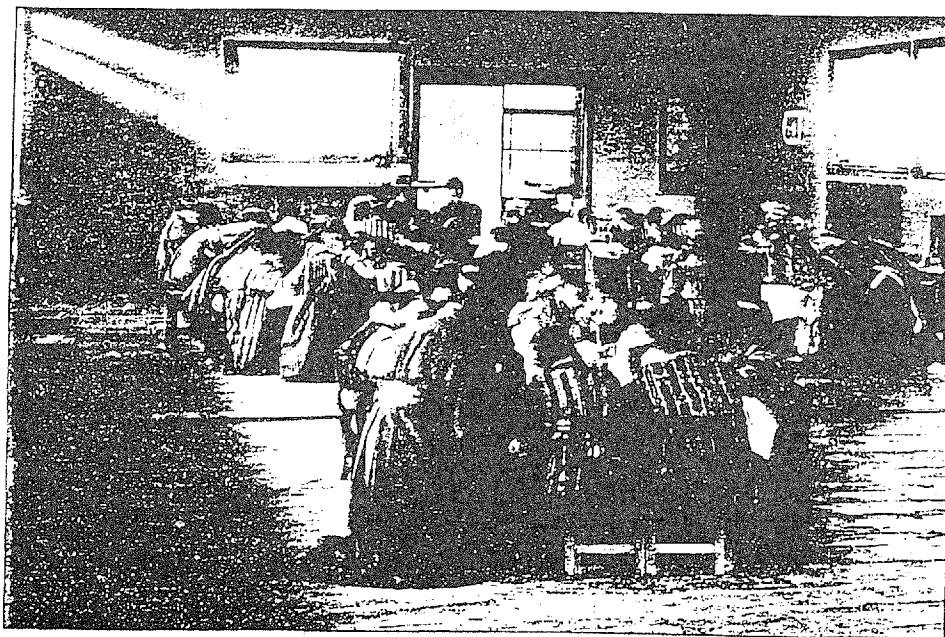
We have definite programs worked out to suit seasons, modes of life, and occupations. The students, once a week, bring for inspection their work for the following week planned for each period in the week, stating subjects, material, etc. There are surprises every week in the attractive, practical work which the students put before me,—saved from monotony by the exquisite touches so inevitable to their artistic temperament and made practical by the skillful fingers of the children. If given an idea or suggestion and allowed to work it out from their own standpoint, the result is nearly always successful. But

given the suggestion and the western idea of how it should be worked out, and lo! we have something between a crow and a canary bird, if it happens to be a bird we are working on. This is fully illustrated by what came to me one morning in a plan of work. The girls are required to write out their daily talks to the children in English. The central thought of the plan was "Our needs are supplied by ——" It was in the early days of the struggle when English words bore no relation one to the other. Our subject was "Our need of groceries is supplied by the groceryman," and this is what faced me: "Principle: Our need of a groceryman is supplied by the use of a bean!"

And the children! What shall I say that will express the all-compelling charm of these doll-like babies? Seemingly stiff and prim in their high wooden shoes and many colored

dresses and their funny little bows which are on tap at the slightest stimulus! They are transformed into veritable butterflies of rainbow hue, skipping, fluttering hither, thither, as they give expression to their feelings at playtime in the joyous, happy freedom that only childhood can know. The children are alive with interest, supplemented by a devouring curiosity to see just how "the wheels go round." It is a delight to the teachers to give their morning talk, and then, with a suggestion here and there, see with what rapidity and intelligence the children express themselves in Gifts, Occupations, or manual work. Japanese children have few toys at home and almost no definite plays or games such as children in America have. This, I think, serves to intensify their interest in kindergarten.

In disclosing characteristics pecul-

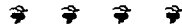


GIVING THANKS.

lar to their kind, Japanese are like their western brothers and sisters. If it be the play in kindergarten of the mother putting her baby to bed, the tenderness, the watchful care, as the little mother sings a cooing lullaby, soft and sweet as the fall of the cherry blossom, it is only a bit of a beautiful picture to be seen in almost any Japanese home. Or, if it be the play of the street children in the storming of a fort by a band of small would-be soldiers—the fort may be sand, the Russians may be sticks (for of course the enemy is Russian), the earnestness of the attack will be just as real. These fierce little soldiers, astonishingly well drilled and commanded by one of their number, will

slay the enemy by the dozens, charge and recharge the fort they have been at such labor to construct till it is annihilated, pausing only long enough to rebuild and arrange the poor, splintered, jagged enemy in line again. It is only a repetition in a play of what their fathers and brothers are doing in reality.

The kindergarten work in Japan is rich in promise, for the children are lovable, teachable, and gentle, the girls ambitious, earnest, and steadfast, and the truths to be taught lead to paths of peace and harmony. So the compensations reach far beyond the difficulties, and to be their teacher is a privilege.



Japanese Cradle Song

(Ne Honno Komori Wootah)

SLEEP, sleep, dear child, now slumber,
 After resting, awake;
 Fine red beans without number
 Thou shalt have with cake.

Hear now the wild birds crying,
 O'er the rice fields near,
 Far away they'll soon be flying,
 Slumber now, my dear.

Soon bloom the plum-tree flowers
 Near the pool of Kawai,
 Thro' cherry blossom bowers
 You shall see the sky.

—From *Cradle Songs of Many Nations*.

⑥ Alice L. Coates "Letter From Japan" Kindergarten Review, May, 1905, pp. 526-527.

⑦ Yone Noguchi "Japanese Babise" Kindergarten Review, May, 1905, p. 527.



A Letter from Japan

NAGOYA, January 3, 1905.

DEAR KINDERGARTEN REVIEW.

Besides being a connecting link with the home land—I formerly lived in Springfield, Mass.—I find so much that is helpful in your pages that it has just occurred to me that since I am renewing my subscription the editor might like a picture of my dear little Japanese children. There are forty-five of them at present and since last April thirty or more have been refused admission for lack of room.

Kindergarten closed for the holidays on the twenty-second, with our usual program, Christmas songs and

the Christmas story, half an hour spent in playing games, then the Christmas tree, which we have every year, as a graceful pine with low hanging boughs grows in the garden. Our Christmas gifts were more simple than usual this year, and given up altogether in the Sunday school which these same children attend, that we might use the money instead to buy fruit for the sick and wounded soldiers now filling the hospital to overflowing. On the twenty-sixth the Japanese kindergarten teachers and I took twelve of the children (the hospital officials had asked us not to bring too many) to the hospital,

nearly three miles distant, where the children went through ward after ward, giving apples, oranges, and dainty picture cards to the soldiers. Then, in a room where the convalescing soldiers gather, the children sang their Christmas songs to a delighted audience of several hundred soldiers, concluding with the Red Cross song, in which many of the soldiers softly joined.

On the first three days of the new year every lady must be at home to receive callers. The most charming of mine are the kindergarten chil-

dren, usually brought by their maids, as the mothers must remain at home. In former years the children, at least the girls, looked like rainbows and sunset clouds in their gay attire of silk and crepe, but now all except the tiniest of the children appear in close-fitting sleeves and "hakama," a pleated skirt of uniform dark red color, better from some standpoints, perhaps, but certainly less charming in appearance.

Wishing you a Happy New Year,
I am, Yours most sincerely,

—ALICE L. COATES.



Japanese Babies

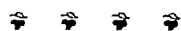
A HUNDRED gifts in various shapes are offered to the baby before its appearance; toys, big ones, of course, pieces of cotton, silk or crepe, invariably with a happy omen in their design, are a joy to the mother. The housemaids will be busy with the baby's dress, under the supervision of the grandmother. It will be no slight affair if the baby is a boy, yes, especially if it be the first son. Parties coming with their congratulations will begin to stream into the house the very next morning after the announcement. They will bring dried fish or a box of eggs to express their good wishes, which will be returned in some form of present when the baby is two weeks old. On the seventh day after the birth comes the christening, and rice cooked with red beans—does n't red mean happiness?—will be sent among the friends.

Matsu (pine) is a favorite name, since it signifies bravery keeping green even under winter's frost. Is not *Mume* (plume) better, since it is the harbinger of spring breathing out the most divine odor in the world? *Miyamairi* (going-to-temple) will take place on the thirtieth day. The boy will be dressed in a kimono; it must be silk, with the family's coat of arms on it. He will be put under the immediate protection of the deity. His fortune will be secured.

Our Japanese baby will not undergo the American torment of buttoning, pinning, tying of strings, or thrusting of arms into tight sleeves. He will live in the perfect ease of a kimono. Kimono, yes, American nightrobe apologetically modified with a shadow of formality!

—*Yone Noguchi, in Good House-keeping.*

- Everett Hale, Jr. Price, paper, \$0.12½; cloth, \$0.20.
HENRY HOLT AND CO., NEW YORK.
The Peter Newell Mother Goose.
By Carolyn Sherwin Bailey. Ill-
lustrated by Peter Newell. Price,
\$1.50.
- J. B. LIPPINCOTT CO., PHILADEL-
PHIA. On Holy Ground. By
William L. Worcester. Illustrated.
Price, \$3.00; postage, \$0.31.
- B. F. JOHNSON PUBLISHING CO.,
RICHMOND, VA. Word Studies.
By Edwin S. Sheppe. Primary
Book. Price, \$0.18.
- THE SAALFIELD PUBLISHING CO.,
AKRON, OHIO. The Home Kin-
dergarten. By Katherine Beebe.
Price, \$1.00.
- SMALL, MAYNARD AND CO., BOSTON.
Football Grandma. Edited by
Caroline S. Channing Cabot.
Price, \$1.00; postage, \$0.10.
- GEORGE W. OGILVIE AND CO.,
CHICAGO. Faulty Diction. By
Thomas H. Russell. Price, \$0.25.
- * *
- Educational Readings in Recent
Periodicals
- THE CHILDREN WHO TOIL. By
Robert Hunter. The World's
Work. December.
- THE HOME AND THE SCHOOL. By
Frank T. Carlton. Education.
December.
- THE INDIAN AS A WORKER. By
Rt. Rev. James B. Funsten. The
Outlook. December 9.
- LINCOLN, THE LAWYER. I. By
Frederick Trevor Hill. Century.
December.
- HOW BURBANK PRODUCES NEW
FLOWERS AND FRUIT. By Garrett
P. Serviss. Cosmopolitan. De-
cember.



Notes from the Kindergarten at Hakodate, Japan

“IAI Yochiyen” (the name by which we call our kindergarten) came into existence on September 18, 1895, as one of the departments of Iai-Jogakko, which celebrated its twentieth anniversary two years ago. Iai, the name applied to our school, means the “legacy of love,” and it was so called because the building fund was given by a devoted mother in memory of her daughter.

The money for the kindergarten building was given by a young kindergartner from Philadelphia. The building has three large rooms and a small study for the teachers. There is also a little garden with flower beds, sand pile, swings, and see-saws. The rooms were first intended for thirty children but, as the demand became greater, fifty were admitted and the rooms are now crowded.

We try to be true to Froebel's



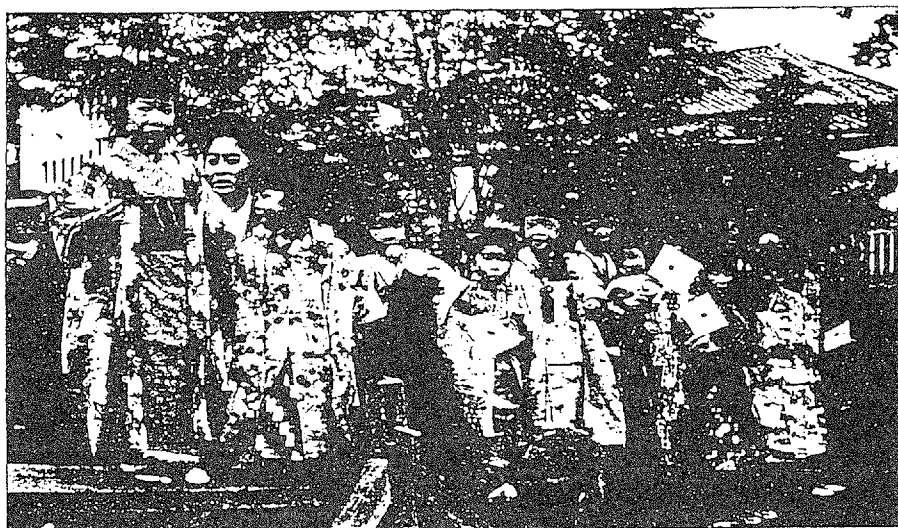
MRS. FUMI OGITA AND THREE OF THE KINDERGARTEN CHILDREN.

principles as they were interpreted for us in the Glory Kindergarten of Kobe under Miss Annie L. Howe. Our methods are about the same as

those used in Kobe with a few changes made to suit the children of the north.

The children love the kindergarten and are regular in attendance, although the climate of Hakodate is very cold and changeable. Many of the mothers tell us that the greatest punishment for their children is to be told that they are not to go to the kindergarten.

They love and trust their teachers above all others. One little boy who dearly loves his baby brother is afraid that the guests who come to his home will take the baby away. Yet he tells his mother that he is willing for his teacher to have the baby, but for nobody else. A boy of three thought of his teacher as a great person and once said that his teacher was not a woman. (He, being a Japanese boy, thinks a man is superior to a woman.) His mother asked him if his teacher were a man, and he answered, "She is not a man nor a woman, but a kindergarten."



ON A SEE-SAW.

Obedience is not always required of the children at home by their parents, and when they come to the kindergarten the first thing they have to learn is to obey. Almost every mother whom we meet says that the children do not mind her unless she tells them that she will report them to their teachers. A mother exclaimed one day when she came to the kindergarten, "If Jiro would behave half as well at home as he does here I would be so happy. The expression of his face is differ-

times mothers or grandmothers came to ask if their children could be admitted. Each had her own special reason. One mother said: "My boy is so selfish at home I cannot keep him within my management. I hope you can do something for him." Another, "We have many bad children around us and I am afraid to have my girl play with them." A grandmother said, "My granddaughter likes cakes and persists in having them all the time. If she comes to the kindergarten she



ON THE EMPEROR'S BIRTHDAY.

ent from what it is when he is at home." Some children are very quick to see and reason. One of our boys said to his mother one day, "Mother, you tell us to do one thing and, if we do not do it, you do not reprove us." The mother said that she could not say a word to that.

We had eighty applicants waiting for entrance for the twenty-one vacancies that occurred in April, the time when the children of six pass up to the primary school. So many

will probably stop it. So I ask you to admit her as a special favor." Still another, "Our boy does not mind anybody at home. He needs some one whom he fears. He is told that you are the one to be afraid of. Can't he come in just as an extra one?"

Most of the people do not understand about the kindergarten. We often hear them say that they send their children to prevent their constant eating of cakes.

We have severe winter weather in Hakodate and the roads are very bad, so that it is hard for even grown people to walk. Those who have never seen anything but paved city streets can hardly realize how bad the roads are. Besides, our Japanese wooden shoe is very inconvenient in bad weather. Sometimes a child comes covered with mud and sometimes he comes wet through. In the severest winter weather the children come wrapped in blankets. They remind us of the Esquimaux in the pictures. Sometimes they get very cold on the way, their hands and feet are numbed, and the wraps around their mouths are frozen, so that even the bravest boy comes with his eyes brimming with tears. But, when they are brought near the stove and warmed, they are soon cheered, and begin to tell how they conquered the raging storm.

So, we have, for the last three years, been having our longest vacation during February and March, and take advantage of this winter

vacation to visit other cities where there are kindergartens.

The effect of the war was shown even in the kindergarten. When the children played with the Gifts and slats, they made gunboats, torpedoes, cannons, wagons, and cars to carry soldiers. Some of the boys knew the names of the generals and recognized their faces in the pictures.

To be a soldier is the highest ideal the little boys have. We had a boy whom he and his friends called Admiral Togo. There was no one equal to him in his ability in organizing his little soldiers. At recess he gathered the boys together and made them into a file, with some as officers. He then led them around the yard, some imitating gunners, some waving flags, and some pretending to be trumpeters. When the weather was not favorable for them to be out, they made a hospital with chairs. The girls were then asked to play nurses. The wounded soldiers were carried in, doctors examined them, and the nurses bustled around. It



A DAISY PICNIC.

is a wonder that those wounded soldiers could keep quiet so long!

The children love music and love to sing one song after another. Each one is eager to choose his or her own favorite. For ear training we sometimes play the tunes on the organ and, after listening to the first one or two measures, they recognize the tune and follow with the words.

The children like to walk on the

mountain when the warm weather comes. The hillsides are covered with dandelions and buttercups, and the children say that they are invited by the butterflies or dragon-flies. They take their lunch with them and eat it on the grass or on a bed of clover; some sit on the stump of a tree. Even the dullest child becomes freer and his eyes and ears seem to be opened.

MRS. FUMI OGITA.



Georgia Allison



TEN years ago a committee appointed by the Board of the Pittsburgh and Allegheny Free Kindergarten Association journeyed to Chicago for the purpose of studying the development of the kindergarten

in that city and of securing, if possible, a superintendent for the work which had been begun in Pittsburgh. The election of the committee fell upon a young girl of twenty who was still a student at the Chicago Kindergarten College and who refused to consider any position which might be offered until she had completed the preparation for her chosen work. Her personality so impressed the committee that they decided to wait for a superintendent until she should be ready to accept the responsible position. The years which have passed since this decision was made have richly confirmed its wisdom; for the young girl then chosen to organize and develop the work in Pittsburgh has accomplished one of the greatest marvels in the history of the kindergarten movement.

When in September, 1896, Georgia Allison entered upon her life work

② "Seventeenth Annual Meeting of the International Kindergarten Union, Report of Committee on Foreign Correspondence" Kindergarten Review, June, 1910, pp. 639-643.

Louis Teachers' College, under the direction of Miss Laura J. Soper.

The general subject for the evening was *The Making of Our Little Citizens*, and the first speaker introduced by Miss Alice O'Grady, president of the I. K. U., was Mrs. Anna Garlin Spencer of New York. Mrs. Spencer, who is director of the School of Ethics and member of the faculty of the New York School of Philanthropy, is a speaker of ability and is especially interested in questions of child welfare. She took as her special subject, *The Changing Population of our Large Cities*.

Miss Hortense Orcutt, supervisor of the Free Kindergarten Association of Savannah, Ga., followed with an address on *The Kindergarten and the Family of the Little Forcigner*.

Mr. Frank Manny, who has held educational positions in different sections of the country and is now principal of the Western State Normal School, Kalamazoo, Mich., gave the last address of the evening on *The Process of Americanisation in the Kindergarten and the School*. (Page 612.)

Opening Session

On Wednesday morning the program which constituted the formal opening of the convention was carried out, beginning with an invocation by Dr. Charles S. Mills, pastor of Pilgrim Congregational Church, St. Louis, through its representatives. Hon. Frederick H. Kreismann, mayor, Mr. Robert Moore, president of Board of Education, Mr. Ben Blewett, superintendent of public schools, and Mrs. Philip N. Moore, president of General Federation of Woman's Clubs, extended the usual cordial welcome to the visitors, and assured the Union of its

interest and sympathy in the kindergarten cause, which is so vitally associated with its educational history. Miss O'Grady, in response to these addresses of welcome, expressed the gratification of the kindergartners in the recognition their work is receiving.

The remainder of the morning was given over to the reports of officers, committees, and delegates.

Miss Ella Elder, corresponding secretary and treasurer, reported the addition of six new branches and five associate members, making the number of branches in good and regular standing, 115, and associate members, 102. The total individual membership cannot be given exactly, owing to the failure of several branches to report the number of members, but it approximates 12,000. Of the new branches, the Dunedin Froebel Club, New Zealand, is the most distant accession, Dunedin being probably the most distant from New York of any city on the globe.

The treasurer's report showed the total receipts to be \$1,143.34; total expenditures, \$821.56; leaving a balance of \$321.78, which with the Cooper fund gives a balance on hand of \$593.75.

Miss Netta Faris, chairman, submitted the following:—

Report of the Committee on Foreign Correspondence

Friendly greetings, hearty good wishes, and encouraging news concerning the progress of kindergarten work have come from many quarters of the world. Especially is it gratifying that almost universally governments and those in high authority are beginning to realize the value of the kindergarten as the foundation of all education and are now lending their cordial support.

From the National Froebel Union of

London, England, comes a very interesting report of the Child Attendant Association, which Mr. E. H. Maclean, secretary of the Union, explains has recently become affiliated with their organization and "has been inaugurated in order to train people to look after the little ones." The requirements for admission to the school are good health, good disposition and character, refinement, and intelligence. Six months of practice work is required of each student in a "selected school" under supervision, such work to include: (a) Reception of children and separation of those giving evidence of personal uncleanness or physical disabilities, such as sore eyes, heavy colds, or symptoms suggestive of the early stages of some infectious illness; (b) the washing of children, supervision of and attention to their bodily functions and decent use of the offices; (c) organization and supervision of lunches; (d) disinfection of garments when indicated; (e) necessary first aid to minor accidents,—cuts, sores, etc. The course covers: (a) Twelve hours of instruction on elements of child hygiene and care of children; (b) twelve demonstrations on the characteristics of normal and abnormal children; (c) twelve demonstrations with practice in methods of cleaning the children's persons, disinfection of clothes, and washing and dressing of cuts, sores, or bruises, care of school "lunches," drinking cups, etc.

Miss Kate F. Bremner writes that in connection with the free kindergarten, under the management of the Edinburgh Provincial Committee for the Training of Teachers, the dinner hour has been a particular feature this year. This kindergarten, conducted in the poor and densely populated district of Fountainbridge, has provided a nourishing midday meal for the children in attendance, at the nominal cost of a penny a day to the parents. This sum, wholly inadequate to meet the expenses incurred, has been added to by voluntary contributions. In addition, provision is made for an afternoon rest in net beds, light and portable, thus allowing for sleeping in the open air when the weather is warm enough. Excursions have been taken—one to a farm in the neighborhood of Edinburgh, where a little fellow upon seeing a cow milked remarked, "A dinna ken it cam frae a coo." It has not been found that

what is being done tends to minimize the mothers' sense of responsibility towards their children. On the contrary, they are responsive and grateful, and much of their appreciation has taken the practical form of offers to help the school. One mother helps to make the overalls which the children wear over their everyday clothing during school hours; another allows her boy to be school messenger out of school hours; and the different families wash the overalls once a fortnight at their own request.

From Dartmouth, Nova Scotia, comes rejoicing for the progress made and the encouragement given to the kindergarten workers by the Council of Public Instruction at the Truro Normal School. This school has now established a training class for kindergartners. The Council of Public Instruction will give diplomas to the graduates of this class, carrying a government grant of \$120 per annum. This will make it possible to open kindergartens in different parts of the country which could not otherwise afford to do it. The Council very handsomely conferred upon Miss McKenzie, principal of the kindergarten training department of the Truro Normal School, and upon Mrs. Hamilton, who has had charge of the kindergarten work at Dartmouth since its inception twenty-one years ago and has always been active in the advancement of the cause, the first kindergarten diplomas of the kind above mentioned. At present there are only three public school kindergartens in Nova Scotia, one in Dartmouth, one in Halifax, and one in Truro, the last mentioned being the practice kindergarten for the Normal College.

Miss Ellen Desailly of Sydney, Australia, sends the following word: "The Kindergarten Union of New South Wales, Australia, is now nearly sixteen years old. We are proud of being the pioneers of this good work in Australasia, and we are pleased, indeed, to report that the education department of New South Wales, convinced now of the importance of kindergarten teaching as a first essential in education, is establishing kindergartens in the public schools wherever possible and is training teachers to this end. * * * In Melbourne (Victoria) and Adelaide (South Australia) kindergarten is gradually be-

ing introduced into the public schools and the training of kindergarten teachers is steadily growing in importance. * * * Sydney stands at the head of kindergarten work in Australasia and its fully equipped college, with about fifty students under the direction of a staff of American trained teachers, is doing excellent work."

Miss Annie L. Howe of Kobe, Japan, has divided her report as follows: "(1) *The Kindergarten Union of Japan*. This body is now represented by fifty-four active members, six associate members, and forty-six kindergartens. Of course, you understand that this is all mission kindergarten work. The numbers seem small to you, naturally, but when you realize that twenty years ago there were only one or two at most trained kindergartners, and only two kindergartens, you can understand how missionary sentiment has changed in favor of this phase of educational work. At our last annual meeting, held in August, 1909, we had a fine exhibit of work sent on from Boston, Chicago, New York, and other cities; in addition to this, the exhibit from our own kindergartens here in Japan was most interesting to all of us. This exhibit of work is one of the most valuable agencies, I feel, in presenting new ideals before those in charge of kindergarten work who have not had so much experience, perhaps, as some of the other members. We also introduced an afternoon of games, which proved to be one of the successful features of the meeting. We welcomed a number of new members, trained kindergartners, from the United States. The papers presented were of a higher order than at any other meeting; the Japanese kindergartners attended in much larger numbers than ever before, and altogether we feel very greatly encouraged with the progress made by our Union. We greatly appreciate the fact that the Kindergarten Union of Japan has been made a branch of the International Kindergarten Union. It is a step in the right direction, this joining of forces between the Occident and Orient. I am sure the day will come when we shall be sending delegates to each other; in fact, I am sure the day will come when there will be an international gathering of kindergartners in Japan. (2) *The growing interest in kindergarten work*. In 1900

I seemed to be the only person available to read a paper at the Mission Conference in Tokio at that time. I was obliged to say, 'We have dozens of Doctors of Divinity, scores of college graduates for the education of youth in our field, while many a mission board is still unwilling to allow even one woman to give her whole time to this kindergarten work.' This statement, perfectly true at that time, no longer holds. I think it is safe now to say that there is not one mission in Japan which is not opening kindergarten work. Five of them have their own training schools, and many others, while they do not attempt the training of teachers, are sending for trained women to look after their kindergartens. The government is far ahead of us in the matter of buildings and equipment. * * * (3) And right here let me say a word about *the young woman who would like to come out to Japan to do kindergarten work*. For a year or two I have been receiving a good many letters from young women who would like to come out to the Orient simply for the novelty of the thing; they want to travel; they want to see Japan. They have not money to do this, hence they look upon missionary work as a means of paying their expenses. They know nothing of conditions; they, in too many cases, I fear, have no staying qualities to grapple with the difficulties and discouragements which lie, I think, in the path of any one who would attain success in this land. The work must be done in Japanese. Two years is the very lowest limit which can be put for gaining a working knowledge of the language. Mission boards are very strict in their examinations for candidates, and salaries are low. It is true that women of experience, maturity, and deep Christian faith, who are strong enough physically and mentally to stand the strain of work here in Japan, will be most gladly welcomed and are sorely needed. But it will be well for any others to think very carefully before considering kindergarten work in Japan. A young lady arrived here a few weeks ago, and was utterly astounded when she found she must study Japanese! She supposed she could teach the Japanese children as she had taught Italians and other foreigners at home. This is only one instance, but there are others like her. (4) *The celebration of the twentieth anni-*

versary of my work. It was one of the most beautiful events of my life, this gathering together of our four hundred and fifty-six graduates from the kindergarten and the sixty-one graduates from the training school. The chairman of the celebration for the kindergarten graduates was a fine young man just out of a medical school in Tokio, having graduated from our kindergarten in 1891. Another very interesting thing was the calling back of fourteen of our training school graduates now in charge of kindergarten work in various parts of Japan. We were able to pay their expenses, which made it easy for them to come. Another interesting feature was the presence of three famous men who came from Tokio to give addresses at the last of our meetings. The department of education sent one man, and of the two others one was the editor of one of the largest newspapers in Tokio and a prominent member of Parliament as well, while the other had also been an M.P. and is now prominent in educational work. We had supposed that they would speak on general educational topics; imagine our delight when they confined themselves closely to kindergarten themes."

Miss Mary Cody of Nagasaki, Japan, reports three kindergartens under her supervision, with an attendance of one hundred and six children, differing very greatly as to social conditions. Especially is this true of the two most recently established. In one there are the children of ship colliers, coolies, etc., while in the other are children whose fathers are lawyers, physicians, government officials, well-to-do merchants, who belong to the more progressive and less prejudiced of the aristocratic class, for the old, conservative Nagasaki residents still retain their hatred of Christians, handed down for two hundred years, and will have nothing to do with anything bearing the name of Christian. The training class numbers six, two of whom graduated in June, a Japanese and a Chinese, the latter expecting to return to China to do kindergarten work.

From Miss Clara Martin of the Anglo-Chinese Girls' School, Penang, China, comes this word: "I have had charge of the Girls' School here this past year and for a part of the time I have planned the work for the teachers. Our kindergarten numbers about sixty chil-

dren, most of whom are girls. There are Chinese, Tamil, Malay, Siamese, and Eurasian; there are a few English children. Most of them are beyond kindergarten age, so that they have some primary work in connection with the other work. They join as heartily in the songs and games as children will in any country. It takes a long time for them to get the words of the English songs, but their parents are anxious for them to learn English and are much pleased when their children can sing English songs."

Miss Charlotte Halsey of Trebizond, Turkey, writes: "It was a little hard at first in Constantinople, for we had three separate kindergartens, with as many languages, Turkish, Armenian, and Greek. One can allow for restless children when they have to wait for three translations. We had ninety children and a training class of eight; two of these were Greek and the others Armenians. Three of the girls are teaching in the same school and the principal writes that they are a great comfort to her."

Mardin, Turkey, through Miss J. Louise Graf, sends us encouraging news of the progress of kindergarten work there. She writes: "This year we revised the *Mother Play*; a high school teacher, being free because of the closing of school for the year, put the mottoes into good Arabic rhyme, and the prose is also well done. When I came to take up the work fifteen years ago we had perhaps six kindergarten songs and games. We began to translate and originate until now we have one hundred and fifty songs, games, and stories."

From a very interesting letter from Miss Elizabeth C. Clarke of Sofia, Bulgaria, I quote the following: "More than a hundred children have been enrolled in our two kindergartens, and a very mild winter has favored a more regular attendance than usual. There are five young women this year taking kindergarten training as part of their work. The Juniors are translating Miss Harrison's *Study of Child Nature*. The father of our senior kindergartner, a very good linguist, has offered to revise their translation in gratitude for what the kindergarten has done for his daughter. The first chapters have already been read before a circle of mothers, a num-

ber of whom expressed warm appreciation. Once when our good Queen Eleonora was asking about our work I told her about this translation that is preparing, and she asked for a copy of the book, saying that we might perhaps have a larger edition printed for wider use among young women. I hope soon to send her a copy of that and of *Misunderstood Children*, with a card from the author. Her Majesty seems to have an unlimited fund of sympathy, and interests herself in all that concerns her people. This week she visited our smaller kindergarten, and it was characteristic of her that the poorest child attracted the largest share of her attention. Several times she has signified her readiness to help whenever we have kindergartners enough to open a third kindergarten in town. Our widening circle of mothers, who from time to time have attended our mothers' meetings, help us in various ways."

From the *Report of the Work Connected with the Pestalozzi-Froebel House*, Berlin, Germany, I quote Frau Richter as follows: "Although our Berlin Association for the Education of the People has been in existence for thirty-eight years, our chairman can, with perfect truth, say of it to-day that it is still undergoing a process of development, and that it is full of energy and young life."

Fraulein Hanna Mecke of Cassel reports that her work is being most successfully carried forward by an accomplished faculty of twenty-nine, seven of whom are men.

Fraulein Eleonore Heerwart, our faithful friend and correspondent, tells of the increasing interest in kindergarten work in Germany. She says: "It is most encouraging, I might almost say amusing, to watch the growing interest in quarters where great indifference prevailed; it may yet become the fashion to speak of Froebel." Over one hundred new members have been added to her Society. A Kindergarten Training School, with kindergarten attached, has been opened in Eisenach. Most interesting and significant is this bit of news: "In the royal Elisabeth-Schule in Berlin, Fraulein Gertrude Papenheim is engaged since last October to conduct a kindergarten and give lessons where the upper class of the Girls' High School attend, and she says they are well pleased and

interested. This arrangement is now introduced in several high schools, and will most likely be extended over Germany." Fraulein Heerwart also writes entertainingly of the celebration at Schweina. She says: "Rich and poor, high and low, took part in our program; at the head was the Duke of Saxe-Meiningen, the school authorities, and last, though not least, the twenty-seven old pupils—three men and twenty-four women—who once played with Froebel, 1850-1852. Many memories were called forth, so that past and present were linked together by a series of events which make up history like many colored stones making a mosaic floor in the picture of Time. A coming event of great interest is the celebration of Madam von Marenholtz-Bulow's one-hundredth birthday, in Dresden. On the 5th of March, at 12 o'clock, her monument will be unveiled, as well as a tablet in memory of her niece, the Baroness, who died last year. In the evening a grand meeting will be held, with speeches, songs, and social intercourse, and during April a memorial exhibition is planned showing all that Madam von Marenholtz has done during her most active life. About the same time at which you assemble we shall have met here. Our hands cannot feel the warm clasp of friendship, but the spirit has no limit, and no barriers of sea and land can hinder our mutual intercourse."

Miss Elizabeth Harrison, Chicago, reported for

The National Association for the Promotion of Kindergarten Education

This is one of the new societies which has just become affiliated with the I. K. U., and was organized for the purpose of arousing an interest in this important subject throughout the length and breadth of the land. It is the intention of the association by judicious effort, through the use of the press, leaflets, and lectures, to inspire state officials, boards of education, and prominent citizens with such interest in this subject that

© Mary F. Ledyard "Kindergarten Housing and Kindergartens Around the Pacific's
Pim" *The Kindergarten and First Grade*, Dec, 1917, pp. 401-409.

The Kindergarten and First Grade

VOL. II

DECEMBER, 1917

No. 10

Kindergarten Housing and Kindergartens Around the Pacific's Rim

By Mary F. Ledyard, Los Angeles, California

"And Nature, the old nurse,
Took the child upon her knee,
Saying, 'Here is a story-book,
Thy Father hath written to thee.'"

WHEREVER the word kindergarten is known and loved it surely should presage fresh air, sunshine, bloom, and the open in general. Delightfully as many parts of the Occident and Orient have translated this pregnant word into terms of "God's great out-of-doors," there are still found vast areas on both sides of the Pacific which are yet unblessed by this rightful heritage of every little child who comes into the world—a properly equipped kindergarten home, together with an opportunity for nature study at first hand.

Setting at one side the all-determining factor of the personnel of the kindergarten world, both Occidental and Oriental, and looking at the externals, the mere housing of these same kindergartens, it is interesting to note how more and more apparent becomes the response to the call of the open, or nature's call, as one proceeds toward the setting sun, culminating, it would seem, under the Southern Cross in Honolulu, and yet remaining the most striking attribute when viewed from a vantage point again in the land of the rising sun. When we consider West and far East, the western coast of America, Hawaii, China, and Japan, the resemblances and differences in kindergarten housing and equipment are remarkable indeed.

Climatic conditions favor almost the entire Pacific coast to such an extent that out-of-door kindergartens seem almost indigenous to the soil. They seem to be the most natural, spontaneous mode of expressing the most sane living that the people know.

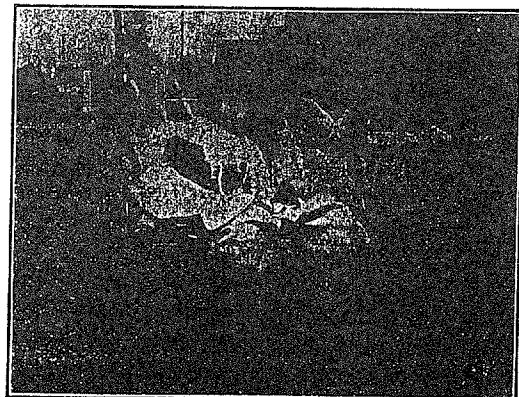
All the way from San Diego, California, to Tacoma, Washington, the kindergarten housing takes on a more or less out-of-door aspect, usually accom-



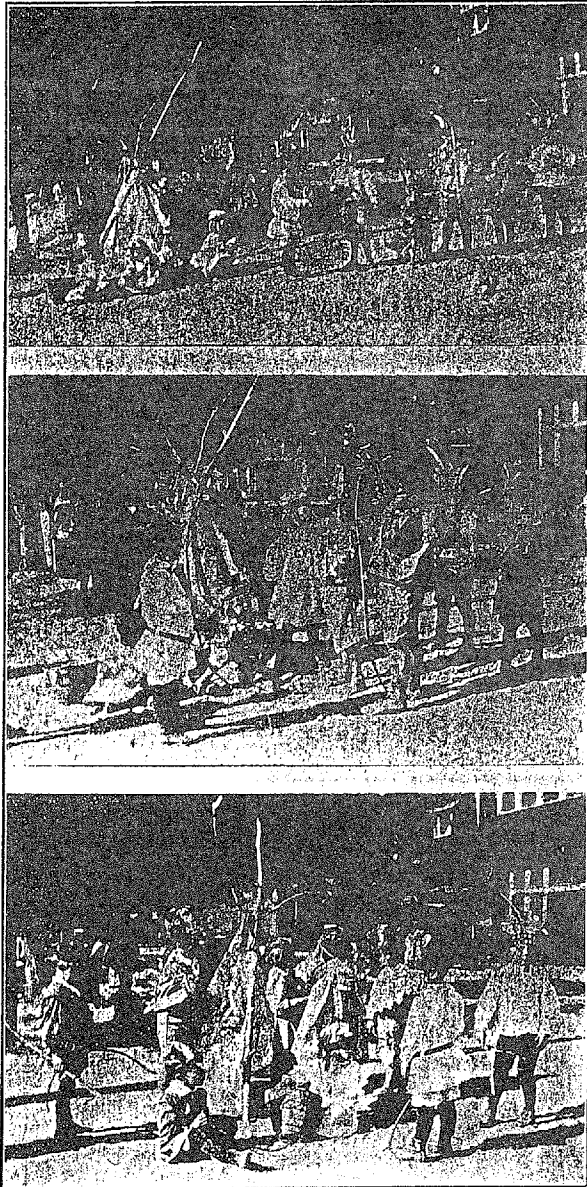
In the Garden

Fremont Ave. Kindergarten, Los Angeles

plished by means of buildings so constructed that a whole side of a room may, at any time, be thrown open to the sunlight and air by means of cleverly constructed sliding doors and windows. At least this characterizes the construction of the most up-to-date kindergarten structures everywhere. Of course



Belinda Jane and her Ardent Admirer



Outdoor Dramatization of Hiawatha Story

1. Indians shooting bear.
2. Indian chief bringing bear home on his back.
3. Skinning the bear.

(Wigwam made by boys, sewing done by girls.)

where the kindergartens are housed under the same roof as the rest of the grades in large conventional buildings, as obtains usually in Los Angeles for example, the above conditions cannot be realized to

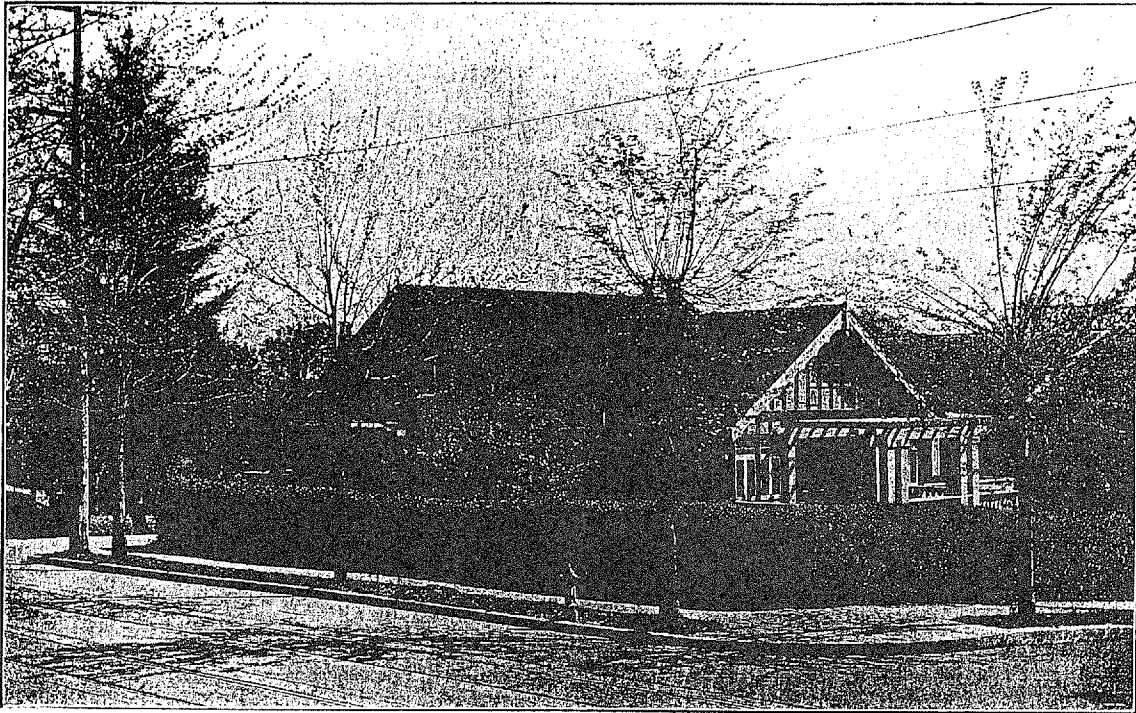


Southern California Kindergartens

1. Outdoor games.
2. Free play.
3. Sand pile. Illustrating mountains.

any great degree. Los Angeles may justly be proud of her wonderful kindergarten gardens, however, than which no better can be found in any land beneath the sun.

Traveling north to dreamy old Santa Barbara, one finds the matters of both housing and kindergarten gardens worked out to perfection. Here one recognizes at once something which strongly smacks of "Far Japan" in the way collapsible screens and sliding windows and doors are used to guard against



St. Helen's Hall Kindergarten, Portland, Oregon

storm, when needed, and invite sunshine and fresh air, when possible. Here one often finds a whole side of a building thrown open to a terrace below where a veritable paradise of bloom is discovered, which has been planted, watered, tended wholly by baby hands. Nowhere in the world, except in Hawaii, can be found gardens of such rare perfection.

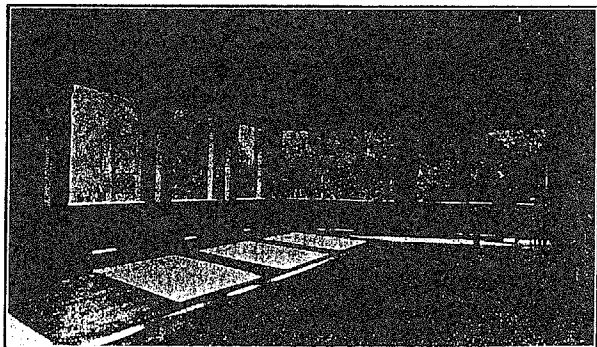
Central California, San Francisco and vicinity, seem to have awakened slowly to a sense of the mighty possibilities lying within their grasp along these lines. This may in part be explained by the presence of a note of sternness in their climate not featured in the southern part of the state.

To Portland, Oregon, we next turn, taking up the thread dropped in the sunny southland, and finding it not impossibly connected with a small but very representative expression of the idea we are following, thence the "High Sign" is passed on to Seattle and Tacoma. Portland holds this advantage over many of the cities of the west coast in that it conserves its most beautiful hills and parks and rivers in such a way as to bring undefamed nature to the very feet of the children of the town.

Every child in the city of Portland can, by taking a very little walk, be transferred to the very "forest

primeval," untouched and untarnished by the hand of man. As a result of this it would seem to be impossible for the childhood of Portland to grow into anything less than nature-loving beings. Much of the condition obtaining here also is rejoiced in by both Seattle and Tacoma, a fact which the people do not fail to comprehend and take advantage of.

St. Helen's Hall kindergarten furnishes such a splendid example of modern kindergarten housing,



Play Porch, St. Helen's Hall Kindergarten

72 feet long, 34 feet wide

that a detailed description is of interest. Though only a few squares from the heart of the city of Portland, it is situated just one square from the gateway of one of the most beautiful public parks of the city. This park stretches away into the low hills which fringe the city until it is lost at last in the veritable forest. In this park the children spend whole joyous days, studying the flowers in their seasons, the habits and songs of the birds, the squirrels in the trees, and the animals of the Zoo, all of which are to the children old and familiar friends. It is not too much to say that not anywhere in the whole world can be found a more ideally situated "House of Childhood," with the distinctly out-of-door characteristic of its architecture, and its perfection of setting.

Surrounding the building is a garden which occupies an entire block, where tennis courts and playgrounds and gardens are available for fair days, but even when the rains descend, still are the little people happy for they are not forced indoors. A wonderful play-porch, 72 feet long by 34 feet wide, is provided in which the children may romp to their hearts' content. This porch is also roofed over and screened in, and is provided with a sand table and blackboards and kindergarten circles.

The building itself, early English in style, presents a charming exterior—plastered in gray, and paneled in black and white. The graceful balance is obtained through two widely spreading wings, and a saving touch of airiness is gained through the two pergolas, which are thrown out from these two wings on either side of the building.

Entering, one is impressed with the hominess of the reception hall, from which open offices and cloak rooms. On the right, one enters the beautiful kindergarten room, and on the left is a similar room devoted to the primary, or first grade. From each of these rooms dressing rooms, lavatories, and a wee kitchenette open. On three sides of the two large rooms windows open almost to the floor and quite fill the entire sides of the rooms, with the exception of two double doors, one of which leads into the pergola and the other into the play-porch. This last adjunct is a more needed one here than in many other places, owing to the large number of days when rain falls, but yet a warm atmosphere makes sheltered out-of-door play most desirable.

Since opportunities are almost unlimited for gardening enterprises, and nature study at first hand, the treasures which are brought into the kindergarten room and set up there are as varied as nature's

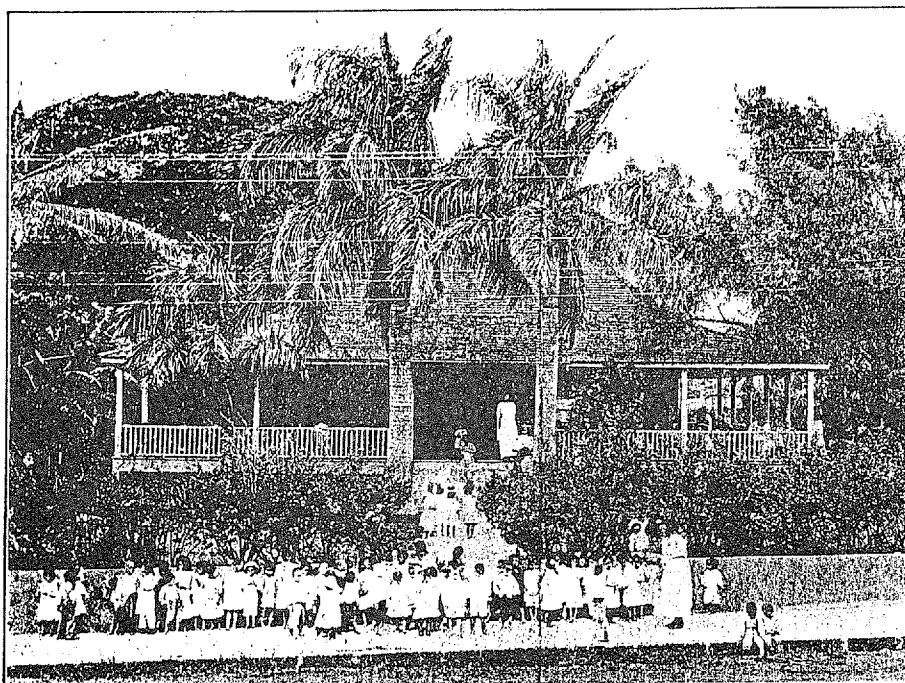
storehouse affords. In the fall the gay leaves, the cones, the burrs, the nuts, and hips convert the morning march into an autumn pageant.

The superstition seems to have taken root in some localities that such open-air living as this is not possible in a northern clime. On the contrary, nowhere in the world can be found more sturdy, ruddy, and in every way robust children than in this very kindergarten, where illness is almost unknown, and where at every season of the year they are given marching, rhythms, and the more active games always in the open. Contrast such a life with the so-called educational systems into which we as children were thrust, and then cheerfully acknowledge that "the world do move."

Almost daily comes a wail from some member of the training class, who act as assistants in the various charity kindergartens of the city, "Oh, if only my poor babes of 'Little Italy' could be set down in St. Helen's Hall kindergarten for an hour!" If all the children of all the lands, especially of all the poorest sections of the cities of these lands, could be similarly educated, it is not too much to say that the blood-stained battle flags now floating over most of the world would be forever furled, for there never has been, and probably never will be, a more humanizing influence than the kindergarten philosophy, when rightly understood and wisely applied.

Crossing to our most western outpost, Honolulu, H. I., we find all that we have noted respecting the housing of kindergartens on the western coast of America (or on the "mainland" as they say over there) plus something more which smacks decidedly of the Orient. It is as if the kindergartens of Honolulu stood with arms outstretched, reaching one hand back to their mother on the mainland of America, and the other on to their little brown neighbors overseas, while from their own Kanackan homeland is supplied the medium which completes the blend and makes of it something bewitching and adorable beyond compare.

Here the buildings are less substantial than are those on the mainland (herein lies much of their charm) yet they are not as fragile as the purely Japanese type, though permitting of nearly as much open-air living. But the gardens, oh, those tropical gardens! Nothing anywhere in this world can compare with the loving response which nature makes to the tender caress of baby hands in Hawaii. The kindergarten gardens of this wonderful subtropical land must always remain a marvel and inspiration to kindergartners the world around.



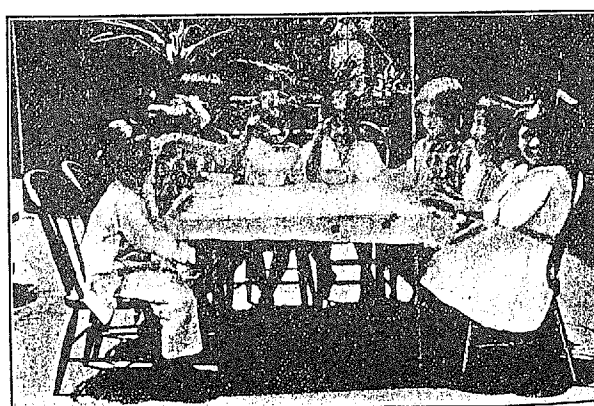
Model Kindergarten, Honolulu, T. H.

It remains for our little brown neighbors, however, to fully demonstrate the most truly economical, practical, and at the same time artistically beautiful kindergarten housing plans suitable to any mild climatic conditions. What could be more sanitary, sunny, airy, and wholesome than their fragile one-story structures surrounded by wide porches into which whole rooms may open by means of wonderful

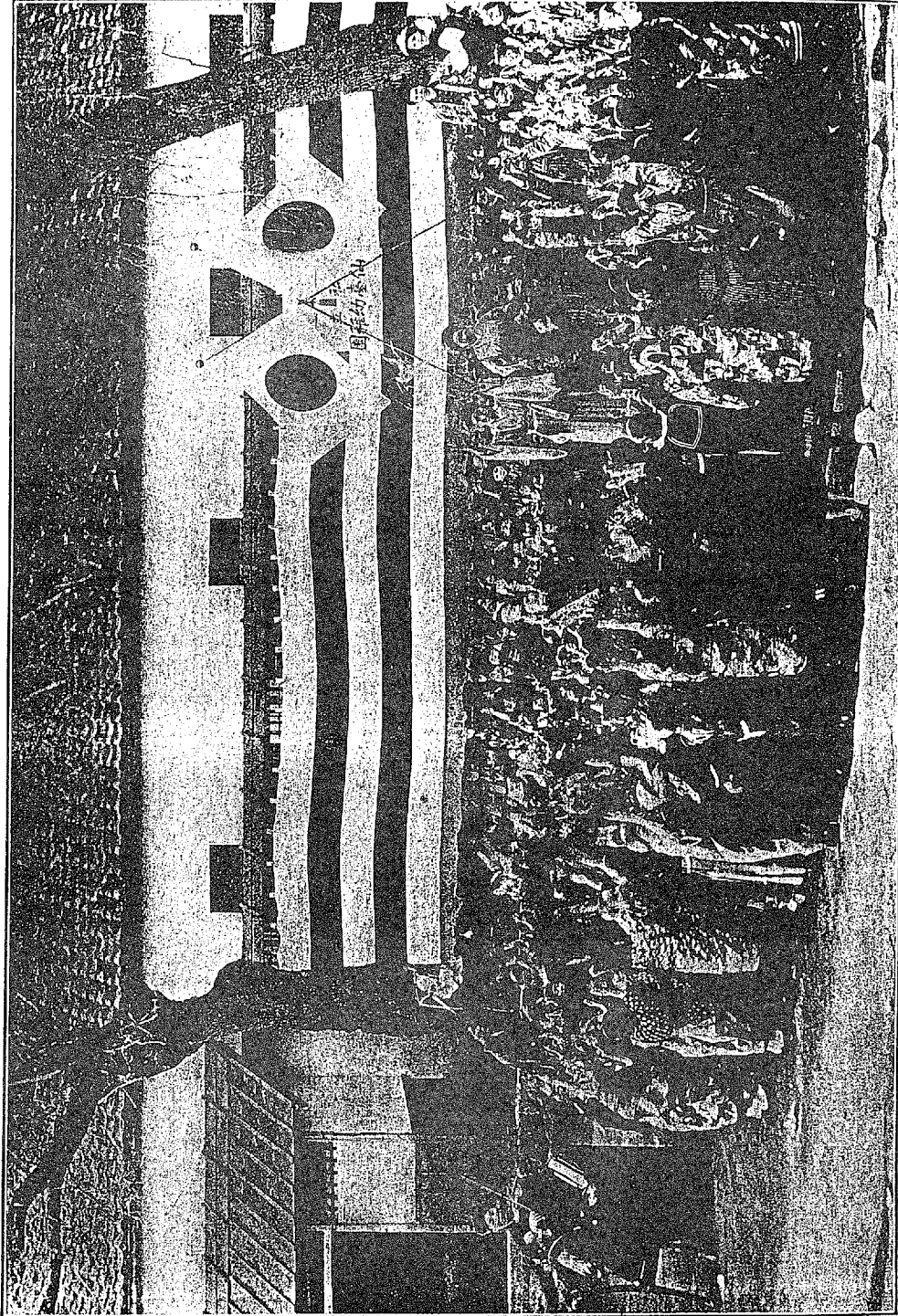
sliding screens? What could be more beautiful than the matted floors and wooden walls and ceilings; indeed what more restful and altogether lovely than the softly padded floor upon which no dusty shoe or boot is ever permitted to fall? There is great gain made possible also in the muscular co-ordination, balance, and power through free activities without the handicap of a heavy shoe or boot.



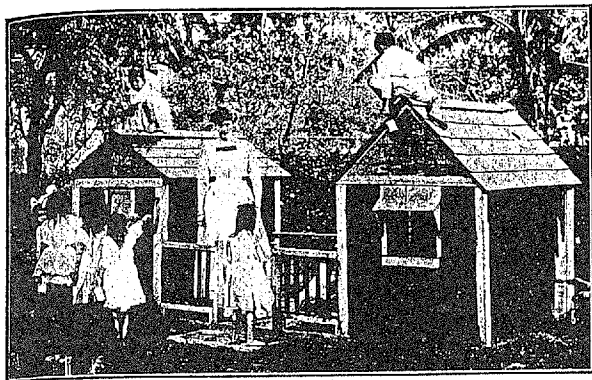
Kindergarten Children Sailing the Boats they Have Made, Honolulu



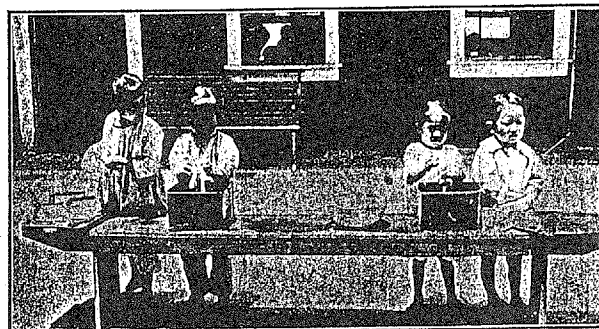
Luncheon Hour at the Beretania Kindergarten, Honolulu



Games in the Garden, Japanese Kindergarten, Kobe, Japan



Kindergarten Children Painting the Play Houses,
Honolulu



Kindergarten Children Washing Dishes after
Luncheon, Honolulu

Once seen, a Japanese kindergarten can never be forgotten—its cleanliness, its artistic effects, its kaleidoscopic mingling of bright colors in costumes, and the exquisite gardens in the care of which each little one has his very definite part. Could the wheezing, asthmatic, archaic organs be expelled from these beautiful kindergartens, one might include the sounds as well as the sights in a song of praise—but not yet, alas. Because the first mission kindergartner could afford nothing better in the crude pioneered effort of the early days the imitative Japanese promptly concluded that nothing better was possible, and so the ear murdering goes gayly on.

Many a kindergarten building in Japan contains four or five or possibly more rooms, the walls consisting of sliding screens (called Shojis) made, as in all similar structures, of rice paper put together in narrow wooden frames. When these Shojis are folded back the room is practically out of doors, with a wooden ceiling overhead, soft padded mats underneath, and about the sides of the room wainscoting of wood from three to ten feet in height. The trees and the flowers and the vines and the birds seem so much a part of the room that the mind is left confused as to whether the room is in the garden or the garden in the room.

Here again the usual American kindergartner might well profit by following the Japanese example as to decoration. Always is placed but one lovely thing in a room at one time, and that in such a way as to give the most perfect effect; one beautiful flower, so moulded into its setting that it delights the very soul; one picture perhaps, set up in so perfect a light and position as to bring out its every charm. Compare this exquisite simplicity with some of our kindergarten rooms crowded and overlaid

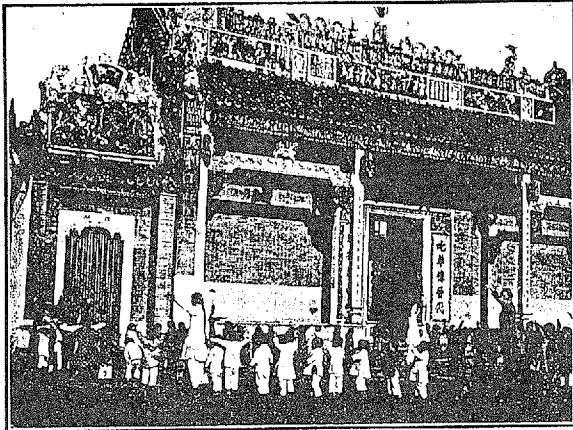
with a cheap, tawdry assortment of articles fit only for the junk heap. Such are some of the sins committed in thy name, O Art!

In China, unlike Japan, we find the kindergartens few in number and usually housed in decrepit and dilapidated ancestral homes, once owned by proud patriarchs, doubtless, whose line has fallen into decay. Happily these homes are usually almost as suitably

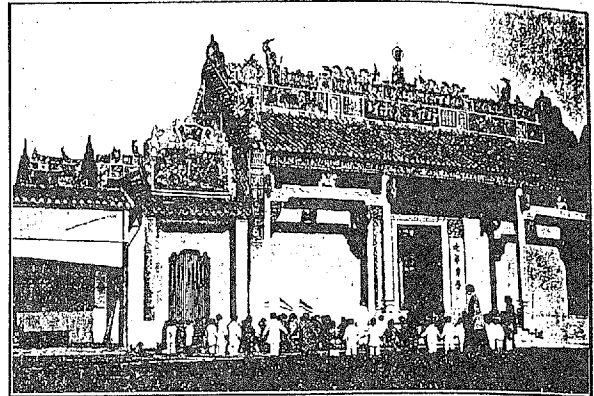


Chinese Child

The Kindergarten and First Grade



'We fly like birdies round the ring'
American Kindergarten, Canton, China

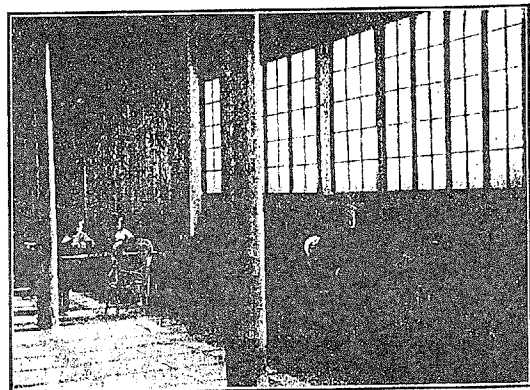
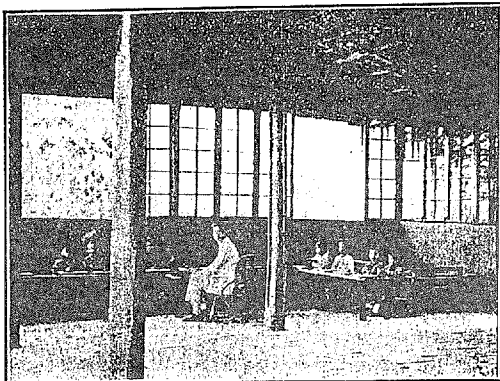


Playing Soldiers, American Kindergarten,
Canton, China

constructed as the Japanese kindergarten buildings, because for centuries it has been the custom in China to build around an open court, and leave the entire front portion which faces this court open to the sunshine and air. This custom, and the universal one of drinking tea made with boiled water, are doubtless two basic causes of the longevity of the race. Where filth is so universal and where the native sleeps with a thing like a mattress pulled tightly over the head at night it would seem that they must certainly perish, were it not for these two saving customs.

So we find that almost everywhere in China the little ones live an out-of-door life during the day, but they do not seem to be given very much out-of-door occupation, either in the schools or in the homes. This can hardly be explained as the Chinese are a great nature and flower loving people.

Many of the same impressions received in Egypt are revived here upon entering some ancient ancestral home now converted into a thriving kindergarten. Always one finds in some conspicuous place ancestral tablets and shrines, which no one has had the courage to demolish, and the sight of dozens of three-year-old gay butterflies of babies silhouetted against a richly carved gateway, centuries old, guarded by two grim lions, or horrid devils, all combine to give one a shiver as of some unbidden ghost treading in the baby footsteps. Indeed all China seems dominated by antiquity, a relic of the ancestral worship doubtless which gets into the very fiber of things Chinese. It calls to one through the very rocks by means of their carved inscriptions; it springs from the earth at one's feet, for one cannot dig below human bones; and it calls to one from the air by means of overhanging archways and the ever-



Interior of American Kindergarten, Canton, China

present pagodas and temples, until, looking at a group of merry, joyous kindergarten children at play, one wonders how anything dare be alive and gay in such a place.

Great is the surprise that waits one who visits Soochow, China, to find there a kindergarten building constructed on the exact lines and after the very plans of the model kindergarten plan accepted a few years ago in America as the proper type for such buildings in this country.

On the whole, however, the usual open court arrangement seems the most suitable to the country, and nowhere on earth will one find a more loyal appreciation of the kindergarten method of education than is manifested by the more intelligent classes of Chinese. Even among the most ignorant classes the sacrifices which the poverty-stricken parents will make to place their children in a kindergarten (if there be one) would put any Occidental to the blush.




At Christmas Time

By Helen Hillyer

'Twas Christmas time and all through the air
 The tinkle of bells floated everywhere.
 The stars in the heavens and the moon shone bright
 On the earth transformed by its carpet of white.
 Jack Frost was out with his paint pot and brush
 And over the world was spread such a hush
 That he cautiously crept o'er the soft fallen snow,
 And stopped at the cottage which lay just below.
 He peeped in at the window and what did he see
 But Santa Claus trimming a beautiful tree.
 On each of its branches which spread out so wide,
 A present for each of the children he tied.
 There were icicles, popcorn, and peppermint canes,
 Red and green bells and gold paper chains.
 But Santa Claus' work had just been begun,
 For there by the chimney three stockings were hung,
 And he laughed as he filled them from out of the pack
 That he carried around on his big broad back.
 He had horses and drums and a jack-in-the-box,
 And a doll with blue eyes and blond curly locks,
 And a train, and some tracks, and for baby a ball,
 And into the stockings he crowded them all.
 Then he picked up his pack, for he'd finished his work,
 Jumped into his sleigh, to the reins gave a jerk,
 And over the soft white ground he sped
 With his eight tiny reindeer running ahead.
 Jack Frost watched 'till he passed out of sight,
 Then came through the window and crept up one
 flight.
 He peered in at the door and saw three tousled heads
 Dreaming sweet dreams in three tiny white beds,
 But Jack Frost knew as away he did steal
 That what now was a dream would to-morrow be real.


KINDERGARTEN



Readers of The Kindergarten and First Grade should know about our popular and successful Home Kindergarten Course; also about the Course in Primary Methods which we offer under Dr. A. H. Campbell, Principal of our Normal Department. We have helped hundreds of teachers secure more congenial positions and better salaries.

DR. CAMPBELL, Principal.
250-page catalog free. Write to-day.
The Home Correspondence School, Dept. 48, Springfield, Mass.

PHOTO - ENGRAVING
FOR ALL
ARTISTIC AND MERCANTILE PURPOSES
SPRINGFIELD
PHOTO - ENGRAVING CO.
3 Post Office Square, Springfield, Mass.



Used in all the public schools of New York for thirty-six years, and most all the Boards of Education in the principal cities. Send for illustrated catalogue, 4th edition, on Silicate wall, roll and revolving blackboards, slated cloth, black diamond erasing, book sticks, erasers, crayons, crayon holders, easels, blackboard plate in slabs, dividers, pointers, stone slate blackboards, etc. Manufactured only by the NEW YORK SILICATE BOOKBOARD CO., 26-28th Vooey St., New York.

Bradley's Educational Helps

A complete line of the best materials available for educational purposes.

- Reading and Language Materials
- Number Work Supplies
- Water Colors and Crayons
- Drawing Materials and Art Supplies
- Books
- Kindergarten Materials

Send for our complete catalogue of Bradley School Supplies.

MILTON BRADLEY CO., Springfield, Mass.
Boston New York Philadelphia Atlanta San Francisco
Chicago: Thomas Charles Co., Agts. Kansas City: Heaver Bros., Agts.


Kindergarten Supplies

DISTRIBUTORS FOR
CANADA

Write for Catalogue

The GEO. M. HENDRY Co., Ltd.
215 Victoria St. TORONTO, ONT.

Home Study Courses



Over one hundred Home Study Courses under professors in Harvard, Brown, Cornell and leading colleges.

Academic and Preparatory, Agricultural, Commercial, Normal and Civil Service Departments.

Preparation for College Teachers' and Civil Service Examinations.

250 page catalog free. Write today.

THE HOME CORRESPONDENCE SCHOOL
Dept. 308, SPRINGFIELD, MASS.

News Items

THE United States Bureau of Education has recently issued a Bulletin called *Training Little Children*, which is intended for the guidance of parents. The articles which it contains were collected by the National Kindergarten Association, largely from mothers who were formerly kindergartners. They were originally issued to the press of the country, and have been printed by many papers and magazines. This Bulletin (1919 No. 39) can be obtained from the Superintendent of Documents, Government Printing Office, Washington, D. C., for fifteen cents.

Friends of Miss Annie Laws of Cincinnati will sympathize with her deeply in the loss of her sister, Mrs. Elizabeth Laws Ricketts, whose death occurred August 5. Mrs. Ricketts will be remembered by many who attended the I. K. U. meeting in Cincinnati several years ago as a cordial hostess and interested friend of the kindergarten movement.

Public-Spirited Kindergartners —Notice!

THE extension of the kindergarten,—although always of great importance,—is particularly so at the present time, as a solution of present-day social and economic problems. In order to create a public demand for the kindergarten, every available source of publicity ought to be utilized.

The National Kindergarten Association, 8 West 40th Street, New York City, issues to the press of the country weekly articles especially written for the guidance of parents in training their children. Brief notices to stimulate interest in kindergarten extension in communities where there are none accompany each article.

One of the most valuable results obtained through the publication of these articles is the development of public interest in the subject of the kindergarten in localities where the articles appear. Every kindergartner is urged to use her influence to enlist the interest of her local editor in the publication

of the *Training Little Children* series.

The Association is glad to furnish these articles without charge to any publication requesting them, although it receives voluntary contributions to help defray the expense of the service from many editors who recognize how valuable this material is to their readers. Sample copies will be furnished upon request.

VERA R. BROWN

Notes Concerning Wisconsin Kindergartners

MISS CAROLINE W. BARBOUR of the Superior (Wis.) Normal School was one of the kindergarten instructors in the summer session of the Milwaukee Normal School. The other instructors were Miss Mary C. Jacobs and Miss Blanche Lovett of the Milwaukee faculty. The number of students enrolled for the kindergarten courses was over 130. This included graduate kindergartners, primary teachers and rural teachers.

Miss Hazel E. Behrens, the kindergartner in the Oshkosh Normal School, had charge of the demonstration kindergarten in the State Normal School at Canyon, Texas, for the summer session.

Miss Florence Foxwell has been appointed to the kindergarten position in the Normal School at Ma Crosse, Wis. She is a graduate of the Milwaukee Normal School who has had successful experience in Kenosha and elsewhere, and has just completed an advanced course in the University of Chicago.

Miss Florence E. Holcombe is in charge of the kindergarten in the Whitewater Normal School. She is a graduate of the University of Wisconsin and of the kindergarten department of the Milwaukee Normal School.

Report from Japan

The annual report of the Glory Training School and Kindergarten, Kobe, Japan, recently issued, gives an encouraging account of the growth of the kindergarten in that country. A class of fifteen students was graduated in 1919, making

ing a total of 146 graduates. This last class, it is felt, goes out with more careful training than any other which has been sent out to work for the children of Japan. There is a rapidly growing sense among those who are responsible for kindergarten work in Japan, of the value of well-trained, efficient, mature kindergartners. The demand is for graduates fitted for leadership, not the young, inexperienced, "recent graduate."

The return of Wakuyama San from America is mentioned in this report and her appreciation of all the kindness shown her in the United States.

Four kindergarten text-books have now been translated into the Japanese language and are on the market and in constant use in the Training School. These are Froebel's *Mother Play, Education of Man*, Lamareoux's *Unfolding Life*, and Blake's *Life of Froebel*.

Each year, on the last Thursday of January, the International Plan of a Day of Prayer for Schools and Colleges is followed. The regular work of both kindergarten and training school is stopped, and the day given to reports and prayers. Each year the graduates of the Training School are asked to send their special request for praise, thanksgiving, or petition. This year, these requests were compiled and printed to be in the hands of those present at the meeting, and later to be sent to each graduate. It is also our purpose to have the report done in English, for nothing can so well convey to our friends in foreign lands the spirit of the graduates of this Training School.

As one reads the petitions sent one must believe that women of such world vision, of such a sense of responsibility towards Japan's deepest needs, of such a sense of responsibility towards children and to their own homes, must be a strong element in the regeneration of Japan—not only that—but the "personal touch" of all this on graduates and school is of great value.

With the graduation of the 30th class of 29 from the Glory Kindergarten, the total number of children who have passed from this school into the primary grade is 89. Miss Annie L. Howe, the faithful leader of kindergarten

PENMANSHIP AND SPELLING COÖRDINATED

Palmer Method Spellers

Present to the pupil for visualization all words in PHOTO-ENGRAVED PALMER METHOD PENMANSHIP. There is a separate book for each grade. Educators everywhere should investigate thoroly this plan of presenting to pupils for study in spelling, the words written in the most extensively taught penmanship style. Because the words in the Palmer Method Spellers are all in Palmer Method Penmanship they eliminate the unnecessary process of changing the printed impression to the written expression. Words used have been carefully selected by well-known educators, having been tested in one of the largest and most progressive New York City Public Schools. In Palmer Method Spellers for the intermediate and advanced grades are quotations in liberal quantities from well-known authors, all in photo-engraved Palmer Method Penmanship. Write our nearest office for further information.

THE A. N. PALMER COMPANY

30 Irving Place, New York City Pittock Building, Portland, Oregon 623 South Wabash Ave., Chicago, Ill.

GIFTS For The LITTLE ONES

Steiger's Kindergarten Occupations for the Nursery

Boxes containing a generous supply of correct kindergarten material for one or two children at an exceptionally low price:
Chain Making and Bead Stringing, \$0.50
Card Sewing, \$0.50
Crayon Work and Painting, \$0.50
Mat Weaving, \$0.25
10 Christmas Sewing Cards, \$0.10

SEND FOR DESCRIPTIVE CIRCULAR

Our Kindergarten Catalog, 14th Edition, mailed gratis upon request

E. STEIGER & CO. 49 Murray St. NEW YORK

Publishers and Manufacturers of Kindergarten Material

THE BEST PENCIL FOR KINDERGARTEN



Eagle No. 245. Alpha, medium large diameter, large black lead. It is important to know that this Pencil possesses several unique and indispensable qualities for kindergarten and first year work, and is recommended by the leading supervisors.

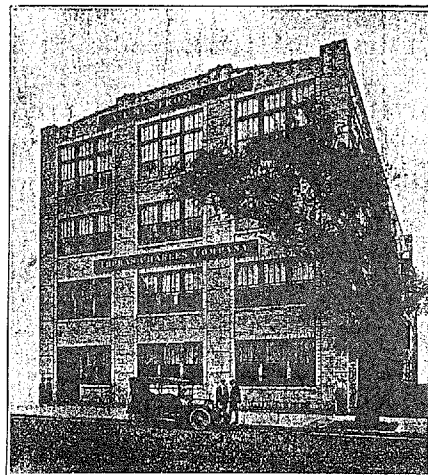
EAGLE PENCIL COMPANY

703 East 13th Street

New York

WRITE FOR SAMPLES

THOMAS CHARLES COMPANY'S NEW HOME



OUR BUILDING can be easily reached by any of the following routes:

First.—Any street car going south on Wabash Avenue, to 23d Street, one block east, Indiana Avenue car to 23d Street, three blocks east.

Second.—South Side elevated to 22d Street Station, five blocks east, half block south.

Third.—Illinois Central Railroad to 22d Street Station, one block west, half block south.

We are the exclusive distributors of The Milton Bradley Co.'s School Materials and Books—for the following states—Illinois, Indiana, Kentucky, Michigan, Wisconsin, Iowa, Nebraska, Minnesota, South Dakota, and North Dakota.

2249-53 Calumet Avenue
Telephone Calumet 6127

Send for complete catalogue.

work in this school, says: "Altogether 1918-19 has been one of the best years in the history of the Glory Kindergarten."



Book Notices

BLUEBERRY BEAR. By J. L. Sherard. Illustrated in color by George Carlson. Thomas Y. Crowell Company, New York.

Blueberry Bear is one of the inquisitive and venturesome young animals which are always getting into trouble, but are resourceful enough to find a way out. The account of his escapades will please the children who love bear stories.

JANE AND THE OWL. (Sage Brush Stories.) By Gene Stone. Illustrated in color by George Carlson. Thomas Y. Crowell Company, New York.

An imaginative story in which figure a little girl living in the sage brush country, who, during a nap on the hillside, makes the acquaintance of an owl. Together they have surprising adventures and Jane even learns how to fly. The owl proves to be an enchanted prince.

CHILDREN IN THE WOOD STORIES. By Jeannette Marks. Illustrated by Clara M. Burd. Milton Bradley Company, Springfield, Mass.

Robin Hood, London Bridge, Sir Geoffrey Chaucer, and various expected Christmas presents are mixed up in a wonderful dream which came to one of the children in this story book, all because Aunt Jane told them a story just before bedtime about some children who decided to cross over a great big mountain called Time, and left six hundred years behind them. The full page illustrations are in colors, adding much to the attractiveness of the book.

GEOGRAPHY EXERCISE BOOKS. Book I, Practical Home Geography. Book II, The British Isles. Evans Brothers, Ltd., London, England.

The plan of the *Kingsway Book of Practical Geography* which begins

SINCE THE MOVING PICTURES CAME, it has become a custom among the thinking class of men and women to go home after the show and right away Murine their eyes. Two drops to rest, refresh, and cleanse. Murine at Druggists, 50c. Ask Murine Eye Remedy Co., Chicago, for Book of the Eye free.

with the immediate surroundings and makes the study real by diagrams, charts, etc., is carried out in these exercise books for pupils to fill out. The first one takes up the drawing of plans and maps of the schoolroom and the surrounding country. The second illustrates by diagrams and maps the contour, climate, productions, etc., of the British Isles. The plan of presentation of the subject-matter is a practical and interesting one.

UNCLE SQUEAKY'S COUNTRY STORE. By Nellie M. Leonard. Illustrated by Carle Michel Boog. Thomas Y. Crowell Company, New York.

The doings of the Graymouse Family, which have been told in several stories of this series, are here continued in the country where they went from their attic home to spend a summer. They liked it so well that they remained through a winter also. The whole

family becomes popular with the wood folk and the latest undertaking is a store for the benefit of the community.

RAFFIA, CANE, AND POKER WORK. By Grace A. Cannon. L.L.A. Evans Brothers, Limited, London, England.

The object of this little book is to outline clearly, and in the briefest possible way, a course of raffia, cane, and poker work for young people. The course has been carefully worked out and each step is clearly illustrated.

THE KINGSWAY SERIES OF TEACHING MAPS. Evans Brothers Limited, London, England.

The eight books of this English series of maps take up The World, The Continents, Europe (Nos. 1 and 2), British Isles (Nos. 1 and 2), The British Empire (two books). The physical geography of each continent is shown and also the political divisions.

ALBERT Teachers' Agency
 25 E. Jackson Blvd., Chicago
 34 years of conservative management. Largest and best known. Our booklet, "TEACHING AS A BUSINESS" with new chapters on "Forecast" and other important topics sent FREE.
 437 Fifth Avenue, New York; Symes Building, Denver; Peyton Building, Spokane

TEACHERS We Can Place You in Better Positions
 WRITE US TO-DAY FOR THE FREE BOOKLET "The Road to Good Positions"
 Branch Offices: PORTLAND, OREGON; CHICAGO, ILL.; MINNEAPOLIS, MINN.; KANSAS CITY, MO.; LOS ANGELES, CALIF.
 WM. RUFFER, A.M., MANAGER
 OUR SERVICE IS UNEXCELLED—OUR SUCCESS PHENOMENAL. THE LARGEST AND MOST WIDELY PATRONIZED TEACHERS' AGENCY in the West. Enrollment fee not necessary.

THE WEST NEEDS TEACHERS **CLINE TEACHERS' AGENCY**
 COLUMBIA, MO. CHICAGO, ILL.
 Arthur B. Cline, Mgr. 1440 E. 60th, M. F. Ford, Mgr.
 BOISE, IDAHO SAN DIEGO, CALIF.
 George F. Gorow, Mgr. 326 Owl Bldg., Wynne S. Staley, Mgr.
 The West is offering the highest salaries ever paid teachers. **ENROLL FREE**

KINDERGARTEN NORMAL TRAINING SCHOOLS

1886 1920
National Kindergarten AND Elementary College
 KINDERGARTEN AND PRIMARY TEACHERS IN DEMAND. SALARIES RAPIDLY INCREASING. COMBINED PROFESSIONAL AND CULTURAL EDUCATION. COLLEGE ACCREDITED. DIPLOMA, 2 YEARS. THREE AND FOUR YEAR COURSES. FIVE DORMITORIES ON COLLEGE GROUNDS. - - - - - FOR CATALOG ADDRESS
Box 125. - - 2944 Michigan Boulevard, Chicago, Illinois

4. アメリカ国立公文書館における日米教育交渉史

関係資料の概況

— 国務省記録を中心として —

橋本 昭彦 (国立教育政策研究所)

はじめに

本稿は、アメリカ合衆国の国立公文書館（National Archives and Records Administration; NARA）の中に含まれる教育交渉史関係史料の存在状況について、同国の国務省（the Department of States）記録を中心にして報告するものである。

国務省は、日本でいえば外務省と、2001年の中央省庁再編以前の総理府・国土庁などを合わせた機能を持つと言って良い。諸外国との交際・交渉・典礼、諸外国についての情報収集、諸外国に在留する米国民の保護、大統領の印章（the great seal）の管理、大統領府の典礼や報道対応などを主要な任務とする。1789年9月15日までは単に外務省（the Department of Foreign Affairs）と称されていたが、同日の法改正によって任務の範囲が拡大したため、現在の名称を用いるようになった。

アメリカ国立公文書館の国務省記録には、日本との交渉が本格化しはじめる1850年代以降の関係文書資料が保管されている。そのうちには、首都ワシントンD.C.の国務本省のもの・在外（在日）公館のものなどがあるが、それぞれにアメリカ側が収集してきた日本の教育事情に関する情報が含まれている。

以下では、アメリカ国立公文書館における日米教育交渉史関係の史料について、下記の各項の通りに順を追って略述したい。

1. アメリカ国立公文書館の政府文書の体系とその利用について
2. 国務省記録の体系とその利用について
3. 国務省記録のマイクロ化資料とその利用について
4. 国務省以外の官庁の記録について

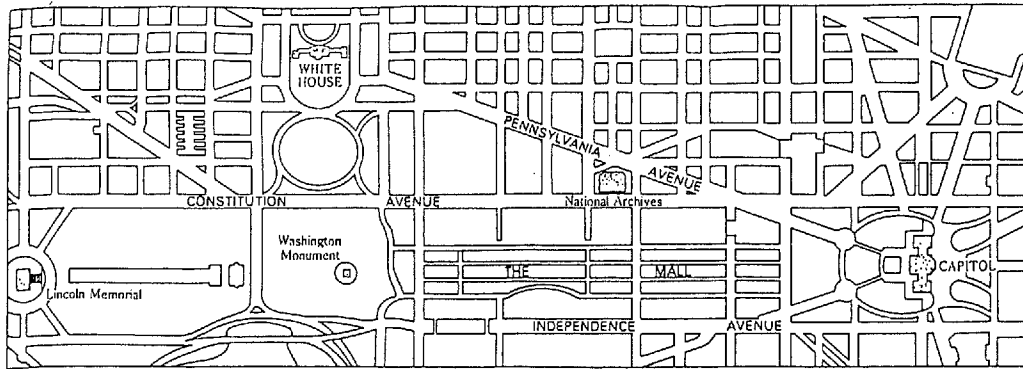
筆者は、このたびの共同研究の一環として、小宮山道夫氏、竹本英代氏、その他のメンバーとともに、国務省記録の調査と分析を行い、その教育史料としての利用価値について共同で検討を加えた。本稿では、その調査の過程の最初の部分で得た史料についての基礎的知識を整理した。今後、国務省記録を利用した各種の調査において本稿が役立てば幸いである。

1. アメリカ国立公文書館の政府文書の体系とその利用について

(1) 国立公文書館における記録管理システム

アメリカ合衆国において現用を離れた公文書は国立公文書館（National Archives and Records Administration; 以下NARAと略す）に保管・管理されることになっている。同館の創立は1934年で、国務省を管轄官庁とする。それ以前は、連邦政府各機関において、それぞれ個別に記録管理が行われていたが、その無秩序さとそれがもたらす資料の損耗や活用面での非効率への反省のもとに、1926年の立法で建設が決定された⁽¹⁾。

NARAの本館は首都ワシントン＝コロンビア特別区（Washington District of Columbia.



A drawing of the Mall in Washington, D.C. Designers proposed various locations for the National Archives, but the winning site (center) was chosen because it is midway between the White House (left) and the Capitol (right).

【図1】NARAの立地：大統領官邸(White House)と国会議事堂(Capitol)の中間の地が選ばれた。

出典：Christina Rudy Smith, The National Archives and Records Administration (Know your government), 1989, Chelsea House Publishers, p. 35

以下D. C. と略す)にあるが、アメリカ国内のいくつかの都市に分館をもつ。このうち本館の機能を補うのが、D. C. 郊外のカレッジ=パーク(College Park、メリーランド州)に新設された国立公文書館カレッジパーク分館(The National Archives at College Park)である。同館は通称を第二公文書館(Archives II)といい、対するD. C. の本館も第一公文書館(Archives I)と称されることがある⁽²⁾。

1989年に起工されたArchives IIは、広大な敷地に6層(地上4階・地下2階)建てのメインビルを有し、200万立方フィートの資料収容力と390席の閲覧席を持つ。Archives IIがもつばら収蔵する資料は、もともと政府機関の動画や音声資料・地図資料・電子記録等の特殊資料であったようであるが、近年では各機関の主要な文書資料もArchives Iから移されて利用に供されているもようである。(Archives I・IIの機能の分担関係については明確に取材していないが、頻繁な変更が行われているもようである。)

NARAの所蔵資料は、アメリカ独立前年の1775年以前のものを含む膨大なもので、その総量は、「数十億ページの文書資料に、約千四百万点の静止映像やポスター、約三十万リールの動画フィルム、二十万点以上の音声資料、千五百万点近い地図・図面・航空写真類、そして約七千六百件のコンピュータ・データ」を擁するとされている⁽³⁾。

NARAにおいては、独自の記録管理システムが採用されている。文書管理学上、記録資料の保管については、記録の「起源」の原則(the principle of provenance; 元々どの組織・部署で発生したか)と、記録の「原序列」の原則(the principle of original order; 元々どのような配列で産出されたか)は、もともと基本的な原則として尊重されなくてはならないが、そうした記録管理学の原則と記録管理業務の効率化の要請を折衷させる形で、独自の「記録群システム」(the system of record groups)が編み出されたのであった。

このシステムのもとでは、すべての政府関係資料は、515の記録群 (Record Group ;RG) に分別されている。例えば、国務省 (the Department of State) の記録は「RG59」であり、1979年10月17日付で新設された教育省 (the Department of Education) の記録は「RG441」、その前身で内務省 (the Department of Interior) や保健教育福祉省 (the Department of Health, Education, and Welfare; HEW) などの一部局であった時代の教育局 (the Bureau (Office) of Education) の記録は「RG12」である。省によってはさらに細かい部局ごとにRGが構成されていることもある。RGシステムの実施によって、すべての記録は扱いやすい単位での保管・閲覧業務が可能になった。

分別システムの他にも、マイクロフィルム化の積極的な推進により、閲覧・利用の便宜や原資料の保存性などの向上が図られている。

(2) 国立公文書館における記録の利用

現在、NARAの資料すべてを網羅する目録(index)は存在しない。その代わりに各種の検索手段 (Finding Tools) や調査の手引き (Finding Aids) の類の書誌がある。

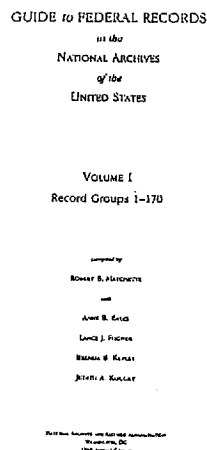
そのような書誌のうちのもっとも包括的なものが、Guide to Federal Records in the National Archives of the United States (第2版、NARA、1998。3巻、計2,428頁。初版が1994年であるからGuide '94と略す) である。公文書館の資料についての包括的な解説書は、NARA開館直後の1937年以来数次にわたって作成されてきたが、Guide '94の編集作業は、1974年の大改定 (1987年に補訂・再版) 以来のプロジェクトとして行われた。

3巻からなる同書は、Vol.1がRG1からRG170まで、Vol.2がRG171からRG515までの各 (RG) についての詳細な解説を収録しており、Vol.3一巻が'Index'として全体の事項別索引をなすという構成である。各RGごとの解説の例は、次節の中で国務省記録のRG59について引用する通りである。いまはその大要を述べておくが、おおよそ全てのRGについて、解説には下記のような情報が含まれている (Guide '94, Vol.1, 'Introduction'による)

ア. 機関の小史 (Administrative History) :

記録を生み出した機関・部局の小史。前身や統廃合の事実等も併記。各RG番号のあとの枝番号「. 1」で示される。

イ. 記録の形態別大要 (Records Type Summary) :



【図2】 Guide '94 の中扉。

残存する記録資料を形態（文書・地図・図面・動画・静止画・ビデオ・音声・機械可読）の違いによって分別し、それぞれの所蔵館や、分量を表す。各RGについての解説の始まり部分に、地の文章とは別に囲みにして示されている。

ウ．個別記録群についての詳細説明：

記録の発生した組織（部局、委員会等）ごとに、どのような性格の資料がどのくらいあるか、上述の形態別に説明している。RG番号のあとの枝番号の「. 2」以下で組織ごとの区分を行い、必要に応じてさらに枝番号を振って記録を生み出した末端の組織ごとに細かな区分を図っている。資料群ごとの管理小史や形態・分量の説明もしばしば個別に行われている。文書資料でマイクロ商品化されている資料群については、Mで始まる製品番号が示されている。

また、Guide '94が取り扱っているのは、初版が出る前の1994年9月1日現在の情報であるが、それ以後の情報については同館の館報であるThe Records（季刊）に随時掲載されるという。なおGuide '94の内容は、インターネット上でも公開されている（<http://www.nara.gov/guide/index.html> 参照）。

その他、NARAでこれまでに刊行されてきた主なパンフ・書誌・一般図書類は、Select List of Publications of the National Archives and Records Administration ⁽⁵⁾ というリーフレットの中に収録されている。我々の調査上特に重要な参考資料は書誌類であるが、その形態は様々である。すなわちGuide '94のように大冊で市販されているものもあれば、文書群がマイクロ化される際に付された簡単な解題程度のリーフレットもある。

「目録（Inventory）」と称した場合にも、印刷費が不十分で内部資料化しているように見えるものもあれば、特製版（Preliminary Inventory）として普及しているものもある。

上述のリーフレットでは、所収の刊行物のうち有償のものには\$表示で値段が示されているが、無償のものには\$マークが付されていない。無償のものについては残部がある限りWashington D. C. のArchives Iに請求すれば無料で送付してもらうことができる⁽⁶⁾。

2. 国務省記録の体系とその利用について

国務省（The Department of State）は、当初1789年7月27日に外務省（The Department of Foreign Affairs）として創設されたものが、同年9月15日に改組されて誕生した。省としての主管事項は、対外国政策の策定と実施について大統領に進言し、対外関係の実務をになう外交官庁であるとともに、大統領の印章の管理や大統領による人事の委嘱・任命の事務に関わった。また、法令の発布や連邦の記録管理、領土の保全を管掌した時期もあった。文字通り国事行為に関わる重要な官庁である。

国務省の記録は、その前身時代からのものをも含んで、1756年から1979年にわたっている。Guide '94によれば、国務省の記録はおおまかに言って次のような内容構成である。

- ① 外交文書を中心とする中核的文書（“Central Files”）

- ② 省内の特定の局の文書 (“Records of Organizational Units ”)
- ③ 外交以外の所管事項に関する文書 (“Records Relating to Various Functions”)
- ④ 特定案件に関わる一件文書 (“Records Relating to Special Subjects or Events”)
- ⑤ 音声・映像資料

このうちで、今回の調査で注目した部分は、①の中核的文書である。国務省の活動史の中で外交関係文書にもいくつかの類型が生まれ、文書管理システムの変更等もあった。そのため、①の中核的文書の中も管理方式上の違いによって大きく4つの時期に区分される。その4つを表に表すと、次のようになる。

文書の年代	1906年以前	1906-1910年	1910-1963年	1963年以降
管理方式から付された名称	(by series)	Numerical and Minor File	Decimal File	Subject-Numeric File
整理上の特色	文書の発生単位毎に、日付順に保存・整理	十進分類法への移行期。簿冊番号による管理。目録の簿冊有り	十進分類法による管理確立。分類・管理マニュアルや目録有り	新たな8 Subjectを核とする分類法

【表1】国務省記録の”中核的文書”における管理方式上の時期区分

まず1789年から1906年までの文書は、単純に文書の発生部署単位でまとめられ、必要に応じてさらに当該国の別、往・復の方向別、収受の相手別などの下位分類が行われている。この期間の文書群では、日本との教育交渉に関する部分は大部分がマイクロ化されている。詳細な内容の説明は次節に譲りたい。

次に4年間の文書管理方式の移行期間における文書群（これはすぐあとで説明する）において、1910年以降は十進分類法「Decimal System」で管理されている文書群があらわれる。国務省では1906年に十進分類法が採用されて、文書群はその内容別に管理されることとなった。“Outline of the decimal classification”によると、同十進分類法では百の位ごとに次のような内容分類が定められている（1963年まで）。

- Class 0: (000. ～) General and Miscellaneous
- Class 1: (100. ～) Administration, U.S. Government
- Class 2: (200. ～) Extradition
- Class 3: (300. ～) Protection of Interests
- Class 4: (400. ～) Claims

Class 5: (500. ～) International Conferences (Congresses), Multilateral Treaties, Disarmament, League of Nations, and Interparliamentary Union

Class 6: (600. ～) Commerce, Customs Administration, and Trade Agreements

Class 7: (700. ～) Political Relations of States

Class 8: (800. ～) Internal Affairs of States

具体例で説明する。例えば「各国の内政文書」には800番台が当てられている。8の後の二桁には当該国の番号（日本は94）が充てられ、さらに小数点以下で文書の内容領域を示す数字が割り振られる。例えば、「社会問題 (social matters)」は「. 4」があてられ、その中で「教育 (education)」には「. 42」が付される。つまり日本の社会問題に関わる文書は「894.4」、教育問題に関わる文書は「894.42」の記号下に管理されている。国務省がこの分類法を徹底させたのは1910年であるため、文書群も1910年を境に保管上の属性を一新したのである。この時期のものも主要なものは全てマイクロ化されている（相談室の文書官の教示による）。

さて第三に、残る1906～1909年の文書群であるが、これらの文書は通称マイナー・ファイル（訳語に困るが、小ファイル・例外ファイル; Minor file）と呼ばれて、前二者とは区別されて管理・利用されている。1906年、十進分類法の採用は決定されたものの、システムの変更が軌道に乗ったのは1910年以降である。そのために管理方式の移行期間においては、若干の不統一・不徹底が生じたようである（マイクロ室担当者専門官の話による）。マイナー・ファイルズは全部で20,000冊以上の簿冊があり、Archives IIにおいて閲覧に供されている。標題ごとの目録があって、比較的新しくマイクロ化されて「M862」の製品番号で、1,241ロールが閲覧・販売に供されている。（Microfilm Resources for Research; A Comprehensive Catalog）

3. 国務省記録のマイクロ化資料とその利用について

国務省記録に限らず、NARA所蔵の文書資料のうちの主要な物はマイクロフィルム化・商品化が進められている。資料の本格的なマイクロ化は、1941年から始まっているが、@年からはNational Archives Trust Fund Boardによる連邦政府の補助金を得て、大規模なプロジェクトとしてマイクロ化事業を行っている。

マイクロ化の進展とともに、マイクロ化された資料についての解説やパンフが作成されてきた。主な物を挙げると、次のような刊行物がある。

- a. Catalog of National Archives Microfilm Publications 1974, 184p
- b. Diplomatic Records: A Select Catalog of National Archives Microfilm Publications, 1986, 245p
- c. National Archives Microfilm Resources for Research: A Comprehensive Catalog,

Revised ,1986, 1990, 1996, 136p

d. 各個別のマイクロ製品ごとの解説リーフレット：各マイクロのシリーズの頭に焼き込まれている。印刷版は、公文書館のマイクロ閲覧ホールの目録コーナーでファイルに綴じられている。⁽⁷⁾

国務省記録のマイクロは、日本国内でも幾つかの研究機関が所蔵している。今回主に調査した Records of the Department of State Relating to Internal Affairs of Japan は、明治学院大学附属図書館などが所蔵しているし、国際日本文化研究センターも国務省記録以外にもかなりのマイクロを所蔵している。マイクロの利用に当たっては、アメリカ国立公文書館のホームページで利用可能なマイクロ製品の一覧を参照しつつ、日本国内の所蔵状況を調べることで、より効率的な調査が可能となる。⁽⁸⁾

4. 今後の研究課題について

今回の調査は、国務省記録（RG59）を中心としたが、「アメリカ国立公文書館における日米教育交渉史関係史料の概況」という以上は、国務省以外の関連史料についても一言しておきたい。

NARAにおける日米教育交渉史関係史料の所在を探るとすれば、注4で挙げた、Guide to Federal Records in the National Archives of the United States を参照するのが手取り早い。記録群（RG）ごとに関心を引く部分を抽出すれば、次のようなリストが出来る。

- RG 12 Records of the Office of Education （連邦教育局記録）
- RG 43 Records of International Conferences, Commissions, and Expositions
（国際会議、国際機関、国際博覧会関係記録）
- RG 59 General Records of the Department of State （国務省記録；本稿で詳述）
- RG235 General Records of the Department of Health, Education and Welfare
（保健教育福祉省記録）
- RG242 National Archives Collection of Foreign Records Seized （第二次世界大戦の占領軍押収文書）
- RG331 Records of Allied Operational and Occupation Headquarters, World War II.
（第二次世界大戦の連合軍占領軍司令部文書）
- RG335 Records of the Office of Secretary of the Army （陸軍省記録）
- RG441 General Records of the Department Education （教育省記録）

このように、ざっと見ても、国際関係や教育関係の部局など、かなり多くの文書群を見ることが有効であると思われる。砂金を探すような作業も、目録やインターネットの整備によってかなり省力化されると思われる。

今回の史料研究は、国務省記録における日米教育交渉史関係文書の存在状況を調査し、その研究史料としての可能性を検討することを課題とし、筆者と竹本英代・小宮山道夫両氏を中心として進められた。本共同研究の取り扱う主な時代が1900年から1930年代だということもあり、また1910年以前の国務省記録の検索が事実上困難であることも考慮して、今回は1910年以降に限って取り扱うことにした。

この史料研究の本報告書における成果は、小稿と竹本・小宮山両氏による文書件名リストである。今後は、さらに史料を読み込んで、国務省記録に現れた日本の教育の姿を浮き彫りにすることが課題である。⁽⁹⁾

参考文献ならびに注

(1) Christina Rudy Smith , The National Archives and Records Administration (Know your government) ,1989,Chelsea House Publishers, 109p. 以下、NARAの略史は同書による。

(2) リーフ: National Archives at College Park -Information for Researchers- , 1999.2, NARA.

このほかNational Archives at College Park (アーカイブスII) の概要情報は、下記のインターネット・サイトからも得られる。

・National Archives at College Park

http://www.nara.gov/nara/dc/Archives2_directions.html

・Information for Researchers at the National Archives at College Park, MD

http://www.nara.gov/nara/dc/a2_info.html

(3) General Information Leaflet No.1., National Archives of the United States, rev.1998).)

(4) Robert B. Matchette, et. al., Guide to Federal Records in the National Archives of the United States, Second edition, NARA, 1998, 3vols. First edition published in 1994.

同書は、NARA所蔵の連邦政府文書の全体についてのガイドブックである。このガイドブックは、3巻本の大冊で、日本の大学附属図書館では一橋大学にあるのが確認されている。

なお、同ガイドブックにはWEB版もあり、各RGごとの説明を見ることもできて、大変有用である。

<http://www.nara.gov/guide/> 参照。

- (5) General Information Leaflet No. 3, 1994, 53p;内容については、
<http://www.nara.gov/publications/gil3home.html> を参照。
- (6) 本共同研究において寄贈を依頼したものは次掲の通りである。なおこれらの内容はインターネットで入手可能。
<http://www.nara.gov/publications/gil3home.html> を参照。

ア. General Information Leaflets

- # 1. National Archives of the United States, (rev. 1998).
- # 3. Select List of Publication of the NARA, (rev.1994), 53p.
- #13. Ordering Reproductions from the National Archives (rev.1987), 13p.
- #28. Looking for an Out-of-print U.S. Government Publication?, (rev.1990), 4p.
- #30. Informations about National Archives for Prospective Researchers, (rev.1994), 24p.
- #36. Informations about the Center for Electric Records, (rev.1992), 8p.
- #37. Informations about Electric Records in the National Archives for Prospective Researchers, (rev.1994), 8p.
- #54. National Archives Gift Collection Acquisition Policy: Personal Papers, 1993, 2p.
- #57. Rules for Using Historical Records in the National Archives, 1994, 2p.
- #58. National Archives Gift Collection Acquisition Policy :Records of Federally Chartered Organizations, 1993, 2p.

イ. Microfilm Catalogs

- # 3 John H. Hedges comp. Diplomatic Records: A Select Catalog of National Archives Microfilm Publications, 1986, 245p.
- この他に、有償頒布物であるために寄贈依頼はしなかったが、Microfilm Catalogs #11 Microfilm Resources for Research : A Comprehensive Catalog, (rev.1990), 132p.がある。この最新版、Microfilm Resources for Research: A Comprehensive Catalog, (rev.1996), 115p.は購入した。

ウ. Reference Information Papers

- # 74. Stephen H. Helton comp. Recordkeeping in the Department of State, 1789-1956, 1975, 36p.

エ. Inventories, Preliminary Inventories, and Special Lists: Inventories by Number

- # 13. Edward E. Hill & Renee M. Jaussaud comp. Records of the Department of the

Interior, 1987, (RG48のマイクロフィッシュ付属の解説書).

15. Inventory of General Records of the Department of State, 1992, (RG59のマイクロフィッシュ付属の解説書).

オ. Inventories, Preliminary Inventories, and Special Lists : Preliminary Inventories by Number

#157. Daniel T. Goggin & H. Stephen Helton comp. General Records of the Department of State, 1963, 311p.

#178. Carmen Delle Donne comp. Records of the Office of Education, 1974, 65p. (RG 12)

#181. Jerry N. Hess comp. Records of the Department of Health, Education, and Welfare, 1974, 65p. (RG 235)

カ. Inventories, Preliminary Inventories, and Special Lists : Inventories, Preliminary Inventories, and Special Lists by Record Group ("Inv" = Inventory, "PI" = Preliminary Inventory, "SL" = Special List)

RG12 "Office of Education" (PI 178)

RG59 "Department of State" (Inv. 15 & SLs 7 and 37)

(7) 個別の書誌事項は下記の通り。

a. National Archives Trust Fund Board, Catalog of National Archives Microfilm Publications 1974, 184p

b. National Archives and Records Administration, Diplomatic Records: A Select Catalog of National Archives Microfilm Publications , 1986, 245p

c. National Archives and Records Administration, National Archives Microfilm Resources for Research: A Comprehensive Catalog, Revised , 1986, 1990, 1996, 136 p

この他、Archives II で制作した説明書と見られる State Department Records in the National Archives (A4で4ページ) がある。筆者は、担当文書官から直接コピーを入手したが、国務省記録の全体を簡明に説明している。

(8) アメリカ国立公文書館のホームページは、

<http://www.nara.gov/> 。

(9) 国務省以外の記録 (マイクロフィルム) の解説パンフレットとしては、Records of the Office of Education (Preliminary Inventory No. 178), 1974, 65p. (連邦教育局)、Edward E. Hill & Renee M. Jaussaud comp. Records of the Department of

the Interior, 1987 (内務省 ; 再掲) などがある。

付記： 今回の一連の調査に際しては、アメリカ国立公文書館に閲覧上の案内をしていた
だいたほか、マイクロ調査に際しては、国務省記録の「各国の内政文書」の「日本」
の部分（Records of the Department of State Relating to Internal Affairs of
Japan, 1910-29、ならびに同じく…1930-1939, …1940-1944）を所蔵する明治学院大
学附属図書館に幾度もお世話になった。この場でお礼申し上げたい。

5. アメリカ国立公文書館所蔵国務省記録・

日米教育交渉史関係文書件名目録

小宮山 道夫 (広島大学)

竹本 英代 (広島大学)

本目録は、アメリカ合衆国の国立公文書館 (National Archives and Records Administration) 所蔵の国務省記録の中から、1906年～1944年間の日米教育交渉史関係文書を抽出し、件名ごとに目録化したものである。この目録の作成に際し、史料の調査は、小宮山道夫と竹本英代が、橋本昭彦他共同研究の代表者や他の分担者と共同で行った。

目録化にあたって抽出の範囲とした文書は、国務省記録中の”Records of the Department of State Relating to Internal Affairs of Japan, 1910-29”、ならびに同じく”1930-1939”,”1940-1944”の文書群である。文書の調査は、主としてアメリカ国立公文書館製作のマイクロフィルムからのコピーを用いた。現地調査にかかるもの以外には、明治学院大学図書館所蔵のマイクロフィルムを使用させて頂いた。

文書は、日本や中国に駐在するアメリカ外交官たちが、米国国務省の国務長官に報告した史料を主としている。ただし、国務省とアメリカ外交官との往復文書や他の部局との連絡文書も保存されているため、国務省を中心とした当時のアメリカ上層部における日本教育観を知るうえで貴重な史料だといえる。

個々の文書については、凡例の各項に示した通りに史料情報を盛り込んだ。なお、アメリカ国立公文書館の原文書には、同館で整理された際に作られたと見られる「略目録」が付されているが、内容が不十分であったり、精確さを欠くことが多いため、筆者らが適宜補正した。

凡 例

1. 「資料番号」…国立公文書館における各資料固有の番号である。国務省によって1910年に採用されたDecimal File(デシマル ファイル)方式に準拠している。アメリカ国務省と交流のあった各国の記録は、すべて国別・内容別に分類されたが、本目録を作成するに当たっては、800番台(Class 8)の「国内問題 (Internal Affairs of States)」の部を参照した。百の位の「8」のあとは二桁の国番号が入るが、「日本」国を示すのは「94」である。小数点以下に、内容による分類記号が与えられるが、小数点第一位の「4」が「社会問題(Social matters)」を表す。「教育」は、その中で小数点第二位が「2」の文書として分類される。

すなわち、「日本」「国内」の「教育」の内容をあらわす文書は、「894.42」の親番号を持ち、「//」(スラッシュ)以下に、枝番号を付された個別の文書が配されているのである。

2. 「発信者/発信地」…発信の地名の表記は、原則として都市名に統一した。都市名がある場合は、国名は原則として省いた。例えばWashington D.C.。所番地は省略した。発信人の肩書は可能な範囲で入れた。筆者が補った情報は [] で囲った。

3. 「日付」…文書の発信日をマイクロで確認した。

4. 「宛先」…2. 「発信者／発信地」と同様の原則により標記した。はっきりしない「宛先」を推測した場合は [] に入れた。
5. 「件名」…前記の「略目録」においては「purport」として説明的な「件名」が付されている。当座はこれを「件名」として生かすこととした。件名の先頭に「Re」と付されているのは、Relative to/Regarding/Relating toの意味であるが、これも当座はそのまま置くこととした。
6. 「分量」…マイクロ上で確認できるコマ数を数えた。
7. 「コマNo.」…マイクロ上でコマごとに付されている番号が判読出来る場合には、これを転記した。
8. 「備考」…特定の様式をもった用紙がある場合には”用紙:”として記入した。「Note」として公文書館で作成された書誌情報のメモの扱いについては「備考」欄に”Note”と示しておく。

一、枝文書の扱い

1. 枝文書（添付文書／返書控／転送控）は、「親文書」の中で掲げた。
2. 資料情報は、親文書と同様に、文書ごとに掲げた。
3. Seeまたは本文や原注に明らかに言及される関連文書は、枝文書としてその資料情報も掲げた。

一、その他、表記に当たっては、次の諸原則によった。

1. 地名等の省略の「-」は、必要に応じて補った。例：at - → at Shanghai
2. なるべく原文書に登場する名辞を用いた。

資料番号	発信者／発信地	日付	宛先	件名	分量	コマNo.	備考
894.42/ 1	H. W. Ballantine, Ambassador, Tokyo	1916.1.21	The Secretary of State, Washington D.C.	Copy of report by H. W. Ballantine re military training in Japanese schools for the New York Peace Society.	1	693	送付状
894.42/ 1	J. W. Ballantine, Assistant Japanese Secretary	1916.3.2	[The Secretary of War]		2	694	報告書
894.42/ 1		1916.3.2	[The Secretary of War]		1	696	転送控
894.42/ 2	Thumor Hemms, Consul General, Shanghai	1917.4.7	The Department of State	Opening of new, modern Japanese Public school at Shanghai . Reports re-	2	697	In triplicate to the Department of State
894.42/ 2		1917.5.18	[The Secretary of the Interior]		1	699	
894.42/ 3		1920.6.10		See 811.4061/328 for despatch from Japanese Emb.#- Re : Desire to obtain cinematographic films used by Am. Authorities during the war, in presentation of military, naval, industrial & other activities of U.S. for betterment of educational publicity in Japan	1	700	NOTE
894.42/ 4	Green, Tokyo	1921.2.10	The Secretary of State, Washington,D.C.	Resolution passed unanimously in House of Peers urging Govt. speedily to take steps to settle school questions. May cause fall of the ministry.	1	701	用紙:TELEGRAM RECEIVED
894.42/ 5	Eugene H. Dooman, Taihoku, American Consulate, Taihoku, Taiwan, Japan	1921.3.17	The Secretary of State, Washington D.C.	Report on Education in Taiwan : Encloses.	1	702	送付状
894.42/ 5	Eugene H. Dooman, American Consul in charge, Taihoku, Taiwan, Japan	1921.3.14	[The Secretary of State, Washington D.C.]		14	703	報告書
894.42/ 6	[Imperial Japanese Embassy, Washington D.C.]	1921.5.14	[The Secretary of State, Washington D.C.]	Requests for Prof. Yasaka Takagi that he be furnished with certain publications of Dept. of state to be used in connection with A. B. Hepburn chair on Am. history, institutions and diplomacy in the Imperial University of Tokyo.	2	717	依頼状, 用紙: IMPERIAL JAPANESE EMBASSY WASHINGTON
894.42/ 6	Yasaka Takagi, Washington D.C.	1921.5.9	Baron K. Shidehara, [The Japanese Ambassador].		2	719	英訳書状写
894.42/ 6	[Yasaka Takagi]				2	721	入手希望資料一覽
894.42/ 6	Department of State	1921.5.20		The Secretary of State Presents his compliments to His Excellency, the Japanese Ambassador, and in response to his memorandum of May 14, 1921, has the honor to transmit herewith much of the volumes requested by Professor Takagi as are at the present time available for distribution.	1	723	口頭通牒(件名に本文部分を記載)

資料番号	発信者／発信地	日付	宛先	件名	分量	コマNo.	備考
894.42/ 6 1/2	Wilson, Japan	1923.3.16		REGARDING : Money from Shantung agreement to be used for certain education purposes in China. Probable that-	1	724	DOCUMENT FILE NOTE
894.42/ 7	Lester L. Schnare, Consul, Yokohama	1921.6.13	[Department of State]	EDUCATIONAL COURSES IN JAPANESE SCHOOLS : Report re in reply to Dept's circulator instruction of April 13, 1921. Noted 800.42	45	725	報告書
894.42/ 8	Lester L. Schnare, Consul in charge, Kobe	1922.1.25		Opportunities for Correspondence School Courses in Japan. Report concerning-	8	770	報告書
894.42/ 8	[Consulate, Kobe]			Private Schools Equipped to Supervise Correspondence Courses	1	778	報告書補遺1
894.42/ 8	[Consulate, Kobe]			Advertising Agency	1	779	報告書補遺2, NOTE
894.42/ 9	Vice Consul, Nagasaki	1922.10.24	842 DH.	Re Kyushu University - Now Admits Women - (Taken from The Mainichi, English Edition, October 22, 1922)	2	780	報告書
894.42/10	Cyrus E. Woods, Tokyo	1924.4.30	The Secretary of State, Washington	Organic regulation of the Educational Advisory Council, promulgated by Imperial Ordinance #85 on April 14th : Encloses translation of. -	2	782	添状, 用紙: EMBASSY OF THE UNITED STATES OF AMERICA
894.42/10		1924.4.14		TRANSLATION (Imperial Ordinance No.85 ORGANIC REGULATIONS OF THE EDUCATIONAL ADVISORY COUNCIL)	2	784	同封書類1
894.42/10	Cyrus E. Woods, #478-E FEPI	1924.5.21	Navy Department FE	Organic regulation of the Educational Advisory Council, promulgated by Imperial Ordinance #85. Encloses copy of despatch #478 of April 30, 1924	1	786	894.42/10への返書
894.42/11	Embassy, Tokyo	1925.1.17		General Description of Japanese Education. Transmits pamphlets edited and published by Japanese Department of Education, containing--	1	787	送付状, 用紙: AMERICAN FOREIGN SERVICE REPORT
894.42/11		1923.5		GENERAL DESCRIPTION OF JAPANESE EDUCATION	55	788	文部省作成による日本教育の外国人向け概説書簡, 用紙: EVERETT COLGATE JESSUP, M. D. ROSLYN, LONG ISLAND
894.42/12	Dr. Everett C. Jessup	1925.4.10	Hon. John Van Antwerp MacMurray, Assistant Secretary of State, Washington D.C.	Verification of statement made by Dr. David Starr Jordan in his plan to the effect that the Gov. of Japan completely revised the elementary history text books removing all references to military glory, et cetera: requests--	1	843	

資料番号	発信者/発信地	日付	宛先	件名	分量	コマNo.	備考
894.42/12	サイン解読不能	[1925.4.19]	F. E. (Mr. Caldwell)	Will you please draft for my uguasure a letter to Mr. Jessup in the sever of your memo, of the 121???. Thanks	1	844	別添, メモ(件名に全文を記載), 用紙: DEPARTMENT OF STATE ASSISTANT SECRETARY A-2
894.42/12	サイン解読不能(上記と同一人物)	[1925.4.11]	F. E. (Mr. Caldwell)	Do you know anything about this?	1	845	別添, メモ(件名に全文を記載), 用紙: DEPARTMENT OF STATE ASSISTANT SECRETARY A-2
894.42/12	サイン解読不能	1925.4.14	Hon. John Van Antwerp MacMurray, Assistant Secretary of State, Washington D.C.	[the Department of Education text books used in Japanese schools]	1	846	別添, 用紙: DEPARTMENT OF STATE DIVISION OF FAR EASTERN
894.42/12	Hon. John Van Antwerp MacMurray, Assistant Secretary of State, Washington D.C.	1925.4.23	Dr. Everett C. Jessup	[Re: the Department of Education text books used in Japanese schools]	1	847	返信
894.42/13	Edwin L. Neville, American Consul General, American Consulate General, Tokyo.	1926.5.3	Department's Circular Instruction	Department of Education of Japan Report on, -, Noted to 800.42	8	848	Date of Mailing: 1926.5.13 Report #126, 本文2~8ページ
894.42/14	Edwin L. Neville, American Consul General, Tokyo	1926.5.28	The Secretary of State, Washington D.C.	Department of Education of Japan. Enclose copy of handbook entitled "A General Survey of Education in Japan". Noted to 800.42	1	856	894.42/13の転送控, 用紙: AMERICAN CONSULATE GENERAL
894.42/15	Milton Fairchild, Chairman, Character Education Institution.	1926.10.11	Hon. J. Wright, Assistant Secretary of State, Washington D.C.	Contacts desired with Japanese educational institutions. Resolution expressing appreciation of assurance of Mr. Wright of assistance of State Department in forming -	1	857	添状, 用紙: THE CHARACTER EDUCATION INSTITUTION, U.S.A
894.42/15	Milton Fairchild, Chairman, Character Education Institution.	1925.12		Public Schools are Best for a Republic	4	858	報告書
894.42/15	Milton Fairchild, Chairman, Character Education Institution.	1926.10.25	Hon. J. Wright, Assistant Secretary of State, Washington D.C.	[Re: The Character Education Institution, U. S. A]	1	862	用紙: DEPARTMENT OF STATE ASSISTANT SECRETARY
894.42/16	Goodier, Nagoya #89, NTJ	1926.10.23	Hon. J. Wright, Assistant Secretary of State, Washington D.C.	DO : Conversation with Mr. Fairchild relative to -	2	863	用紙: DEPARTMENT OF STATE DIVISION OF FAR EASTERN AFFAIRES
894.42/17	H. T. Goodier, American Consul, Nagoya	1927.8.29	The Secretary of State, Washington D.C.	Schools and college in Nagoya consular district. List of -- was sent Department as enclosure to letter to A. D. Jackson, Department of Public Instruction, Pennsylvania.	1	865	811.11は送付状カ, 書状

資料番号	発信者／発信地	日付	宛先	件名	分量	コマNo.	備考
894.42/18		1928.7.2		SEE 894.04417/3 for despatch #895 from Japan (Neville). "Regulation of Privy Council. Reforms recommended by special committee of the Privy Council appointed to examine draft of imperial ordinance approved on June 28th. Re - forming system of education.	1	866	NOTE
894.04417/3	Edwin L. Neville, Charge d'Affaires ad interim, Tokyo #895	1928.7.2	The Secretary of State, Washington D.C.	Approval by privy Council on June 28th of the imperial ordinance making active advocacy of communism a capital crime. The Emperor promulgated it on the following day. Copy of ordinance as published in OFFICIAL GAZETTE Amendment to Peace Preservation Law. Establishment and regulation of Privy Council. Translation of account in Tokyo JIJJI SHIMPO of meeting of Privy Council on June 27th. Procedure followed by Government. Views expressed by large number of persons, of distinction. Noted to 894.108 ; 894.00B ; 894.13 ; 894.03 ; 894.001 ; 894.00 ; 849.42 ; 894.10 ; 894.105 ; 894.48 Relief Measures. 894.40 ; 894.002.	8	175	894.42/180の関連文書
894.42/19	Edwin L. Neville, Charge d'Affaires ad interim, Tokyo #936	1928.8.21	The Secretary of State, Washington D.C.	Fifty-first Annual Report of the Minister of State for Education for 1923-1924. One copy of --, issued by the Department of Education, (Japan (1928)).	1	867	第51回文部省年報の送付状
894.42/20	Neville, Japan	1929.4.6		SEE 894.00 P. R. /16 for #1143 from Japan (Neville) Re : Illiteracy - Japan. Extent of --, which was discovered at annual examination for prospective army recruits. Details. Copy attached.	2	868	NOTE
894.00PR/16	Neville, Japan #1143	1929.4.6	Cond. For Mar. NOTED Names				1929.4.30着信
894.42/21	Neville, Japan	1929.6.5		SEE 894.00 PR./18 For #1196 From Japan. Education - Japan. Simultaneous demonstrations staged by Waseda and Tokyo Imperial University students. (COPY ATT* ACHED).	2	870	NOTE
894.00PR/18	Neville, Japan #1196	1929.6.5	Cond. For May, 1929. NOTED				1929.6.22着信

資料番号	発信者/発信地	日付	宛先	件名	分量	コマNo.	備考
894.42/22	Edwin L. Neville, Charge d'Affaires ad interim, Tokyo #1276	1929.9.11	The Secretary of State, Washington D.C.	the Fifty-Second Annual Report of the Minister of State for Education for 1924-1925, issued this year by Japanese Department of Education : Transmits copy of -	1	872	第52回文部省年報の送付状
894.42/23	A. W. Johnson, Navy Dept.	1929.2.19		Citizens without Japanese nationality to be admitted to Japanese Schools. Translation from the SHIN SEKAI (new world) Japanese language paper of Feb. 13, 1929, published in San Francisco.	1	873	メモ
894.422/-	Jefferson Caffery, Charge d'Affaires a. i. Tokyo #105-E FEPI	1923.12.5	The Secretary of State, Washington D.C.	Offer by Rockefeller Foundation to Japanese Government to co-operate with Japanese authorities regarding public health reconstruction by the co-operative establishment of a post-graduate medical center and public health institute.	2	874	添状
894.422/-	R. B. Teusler	1923.11.16	Rockefeller, New York	Transmits memorandum handed by R. B. Teusler to Embassy regarding, -	3	876	メモ
894.422/-		1924.1.5	The Secretary of the Treasury Dept. FE	Acceptance by the Japanese Government of offer made by Rockefeller Foundation to cooperate with the Japanese authorities in their program of public health reconstruction. Encloses copy of despatch #105-E from Japan regarding, -	1	879	894.422/-の転送控
894.422/1	Jefferson Caffery, Charge d'Affaires a. i. Tokyo #310-E FEPI	1924.2.20	The Secretary of State, Washington D.C.	Quotes portion of letter from Dr. R. B. Teusler as to present status of offer from Rockefeller Foundation presented to Japanese Government last October.	3	880	894.422/-の関連書簡
894.422/1	J. Butler Wright, Third Assistant Secretary	1924.3.22	The Secretary of the Treasury Department FE	Encloses copy of despatch #310-E of Feb., 20th, from Japan quoting portion of letter from Dr. Teusler as to present status of offer from Rockefeller Foundation presented to Japanese Government last October.	1	883	894.422/1の転送控

資料番号	発信者／発信地	日付	宛先	件名	分量	コマNo.	備考
894.422/2	Jefferson Caffery, Charge d'Affaires a. i. Tokyo #551-E	1924.6.28	The Secretary of State, Washington D.C.	Offer of Rockefeller Foundation to cooperate with Japanese authorities in their program of public health reconstruction. Reports that representatives sent out by the Foundation for this purpose at invitation of Japanese Government have recently completed their survey and are leaving shortly for the United States to report to headquarters.	4	884	894.422/-及びび/1の関 連書簡
894.422/3	State Department Division of Far Eastern Affairs (Lockhart), FPL	1924.9.10	Mr. Secretary	Proposal that Rockefeller Foundation should establish in Japan a post-graduate medical center and public health institute. Attaches memorandum giving a resume of correspondence concerning -	2	888	メモ
894.422/3	State Department Division of Far Eastern Affairs (Lockhart), FPL	1924.9.10		[Memorandum regarding the proposed cooperation of the Rockefeller Foundation with the Japanese Government in the establishment of a postgraduate medical center and a public health institute]	4	890	メモ
894.4241	Henry B. Hitchcock, Taihoku, Taiwan, Japan	1921.12.10	The Secretary of State, Washington D.C.	Informing that Kingo Kimura, M.D. wishes to receive any Government publications re instruction of blind and deaf mutes which are obtainable gratis.	1	894	依頼状
894.4241/1	F. M. Goodwin, Assistant Secretary, Washington D.C.	[1922.2.2]	The Secretary of State, Washington D.C.	Encloses publications of Bureau of Education for transmission to Dr. Kingo Kimura.	1	895	894.4241に関する国務 省からの報告書, 出版 物一覽
894.4241/1	Wilbur J. Carr, The Secretary of State	[1922.2.6]	Henry B. Hitchcock, Esquire, American Consul, Taihoku, Taiwan	Encloses above.	1	896	894.4241(Dec. 10)への 返書
894.4241/1	F. M. Dearing, Assistant Secretary, Washington D.C.	1922.1.28	The Secretary of the Interior	Encloses copy of the above.	1	897	国立公文書館の路目録 では894.4241に含まれ ている
894.4241/2	Henry B. Hitchcock, Consul, Taihoku, Taiwan, Japan	1922.3.20	The Secretary of States, Washington D.C.	Certain periodicals published by American Associations interested in the Education of Deaf Mutes and Blind, Reports re, that he has delivered publications to proper authorities.	2	898	894.4241/1(Feb. 6)への 返書
894.4241/2	Leland Harrison, Assistant Secretary	1922.4.27	The Secretary of the Interior	Encloses copy of desp. From Am. Con. At Taihoku re desire of Dr. Kimura to have his school on free mailing list for periodicals on education of the deaf and blind.	1	900	894.4241/2の転送控

資料番号	発信者／発信地	日付	宛先	件名	分量	コマNo.	備考
894.4241/2	Wilbur J. Carr, The Secretary of State	1922.4.27	Henry B. Hitchcock, Esquire, American Consul, Taihoku, Taiwan, Japan	Dr. Kimura desires to have his school placed on free mailing list to receive certain periodicals published by Am. Associations in education of deaf mutes and blind.	1	901	894.4241/2(Mar. 20)への返書控1
894.4241/3	F. M. Goodwin, Assistant Secretary, Washington D.C.	1922.6.1	The Secretary of States, Washington D.C.	Placing of Taihoku Moe Gakko on mailing lists of institutions for deaf and blind : Encloses reply from 4 institutions.	1	902	添状(April 27への返書), 用紙: DEPARTMENT OF THE INTERIOR 会への回答1
894.4241/3	The Volta Bureau, (SGD.) Josephine B. Timberlake, Superintendent, Washington D.C.	1922.5.5	Mr. L. A. Kalbach, Chief Clerk, Bureau of Education, Department of the Interior, Washington D.C.	[We will send the some literature regarding the education of the deaf]	1	903	894.4241/3]に関する照会への回答1
894.4241/3	(SGD.) Percival Hall, President, Washington D.C.	1922.5.6	Mr. L. A. Kalbach, Chief Clerk, Bureau of Education, Department of the Interior, Washington D.C.	[The editor, Mr. Irving S. Fushfeld, will be glad to send the magazine at the rate of \$2.20 per year.]	1	904	894.4241/3]に関する照会への回答2
894.4241/3	(SGD.) Winifred Hathaway, Secretary, New York	1922.5.8	Mr. L. A. Kalbach, Chief Clerk, Bureau of Education, Department of the Interior, Washington D.C.	[About the mailing list]	1	905	894.4241/3]に関する照会への回答3
894.4241/3	(SGD.) Alvin E. Pope, Superintendent, The New Jersey School for the Deaf, Trenton, New Jersey	1922.5.15	Mr. L. A. Kalbach, Chief Clerk, Bureau of Education, Department of the Interior, Washington D.C.	[About the mailing list]	1	906	894.4241/3]に関する照会への回答4
894.4241/3	Wilbur J. Carr, The Secretary of State	1922.6.10	Henry B. Hitchcock, Esquire, American Consul, Taihoku, Taiwan, Japan	Encloses copy of letter from Interior Dept. re placing of Dr. Kimura's school on mailing list of blind and deaf institutions.	1	907	894.4241/2(Mar. 20)への返書控2

資料番号	発信者／発信地	日付	宛先	件名	分量	コマNo.	備考
894.42762/-	Jefferson Caffery, Charge d'Affaires, a. i. Tokyo	1924.11.4	The Secretary of State, Washington D.C.	Visit by Dr. Fritz Haber in Japan, at invitation of Hoshi Pharmaceutical Company. Reports concerning-- and states he has given a number of addresses on scientific subjects in Tokyo. German Ambassador to Tokyo states Dr. Haber has come partly on business with Hoshi concern and party to return thanks for contributions made since war by Mr. Hoshi in aid of scientific institutions in Germany. German Ambassador denies rumors that the visit had anything to do with establishment of laboratories for experimenting in poison gas by Japanese Military authorities but admitted the possibility of an arrangement for utilization of his experience and advice in connection with manufacture of certain artificial fertilizers.	2	908	報告書
894.42762/-	Jefferson Caffery, Charge d'Affaires, a. i. Tokyo	1924.11.4	The Secretary of State, Washington D.C.		2	910	コマNo. 0908-0909と同 一
894.42793/5	Japan #1046	1910.2.18	MR. O'BRIEN TO THE SECRETARY OF STATE.	Newspaper clipping in re.	1	912	送付状, 用紙: American Embassy.
894.42793/5		1910.2.18	MR. O'BRIEN TO THE SECRETARY OF STATE.	Chinese Students in Tokyo (THE JAPAN DAILY MAIL Yokohama Thursday Feb 10 1910)	1	913	新聞切り抜き
894.42793/5		1910.2.18	MR. O'BRIEN TO THE SECRETARY OF STATE.	A MATTER OF EDUCATION; Alleged Contract Made by Chinese Legation in Tokyo (THE JAPAN ADVERTISER Tokyo sunday Feb 13 1910)	1	914	新聞切り抜き
894.42793/5	Ambassador	1910.2.18	MR. O'BRIEN TO THE SECRETARY OF STATE.	[Prediction about Chinese student in Japan]	2	915	用紙: American Embassy, Tokyo
894.42793/6	Charles R. Crane, Peking #917	1921.3.10	The Secretary of State, Washington D.C.	Chinese Govt. informs Jap. Govt. that it has no intention of renewing the Sino- Japanese educational Agreement governing training and education of Chinese students in China.	1	917	添状
894.42793/6		1921.3.2		END OF THE SINO-JAPANESE EDUCATIONAL AGREEMENT; The Infamous Twenty One Demands Treaty an Abatacle to Friendship (THE PEKING LEADER, Wednesday, March 2, 1921)	1	918	新聞切り抜き

資料番号	発信者/発信地	日付	宛先	件名	分量	コマNo.	備考
894.428	John Hyde	1913.4.28	Mr. President	Re gift of publications to Tokio Statistical Society fr. John Hyde.	2	919	用紙: North-China Daily News, North-China Herald
894.428				[memo]	1	921	用紙: Department of State, The Undersecretary
894.428/1	W. Philipps, State Dept. Office of Under Secretary.	1923.9.25		Conversation with Japanese Amb. Re desire of Japan to obtain donations of books to replenish University and college libraries which were wiped out by the earthquake disaster.	2	922	用紙: Department of State, The Undersecretary
894.428/1				[Donation of books for replenishing the libraries of various universities and colleges which have been destroyed in the recent disaster in Japan]	2	924	894.428/1の関連資料
894.428/2	F. P. Lockhart, State Dept. Far Eastern Division	1923.9.27		Conversation with Mr. Saburi of Japanese Emb. Re replenishing of libraries in Japan which were destroyed by earthquake and fire.	2	926	会談の要約メモ, 用紙: Department of State, Division of Far Eastern Affairs
894.428/3	Carnegie Endowment FE, Assistant Secretary	1923.9.28	Mr. Sadao Saburi, Counselor of the Japanese Embassy, Washington D.C.	Encloses copy of memo. From Japanese Emb. Requesting assistance re replenishing University and college libraries.	1	928	書簡
894.428/3a		1923.10.3	Herbert Putnam, LL. D., Library of Congress, Washington D.C.	[Carnegie Endowment has expressed a willingness to duplicate the publications with some additions]	2	929	返書控
894.428/4	T. Midzuno M. A. A professor and the superintendent of the Library, Yokohama Technological College	1924.2.21	Mr. Charles Evans Hughes, The Secretary of the State, U. S. A.	Re- Establishment of Library in Japan ; Requests this Government aid in. -.	1	931	添状, 用紙: THE YOKOHAMA TECHNOLOGICAL COLLEGE
894.428/4	T. Midzuno M. A. A professor and the superintendent of the Library, Yokohama Technological College			[Trying to promote the friendly relationship between Japan and U.S. A.]	2	932	依頼状, 用紙: THE YOKOHAMA TECHNOLOGICAL COLLEGE
894.428/4	J. BUTLER WRIGHT, Third Assistant Secretary	1924.3.24	The Librarian of Congress, Washington D.C.	Encloses copy of letter from T. Midzuno requesting cooperation of American authorities in replenishing the library of Yokohama Technological College.	1	934	894.428/4への返書控
894.428/4	HERBERT O. HENGSTLER	1924.3.24	Graham H. Kemper, Esquire, American Consul, Yokohama	[Instruct to make appropriate acknowledgment to Mr. Midzuno]	1	935	894.428/4の転送控

資料番号	発信者/発信地	日付	宛先	件名	分量	コマNo.	備考
894.428/5	Library of Congress FE	1924.3.31	The Secretary of State, Washington D.C.	Request of T. Mizuno for cooperation of American authorities in replenishing the library of Yokohama Technological College. Encloses copy of letter from dated Mar. 31 from Library of Congress	1	936	用紙: Library of Congress, Washington
894.428/5	HERBERT O. HENGSTLER	1924.4.10	Graham H. Kemper, Esquire, American Consul, Yokohama		1	937	894.428/5の転送控
894.428/6	Edgar A. Bancroft, Tokyo	1925.2.10	The Secretary of State, Washington D.C.	Tokyo Imperial University Library. Mr. Rockefeller's gift of 4,000,000 yen for reconstruction of - Transmits press article regarding -	2	938	用紙: Embassy of the United States of America
894.428/6		1925.1.16		Mr. Rockefeller's contribution of Yen 4,000,000 to the Tokyo Imperial University Library (Tokyo Asahi)	1	940	新聞記事の引用
894.42/24	Japan(Castle)	1930.4.7		SEE 894.00 P.R./28 for #91 from Japan (Castle) re: Education grant-Japan Increase of the State subsidy for compulsory education to relieve the financial burdens of the local governments is one of the present Government's most important policies. Discussion	1		NOTE
894.00PR/28	W. R. Castle, Jr., Tokyo	1930.4.7	The Secretary of State, Washington, D.C.		1		894.42/24の関連文書, 送付状, 用紙: EMBASSY OF THE UNITED STATES OF
894.00PR/28	W. R. Castle, Jr., Tokyo	1930.4.7	The Secretary of State, Washington, D.C.	REPORT OF CONDITIONS IN JAPAN DURING THE MONTH OF MARCH, 1930	16		894.00PR/28の同封資料, 報告書
894.42/25	Edwin L. Neville, Chargé' Affaires ad interim, Tokyo	1930.9.13	The Secretary of State, Washington, D.C.	Fifty-third annual report of the Minister of State for Education covering the years 1925-1926 enclosed.	1		送付状, 用紙: EMBASSY OF THE UNITED STATES OF
894.42/26	Japan(Forbes)	1931.6.30		Revision of textbooks planned in order to keep abreast of advanced ideas in education and the change in the international outlook. SEE 894.00PR/43 for #261 from Japan(Forbes).	1		NOTE
894.00PR/43	W. Cameron Forbes, Tokyo	1931.6.30	The Secretary of State, Washington, D.C.		1		894.42/26の関連文書, 送付状, 用紙: EMBASSY OF THE UNITED STATES OF AMERICA
894.00PR/43	W. Cameron Forbes, Tokyo		The Secretary of State, Washington, D.C.	REPORT OF CONDITIONS IN JAPAN DURING THE MONTH OF JUNE, 1931	10		894.00PR/43の添付文書

資料番号	発信者/発信地	日付	宛先	件名	分量	コマNo.	備考
894.42/27	Edwin L. Neville, Chargé d' Affaires ad interim, Tokyo	1932.4.1	The Secretary of State, Washington, D.C.	Annual report of Japanese Ministry of Education for 1926-1927. Transmits.	1		送付状, 用紙: EMBASSY OF THE UNITED STATES OF AMERICA
894.42/28	Nelson Trusler Johnson, Peiping	1932.8.4	The Secretary of State, Washington, D.C.	Japanese textbooks containing anti-Chinese and anti-foreign teachings Transmits copy of despatch No. L298 of July 19, 1932 from American Consulate General, Nanking, on the subject of together with a sample of such a textbook. (NOTE894.202)	1		送付状, 用紙: LEGATION OF THE UNITED STATE OF AMERICA
894.42/28	Willys R. Peck, American Consul General, Nanking	1932.6.19	Nelson Trusler Johnson, American Minister, Peiping	[Copy of despatch No. L-298 of July 19, 1932]	3		894.42/28の同封書類, 特電控, 用紙: AMERICAN CONSULAR SERVICE
894.42/28	[DIVISION OF FAR EASTERN AFFAIRS]	1932.8.31	[Department of State]	[Remark on Anti-Foreign Teachings in New Textbooks and Publications of Japan]	1		書状, 用紙: DEPARTMENT OF STATES
894.42/29	John Weckerling, Captain, Infantry. DOL., Asst., Military Attache, Tokyo	1935.5.20	[Department of State]	Young People's School: Submits report on-	3		報告書
894.42/30	Makinson, Osaka	1938.3.17		Incidents in Christian Schools and Institutions, with specific reference to Doshisha University at Kyoto: Report concerning-. SEE894.00/783.	1		NOTE
894.00/783	George A. Makinson, American Consul General, Osaka	1938.3.17	Joseph C. Grew, American Ambassador, Tokyo	Enclosing report entitled "Liberal Christianity Suspect in Japan"	1		894.42/30の関連文書, 用紙: AMERICAN CONSULATE
894.00/783	George A. Makinson, American Consul General		Joseph C. Grew, American Ambassador, Tokyo	LIBERAL CHRISTIANITY SUSPECT IN JAPAN	13		894.00/783の報告書
894.42/31	R. B. Pape, Captain, C. A. C., DOL., Asst., Military Attache, W. R. Castle, Jr.	1939.5.3		Autonomy in Imperial Universities of Japan. Report-	2		報告書
894.4212/1		1930.2.24	The Secretary of State, Washington, D.C.	Plan for the direction of the thought of Japanese students of higher school corresponding to U. S. colleges. Details and discussion of-	11		報告書, 用紙: EMBASSY OF THE UNITED STATES OF AMERICA
894.4212/1	[the Acting Secretary of State]	1930.3.22	[William R. Castle, junior, American Ambassador, Tokyo]	Development of student societies in Japan for study of social questions. Comments upon Embassy's despatch #41, Feb. 24, 1930, on general subject of-	1		書簡
894.4212/1		1930.3.19			1		メモ

資料番号	発信者／発信地	日付	宛先	件名	分量	コマNo.	備考
894.4212/2	Grew, Japan	1932.9.1		Plan promulgated by the Japanese Department of Education whereby the number of educated people who are unable to find employment will be reduced during the next ten years. SEE 894.00- Monthly Report on Conditions in Japan during the month of August, 1932	1		NOTE
894.00PR/57	Joseph C. Grew, Tokyo	1932.9.1	The Secretary of State, Washington, D.C.		1		894.4212/2の関連文書, 送付状, 用紙: EMBASSY OF THE UNITED STATES OF AMERICA
894.00PR/57				REPORT ON CONDITION IN JAPAN DURING THE MONTH OF AUGUST, 1932	35		894.4212/2の関連文書, 894.00-P.R./57の同封資料, 報告書
894.423/1	[Peiping]	1933.10.25		Japan and Justice for Jews. A touch stone to some facile affinities in the Far East (A Centile's view anonymous mimeographed article entitled-, Mr. Dooman comments on-, Has to do with migration of Jewish-German savants to Japan. An attempt at presenting" pr	15		
894.423/1	[Division of Far Eastern Affairs]	1934.1.31	Department of State, Washington, D.C.		2		感想
894.423/1	[Division of Far Eastern Affairs]	1934.2.2	Department of State, Washington, D.C.		2		報告書簡
894.423/1	[Division of Far Eastern Affairs]				1		メモ
894.423/2	A. E. Corrigan, Ottawa	1936.1.29	Stanley K. Hornbeck, Esq., Chief of Division, Far Eastern Affairs, Department of State, Washington, D.C.	Development of scientific education and research work in Japan. Information on-, desired Encl. a brochure entitled "National Scholarships as a National	1		依頼書
894.423/2		1936.2.4	Mr. Corrigan	DITTO : No available materials. Buggests that assistance might be rendered by the Canadian or Japanese diplomatic service or some member of the Canadian Council of the Institute of Pacific Relations.	2		返書
894.42710/1	Walter H. McKinney, Chargé d' Affaires ad interim, Legation of the United States of America, Guatemala	1938.12.15	The Secretary of State, Washington, D.C.	Ten scholarships in Japan to be granted to two students from each of the five Central American Republics, selection of students to be made on a competitive bases. NOTE 810.00 Japanese.	1		報告書

資料番号	発信者/発信地	日付	宛先	件名	分量	コマNo.	備考
894.42711/1	Donovan, Kobe	1934.8.27		Students in Japan of Japanese Race and American citizenship. Graft showing number of Japanese-American students registered in Kobe Consular District and the Ages at which they left the U. S. SEE 130 Revision/188.	1		NOTE
894.42711/2	Richard F. Boyce, American Consul, Yokohama	1935.9.20	The Secretary of State, Washington, D.C.	"Second -generation" in Japan: (Americans of Japanese race): Encloses report on-, requesting instructions with regard to showing of report to two Japanese-American who rendered assistance in its preparation.	2		送付状
894.42711/2	Consul Richard F. Boyce, American Consulate., Yokohama	1935.9.20		THE "SECOND-GENERATION" JAPANESE PROBLEM	48		894.42711/2の同封書類, 報告書
894.42711/2		1935.6.21		FAMOUS DRAMA BY KIKUCHI KAN GIVEN IN ENGLISH	3		JAPAN TIMES とMAIL FRIDAYからの写し, 前史料の続き, 同封資料
894.42711/2				QUESTIONNAIRE	3		同封資料4(a), 質問紙写し, 前史料の続き
894.42711/2				RESULTS TAKEN FROM THE SECOND GENERATION CENSUS TAKEN BY THE Y. M. C. A. 1934-1935.	4		同封資料4(b), 前史料の続き
894.42711/2				THE JAPAN CULTURAL FORUM MEMBERS	1		同封資料5, 前史料の続き
894.42711/2				BULLETIN OF THE SCHOOL OF JAPANESE LANGUAGE AND CULTURE	16		同封資料2(a), 学校要覧, 英語版, 前資料の続き
894.42711/2				WASEDA INTERNATIONAL INSTITUTE	11		同封資料2(b), 学校要覧
894.42711/2				『早稲田国際学院』	16		学校要覧
894.42711/2				『春宿寮 補導学校 入寮入学案内』	1		同封資料2(c), 入学案内
894.42711/2				THE KAIGAI KYOIKU KYOKAI	3		同封資料2(c), 『早稲田国際学院』の英語訳
894.42711/2				SECOND GENERATION GAST IN HARD ROLE' THE JAPAN ADVERTISER, TOKYO, 1935.2.17	3		同封資料3(a), 新聞切り抜き
894.42711/2				Second Generation Girls introducing American Dance' THE JAPAN TIMES &MAIL SUNDAY, 1935.2.	2		同封資料3(b), 新聞切り抜き
894.42711/2		1935.10.25	American Consul, Yokohama		1		
894.42711/3	Charles H. Stephan, American Vice Consul, Nagoya	1934.9.9	The Secretary of State, Washington, D.C.	Chick sexing: Study of-, by American-born Japanese. NOTE to 811.62228	2		報告書

資料番号	発信者／発信地	日付	宛先	件名	分量	コマNo.	備考
894.42711/3	Labor Dept.	1934.10.23		DITTO : Copy of- transmitted.	1		伝達
894.42711/4	HENRY B. HAZARD, Acting Deputy Commissioner, Washington	1935.10.29	The Secretary of State, Washington, D.C.	Chick sexing: Study of-, by American- born Japanese: Department's communication of Oct.23, transmitting copy of Nagoya's desp#23 Sept.;; acknowledges receipt of-.	1		お礼状, 用紙: U. S. DEPARTMENT OF LABOR IMMIGRATION AND NATURALIZATION お礼状控
894.42711/4					1		
894.42711/5	WAR DEPARTMENT	1935.12.27		Second generation Japanese born in Hawaii and the United States who have come to Japan: Recent survey of-, questioned on intention of remaining or returning to land of birth; also opinions on aspects of Nippon. Article on-, clipping of-, from the Japanese	1		用紙: MILITARY INTELLIGENCE DIVISION WAR DEPARTMENT
894.42711/5					1		JAP-CAL DAILY NEWS の切り抜き
894.42711/6	Lasker, American Council, Institute of Pacific Relations	1938.8.9		Japanese exchange students in the US. There is great concern among certain Japanese educators over the falling off in the number of Japanese graduate students in America. Dr. Kenzo Takayanagi has brought to this country a plan for some exchange arrangement	1		NOTE
894.42711/7	Consul Richard F. Boyce, American Consulate. , Yokohama	1940.1.29	Department of State, Washington, D. C. American Consulate, Tokyo	American citizens of Japanese race residing in Japan: Report concerning-, enclosing certain publication on the subject.	15		用紙: VOLUNTARY REPORT
894.42711/7	Consul Richard F. Boyce, American Consulate. , Yokohama		Department of State, Washington, D. C. American Consulate, Tokyo	THE NISEI, A STUDY OF THEIR LIFE IN JAPAN KEISEN GIRLS' SCHOOL, TOKYO, 1939	55		同封書類No.1, 学校要 覧, 英語版
894.42711/7	Consul Richard F. Boyce, American Consulate. , Yokohama		Department of State, Washington, D. C. American Consulate, Tokyo	Tosuke Yamazaki "NISEI OPPORTUNITIES IN JAPAN" 1939.9.6	4		同封書類No.2
894.42711/7	Consul Richard F. Boyce, American Consulate. , Yokohama		Department of State, Washington, D. C. American Consulate, Tokyo	THE IDEALS OF THE SECOND- GENERATION JAPANESE AND JAPANESE SPIRIT, S. Natori, Vice President of Waseda International Institute, 1939.9.18	6		同封書類No.3, 英語訳
894.42711/7	Consul Richard F. Boyce, American Consulate. , Yokohama		Department of State, Washington, D. C. American Consulate, Tokyo	PAN-PACIFIC YOUTH, a publication of the Japan-America Young People's Federation, Vol I	20		同封書類No4
894.42711/7	Department of State Division of Far Eastern Affairs	1940.3.25		Report of Yokohama's voluntary report of Jan.29, 1940, " American Citizens of Japanese Race Residing in Japan"	2		VOLUNTARY REPORT の説明書

資料番号	発信者／発信地	日付	宛先	件名	分量	コマNo.	備考
894.42711	Charles, Division of Cultural Relations	1940.5.27	Joseph J. Early	Appointment of Dean M. Lyle Spencer as a member of the faculty of the Oriental Cultural Summer College at Tokyo for the 1940 session. Editorial regarding- appearing in the Queens Evening News.	1		
894.42711		1940.5.13			1		用紙: DEPARTMENT OF STATE DIVISION OF CULTURAL
894.42711		1940.9.4			1		用紙: DEPARTMENT OF STATE DIVISION OF FAR EASTERN
894.42711	Joseph J. Early	1940.5.4	Secretary		1		
894.42711/9	Joseph C. Grew, American Embassy, Tokyo	1940.8.6	The Secretary of State, Washington, D.C.	Hepburn Professorship of American Constitution, History and Diplomacy at the Tokyo Imperial University. Establishment of -; Encloses copies of certain letters exchange in 1917 between Mr. A. Marton Hepburn, Baron Eiichi Shibusawa and Baron K. Yamagawa on-	3		送付状, 用紙: THE FOREIGN SERVICE OF THE UNITED STATES OF AMERICA
894.42711/9	A. Barton Hepburn, New York	1917.11.15	Baron K. Yamagawa, President, Tokyo Imperial University, Tokyo		4		同封書類No.1, 書簡控
894.42711/9	President of the Tokyo Imperial University		Baron E. Shibusawa		3		同封書類No.1, 書簡控
894.42711/9	A. Barton Hepburn, New York	1917.6.11	Baron E. Shibusawa, Tokyo		5		同封書類No.1, 書簡控
894.42711/9	K. Yamagawa, Tokyo	1917.12.25	A. Barton Hepburn		2		同封書類No.1, 書簡控
894.42711/9	Joseph C. Grew, American Embassy, Tokyo	1940.8.6	The Secretary of State, Washington, D.C.	Excerpt of a brief biographical sketch of Dr. Hepburn taken from the book "A. Barton Hepburn, His Life and Service to His Time" by Joseph Bucklin Bishop	2		同封書類No.2, 引用
894.42711/10	Grew, Japan	1941.6.22		Japanese Govt. enhrassed by preserve in Japan of large numbers uninvited, ill informed and disappointed generation students having dual nationality; nationality should be definitely elected before students come. Japanese Govt. desires to make available to	1		用紙: CROSS-REFERENCE FILE NOTE
894.427/a	The Secretary of State	1943.3.22	American Charged' Affaires ad interim, Peiping	Japan's Program of Cultural Relations, 1942. Encloses copy of memorandum prepared on subject of-	1		送付状
894.427/a	The Secretary of State	1943.1.30	American Charged' Affaires ad interim, Peiping	JAPAN'S PROGRAM OF CULTURAL RELATIONS, 1942	43		894.427/aの同封書類, 報告書

資料番号	発信者／発信地	日付	宛先	件名	分量	コマNo.	備考
894.42732/3	Burdett, Brazil	1940.1.22		Visit of Brazilian students of the Gremio Cultural Brasileiro-Nipponico to Japan as guests of the Japanese Govt: Report on the proposed-, in a group to be known as the "Caravana de Intercambio Cultural Brazil-Japan SEE 800.20210/464.	1		用紙:CROSS-REFERENCE FILE NOTE
894.42732/4	Burdett(Brazil)	1940.3.2.		Prospective trip of 20 recently graduated students of U. of Sao Paulo to Japan, under auspices of Liga Estudantina Nippo-Brasileira, with transportation and expenses paid by Japanese Govt. Copy of report of Consul General Foster, mentioning-. SEE 800.20210/48	1		用紙:CROSS-REFERENCE FILE NOTE
894.42737/1	Cuba(Messersmith)	1940.6.11		Lectures to be given in Japan by Salvador Massip, Cuban citizen, on geography of Cuba. Memorandum concerning-. SEE 837.00-N51.	1		用紙:CROSS-REFERENCE FILE NOTE
894.42737/1	Department of State, Washington, D. C.	1940.6.6	American Embassy, Tokyo	DITTO: Dr. Salvador Massip, Professor of Geography of the University of Habana, was to leave for Japan on or about June 21, 1940 to deliver five or six lectures on the geography of Cuba. Please endeavor to report fully regarding his lectures and activities	1		電報, 用紙: TELEGRAM SENT
894.42737/2	Joseph C. Grew, American Embassy, Tokyo	1940.8.5	The Secretary of State, Washington, D.C.	DITTO : Recently arrived in Japan for a five months' stay. Copy of an article from THE JAPAN TIMES of July 19, regarding the character of his visit enclosed. He stated that he was trying to establish some permanent cultural relations between Japan and Cuba.	2		報告書, 用紙: THE FOREIGN SERVICE OF THE UNITED STATES OF AMERICA
894.42737/2	Joseph C. Grew, American Embassy, Tokyo	1940.7.19	The Secretary of State, Washington, D.C.	SCHOLAR HERE TO PROMOTE BETTER JAPAN-CUBA BONDS: The Japan Times	1		894.42737/2の同封資料, 新聞切り抜き
894.42737/2	The Secretary of State, Washington, D. C.	1940.9.11	American Ambassador, Habana	DITTO: Encloses copy of despatch No.4887, 5, 1940 in regard to-	1		書簡控
894.428/9-14	TRUMAN M. MARTIN, Colonel, G. S. C., Chief, Japan Branch	1943.9.14	State Department Commerce Department	Bibliography of Japonies from Selected Libraries	2		送付状
894.428/9-14	TRUMAN M. MARTIN, Colonel, G. S. C., Chief, Japan Branch	1943.9.14	State Department Commerce Department	Numerical List of Libraries	10		894.428/9-14の同封資料

6. 清末中国における日本教育視察

—資料的考察—

阿部 洋 (国立教育政策研究所)

蔭山 雅博 (専修大学)

清末中国における日本教育視察 —資料的考察—（中間報告）

阿部洋（国立教育政策研究所・名誉所員）
蔭山雅博（専修大学）

目次

はじめに —趣旨と方法—

I. 清末中国における教育改革と日本教育視察—時代的背景—

II. 資料

(1) 『日本外務省記録』所収清国人日本教育視察関係文書（目録）

(2) 明治期新聞紙上の吳汝綸—『東遊日報訳編』所収主要論説・記事—（目録）

はじめに —趣旨と方法—

戦前戦後を通じて、長年日中教育文化交流史に関する研究を進められた故実藤恵秀教授（1896-1985年）が残された貴重な資料群のなかに、清末民国期中国人の手になる日本視察記録、いわゆる『東遊日記』がある。現在東京都中央図書館の『実藤文庫』中に収録されているものだけでも250点が数えられ、そのなかに教育関係のものも少なくない。

筆者らは、かつてそれら教育関係東遊日記について調査を行い、そのうち主要なものを選んで複写作業を行ったことがある。このたびの近代中国における日本教育観の形成に関する研究の一環として、近年における『東遊日記』に関するいくつかの研究成果をふまえ、清末期を中心に教育関係『東遊日記』の内容を整理して簡単な解題を行い、それらを清末当時の教育改革あるいは同時期における日中両国間の教育交流の流れのなかに位置づけしてみることにした。

今回の資料整理・解題作業は、次のような手続きを進める。

- ① 東京都立日比谷図書館『東京都立日比谷図書館蔵 実藤文庫目録』（1966年刊）の中から主要な教育関係『東遊日記』を抽出し、
- ② それらの成立経緯を、まず外務省外交史料館所蔵『日本外務省記録』中の下記の関連資料で補強する。
 - ・『外国官民本及鮮満視察関係雑件（清国ノ部）』9冊
 - ・『清国視察員来朝雑件（第5回国内博覧会視察）』1冊
- ③ これらを踏まえ解題作業を進めるが、その際下記のような先行研究の成果を参照する。

1. 田正平著・蔭山雅博訳「清末における中国知識人の日本教育視察」（国立教育研究所『研究集録』第25集、1992年所収）
2. 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版、1990年刊
3. 汪婉『清末中国対日教育視察の研究』汲古書院、1998年刊
4. 呂順長編著『教育考察記』上・下（晩清中国人日本考察記事集成）、杭州大學出版社、1999年刊
5. 小川修「実藤恵秀（収集）『東遊日記』（近代中国人日本旅行記）解題」（『創大アジア研究』第8号、1987年刊所収）
6. 容応莢「呉汝綸と『東遊叢録』—ある『用務派』の教育改革案—」（平野健一郎編『近代日本とアジア：文化の交流と摩擦』東京大学出版会、1984年刊所収）
7. 近代アジア教育史研究会（代表 阿部洋）編『近代日本のアジア教育認識（目録編）』1995年刊
8. 田正平『留学生与中国教育近代化』広東教育出版、1996年刊
9. 山根幸夫「嚴修の『東遊日記』（汲古書院『汲古』第30号、1996年11月刊所収）
10. 朱鵬「嚴修の新学受容過程と日本—其の二・天津の紳商と近代初等学堂をめぐって—」（『天理大学学報』第192輯、1999年刊所収）

ちなみに、本稿の作成にあたっては、「はじめに」、「I」および「資料(1)」を阿部洋が、「資料(2)」を蔭山がそれぞれ担当した。

I. 清末中国における教育改革と中国人の日本教育視察 —時代的背景—

1) 清末中国における教育改革

周知のとおり、清朝末期は「日本モデル」の教育改革が行われた時代であった。中国側に、明治日本の急速な国家発展の基礎には、近代学校教育の国民的普及があるとする認識が生まれるのは、1894-95年の日清戦争の敗北を機とする「変法自強運動」の時期においてであった。康有為・梁啓超らの進歩的知識人は、日清戦争を機に帝国主義列強による中国植民地化が急速に進むなか、倒壊の危機に瀕した清朝体制を立て直し、その下での中国の富強化を図るために変法自強運動を展開するが、彼らは「変法」＝政治・社会制度の変革と併せて、「興学」＝近代学校教育の導入を行うことが不可欠であるとし、そのために明治日本の教育発展に学ぶべきことを提唱するからである。

変法派による1898年の戊戌改革は、わずか100日で保守派のクーデターによって圧殺されるが、その教育改革の試みは、間もなく1900年義和団事件を機に開始される「光緒新政」によって継承・発展されることとなる。1902年張百熙によって「欽定学堂章程」が制定され、次いで翌1904年には張之洞らの尽力で「奏定学堂章程」が改めて制定公布され、日本

の学校制度をモデルにした中国最初の近代学制が発足し、近代学校教育の系統的・制度的導入が本格的に開始された。

この「日本モデル」の教育改革が大きく進展するのは、日露戦争における日本の勝利が大きな契機となっていた。1905年清朝政府が1300年の長きにわたり存続してきた科挙制度を廃止する一方、近代教育普及のため、同年日本文部省の制度にならって学部を創設したのはそれをよく示している。

2) 清国人の日本教育視察

1. 初期の「東遊記録」

こうした時代状況のなかで、日中両国間の教育交流が盛んとなり、日本から多くの教育顧問や教習が中国各地に招かれる一方、中国からは数千に及ぶ青年たちが日本留学を志し、また多くの官吏や知識人が相次いで近代化方策を求めて日本視察（「遊歴」）に赴くことになった。彼らが日本訪問にあたって最も力を注いだのは、軍事および教育面の視察であった。

但し、中国知識人の日本視察は、この時期が最初ではなく、すでに日清戦争以前から始められてはいた。黄遵憲、傅雲龍、黄慶澄、王韜、姚文棟らによるもので、彼らはいずれも視察結果を旅行記や詩集にまとめて刊行していた。併し、これら初期の段階では日本の国情全般を視察することが主眼で、当時の日本の教育についての問題関心はそれほど高いものではなかった。これら初期の代表的な日本視察記録として知られるのは黄遵憲の『日本国志』（1890年初版）である。黄は1877年初代駐日公使何如璋に随行して書記官として来日、日本に滞在中伊藤博文や岡千仞ら朝野の人士と広く交遊して日本理解を深め、『日本雑事詩』（1879年刊）を残している。『日本国志』は中国で最初の本格的な日本研究書ともいべき大著で、40巻からなり、幕末から明治初期の日本の社会、政治、教育、経済、軍事などを全面的に分析している。教育についても、明治初年岩倉使節団の欧米訪問以後における西洋文化の摂取努力や、近代教育制度の樹立過程が記述されており、康有為ら変法派の人々は、日本理解にあたってこの書物の影響を強く受けたという。

戊戌期に入ると、教育改革のモデルを求めて、清朝政府や各省督撫はしばしば人員を派遣して日本の教育事情の調査にあたらせた。なかでも活発な活動を行ったのは清末教育改革のリーダーとして知られる湖広総督張之洞(1837-1909年)である。彼は『勸学篇』（1898年）を著して意欲的な近代教育の導入や、海外ことに日本への留学生の派遣を提唱するかわら、自らも北省武昌を中心に新式軍隊の編成や製鉄所・鉱山の開設などの富強化政策を推進し、また西湖書院など旧教育機関の改革や、湖北自強学堂、武昌農務学堂などの新式学堂の設立運営にあたった。張は、そのため1898年姚錫光を日本に派遣して教育調査にあたらせている。姚錫光は約2ヶ月間日本に滞在、各種の官公立学校を視察して、帰国後

報告書として『東瀛学校挙概』（1899年刊）を提出し、そのなかで普通、陸軍、専門に大別して各学校の組織運営、教育内容などを系統的に紹介した。

2. 教育改革の進展と日本教育視察

清末期の教育改革が本格的に始動するのは、義和団事件後の所謂「光緒新政」に於いてであった。この動きを推進したのは張之洞、劉坤一、袁世凱、端方らの開化派官僚である。彼らの提唱にもとづき新式学堂の設立普及、科挙制度の改廃、海外ことに日本への留学生派遣の諸施策が精力的に展開されることになるのは周知のとおりである。

こうしたなか、日本への教育視察が組織的に行われ、多くの視察記録、いわゆる『東遊日記』が相次いで刊行されるようになる。留学生監督夏偕復の『学校芻議』（1901年刊）や、張之洞・劉坤一両総督の依頼をうけて日本の教育視察に赴いた羅振玉の報告書『扶桑兩月記』（1902年刊）、日本の制度に学んで勸学所を設立し、地方への教育普及の方策を立案することになる直隸学校司総弁嚴修の『壬寅東游日記』（1902刊）などはその代表的なものといえる。

こうしたなか、当時日本の教育事情に関する最新の情報を詳細に提供し、その後の教育改革のあり方に大きな影響を与えたのは、吳汝綸の『東遊叢録』（1902年刊）であった。当時蓮池書院院長の地位にあった碩学吳汝綸（1840-1903年）が日本教育視察に赴いたのは、清朝政府が欽定学堂章程にもとづいて近代学制を導入するにあたり、管学大臣張百熙から京師大学堂総教習就任を要請されたことから、就任に先立ち日本の教育事情や大学運営の実際を調査研究するため、63歳という高齢をおして訪日したものであった。吳は約4ヶ月間日本に滞在、その間彼は文部省をはじめ、各種の官庁や学校、文化施設を精力的に歴訪し、とくに文部省では1ヶ月近くにわたって教育行政から小・中学校以下各レベルの学校の概要、学校衛生、学校管理法、教授法や教科書、あるいは幕末以来の教育改革の沿革などの特別講義を受けた。また文部大臣菊池大麓、東京帝国大学総長山川健次郎、帝国教育会会長辻新次、高等師範学校長嘉納治五郎など多くの教育家を訪ね、外務大臣小村寿太郎や貴族院議員伊沢修二など各界の名士とも面談あるいは文通によって、熱心に中国教育の改革問題について意見を交換した。『東遊叢録』は、こうした彼の滞日中の行動記録を克明に整理したものである。その間、日本各地の新聞や雑誌はさかんに彼の動静をとりあげており、翌1903年には華北訳書局から関連記事・論説をまとめて『東遊日報訳編』が出されたほどである。参考のため、その関連記事や論説類を明治期の各新聞から抽出することとし、今回の中間報告では、その目録を資料(2)にまとめておいた。最終報告書にはそのうち主要なものを提示する予定である。

ところで、日本への教育視察がピークに達するのは、1904年「奏定学堂章程」発布前後の頃である。同章程の総論ともいべき「学務綱要」は、各級官僚や教育関係者に対し、業務遂行上日本への教育視察（「遊歴」）を不可欠なものとして強調していた。後掲の資料(1)に見るとおり、『日本外務省記録』にはこれら教育視察のため来日した多くの中国

人の入国、および日本国内における活動についての公式記録が収められている。彼らはまた帰国後その視察報告書をまとめて公刊、それらは中央・地方における教育改革の進め方や各種学校の実際運営のために重要な示唆を提供した。中国最初の私立師範学校を設立、地方での学校運営のあり方を研究するため訪日した張謇による『癸卯東遊日記』（1903年刊）や、直隸省学校司督弁あるいは同編訳処総弁として、同省における地方教育行政や学校教育実践の改革に大きな役割を果たした胡景桂や王景禧、嚴修らの『東瀛紀行』（1903年刊）や『日遊筆記』（1904年刊）、あるいは『壬寅東遊日記』（1902年刊）などはその代表的なものである。また両江総督張之洞の命により高等教育・高等師範教育のあり方を精力的に考察した江南高等学堂総教習繆荃孫の『日遊彙編』（1903年刊）なども注目に値する東遊日記と云える。

当時の教育関係者による日本視察のなかで最も注目されたものに、各省教育行政機関の責任者たる提学使一行の日本教育視察があった。清朝政府は近代学校教育の全国的普及を図るため、清朝政府は1905年中央教育行政機関としての学部を創設、これについて翌06年には地方教育行政機関として各省に提学使司を開設し、その長官に提学使23名を任命するのであるが、彼等の着任に先立ち、これまで学務の担当経験や訪日の機会を持たなかった十数名を選んで日本に派遣し、地方教育行政について研修させようとした。彼らは、張之洞の女婿で湖北省提学使たる黄紹箕を団長に、1906年8月から3ヶ月余にわたって東京に滞在、文部省や各地の学校を歴訪して教育行政や学校運営の実務を視察するかたわら、各種の講義を受けたり、日本側専門家との間で意見交換を行うなど活発に活動した。その中心行事は8月下旬から約5週間にわたって文部省で行われた連続講義で、その講義内容は

- ①各国の学制
- ②明治年間教育沿革
- ③日本現行教育制度
- ④教育方法及其基礎
- ⑤学校管理法大要
- ⑥各学科目の性質及其関係

など、広範にわたるものであった。彼らはまた、しばしば帝国教育会を訪問して、会長辻新次以下、伊沢修二、高田早苗、野尻精一、湯本武比古、関義臣ら有力会員との間で教育普及をめぐる諸問題についてつっこんだ質疑応答も行っており、その詳細な記録が帝国教育会機関誌『教育公論』に掲載されている。

資料（１）『日本外務省記録』所収 清国人日本教育視察関係文書（目録）

- 備考）1.所収資料題目右肩に★印があるものは、整理のため編者が適宜タイトルを付したものである。
2.Ⅱの内容分類は、Ⅰの方式に準じて編者の判断にもとづいて行った。

I. 『外国官民本邦及鮮満視察雑件（清国ノ部）』

<第1巻>

1. 第一 耿松山

「清国人耿松山府下各小学校等視察ノ件」★東京府知事高崎五六より外務省浅田徳則宛（明治22. 4. 12）

2. 第三 姚錫光・張彪・黎元洪等

「本邦制度視察ノ為メ湖広総督張之洞ヨリ姚錫光等派遣ノ件」★上海総領事代理小田切万寿之助より小村外務次官宛（明治31. 2. 18）

3. 第四 鄒凌瀚・周泰瀛等

「教育及工業等視察ノ為本邦渡航ノ件」★上海総領事館事務代理諸井六郎より小村外務次官宛公信（明治31. 8. 12）

- ・小村外相より大森兵庫県知事宛便宜供与方依頼（明治31. 8. 20）

4. 第五 李盛鐸・李家駒等

「帝国大学視察ノ為メ学務視察員派遣ノ件」★鄭永昌一等領事より小村外務次官宛公信（明治. 31. 9. 6）

- ・林臨時代理公使より大隈外相宛通知「清国ヨリ本邦へ学務視察員派遣ノ義ニ関シ総署ヨリ照会写相添へ申進ノ件」（明治31. 9. 10）
- ・同上の件に関し大隈外相より尾崎文相宛便宜供与方依頼（明治31. 9. 27）
- ・大隈外相より尾崎文相宛李盛鐸外三名着京に付き申進（明治31. 10. 4）
- ・同上の件に関し大隈外相より桂陸相・西郷海相宛便宜供与方依頼（明治31. 10. 4）

5. 第六 錢恂

「張之洞湖広総督秘書官錢恂氏留学生監督ヲ兼ネ本邦渡航ノ件」★瀬川漢口領事より

都築外務次官宛通知（明治32. 4. 1）

- ・青木外相より桂陸相・参謀総長宛通知（明治32. 4. 24）

6. 第七 丁鴻臣・沈翊清等

「四川省派遣調査委員出發報告ノ件」松村上海総領事事務代理より青木外相宛（明治32. 9. 15）

- ・青木外相より大山参謀総長宛四川省総兵丁鴻臣等出發通知（明治. 32. 9. 26）
- ・福州領事より高平外務次官宛本邦陸軍大演習視察清国武官及留学生派遣の件申進（明治32. 9. 25）
- ・松村上海総領事事務代理より青木外相宛閩浙総督派遣員並に留学生出發の件（明治32. 10. 5）
- ・青木外相より大山参謀総長・桂陸相・樺山文相宛四川省派遣調査委員來着便宜供与方依頼（明治32. 10. 18）
付1：福建総督派遣員官姓名 同派遣留学生姓名
付2：四川総督派遣文武官員姓名職位
- ・青木外相・高平外務次官より四川・福建両省総督派遣文武官員の視察申し出に関する下記宛回答依頼及び同通知（明治32. 10. 18-11. 13）
佐野赤十字社々長・鳩山東京専門学校々長・樺山文相・千家東京府知事・田中宮内相・芳川遜相・西郷内相・桂陸相・参謀本部福島大佐等宛
付：参観予定表（明治32. 10. 18-11. 15）
- ・奎俊四川省総督より同省派遣文武官員への優待に関する礼状転送方依頼
堺重慶領事事務代理より加藤外務大臣官房庶務課長宛依頼（明治33. 3. 31）
山縣総理大臣・桂陸軍大臣・大山参謀総長・西郷内務大臣・樺山文部大臣等宛
（青木外務大臣より回送、明治33. 5. 3）

7. 第一二 朱滋澤・黄邦俊等

「湖北道台朱滋澤一行学校参観ノ件」*小村外相より菊池文相宛（明治34. 11. 22）

- ・山座政務局長より細川華族女学校長宛依頼「湖北朱道台学校参観の件」（明治34. 11. 22）
- ・菊池文相より小村外相宛回答（明治34. 11. 22）

8. 第一三 李宗棠等

「李宗棠外一名学校参観ノ件」小村外相より細川華族女学校長宛（明治34. 12. 4）

- ・小村外相より菊池文相宛依頼「李宗棠外一名諸学校参観の件」（明治34. 11. 4）
付：学校参観日割

- ・細川華族女学校長より小村外相宛回答（明治34. 11. 7）
- ・小村外相より山本海相宛依頼及び同回答「清国官吏一行横須賀軍港観覧之許可に関する照会」（明治35. 2. 13/2. 17）
- ・同上の件に関し斉藤海軍総務長官より便宜供与に関する回答（観覧日割）（明治35. 2. 19）
- ・学校参観に関し山座政務局長より湯川東京郵便電信学校長あて依頼（明治35. 2. 24）
- ・横須賀造船廠及び海軍諸学校観覧の件に関する海軍省副官より外務書記官宛要望（明治35. 3. 4）

9. 第一四 羅振玉・陳毅・陳問咸等

「張総督派遣ノ羅振玉等一行派遣ニ関スル件」*蔡鈞駐日公使より小村外相宛便宜供与方依頼（明治35. 1. 10）

- ・珍田外務総務長官より千家東京府知事宛依頼及び回答「張総督派遣の羅振玉外六名東京府師範学校参観の件」（明治35. 1. 21/1. 23） 付：学校巡覧日割
- ・小村外相より菊池文相宛依頼及び回答「張総督派遣ノ羅振玉外六名学校参観日割ノ件」（明治35. 1. 21/11. 22）
- ・珍田外務総務長官より千家東京府知事宛便宜供与方依頼「農務学堂総弁羅振玉外二三名農科大學参観ノ件」（明治35. 2. 3）

10. 第一五 劉洪烈

「劉監院一行諸学校参観ノ件」小村外相より菊池文相宛便宜供与方依頼（明治35. 3. 4） 付：諸学校参観日割

- ・同上の件に関し山座政務局長より細川華族女学校長宛依頼（明治35. 3. 5）
- ・同上の件に関し山座政務局長より近衛学習院長宛依頼（明治35. 3. 5）
- ・同上の件に関し山座政務局長より成瀬女子大学校長宛依頼及び同回答（明治35. 3. 6/3. 6）
- ・同上の件に関し菊池文相より小村外相宛回答（明治35. 3. 6）
- ・同上の件に関し珍田総務長官より周布神奈川県知事宛依頼（明治35. 3. 14）

11. 第一六 黄以霖

「清国人黄以霖東京府師範学校参観ノ件」小村外相より千家東京府知事宛便宜供与方依頼（明治35. 3. 31）

- ・小村外相より菊池文相宛依頼「清国人黄以霖第一高等学校参観ノ件」（明治35.

3. 31)

1 2. 第一七 沈維驄・劉璠等

「清国人学校参観ノ件」*小村外相より在本邦清国公使宛（明治35. 5. 15）

付：学校参観予定表

- ・寺内陸相より小村外相宛清国人学校参観の件回答（明治35. 5. 15）
- ・小村外相より寺内陸相宛砲兵工廠参観希望の件便宜供与方依頼（明治35. 5. 31）

1 3. 第一八 俞明震

「江南陸師学堂総弁俞明震華族女学校参観ノ件」珍田外務総務長官より細川華族女学校長宛（明治35. 4. 23）

- ・小村外相より菊池文相宛帝国大学参観につき便宜供与方依頼（明治35. 4. 23）
- ・珍田外務総務長官より嘉納高等師範学校長宛便宜供与方依頼（明治35. 4. 23）
- ・同上の件に関し細川華族女学校長・嘉納高等師範学校長より珍田外務総務長官宛回答（明治35. 4. 24/4. 28）

1 4. 第一九 吳汝綸・榮勳・紹英

「本邦学制視察ノ為メ五品郷銜吳汝綸外数名本邦渡航ノ件」内田駐華公使より小村外相宛公信（明治35. 5. 31）

付：吳汝綸訪日に関する総理外務部事務慶親王より内田公使宛照会方照会（光緒28. 4. 23）

- ・吳汝綸来日に関し小村外相より寺内陸相・曾祢蔵相宛便宜供与方依頼および同回答（明治35. 6. 9/6. 11）
- ・同上の件に関し内田在華公使より小村外相宛英文電文（1902. 6. 12）
- ・同上の件に関し小村外相より兵庫県知事宛便宜供与方依頼（明治35. 6. 13）
- ・清国北京大学堂総教習吳汝綸来朝に関する珍田外務総務長官より神戸税関長宛便宜供与依頼（明治. 35. 6. 14）
- ・吳汝綸到着時刻に関する兵庫県知事より小村外相宛電報（明治35. 6. 22）
- ・吳汝綸到着後の動静に関する兵庫県知事より小村外相宛申報（明治35. 6. 23）
- ・吳汝綸来日に関する蔡鈞清国公使より小村外相宛依頼公文及び同回答「学務視察員吳京卿一行に関する件」（明治35. 7. 1/7. 2）
- ・吳汝綸一行の陸軍学校・印刷局工場・日本銀行参観に関する小村外相・珍田外務総務長官より寺内陸相・印刷局長・山本日銀総裁宛許可依頼及び同回答（明治35. 7. 18/7. 21/8. 25）

- ・吳汝綸隨行員榮勳等中途帰国に関する内田公使より小村外相宛報告（明治35.9.8）

15. 第二〇 毓朗・陸宗輿

- 「鎮国將軍毓朗學校參觀ノ件」小村外相より寺内陸相宛依頼（明治35.7.28）
- ・工巡局督弁毓朗及び大學堂提調榮勳・紹英の帰国に関する内田公使より小村外相宛報告（明治.35.9.8）
- ・鎮国將軍毓朗北京帰着に関する小村外相より内務大臣宛報告と謝辞（明治.35.9.18）

16. 第二五 李鳳年等

- 「山東巡撫周馥ヨリ本邦へ視察員派遣ニ関スル件」内田駐華公使より小村外相宛公信（明治35.9.15）
- ・慶親王より山東巡撫派遣日本視察員李鳳年等に対する内田公使宛協力依頼（光緒28.8.10）
- ・小村外相より平田農商務相宛便宜供与方依頼「農工商鉞等ノ学科視察員ニ関スル件」（明治.35.10.6）
- ・小田切上海総領事より小村外相宛申進「農工商業視察員に関する件」（明35.11.5）
- ・山東巡撫派遣日本視察員李鳳年等に対する駐日公使蔡鈞より小村外相宛協力依頼及び同回答（明治35.11.20）

17. 第二七 黄忠浩等

- 「清国武官陸軍各學校工廠參觀希望ノ件」小村外相より寺内陸相宛（明治35.11.20）
- ・湖北派来武官の陸軍武備各學堂工廠等視察についての駐日公使蔡鈞より小村外相あて依頼及び同回答（明治.35.11.19/11.20）
- ・湖北官吏来日陸軍演習及び諸學校視察について小村外務大臣より寺内陸相宛依頼及び同回答（明治35.11.20/11.27）

18. 第二八 方燕年

- 「山東巡撫周馥ヨリ派遣ノ山東大學總弁方燕年一行ノ陸軍各學校參觀ニ関スル件」*
珍田外務総務長官より石本陸軍総務長官宛（明治36.11.8）
- ・石本陸軍総務長官より珍田外務総務長官宛回答（明治36.11.13）

19. 第二九 花翎・李光襄・建捷・黎錦彝・繆荃孫・周維藩等

- 「廣東武備學堂特派員ニ関スル件」小村外相より蔡鈞駐日公使宛（明治36.1.14）
- ・花翎等の来日に関し蔡鈞公使より小村外相宛依頼（明治36.1.12）

- ・清国視察員に対する小村外相より菊池文相・寺田陸相・曾祢蔵相・清浦司法相・平田農相・山本海相宛便宜供与方依頼及び同回答（明治36. 1. 28/2. 6）
- ・同上の件に関する珍田外務総務長官より田村参謀本部次長・千家東京府知事宛便宜供与方依頼（明治36. 2. 2）
- ・清国視察員に対する珍田外務総務長官より岡田文部総務長官・陸軍総務長官宛便宜供与方依頼及び同回答（明治36. 2. 10/2. 13/2. 16）
- ・小田切上海総領事より小村外相宛申進「張総督より学校視察員派遣の件」（明治36. 2. 13）
付：学校視察員人名（江南高等師範学校派遣・総教習繆荃孫以下二十余名）
- ・張南洋大臣の繆荃孫以下江南高等師範学堂視察員の派遣に関し蔡鈞公使より小村外相宛依頼（明治36. 2. 13）
- ・同上の件に関し小村外相より陸相・海相宛便宜供与方依頼及び同回答（明治36. 2. 27/2. 28）
- ・同上の件に関し珍田外務総務長官より警視總監・印刷局長・電話交換局長宛便宜供与方依頼（明治36. 2. 28）
- ・雲南総督派遣官吏一行来日に関し蔡鈞公使の小村外相宛照会及び同回答（明治36. 3. 2） 付：訪問先学校一覧および学校視察員人名
- ・同上の件に関し小村外相の寺内陸相宛便宜供与方依頼（明治36. 3. 2）
- ・張南洋大臣の繆荃孫以下学校視察員の派遣に関し菊池文相より小村外相宛回答（明治36. 3. 4）
- ・同上の件に関し珍田外務総務長官より千家東京府知事宛便宜供与方依頼（明治36. 3. 7）
- ・同上の件に関し岡田文部総務長官より珍田外務総務長官宛回答（明治36. 3. 14/3. 24）
- ・同上の件に関し珍田外務総務長官より安広農商務総務長官・浅田通信総務長官宛便宜供与方依頼及び同回答（明治36. 3. 16/3. 17）

20. 第三〇 孫挙璜等

- 「張之洞ヨリ江南高等学堂委員一行派遣ニ関スル件」小村外相より菊池文相・寺内陸相宛（明治36. 4. 2）
- ・江南高等学堂委員孫挙璜及び分教習人員の赴日教育考察に関し蔡鈞公使より小村外相宛依頼及び同回答（明治36. 3. 26/4. 1） 付：教育考察人員姓名・職位
- ・同上の件に関し菊池文相より小村外相宛回答（明治36. 4. 9）

21. 第三一 王仁俊

「兩湖ヨリ学制視察員派遣ノ件」小村外相より菊池文相・寺内陸相、珍田長官より田村參謀次長宛（明治36. 4. 29）

- ・兩湖より学事視察員の派遣に関し蔡鈞公使より小村外相宛依頼（明治36. 4. 27）

2 2. 第三二 喜源・象普・聶嗣中等

「湖北視察員派来ノ件」小村外相より陸相・文相・内相宛（明治36. 5. 7）

- ・蔡鈞公使より小村外相宛喜源等の赴日遊歴に関し便宜供与方依頼及び同回答（明治36. 5. 4/5. 19） 附：視察人員名簿・職位
- ・同上の件に関し寺内陸相・菊池文相・内海内相より小村外相宛回答（明治36. 5. 11/5. 15）
- ・湖北省派遣喜源等架橋野外教練等參觀につき蔡鈞公使より小村外相宛依頼（明治36. 5. 31）

2 3. 第三四 劉煥堂・左念康・左念詒

「湖北省ヨリ派遣員ニ於テ架橋演習其他參觀希望ノ件」小村外相より寺内陸相宛（明治36. 5. 22）

- ・小村外相より寺内陸相宛便宜供与方依頼及び同回答「博覽会視察員左念康等陸軍学校參觀ノ件」（明治36. 6. 12/6. 18）
- ・同上左念詒陸軍諸学校及び砲兵工廠參觀につき長岡東亜同文会副会長より珍田外務總務長官宛照会方依頼（明治36. 6. 10）

2 4. 第三五 張毓琦

「周山東巡撫派遣ノ進士張毓琦日本遊歴ノ件」*蔡鈞駐日公使より小村外相宛照会（明治36. 7. 7）

- ・張毓琦氏の学事視察につき珍田外務總務長官より岡田文部總務長官宛便宜供与方依頼（明治36. 7. 10）
- ・同上の件に関し珍田外務總務長官より石本陸軍長官宛便宜供与方依頼（明治36. 7. 9）

2 5. 第三六 張森楷等

「雲南巡撫ヨリ遊歴官並ニ学生派遣ノ件」小田在上海總領事より小村外相宛（明治36. 7. 31） 附：派遣学生名簿

2 6. 第三七 李慶恩

「清人李慶恩並ニ雲南省ヨリ視察員及学生派遣ノ件」山座外務政務長官より嘉納弘
文学院長宛（明治36. 8. 19）

27. 第四〇 王景禧

「清国直隸省ヨリ留学生派遣及ヒ学校司督弁王景禧学校視察ノ件」小村外相より久
保田文相宛（明治36. 11. 4）

- ・袁世凱直隸總督の編修王景禧の日本派遣に関し楊枢公使より小村外相照会（光緒29.
9. 14）
- ・王景禧の砲兵工廠參觀につき珍田外務總務長官より石本陸軍長官宛許可依頼（明治
36. 11. 26）
- ・同上印刷工場參觀の件につき印刷局長より珍田外務總務長官宛回答（明治36. 11. 27）

28. 第四一 田明德・傅俊招等

「清国四川武備学堂總弁羅崇齡一行陸軍各処參觀ノ件」珍田外務總務長官より石本
陸軍長官宛（明治36. 11. 24）

- ・四川總督派遣田明德等陸軍諸学校視察につき楊枢公使より小村外相宛照会（光緒29.
10. 3）

29. 第四二 楊澧

「袁直隸總督本邦教育制度調査ノタメ候補道台楊澧派遣ノ件」*珍田外務總務長官
より千家東京府知事宛（明治36. 11. 26）

- ・楊澧来日について伊集院天津總領事より小村外相宛申進（明治36. 11. 29）
- ・同上の件につき楊枢公使より小村外相宛照会（光緒29. 10. 12）

29. 第四三 朱恩榮等

「朱恩榮外六氏本邦へ渡航ノ件」内田駐華公使より小村外相宛（明治37. 2. 2）

- ・保定師範学堂副教習朱恩榮外六氏本邦渡航に関し小村外相より久保田文相へ便宜供
与方依頼及び同回答（明治37. 2. 8/2. 18）

30. 第四四 王文華

「清国人王文華学校參觀ノ件」小村外相より久保田文相・寺内陸相宛（明治37. 3. 19）

- ・湖南師範学堂教習王文華の学校參觀に付き寺内陸相・久保田文相より小村外相宛回
答（明治37. 3. 19/3. 22）
- ・上記の件に関し小村外相より楊枢公使宛回答（明治37. 3. 23）

<第2巻>

1. 第一 楊承曾・李金戡

「清国人楊承曾、李金戡学校參觀ノ件」小村外相より久保田文相・寺内陸相宛（明治37.4.2）

- ・楊承曾等来日につき楊枢在本邦清国公使より小村外相宛照会（光緒30.2.15）
- ・同上の件に関し寺内陸相・久保田文相より小村外相宛回答（明治37.4.5/4.8）
- ・同上の件に関し小村外相より楊公使宛回答（明治37.4.6/4.11）

2. 第二 高凌霨・徐毓華・鄧繼恩

「清国人高凌霨徐毓華鄧繼恩及李克佐学校視察ノ件」小村外相より久保田文相宛（明治37.4.6）

- ・高凌霨等の学務視察につき楊枢公使より小村外相宛照会（光緒30.2.17）
- ・高凌霨等の財政視察につき小村外相より曾祚蔵相あて便宜供与方依頼及び同回答（明治37.4.6/4.11）
- ・高凌霨等の学務視察につき久保田文相より回答（明治37.4.12）
- ・高凌霨等の財政視察学務視察等につき小村外相より楊枢公使宛回答（明治37.4.15）

3. 第三 黄受謙・董振鱗

「清国人黄受謙並ニ董振鱗本邦商工業調査ニ関スル件」小村外相より清浦農商務相宛（明治37.4.9）

- ・黄受謙等の実業学校職工徒弟学校制度に関する視察につき楊枢公使より小村外相宛照会及び同回答（光緒30.2.21/明治37.4.9）
- ・小村外相より寺田陸相宛便宜供与方依頼及び同回答「清国人董振鱗本邦陸軍学校視察の件」（明治37.4.9/4.12）
- ・小村外相より久保田文相宛便宜供与方依頼「清国人黄受謙並に董振鱗本邦教育視察の件」（明治37.4.9）
- ・同上の件に関し小村外相より楊枢公使宛回答（明治37.4.12）

4. 第五 車紹武・石世英・蘇鍾貞

「清国人学校視察ノ件」小村外相より久保田文相宛（明治34.4.18）

- ・湖北襄陽府中学堂教習車紹武等の学校視察につき楊枢公使より小村外相宛照会（光緒30.3.1）

5. 第六 柏銳・華学涑

「清国商務部職員章京柏銳主事華学涑来朝ノ件」 小村外相より久保田文相・清浦農商務相宛（明治37. 4. 20）

- ・ 商部職員柏銳等の学務・実業関係視察につき楊枢公使より小村外相宛照会（光緒30. 3. 3）
- ・ 同上の件に関し木場文部次官より珍田外務次官あて回答（明治37. 4. 27）
- ・ 同上の件に関し小村外相より楊公使宛回答（明治37. 4. 6/4. 28）
- ・ 同上の件に関し内田在華公使より珍田外務次官宛便宜供与方依頼（明治37. 3. 22）
付：特別購入品目

6. 第七 視察手続

「清国学事視察員ノ件」 小村外相より久保田文相宛（明治37. 4. 6/4. 28）

- ・ 清国学事視察員の直轄学校参観手続に関し久保田文相より小村外相宛回答（明治37. 4. 20）
- ・ 小村外相より楊公使宛「清国学事視察員各学校参観上ニ関スル件」（明治37. 4. 28）
- ・ 「清国視察員ニ関シ清国公使ト打合案」（明治39. 10. 18. 清国公使館にて協議、岩村）

7. 第八 嚴修

「直隸学校司督弁嚴修教育状況視察ノ為メ本邦へ渡航ノ件」 内田駐華公使より小村外相あて（明治37. 5. 18）

- ・ 小村外相より久保田文相あて「清国直隸学校司督弁嚴修来朝ノ件」（明治37. 5. 31）

8. 第九 陳曾寿・李慶恩等

「雲南省提挙李慶恩軍事及教育状況視察ノ為メ本邦へ渡航ノ件」 内田駐華公使より小村外相宛（明治37. 4. 28）

- ・ 湖広総督湖北巡撫咨送刑部主事陳曾寿等十八員雲南巡撫咨送李慶恩等日本視察につき楊駐日公使より小村外相宛照会（光緒30. 5. 12）

付：咨送遊歴官姓名および参観希望先

- ・ 同上の件につき小村外相より久保田文相宛便宜供与方依頼（明治37. 6. 29）
- ・ 同上の件につき石本陸軍次官より珍田外務次官宛回答（明治37. 7. 15）
- ・ 翰林院編修林開營日本遊歴につき内田公使より小村外相あて便宜供与依頼（明治37. 7. 4） 付：慶親王等紹介状（光緒30. 5. 15）
- ・ 李慶恩等の視察につき千家東京府知事より珍田外務次官宛回答（明治37. 7. 20）
- ・ 広東省知県呂道象等行政司法機関各学校視察につき楊駐日公使より小村外相宛照会

(光緒30. 6. 11)

- ・湖広総督電派遊歴官鄧沅等四員武備等事考察につき楊公使より小村外相宛便宜供与方依頼 (光緒30. 7. 12)
- ・湖広総督電派胡玉縉・羅慶昌等政治学務兵備警察工廠農商分門考察につき楊公使より小村外相宛照会 (光緒30. 7. 12)
- ・珍田外務次官より石本陸軍次官宛便宜供与依頼「清国人候補知府鄧沅軍事視察ノ件」及び同回答 (明治37. 8. 22/8. 23)
- ・湖南巡撫咨送主事易順予等学務視察に関し楊公使より小村外相宛照会 (光緒30. 7. 21) 付：参観希望各学校名
- ・同上の件につき珍田外務次官より木場文部次官宛便宜供与方依頼 (明治37. 8. 31)
- ・江西巡撫咨送遊歴官黄大燠等の農工商務関係施設考察につき楊公使より小村外相宛照会 (光緒30. 7. 21)
- ・同上の件につき珍田外務次官より千家東京府知事・大森京都府知事等宛便宜供与方依頼 (明治37. 9. 5/9. 10)
- ・直隸総督咨派翰林院侍読孟慶榮等農工商及び学務考察につき楊公使より小村外相宛照会 (光緒30. 8. 17) 付：参観希望学校・施設名
- ・湖南巡撫咨送主事易順予・夏紹範等の学務視察につき外務省政務局より各学校・施設宛便宜供与方依頼 (明治37. 9. 29) 付：視察日程表
- ・浙江温処道申送拔貢生劉紹寛等各処学校視察につき楊公使より小村外相宛照会 (光緒30. 7. 21)
- ・直隸総督咨派翰林院侍読孟慶榮等教育視察につき珍田外務次官より千家東京府知事宛便宜供与方依頼 (明治37. 10. 3) 付：外務省政務局より関係各学校宛便宜供与方依頼および訪問日程
- ・同上の件につき小村外相より久保田文相宛便宜供与方依頼及び同回答 (明治37. 10. 10 /10. 12)
- ・江蘇巡撫派遣知府江瀚の行政司法諸制度視察につき小村外相より芳川内相あて便宜供与方依頼 (明治37. 10. 7)
- ・安徽候補道劉樹屏の商業及び各学校の視察につき小田切上海総領事より杉村外務省通商局長宛依頼 (明治37. 9. 12)
- ・同上の件につき珍田外務次官より和田農商務次官宛便宜供与方依頼 (明治37. 10. 26)
- ・同上の件につき石本陸軍次官より珍田外務次官宛回答 (明治37. 10. 26)
- ・林開馨・黄大燠等諸事視察につき小村外相より寺内陸相宛便宜供与方依頼 (明治37. 10. 24)

9. 第一〇 何永紹

「清国人何永紹視察ノ件」 珍田外務次官より各省次官・府県知事・各所長局長宛
(明治37.7.8) 付：訪問先及び視察事項

10. 第一五 熊希齡

「翰林院編修熊希齡・四川総督派遣候補道章世恩等ノ教育・実業制度視察ノ件」*
楊枢駐日公使より小村外相宛依頼 (光緒30.9.24)

- ・ 珍田外務次官より石本陸軍次官宛便宜供与依頼方及び同回答「清国翰林院編修熊希齡外一名並ニ候補道章世恩外一名陸軍学校參觀ノ件」(明治37.11.1/11.7)
- ・ 同上の件につき外務省政務局より関係機関宛便宜供与方依頼 (明治37.11.1)

11. 第一九 朱家宝等

「北洋留学生派遣ニ関スル件」伊集院天津領事より小村外相宛 (明治37.10.17)

- ・ 伊集院天津領事より杉村外務省通商局長宛「警務学堂総弁ヨリノ依頼ニ係ル学生監督依頼ニ関スル件」(明治37.10.17)
- ・ 保定府知府朱家宝・候補知県玉緑等の学校・行政機関等視察につき楊公使より小村外相宛依頼 (光緒30.10.6)
- ・ 同上の件につき珍田外務次官より千家東京府知事・尾崎東京市長・安立警視總監・大森京都府知事宛便宜供与方依頼 (明治37.11.19/11.21)

12. 第二〇 徐乃昌・謝榮敬・孫光庭・陳位準等

「清国人候補道徐乃昌外六名陸軍学校參觀ノ件」珍田外務次官より石本陸軍次官宛
(明治37.12.21)

- ・ 北京練兵処委員謝榮敬等清国官吏の陸軍各学校視察に関し石本陸軍次官より珍田外務次官宛回答 (明治37.12.22)
- ・ 雲南省派遣官員の東京府内諸学校參觀につき、外務省政務局より各学校宛依頼 (明治37.12.19)

13. 第二一 曹九疇・李鳳高等

「江西巡撫咨送劉歴員紳曹九疇等ノ学務農工商業考察ノ件」*楊枢駐日公使より小村外相宛 (光緒31.1.9)

- ・ 江西巡撫派遣遊歴官員曹九疇等の本邦学事視察につき外務省政務局より各学校宛便宜供与方依頼 (明治38.2.25)

- ・同上の件につき珍田外務次官より石本陸軍次官宛便宜供与方依頼及び同回答（明治38.3.18/3.21）

1 4. 第二五 慶春・徐陪光等

- 「湖北実欠地方官派遣視察ノ件」永瀬漢口領事より小村外相宛（明治38.5.10）
- ・湖南巡撫咨送永順県知県趙從嘉等行政司法及び学務機関考察につき楊枢公使より小村外相宛照会（光緒31.5.19）
 - ・直隸・湖広総督咨派実欠知県李盛鑾・徐培光等地方行政視察につき楊枢公使より桂首相兼外相宛依頼（光緒31.6.15）
 - ・湖南巡撫派遣官員趙從嘉等の視察につき外務省政務局より司法省監獄局宛便宜供与方依頼（明治38.7.20）
 - ・京師大学堂総監督咨送知県林傳甲・北洋大臣咨送知県鄭元濬等の地方行政及び学務視察につき楊公使より桂首相兼外相宛依頼（光緒31.7.28）
 - ・袁直隸総督の「地方官ヲシテ日本ニ遊歴セシムル件」につき内田内田公使より桂首相兼外相宛通知（明治38.7.28）
- 付：袁直隸総督の官員日本遊歴に関する指示（原文）
- ・直隸官吏遊歴に付き珍田外務次官より千葉・埼玉県知事宛紹介の件（明治38.8.16）
 - ・上掲李盛鑾等の地方行政視察につき大浦通相より桂外相宛回答（明治38.8.29）

1 5. 第二七 劉鶴慶・況仕任・朱紘等

- 「両広総督咨派広東将弁学堂稽核劉鶴慶等赴日考察ノ件」*楊公使より小村外相宛（光緒31.5.4）
- ・両広総督咨派学務委員況仕任等四員の各種学務視察につき楊公使より小村外相宛照会（光緒31.5.7）
 - ・劉鶴慶等の陸軍所属各学校視察につき珍田外務次官より石本陸軍次官宛便宜供与方依頼及び同回答（明治38.6.9/6.11） 付：參觀日程
 - ・黄世珍等の財政行政及び学務視察につき楊公使より小村外相宛依頼及び同件につき珍田次官より石本次官宛回答（光緒31.5.11/明治38.6.13）
 - ・朱雄等の学事視察につき外務省政務局よりの通知（明治38.6.19）
 - ・黄世珍の本邦実業状況視察につき外務省政務局より司法省監獄局宛協力依頼及び同回答（明治38.7.15）

1 6. 第二八 林伯桐・王銘新等

- 「広西遊歴官林伯桐等・四川遊歴官王銘新等の赴日学務視察の件」*楊枢公使より

小村外相宛（光緒31.5.27） 付：見学予定先

- ・林伯桐等の視察につき外務省政務局の関係機関宛便宜供与方依頼（明治38.7.5）

17. 第三一 陳栄昌・錢鴻逵等

「雲南巡撫咨送遊歴官陳栄昌・進士錢鴻逵等ノ文武各学校及び工商業警察等視察ノ件」*楊公使より桂首相兼外相宛（光緒31.7.4） 付：見学予定先

- ・陳栄昌等の視察につき外務省政務局より関係機関あて便宜供与方依頼および同件に対する司法省監獄局より回答（明治38.8.22/8.22）

18. 第三二 田鴻文・段猷増・張樸等

「北洋大臣咨送日実任知県田鴻文等ノ行政機関学校制度等考察ノ件」*楊公使より桂首相兼外相宛（光緒31.7.5）

- ・田鴻文等の行政及び学校制度視察につき付珍田次官より東京知事宛便宜供与方依頼及び同回答（明治38.8.8/8.10）
- ・同上の件につき桂外相より安立警視総監宛便宜供与方依頼「清国直隸総督派遣現任知県警察事項視察ノ件」（明治38.9.5）
- ・同上の件につき珍田次官より京都府・大阪府・兵庫県知事宛便宜供与方依頼「清国直隸官吏視察ノ件」（明治38.9.23）
- ・同上の件につき外務省政務局よりの関係機関宛便宜供与方依頼（明治38.9.12）
付：同訪問先

19. 第三四 載澤・徐世昌・紹英

「載澤等各国考察政治大臣来日ノ件」*楊公使より桂首相兼外相宛（光緒31.8.22）
付：同訳文

- ・載澤等来日につき楊公使より小村外相宛照会（光緒31.9.29） 附：同訳文
- ・出洋大臣参贊官錢恂等、随員唐宝鏐等の日本考察につき楊公使より加藤外相あて照会（光緒32.1.23）
- ・同上の件につき加藤外相より各大臣・内閣書記官長・衆参院書記官長・警視総監等宛便宜供与方依頼（明治39.2.20）

付：考察政治大臣参贊官・同随員名一覧

20. 第三七 黎澍・李士偉等

「清国留学生諸制度視察ノ件」桂外相より司法相・内相宛（明治38.9.26）

付：見学先

2 1. 第四一 楊宜瀚・姚文蔚等

「陝西巡撫咨送調査学務委員日本訪問ノ件」*楊公使より桂首相兼外相宛（光緒31. 10. 11）

- ・陝西巡撫派遣楊宜瀚等の学務視察につき外務省政務局より関係機関宛便宜供与方依頼（明治38. 11） 付：見学予定先

2 2. 第四三 吳嘉鴻・陳鴻年等

「貴州巡撫咨派知県吳嘉鴻等ノ学務工芸警察各政務考察ノ件」*楊公使より桂首相兼外相宛（光緒31. 10. 27） 付：訪問予定先

- ・吳嘉鴻等の学務等視察につき外務省政務局より各学校・機関宛便宜供与方依頼（明治39. 1. 8）
- ・同上の件につき外務政務局長より司法省監獄局長宛便宜供与方依頼（明治39. 2. 5）

<第3巻>

1. 第一 劉景熙・蘇鼎銘・楊寿植等

「清国人学校參觀ニ関スル件」加藤外相より楊清国公使宛（明治39. 1. 17）

- ・江西巡撫咨送武備学堂監督劉景熙・直隸総督咨送知県蘇鼎銘等の文武学堂・行政機関等視察につき楊公使より加藤外相宛照会（光緒31. 12. 16）
- ・上記の件につき東京府師範学校より外務省政務局宛參觀日通知（明治39. 1. 15）
- ・直隸総督咨派知州楊寿植等の各種学校・工廠・銀行・警察監獄等考察につき楊公使より加藤外相宛照会（光緒31. 12. 26）
- 3. 上記の件につき珍田外務次官より石本陸軍次官宛便宜供与方依頼及び同回答（明治39. 1. 29/2. 2）

2. 第四 王運嘉・李国棟等

「清国官吏視察ノ件」珍田外務次官より東京府知事宛（明治40. 4. 22）

- ・広西巡撫咨送候補道王運嘉の行政・教育・工芸等考察につき楊公使より加藤外相宛照会（光緒32. 1. 9）
- ・南洋大臣咨送湖北候補道李国棟等の政治・学務等考察につき楊公使より加藤外相宛照会（光緒32. 3. 6） 付：視察希望先一覧
- ・上記の件につき珍田外務次官より石原千葉県知事宛便宜供与方依頼（明治40. 5. 8）

3. 第六 戴裕忱・曾有翼等

「盛京將軍咨送學務處委員戴裕忱等學務考察ノ件」*楊樞公使より加藤外相宛（光緒32.1.28）

- ・盛京將軍咨送學務處委員の學務考察につき珍田外務次官より各學校宛便宜供与方依頼（明治439,2.26） 付：參觀希望學校名

4. 第七 何宝笙

「江蘇巡撫咨送知縣何宝笙學務視察ノ件」*楊公使より加藤外相宛（光緒32.2.5）

- ・江蘇巡撫派遣官員の本邦學事視察につき外務省政務局より各學校あて便宜供与方依頼（明治39.3）

5. 第九 李瑞卿・張永熙

「兩江總督咨送候補道李瑞卿兩江師範學堂委員張永熙學務考察ノ件」*楊公使より加藤外相宛（光緒32.3.13）

- ・外務省政務局より各學校宛便宜供与方依頼「兩江師範學堂總弁李瑞卿一行視察ノ件」（明治39.4.10） 付：視察希望學校名

6. 第一〇 花翎・繼源

「清國吉林省學務委員學校視察ノ件」*外務省政務局より各學校宛便（明治39.4.11）
付：視察希望學校名

- ・吉林省學務委員の參觀希望につき外務省政務局より各各機關宛便宜供与方依頼（明治39.4.11）
- ・同上の件につき倉知外務總務局長心得より長谷川造幣局長宛便宜供与方依頼（明治39.7.5）

7. 第一一 姚祖義・羅振芳

「奉天將軍咨送知縣姚祖義・羅振芳學務委員ノ赴日學務實業考察ノ件」*楊公使より牧野外相臨時代理宛（光緒32.3.21） 付：視察希望學校名

- ・奉天將軍咨送知縣姚祖義等の學務視察につき政務局より各學校宛便宜供与方依頼

8. 第一二 恩惠・祿坤

「直隸總督咨送恩惠等官員行政司法及學校等視察ノ件」*楊公使より牧野外相臨時代理宛（光緒32.3.28）

- ・外務省政務局より各學校宛便宜供与方依頼「清國直隸省地方官視察ノ件」（明治39.4.27） 付：視察希望學校名

9. 第一三 舒鴻儀・熊希齡・龍澤厚等

- 「清国両広総督派遣員視察ノ件」外務次官より関警視総監宛（明治39. 5. 11）
- ・各国政治考察大臣参贊官熊希齡等学務視察に付き楊公使より林外相宛照会（光緒32. 閏4. 29）
 - ・広西巡撫派遣官員龍澤厚等の学務視察につき外務省政務局より各学校宛便宜供与方依頼（明治39. 6. 21） 付：視察希望学校名
 - ・珍田外務次官より園田北海道庁長官宛便宜供与方依頼「清国人熊希齡北海道農事視察ノ件」（明治39. 6. 26）
 - ・奉天將軍特派熊希齡中央及び地方行政視察につき楊公使より林外相宛照会（光緒32. 10. 27） 付：視察希望省庁名
 - ・上記の件につき林外相より農商務相・内相・東京府知事宛便宜供与方依頼（明治39. 12. 15）

10. 第一六 提学使

- 「提学司本邦視察ニ関スル件」上海総領事永滝より西園寺外相宛公信（明治39. 5. 18）
- ・各省提学使の訪日学務視察につき楊公使より林外相宛照会（光緒32. 5. 28）
 - ・林外相より牧野文相宛「清国提学使来朝調査ノ件」（明治39. 7. 20）
 - ・提学使一行赴日出発に関し永滝総領事より林外相あて電文（明治39. 8. 3）
 - ・林権助在清特命全権公使より林外相宛公信「提学使ヲ本邦へ派遣ノ件」（明治39. 7. 26）
 - ・上記の件につき那桐・唐紹儀らより林外相宛依頼（光緒32. 6. 1）
 - ・林外相より牧野文相宛（至急）「清国提学使一二人来朝ノ件」（明治39. 8. 4）
 - ・林外相より牧野文相宛「清国提学使来朝ニ関スル件」（明治39. 8. 8）
 - ・提学使一二人および通訳官四名・随員八名の到着につき楊公使より林外相宛紹介（光緒32. 6. 19）
 - ・林外相より楊公使宛「清国提学使来朝ニ付講演ノ件回答」（明治39. 8. 10）
付：講義日程
 - ・林外相より牧野文相宛通知「清国提学使着京ノ件」（明治39. 8. 11）
 - ・福建提学使姚文倬・江西提学使汪詒書着京につき楊公使より林外相宛通知（光緒32. 6. 27）
 - ・林外相より牧野文相宛通知「清国提学使着京ノ件」（明治39. 8. 21）
 - ・林外相より牧野文相宛通知「清国学部参議林灝深等学務調査ノ件」（明治39. 8. 28）

- ・ 訳文（前掲・光緒32年5月28日付楊公使より林外相宛提学使赴日に関する照会）
- ・ 清国学部参議林灝深等の学務調査につき楊公使より林外相宛便宜供与方依頼（光緒32. 7. 6）
- ・ 山東提学使連甲学務調査後帰国来日の件につき楊公使より林外相宛通知（光緒32. 8. 3）
- ・ 下記の二件につき牧野文相より林外相に対し清国公使宛伝達方依頼：「清国留学生ニ関スル件」及び「日本教師招聘ニ関スル件」（明治39. 9. 26）
- ・ 林外相より林在清公使宛公信「清国提学使ニ対スル注意事項ノ件」（明治39. 9. 28）
- ・ 珍田外務次官より石本陸軍次官宛便宜供与方依頼及び同回答「福建布政使連甲陸軍学校工廠等参観ノ件」（明治39. 9. 28/10. 3）
- ・ 建布政使連甲の視察に関し珍田外務次官より大蔵次官・警視總監等宛便宜供与方依頼（明治39. 9. 29）
- ・ 安徽提学使沈曾植の赴日調査につき楊公使より林外相宛通知（光緒32. 8. 21）
- ・ 安徽陸軍視察員への便宜供与につき林外相より石本陸軍次官宛連絡（明治39. 10. 10）
- ・ 林外相より牧野文相宛通知「清国安徽提学使来朝ノ件」（明治39. 10. 10）
- ・ 珍田外務次官より日銀総裁等各機関長宛便宜供与方依頼「提学使参観ノ件」（明治39. 10. 22）
 - 付1：参観人名（湖北提学使黄紹箕以下14名、学部参議林灝深以下6名、通訳3名）
 - 付2：参観日程
- ・ 提学使一行の各機関参観に関する公使館参贊王克敏より岩村翻訳官宛事務連絡（明治39. 9. 16）
- ・ 珍田外務次官より石本陸軍次官宛便宜供与方依頼及び同回答「清国提学使陸軍学校参観ノ件」（明治39. 10. 22/10. 26） 付：参観日程
- ・ 提学使一行の参観につき松方日赤社長より珍田外務次官宛回答（明治39. 10. 24） 付：参観日程
- ・ 上記の件につき野口陸軍幼年学校長・陸軍士官学校長よりの回答（明治39. 10. 24）
- ・ 上記の件につき横浜正金銀行頭取代理よりの回答（明治39. 10. 24）
- ・ 清国戸部主事・学部参議の大浦省参観の件につき楊公使より林外相宛依頼（光緒32. 10. 5）
- ・ 上記の件につき珍田外務次官より大蔵次官宛便宜供与方依頼（明治39. 11. 22）

1 1. 第二三 呂植・王榮綬等

- 「直隸總督咨派知縣呂植・陝西巡撫咨派繆廷福等學務視察ノ件」*楊公使より林外相宛照會（光緒32. 6. 23）
- ・珍田外務次官より沢柳文部次官宛便宜供与方依頼「清國陝西學務視察員の件」（明治39. 8. 17）
 - ・珍田外務次官より京都府知事・大阪府知事宛便宜供与方依頼「清國人呂道象等視察の件」（明治39. 8. 23）

1 2. 第二六 戢翼翬・陳雲鵬等

- 「兩江總督咨派外務部主事戢翼翬、學部咨派委員陳雲鵬等ノ赴日政治學務視察ニ関スル件」*楊公使より西園寺外相宛照會（光緒32. 7. 19）
- ・外務次官より内務次官・陸軍次官・海軍次官・法制局長官宛依頼「清國外務部主事戢翼翬調査ノ件」（明治39. 9. 11）
 - ・上記の件につき河村監獄局長より山座外務省政務局長宛連絡（明治39. 9. 10）
 - ・上記の件につき加藤法制局長官より山座外務省政務局長宛連絡（明治39. 9. 22）

1 3. 第三三 吳良芬

「廣西巡撫咨送知縣吳良芬の地方行政及び学校視察ノ件」*楊公使より林外相宛照會（光緒32. 10. 16） 付：考察希望機關及び学校

1 4. 第三五 劉芬甯・傅鴻詔等

- 「直隸總督咨派知縣劉芬甯等赴日地方行政學務実業等考察ノ件」*楊公使より林外相宛照會（光緒32. 10. 21）
- ・珍田外務次官より内務次官宛便宜供与方依頼「清國人胡商彝地方制度調査ノ件」（明治40. 1. 9）
 - ・上記の件につき政務局より農商務省鉞山局便宜供与方依頼（明治40. 3. 15）

<第4卷>

1. 第五 劉重堪

「兩江總督咨派知縣劉重堪赴日學務警察裁判監獄四事考察ノ件」*楊公使より林外相宛照會（光緒32. 10. 28）

2. 第七 潘盛年

「外務部咨送貴州知府潘盛年赴日政治學務考察ノ件」*楊公使より林外相宛照會（光緒32. 12. 8） 付：考察希望個所

3. 第八 章亮元

「南洋大臣咨派候補道章亮元陸軍教育視察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒32. 12. 10） 付：考察希望個所

4. 第一二 雷振鏞・李祖謨

「陸軍部電派調査委員雷振鏞李祖謨陸軍諸学校視察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33. 1. 10）

・珍田外務次官より石本陸軍次官宛便宜供与方依頼「清国人雷振鏞陸軍參觀ノ件」（明治40. 3. 1）

5. 第一六 文愷

「吏部咨送甘肅慶應陽府知府文愷赴日政治学務考察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33. 1. 22）

6. 第二一 謝崇基・胡開雲

「雲貴總督咨送前雲南留学生監督謝崇基等赴日陸軍及ビ教育並ビニ地方行政視察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33. 2. 23）

・珍田外務次官より沢柳文部次官宛便宜供与方依頼「清国人謝崇基等学務視察ノ件」（明治40. 4. 11）

7. 第二二 王舟瑤・劉士驥・王祖詢等

「兩広總督広東補用道王舟瑤懷集県知県劉士驥等赴日学務政治考察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33. 2. 29）

8. 第二四 陳思泉・覃寿堃・周開忠等

「吏部咨送遇結欠先選用知県陳思泉等赴日学務政治考察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33. 3. 11）

・珍田外務次官より千家東京府知事宛便宜供与方依頼「清国人覃寿堃視察ノ件」（明治40. 5. 3）

9. 第二六 黄明新・怡欽

「吏部咨送試用知府黄明新北洋大臣咨送候補知県怡欽赴日警察学務等視察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33. 3. 25）

1 0. 第二九 柯劭忞

「学部咨送新簡署理貴州提学使司柯劭忞赴日学校制度及教育行政視察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33. 4. 10）

- ・林外相より牧野文相宛便宜供与方依頼「清国貴州提学使署理柯劭忞視察ノ件」（明治40. 5. 23）

1 1. 第三〇 楼藜然・黄維翰等

「浙江巡撫咨送在任候補道四川漢州知州楼藜然等赴日鉄道監獄学校制度考察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33. 4. 10）

1 2. 第三二 劉坦・祁世倬・李輔勳等

「農工商部咨送候補道劉坦兩江總督咨送知県祁世倬等赴日実業教育及行政等考察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33. 4. 10）

- ・珍田外務次官より石本陸軍次官宛便宜供与方依頼及び同回答「清国正参領李輔勳陸軍視察ノ件」（明治40. 6. 14・6. 19） 付：參觀日日割表

1 3. 第三四 王仁東・劉怡・李元俊等

「南洋大臣咨送候補王仁東道江蘇巡撫咨送知県劉怡等赴日教育実業及地方行政等視察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33. 5. 4）

1 4. 第三五 朱祥紱・徐守清

「江蘇巡撫咨送南淮官立小学校校長朱祥紱師範伝習所長徐守清赴日教育及農業商業視察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33. 5. 6）

1 5. 第三六 沈亮燾

「南洋大臣咨送江寧学務公所調査員候補県丞沈亮燾赴日各町村小学校教育考察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33. 5. 10）

1 6. 第三八 商廷修

「広州將軍咨送度支部主事商廷修赴日学務考察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33. 5. 22）

- ・広州將軍派遣視察員の參觀に関し外務省政務局より帝国大学・千束小学校宛便宜供与方依頼（明治40. 7. 11）

17. 第三九 毛声遠

「吏部咨送候選知県毛声遠度赴日教育工芸及び政治警察考察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33.6.1） 付：参観希望機関学校名一覽

18. 第四〇 丁祖訓

「浙江杭州蚕学館教員丁祖訓東京蚕業講習所参観ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33.6.2）

- ・上記の件につき高洲杭州領事より珍田外務次官宛公信（明治40.6.20）
- ・珍田外務次官より和田農商務次官宛便宜供与方依頼及び同回答「清国人丁祖訓蚕業講習所参観ノ件」（明治40.7.15/7.19）
- ・林外相より楊枢公使宛回答「清国人丁祖訓東京蚕業講習所参観ノ件」（明治40.7.26）

19. 第四二 李明哲・劉嘉琛等

「翰林院人員李明哲並ニ進士館畢業學員朱寿朋等六十七名来東遊歴ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33.6.10） 付：翰林院人員遊歴（十名） 進士館畢業學員遊歴（六十七名）

- ・同訳文
- ・「進士館畢業學員王大鈞等来東遊歴ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33.8.12）
- ・珍田政務次官より千葉県知事宛「清国人視察ノ件」（明治40.10.26）
- ・珍田政務次官より石本陸軍次官宛依頼及び回答「清国人士官学校参観ノ件」（明治40.11.27/11.29）
- ・李家駒公使より林外相宛依頼及び同回答「清国人士官学校参観ノ件」（光緒33.10.18/明治40.11.27）

20. 第四五 張祖廉

「学部咨送大学堂予備科監督兼教務提調張祖廉赴日大學制度考察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33.6.17）

21. 第四六 魏震・李廷玉

「吏部咨送新授湖南岳州府知府魏震東三省総督咨送候選同知李廷玉等赴日教育工芸警察等考察ノ件」*楊公使より林外相宛照会（光緒33.6.19）

・「魏震・李廷玉・李飛鵬視察ノ件」(上掲照会訳文)

2 2. 第四七 王東権・郭進修・程家駒等

「学部咨送内閣侍読王東権補用知県郭進修等赴日政治教育商業考察ノ件」*楊公使より林外相宛照会(光緒33. 6. 18)

・「王東権・郭進修・程家駒等視察ノ件」(上掲照会訳文)

2 3. 第五一 羅良経

「吏部咨送遇欠先選用知県羅良経来日教育警察監獄考察ノ件」*楊公使より林外相宛照会(光緒33. 6. 26)

2 4. 第六〇 嚴良勳・王元之・古濟勳

「閩浙総督咨送泉州府知府嚴良勳両江総督咨送泰興県知県等渡日学務商務裁判警察等考察ノ件」*楊公使より林外相宛照会(光緒33. 8. 17)

・女子師範学校より外務省政務局宛参観時日を便宜上設定する件通知(明治40. 10. 25)

2 5. 第六一 吳楓甲・馬吉樟等

「学部咨送翰林院侍読学士吳楓甲翰林院侍読馬吉樟等渡日遊歴参観ノ件」*楊公使より林外相宛照会(光緒33. 8. 17)

2 6. 第六五 劉崇傑・高逸

「使館通訳官兼学部諮議官劉崇傑・同高逸文部省事務視察ノ件」*李家駒公使より林外相宛依頼(光緒33. 10. 5)

・林外相より牧野文相宛依頼及び同回答「清国官吏文部省視察ノ件」(明治40. 11. 18/11. 25)

・上掲照会に対する林外相の李公使宛回答「清国官吏文部省視察ノ件」(明治40. 11. 27)

2 7. 第六六 盧鴻章

「清国遊歴官吏名報告ノ件」吉岡杭州領事事務代理より林外相宛公信(明治40. 11. 13)

2 8. 第六八 呂榮甲・許廷弼・肅啓宗・李英年等

「直隸省派来自治班学生呂榮甲等各県实地調査ノ件」*李公使より林外相宛照会
(光緒33. 11. 16) 付：参観各県及び各紳配分名单

- ・ 珍田外務次官より茨城・埼玉・栃木・千葉・静岡各県知事宛便宜供与方依頼「清国直隸省学生視察ノ件」(明治40. 12. 24)
- ・ 上記の件に関する林外相より李公使宛連絡「清国直隸省学生視察ノ件」(明治40. 12. 27)

<第5巻>

1. 第三 何家驥・喻長霖等

「河南巡撫派遣日本軍政考察委員何家驥の陸軍省所属連隊各項及び士官学校参観ノ件」*李公使より林外相宛照会 (光緒34. 1. 26)

- ・ 学部特派遊歴官翰林院編修喻長霖等教育・海陸軍各学校参観につき李公使より林外相宛照会 (光緒34. 2. 1)
- ・ 上記の件に関する公使館より外務省岩村宛事務連絡 (光緒34. 2. 3)
- ・ 珍田外務次官より石本陸軍次官宛便宜供与方依頼及び同回答「清国人何家驥・喻長霖等陸軍参観ノ件」(明治41. 3. 6/3. 11) 付：参観日程
- ・ 上記の李公使照会に対する林外相の回答「清国人何家驥・喻長霖等陸軍参観ノ件」(明治41. 3. 11)

2. 第四 高爾登

「陸軍咨派遊歴陸軍協参領高爾登陸軍各学校参観ノ件」*李公使より林外相宛照会
(光緒34. 1. 26)

- ・ 珍田外務次官より石本陸軍次官宛便宜供与方依頼及び同回答「清国軍人高爾登陸軍参観ノ件」(明治41. 3. 18/3. 24)
- ・ 上記の李公使照会に対する林外相の回答「清国軍人高爾登陸軍参観ノ件」(明治41. 3. 24)

3. 第五 黄岐春等

「陸軍軍馬医学堂畢業生馬政学学習ノ為日本派遣ノ件」*李公使より林外相宛照会
(光緒34. 2. 23)

- ・ 上記訳文「馬政視察及留学ニ関スル清国公使ノ照会」
- ・ 外相より陸相及び馬政長官宛便宜供与方依頼「申告ヨリ馬政調査員派遣ノ件」(明治41. 3. 31)

4. 第九 張瀛

- 「吉林省咨派補用道張瀛陸軍各學校參觀ノ件」*李公使より林外相宛照会（光緒34. 5. 30）
- ・石井外務次官より石本陸軍次官宛便宜供与方依頼及び同回答「清国補用道張瀛陸軍參觀ノ件」（明治41. 7. 1/7. 4）
 - ・上記の件につき林外相より李公使宛回答「清国補用道張瀛陸軍各學校參觀ノ件」（明治41. 7. 6）

5. 第一一 商衍瀛・何燭時

- 「学部奏派翰林院編修商衍瀛学部主事何燭時帝国大学制度及び一切建築考査ノ件」*胡惟徳公使より小村外相宛照会（光緒34. 9. 1）
- ・「清国学部派遣員東京帝国大学制度調査ニ関スル件」小村外相より牧野文相宛便宜供与方依頼及び同回答（明治41. 9. 30/10. 13）
 - ・上記の件につき林外相より李公使宛回答「清国学部派遣員東京帝国大学形成調査ニ関スル件」（明治41. 9. 29）

6. 第一二 鳳山・唐在礼等

- 「清国高級武官鳳山一行ノ陸軍諸學校參觀ニ関スル件」*胡惟徳公使より小村外相宛依頼（光緒34. 10. 16） 付：參觀希望學校・施設一覽
- ・小村外相より総理大臣及び宮内大臣宛「清国特派大演習陪觀員鳳山等印刷局學習院參觀方照会の件」（明治41. 11. 13）
 - ・小村外相より寺内陸相宛依頼及び同回答「清国特派大演習陪觀員鳳山等各學校連隊廠所參觀方照会の件」（明治41. 11. 13/11. 16）
 - ・小村外相より小松原文相宛依頼及び同回答「清国特派大演習陪觀員鳳山等各學校參觀方照会の件」（明治41. 11. 13/11. 17）
 - ・小村外相より胡公使宛「清国特派大演習陪觀員鳳山等各學校連隊廠所參觀方照会の件」（明治41. 11. 13）
 - ・上掲の件に関し柴田内閣書記官長より石井外務次官宛回答（明治41. 12. 16）
 - ・小村外相より胡公使宛「清国特派大演習陪觀員鳳山等各學校連隊廠所參觀に関する回答の件」（明治41. 11. 13）
 - ・上掲の件に関し田中宮内大臣より小村外相宛回答（明治41. 11. 18）
 - ・小村外相より胡公使宛「清国特派大演習陪觀員鳳山外二名學習院參觀方回答の件」（明治41. 11. 24）
 - ・小村外相より胡公使宛「清国特派大演習陪觀員振武學校其他の學校參觀方に関する

る件」(明治41. 12. 4)

- ・小村外相より胡公使宛「大演習陪観員莊蒞寛外四名陸軍所管学校連隊廠所参観の件」(明治41. 12. 7)

II. 『清国視察員来朝雑件 (第五回内国博覧会視察)』

博覧会参観ノ為メ清国官民本邦へ渡来ノ件 明治36年

1. 第一 沈兆祉

「北京大学堂ヨリ大阪博覧会観覧並教育ニ関スル取調印派遣ニ関スル件」松尾在清国臨時代理公使より小村外相宛 (明治36. 1. 22)

- ・小村外相より文相宛依頼及び同回答「北京大学堂ヨリ大阪博覧会へ派遣ノ件」(明治36. 2. 19/2. 25)

2. 第二 沈秉堃・汪声玲・胡峻・周鳳翔・劉紫驥・左念康・胡景桂等

「博覧会ニ際シテ四川総督ヨリ各種視察員派遣ノ件」徳丸在重慶副領事より小村外相宛 (明治36. 2. 19)

- ・同伴につき岑四川総督より徳丸領事宛依頼及び同回答 (光緒29. 1. 8/明治36. 2. 18)
- ・同伴につき岑四川総督より蔡鈞公使宛照会 (光緒29. 1. 21)
- ・同伴につき蔡鈞公使より小村外相宛照会及び同回答 (光緒29. 1. 21/明治36. 3. 25)
- ・小村外相より農商務相宛依頼「清国ヨリ博覧会視察員派遣ノ件」(明治33. 3. 24)
- ・小村外相より清国公使宛回答「博覧会ニ際シ四川ヨリ派遣ノ委員ニ関スル件」(明治36. 3. 25)
- ・徳丸在重慶副領事より小村外相宛「視察員出発ノ件」(明治36. 3. 5/3. 9)

付：学校視察員官職姓名 (胡峻以下6名)

- ・小村外相より文相宛依頼及び同回答「清国学校視察員出発ノ件」(明治36. 3. 31/4. 8)
- ・同伴につき珍田外務総務長官より博覧会事務局長宛便宜供与方依頼 (明治36. 3. 27)
- ・四川総督派遣東観会及び学務考察員につき蔡公使より小村外相宛照会 (光緒29. 1. 24)

付：各員名單 (汪声玲以下15名)

- ・蔡公使より小村外相宛照会「四川総督派遣主事周鳳翔等赴日視察ノ件」(光緒29. 4. 10)
- ・小村外相より文相・農商務相宛依頼「清国ヨリ視察員派遣ノ件」(明治36. 5. 7)

別記：派遣名簿

- ・江蘇省候補知県徐履泰など視察の件につき寺内陸相より小村外相宛回答 (明治36. 5. 7)
- ・四川省派遣人員等の博覧会視察につき蔡公使より小村外相宛照会 (光緒29. 3. 27)

付：各員名單

- ・内田駐華公使より小村外相宛「直隸学校司督弁外一名博覧会視察ノ為メ渡航ノ件」(明治36. 6. 10)
- ・清国人当校参観の件につ警察監獄学校長より珍田外務総務長官宛回答(明治36. 6. 19)
- ・珍田外務総務長官より石本陸軍次官宛便宜供与方依頼及び同回答「清国四川省派遣ノ胡峻外四名陸軍諸学校参観ノ件」(明治36. 6. 19/6. 20) 付：名簿

3. 第三 劉世珩・方挙・汪声玲・莊蔭華・徐履泰等

「清国人劉世珩一行学校視察ノ件」珍田外務政務長官より岡田文部次官宛便宜供与方依頼及び同回答(明治36. 6. 26/6. 27)

- ・珍田外務政務長官より安藤博覧会事務官長宛便宜供与方依頼「清国盛京省ヨリ博覧会へ委員派遣ノ件」(明治36. 5. 11)
- ・小村外相より菊池文相宛依頼及び同回答「清国視察員派遣ノ件」(明治36. 5. 14/5. 22) 付：名簿
- ・小村外相より平田農商務相宛依頼「清国視察員派遣ノ件」(明治36. 5. 14)
- ・小村外相より蔡公使宛回答「清国ヨリ視察員派遣ノ件」(明治36. 5. 14)
- ・小村外相より寺内陸相宛依頼及び同回答「清国ヨリ視察員派遣ノ件」(明治36. 5. 14/5. 16/5. 19)
- ・四川省派遣官員警察監獄学校視察の件につき内海内相より小村外相宛依頼(明治36. 5. 20)
- ・小村外相より蔡公使宛「四川省派遣員警察制度視察ノ件」(明治36. 5. 22)
- ・小村外相より寺内陸相宛依頼「清国派遣員陸軍諸学校参観希望ノ件」(明治36. 5. 25) 別記：名簿
- ・内閣中書沈兆祉等の学校考察につき蔡公使より小村外相宛照会(光緒29. 5. 5)
- ・小村外相より平田農商務相・菊池文相宛依頼「管学大臣並ニ広西巡撫ヨリ視察員派遣ノ件」(明治36. 6. 2)
- ・上記の件につき岡田文部次官より珍田外務総務長官宛回答(明治36. 6. 4)
- ・上記の件につき菊池文相より珍田外務総務長官宛回答(明治36. 6. 6) 付：名簿

4. 第四 胡景桂・丁惟魯・林炳章等

「袁北洋大臣端両湖大臣等派遣胡景桂丁惟魯林炳章等学事視察ノ件」*蔡公使より小村外相宛照会(光緒29. 6. 4)

- ・上記の件につき珍田外務総務長官より千家東京府知事・岡田文部次官宛便宜供与方依頼(明治36. 6. 29)
- ・上記の件につき小村外相より蔡公使宛「清国官吏各地参観ニ関スル回答」(明治36.

7.1)

- ・ 上記の件につき岡田文部次官より珍田外務総務長官宛回答（明治36. 7. 2）
- ・ 上記の件につき山座政務局長より田所文部大臣秘書官宛依頼（明治36. 7. 3）
- ・ 珍田外務総務長官より石本陸軍長官宛依頼「清国人林炳章一行各処参観ノ件」（明治36. 7. 10）
- ・ 清国人胡景桂・丁惟魯教育事業取調の為本邦渡来につき小村外相より菊池文相あて依頼（明治36. 7. 10）
- ・ 清国時敏学堂董事内閣中書鄧家讓の来東学務視察につき蔡公使より小村外相宛照会（光緒29. 6. 11）
- ・ 内田駐華公使より小村外相宛申進「直隸省学校司ヨリ本邦ヘノ派遣員二名ニ関スル件」（明治36. 6. 29）
- ・ 珍田外務総務長官より岡田文部次官宛「清国入学事視察ニ付便宜ヲ与ラレ度旨通知ノ件」（明治36. 7. 7）
- ・ 上記の件につき珍田外務総務長官より石本陸軍次官宛便宜供与方依頼（明治36. 7. 9）

—以上—

資料（２）明治期新聞紙上の呉汝綸—『東遊日報訳編』所収主要論説・記事—

周知のとおり、『東遊叢録』（1902年10月刊）は、多角的且つ包括的に捉えた明治日本の教育情報を中国教育界に伝えるべく、呉汝綸によって編纂された視察報告書であり、その後の各レベルにおける中国教育改革構想の立案に際して重大な影響を与えた。

同書の内容構成をみると、

- (1) 文部省における講義概要
- (2) 摘抄日記
- (3) 学校図表
- (4) 学科課程表
- (5) 書簡・筆談類

からなり、さらに統計資料や各種学校規則などが数多く収録されている。これをより詳細に分析すると、呉汝綸による教育情報の中国教育界への提供の仕方には一つの特色があることがわかる。日本側から提供された教育情報はこれを無媒介的且つ肯定的に中国側に伝えようとする姿勢がそれである。教育情報の収集対象には文部省をはじめとする各種官庁や教育機関のみならず、文部大臣菊池大麓、東京帝国大学総長山川健次郎、帝国教育会会長辻新次、東京高等師範学校長嘉納治五郎、東京女子高等師範学校長高嶺秀夫、華族女学校学監下田歌子など明治日本を代表する多くの教育家、さらには外務大臣小村寿太郎、貴族院議員伊沢修二など中国事情に精通する各界の名士が含まれており、呉汝綸と彼らとの会談や文通においては、当然のことながら、中国教育改革方策をめぐる議論が大いに戦わされたものと思われる。しかしながら、『東遊叢録』には議論や意見交換の過程がほとんど収録されておらず、議論や意見交換から得られた結果のみを日本側から提供された最も重要な教育情報として記録に留めようとする傾向が顕著である。「摘抄日記」を見ても視察対象機関や会見の概要が抄録されているに過ぎない。

こうした特色を有する『東遊叢録』に比べ、本稿で取り上げた『東遊日報訳編』は呉汝綸の日本教育視察の実態を解明する上で貴重な情報を提供している。

当時日本のマスメディアは中国儒学界の碩学・呉汝綸の日本訪問に歓迎の意を表明し、教育視察に対して出来る限りの援助を提供する意向を示していた。長崎港に上陸して以来、各地の新聞社や雑誌社は、呉汝綸に対する間接的援助の一環として、彼の公的な言論活動はもとより日常の一挙手一投足に至るまで、詳細な記録を取ってこれを報道し続けたのである。そこには、さきの『東遊叢録』には見られなかった呉汝綸と日本の識者との議論や意見交換の経過、及びその内容などが記録されており、これらの分析をとおして、日本の教育情報が呉汝綸によって、いつ、どのように収集されたのか、さらに彼の日本教育観がどのように形成されていったのか、その経緯を明らかにすることができる。

一方、呉汝綸に帯同して来日した中国ジャーナリストや知識人も、彼の言動と日本各地の新聞報道に強い関心を示し、各紙掲載の論説や関連記事を出来る限り収集した。彼

等がこれの収集に全力を費やしたのは、

- (1)日本各地の教育界の呉汝綸に対する歓待振りと、日本の識者に潜在する中国文化への尊崇感情から判断して、友好的な日中関係の樹立は可能であること、
- (2)日本教育視察をとおして、呉汝綸の世界観が大きく変化したこと、とくに中国文明と外国文明の本質的相違を捉えるに至ったこと、
- (3)その結果、呉汝綸が清末中国の教育改革の範を外国に取ること、特に明治日本のそれに範を取るべきであるとする意志を強固なものとしたこと、

などを中国の識者に伝えることが目的であった。彼らは『東遊叢録』の公刊を待って、これら論説や関連記事を翻訳・編集し、『東遊日報訳編』と命名して華北編訳局から刊行する予定を立てたのである。しかしながら、呉汝綸自身の中国教育改革構想が十分に立案されていないこと、清朝政府の教育改革構想も未だ不明確であること、清朝政府内においても呉汝綸の日本教育視察に対する評価が未だ定まっていないことなどを理由に呉汝綸の拒絶にあい、同書の編集・刊行作業は一時凍結された。これの上梓は呉汝綸病没後の1903年旧暦4月のことであった。呉汝綸に随行していた華北編訳局記者は同書の刊行に際し、その経緯と意義を次のように記している。

「壬寅(1902年)の夏、呉桐城先生は清朝政府の特命を受けて日本を訪問、学校制度を視察した。先生の日本訪問が伝えられると、日本のマスメディアは一斉にこれを報じ、大々的に歓迎の意を表明した。

先生の日本滞在期間は凡そ3ヶ月、この間の先生の起居・言動は余す所なく記録された。先生の訪問対象機関と会見人物は枚挙に暇はないが、マスメディアはこれらを追って奔走し、その有様を詳しく報道したのである。

今や先生の日本教育視察から数ヶ月が経った。この間、偶然にも友人の好意により日本の新聞・雑誌に掲載された論説や関連記事の彙集を入手することができた。それを機に、その彙集を翻訳・編集して冊子を刊行したいと思うに至った。それは、先生の日本における奮闘ぶりを国内の識者に知らせるべきだと思ったからである。

先生に課せられた中国教育改革構想の立案作業は未だ完成していない。しかしながら、日本教育視察により中国文明と外国文明の本質的相違が明らかにされたことは、今後この作業を進めるうえで大いに役立つであろう。この冊子が刊行されれば、先生の求めて止まなかったものと、日本の識者の与えんとしたものが明らかになる。これらが要路に在る方々の役に立てば幸いである。

生前、ある記者が論説や関連記事の翻訳・編集作業を計画したことがある。先生はこれを厳しく戒め、遂に冊子の刊行を許さなかった。今では“棺ヲ蓋イテ論定マル”という状況にある。本冊子の刊行を妨げるものはもはや何もない。……」

以下に掲げる資料(2)は『東遊日報訳編』に収録された論説や記事のうち、主要なものを取り上げ、それらの典拠を時系列で示したものである。

『東遊日報記編』所収主要論説・記事

番号	月日	掲載新聞名	論説・記事題目	関連記事(他新聞)	東遊 日報記 編頁記
1	6月22日	日本	「吳汝綸と大学教授」	毎日新聞・東京朝日新聞・時事新報(7/7)	2
2	6月22日	東京朝日新聞	「吳汝綸氏の談話」		3
4	6月24日	大阪朝日新聞	「吳汝綸氏一行」		5
7	6月26日	東京朝日新聞・日本旬報	「吳汝綸氏の一行」・「吳汝綸氏の書翰」		8
12	6月30日	東京日出國新聞	「大谷派本願寺と吳汝綸」		11
14	6月29日	国民新聞	「清儒吳汝綸氏の一行入京」・「吳汝綸氏の詩」	読売新聞(6/30)	13
16	6月29日	報知新聞	「吳汝綸氏を訪ふ」・「吳汝綸氏歓迎」	朝日新聞・日本新聞・日出新聞・民声新聞・都新聞・読売新聞・国益新聞・日日新聞・時事新聞(6/29)、東京新聞(6/30)、徳島毎日新聞(7/2)	14
19	6月29日	日本新聞	「吳汝綸氏を訪ふ」(▼清国吳汝綸氏一行入京、▼吳汝綸氏の学校参観、▼清国貴賓歓迎会)		16
20	6月30日	時事新報	「吳汝綸の演説」		17
21	6月30日	二六新報	「吳汝綸氏と通明翁」	西京新聞・高松市香川新報(7/2)	17
25	6月30日	報知新聞	「清国革新の曙光」・「清国二珍客」		20
26	7月1日	東京朝日新聞	「吳汝綸氏の大學参観」	国民新聞・時事新報・日本新聞・毎夕新聞・萬朝報・徳島毎日新聞・金沢市北陸新聞・富山市北陸政論(7/2)、松山市海南新聞(7/4)	21
29	7月3日	二六新報	「吳汝綸氏に與へて清国教育の最要點を論ず」		22
31	7月3日	時事新報	「昨夜の交詢社常集会」		24
32	7月4日	報知新聞	「目賭耳聞」	大阪朝日新聞	25

37	7月5日	人民新聞	「読者諸君膝下」			
39	7月7日	読売新聞	「紅葉館に於ける吳汝綸氏」		毎日新聞・時事新報・日本新聞・東京朝日新聞・中央新聞・国民新聞・東京日日新聞・都新聞(7/8)、松山市愛媛新聞(7/10)、松山市伊予新聞・日日新聞(7/13)、日台中毎日新聞(7/25)	27
40	7月7日	東京朝日新聞	「吳汝綸氏歓迎会」		松江市山陰新聞	29
41	7月7日	東京朝日新聞	「来遊中の吳汝綸氏」(▼吳汝綸氏は入京以来、▼女子教育の進歩、▼吳氏は大学総教習)		二六新報・東京日日新聞・日本新聞・日出新聞・都新聞・萬朝報(7/8)	30
44	7月8日	東京日日新聞	「首相と鎮國將軍」			32
46	7月10日	報知新聞	「清国の二客」		国益新聞	32
48	7月12日	日本新聞	「吳氏の小学校參觀」		毎夕新聞	33
54	7月16日	国民新聞	「清客招待懇談會」		日出国新聞・日本新聞・東京日日新聞・東京朝日新聞・民声新聞・報知新聞・時事新報	34
59	7月18日	日出国新聞	「同仁會の清客招待」			36
65	7月20日	報知新聞	「吳汝綸氏の談」			38
70	7月28日	東京朝日新聞	「近衛公爵の清客招待」		日本新聞、日本新聞(7/29)、二六新報・報知新聞・大阪毎日新聞(7/30)	39
72	7月29日	日本新報	「吳汝綸氏の日清教育觀」、「東亜同文會の清客招宴」、「雲間寸観」		大阪朝日新聞	41
79	8月16日	都新聞	「忙中閑筆」		毎日新聞・人民新聞・国益新聞・秋田日日新聞・仙台市河北新聞	43
85	8月25日	東京朝日新聞	「吳汝綸氏」		読売新聞・日本新聞・人民新聞・毎日新聞・三田尻新聞・西日日新報・和歌山実業新聞・松江市山陰新聞・鳥取市鳥取新聞	45
86	8月25日	報知新聞	「清国と師範学校」		東京日日新聞・日出国新聞・萬朝報	45

87	8月25日	読売新聞	「吳汝綸氏の支那改革意見」			45
88	8月28日	国民新聞	「吳汝綸氏の詩論」			46
96	9月6日	大阪朝日新聞	「清国近事」			47
97	9月7日	日本	「吳汝綸氏と文部省」		東京日日新聞	48
101	9月11日	東京朝日新聞	「吳氏聴講会」		時事新報・中央新聞・日本新聞・毎日新聞・萬朝報・長野信濃毎日新聞	48
108	9月16日	国民新聞	「吳汝綸氏と吳啓孫氏」			51
109	9月18日	東京日日新聞	「吳汝綸氏を諷す」		日本新聞(9/19)	51
130	10月6日	東京朝日新聞	「根本教授と吳總教習」			57
134	10月8日	国民新聞	「吳汝綸氏の答辞」(漢文)			58
138	10月14日	国民新聞	「伊藤侯と吳汝綸氏」		中央新聞・国民新聞・萬朝報(10/12)、時事新報・報知新聞(10/14)	60
145	10月17日	大阪朝日新聞	「吳氏請待の宴」		日本新聞	62
155	10月24日	日本	「春帆樓の吳汝綸」			66
156	10月27日	東京朝日新聞	「吳汝綸」			67
157	11月20日	東京朝日新聞	「新刊各種」(▼東遊叢録)			67

7. 『教育雑誌』にみられる民国前期の日本教育観

—清末日本モデル観の変化—

佐藤 尚子 (広島大学)

19世紀世紀末から20世紀初頭に至る時期の中国と日本の蜜月時代は最近よく知られるようになった。この時期の中国は教育の近代化に務め、富国強兵に成功していた日本をモデルに国家富強を図ろうとしたのであった。清末として括られるこの時期の中国の雑誌には日本教育に関する記事が多数出現する。ほとんど日本教育の紹介記事である。

ところが、「満州事変」以後の中国教育雑誌には、日本や日本教育に関する非難記事が多数出現する。清末の雑誌論調とは大きな違いがある。それでは、両時期のあいだの中華民国前期ではどうであったのだろうか。今回は、「満州事変」以前における民国時期の『教育雑誌』から、日本教育に関する記事を探し出し、整理してみた。『教育雑誌』は1908年から1948年まで刊行され、二度の中断があったものの中国教育界に影響を与え続けた代表的な教育雑誌である。上海の商務印書館から刊行され、時論、教育現状の報告、外国教育の紹介を中心にした党派性のない雑誌である。

論説・記事内容から分類して解説していく。○の部分は、注目に値すると思われる論説・記事内容の簡単な紹介である。資料リストは分類ごとに付した。

1 日本教育の紹介

日本教育への関心は、民国時期に至っても大きい。かつて調査したことがあるが、「満州事変」以後に至っても日本非難と日本教育紹介記事が並列して掲載されていた。隣国日本の教育動向には常に注意を払っていたことがわかる。記事リストは次のとおりである。リストの最後の項目に記載されているのは所収欄である。

①初等教育 計9点

小学理化器機製造実験の簡法, 4-2, 民国元年五月十日, 教材

小学理化器機製造実験の簡法(続), 4-3, 民国元年六月十日, 教材

日本小学校令改正, 5-9, 民国二年十二月十日, 付録

日本小学校令施行規則之改正, 5-9, 民国二年十二月十日, 付録

日本児童之特別教科書, 8-6, 民国五年六月十五日, 学事一束

日本分設職業化之一小学, 9-2, 民国六年二月二十日, 調査

日本改正小学校令, 11-4, 民国八年四月二十日, 付録

日本小学校体育科的新教材, 14-4, 民国十一年四月二十日, 世界教育新潮

東京高等師範付属小学第五部(低能児)的实施状況, 14-6, 民国十一年六月二十日, なし

②中等教育 計6点

日本高等中学校令, 3-10, 民国元年一月十日, 付録

日本高等中学校課程, 3-10, 民国元年一月十日, 付録

東京第一高等学校寮記事, 10-3, 民国七年三月二十日, 雜纂

日本改正中学校令, 11-4, 民国八年四月二十日, 付録

英俄徳法美日中七国的中学教育, 17-7, 民国十四年七月二十日, 世界教育新潮

英俄德法美日中七国的中学教育, 17-10, 民国十四年十月二十日, 世界教育新潮

③高等教育 計2点

日本公布新帝国大学令, 11-4, 民国八年四月二十日, 付録

日本高等教育之政策及其影響, 21-9, 民国十八年九月二十日, 世界教育新潮

④実業教育 計10点

日本工業教育家手島精一之歴史, 10-2, 民国七年二月二十日, 史伝

日本手工業教育家手島精一之歴史(続), 民国七年三月二十日, 史伝

日本工業教育家手島精一(続), 10-4, 民国七年四月二十日, 史伝

日本工業教育家手島精一(続), 10-5, 民国七年五月二十日, 史伝

日本工業教育家手島精一, 10-7, 民国七年七月二十日, 史伝

日本之補習教育, 19-5, 民国十六年五月二十日, 世界教育新潮

日本之補習教育, 19-6, 民国十六年六月二十日, 世界教育新潮

日本之補習教育, 19-7, 民国十六七月二十日, 世界教育新潮

日本職業教育的運動, 17-1, 民国十四年一月二十日, なし

日本の職業指導, 20-3, 民国十七年三月二十日, 世界各国職業指導運動の近況

⑤師範教育 計2点

日本師範教育之沿革, 5-2, 民国二年五月十日, 外論

日本高等師範改組談, 5-6, 民国二年九月十日, 学事一束

⑥幼児教育 計1点

日本之幼稚園, 9-10, 民国六年十月二十日, 特別記事

⑦社会教育 計5点

日本東京通俗教育(組織法, 成列品)之概略, 7-8, 民国四年八月十五日, 雜纂

雲花様の日本土陸農民学校, 21-12, 民国十八年十二月二十日, 世界教育新潮

日本労働教育發達之概況, 22-3, 民国十九年三月二十日, 世界教育新潮

最近日本之農村教育運動, 22-12, 民国十九年十二月二十日, 世界教育新潮

日本労働学校運動の展開, 22-5, 民国十九年五月二十日, 世界教育新潮

⑧教育理論及び教育方法 計10点

日本現代教育之四大思潮, 14-9, 民国十一年九月二十日, なし

日本最近教育思潮概観, 14-9, 民国十一年九月二十日, なし

日本自由教育之紹介(一), 14-9, 民国十一年九月二十日, なし

日本自由教育之紹介(二), 14-9, 民国十一年九月二十日, なし

日本久保氏之皮奈-西門智力測驗改訂法, 14-10, 民国十一年十月二十日, なし

日本久保氏之皮奈西門智力測驗改訂法, 14-12, 民国十一年十二月二十日, なし

道爾頓制在日本の概況, 16-7, 民国十三年六月二十日, 世界教育新潮

現代日本教育思想界之兩大潮流, 17-5, 民国十四年五月二十日, 世界教育新潮

日本現今教育教授之缺陷，6-2，民国三年五月十五日， 諷論

日本学者之蘇我新教育理論的討究，22-1，民国十九年一月二十日， 世界教育新潮

⑨教育政策など 計5点

日本教育調査会之官制，5-4，民国二年七月十日， 記事

日本教育政策之背景，19-12，民国十六年十二月二十日， 世界教育新潮

論日本各政党在総選中所提的教育政策，20-4，民国十七年四月二十日， 教育評壇

日本文化機關概観，20-8，民国十七年八月二十日， 世界教育新潮

日本之最近文化政策21-12，民国十八年十二月二十日， 世界教育新潮

⑩日本教育界の現状 計28点

明治校長辞世，4-1，民国元年四月十日， 学事一束

日本学校医之職務，6-9，民国三年十二月十五日， 雜纂

日本教育家之談，9-8，民国六年八月二十日， 談話

日本教育家之談，9-9，民国六年九月二十日， 談話

去年日本教育界之狀況，14-2，民国十一年二月二十日， 世界教育新潮

一九二二年的日本教育，15-4，民国十二年四月二十日， なし

日本全国学校一覽，15-11，民国十二年一月二十日， 補白

日本全国学校一覽（二），15-12，民国十二年二月二十日， 補白

日本学生生徒及児童之身長体重胸囲累年，15-12，民国十二年二月二十日， 補白

日本教育之最近概況，20-1，民国十七年一月二十日， 世界新潮

日本学校教育之演化，20-2，民国十七年二月二十日， 世界教育新潮

日本，20-2，民国十七年二月二十日， 世界教育雜訊

日本最近的教育統計一斑，20-3，民国十七年三月二十日， 世界教育新潮

日本，20-3，民国十七年三月二十日， 世界教育雜訊

日本，20-8，民国十七年八月二十日， 世界教育雜訊

高唱思想善導之最近日本教育界，21-2，民国十八年二月二十日， 世界教育新潮

日本青年学生思想之出路，21-3，民国十八年三月二十日， 世界教育新潮

十年来之日本学生運動，21-7，民国十八年七月二十日， 世界教育新潮

從日本教育統計上觀察日本教育，21-8，民国十八年八月二十日， 教育統計

日本，21-10，民国十八年十月二十日， 世界教育雜訊

日本，22-1，民国十九年一月二十日， 世界教育雜訊

日本，22-3，民国十九年三月二十日， 世界教育雜訊

日本青年学生之思想問題，22-5，民国十九年五月二十日， 世界教育新潮

日帝国主义鉄蹄下之華僑教育，22-5，民国十九年五月二十日， 教育界雜訊

日本，22-10，民国十九年十月二十日， 世界教育雜訊

日本，22-11，民国十九年十一月二十日， 世界教育雜訊

日本, 22-12, 民国十九年十二月二十日, 世界教育雜訊

欧美教育雜訊 (附日本), 18-12, 民国十五年十二月二十日, 世界教育新潮

①教育資料の紹介 計33点

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 18-2, 民国十五年二月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 18-3, 民国十五年三月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 18-5, 民国十五年五月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 18-6, 民国十五年六月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 18-10, 民国十五年十月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育要目一覽, 18-11, 民国十五年十一月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 18-12, 民国十五年十二月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 19-1, 民国十六年一月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 19-3, 民国十六年三月二十日, 新刊紹介

日本最近主要教育雜誌要目一覽, 19-5, 民国十六年五月二十日, 新刊紹介

日本最近主要教育雜誌要目一覽, 19-6, 民国十六年六月二十日, 新刊紹介

日本最近主要教育雜誌要目一覽, 19-7, 民国十六年七月二十日, 新刊紹介

日本最近主要教育雜誌要目一覽, 19-8, 民国十六年八月二十日, 新刊紹介

日本最近主要教育雜誌要目一覽, 19-11, 民国十六年十一月二十日, 新刊紹介

日本最近主要教育雜誌要目一覽, 19-12, 民国十六年十二月二十日, 新刊紹介

日本最近主要教育雜誌要目一覽, 20-1, 民国十七年一月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 20-2, 民国十七年二月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 20-8, 民国十七年八月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 20-9, 民国十七年九月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 20-10, 民国十七年十月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 20-11, 民国十七年十一月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 20-12, 民国十七年十二月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 21-1, 民国十八年一月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 21-2, 民国十八年二月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 20-6, 民国十七年六月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 21-3, 民国十八年三月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 21-4, 民国十八年四月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 21-7, 民国十八年七月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 21-8, 民国十八年八月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 21-9, 民国十八年九月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 21-10, 民国十八年十月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雜誌要目一覽, 21-11, 民国十八年十一月二十日, 新刊紹介

最近日本主要教育雑誌要目一覧, 21-12, 民国十八年十二月二十日, 新刊紹介

⑫日本教育に関する研究 計5点

日本之打破国定教科書制度論, 7-1, 民国四年一月十五日, 付録

各国学校系統之研究, 8-9, 民国五年九月十五日, 訳論

中日教育之四大異点, 9-7, 民国六年七月二十日, 言論

日本教育之文化史的考察, 22-12, 民国十九年十二月二十日, 世界教育新潮

日本教育制度之研究与改進, 22-12, 民国十九年十二月二十日, 世界教育新潮

2 日中教育交流と摩擦

次第に日本は露骨な侵略意図を見せてはいたが、日本と中国の教育交流は切れることがなかった。留学生も多数来日していたし、日本教育視察者も多い。清末はお雇い日本人が中国を訪問していたが、民国に入って教育学者が中国を訪問するようになった。しかし、日中教育交流をめぐる摩擦の報道が出現する。それはこの時期の特徴といえる。

①留学生教育 計15点

○留学日本蒙古女学生卒業, 4-4, 民国元年七月十日, 学事一束

日本実践女学校は4月27日に卒業式を行った。本年度優秀卒業生には、蒙古女学生2名がいる。于保貞と何恵貞である。二人は明治39年2月来日、同年4月同校高等女学部に入校した。明治44年に優等成績で卒業して技芸部に入学した。この度、再び最優等成績で卒業した。

○留学生補助費継続, 4-4, 民国元年七月十日, 学事一束

革命のせいで、官費補助が中断した。白岩山本らが支那留学生同情会を組織し、三井三菱から募金して留学生の学費を援助した。発起人は渋沢栄一、高橋是清である。また、同会は補助者名簿を中国政府に渡し、中国に恩を与えたことを示すつもりだ。

○留日学生全体帰国, 10-6, 民国七年六月二十日, 学事一束

中日外交交渉討論会が日本警察に干渉されたせいで、留日学生は大中華民国救国団を組織し、5月20日まで、全員帰国することを決めた。

○設立留日学生監督之経過, 10-7, 民国七年七月二十日, 学事一束

駐日公使館が留学生事務を兼ねるのを嫌ったので、留日学生監督を設立し、江庸を任命した。

○留日学生補助費之規程, 6-4, 民国十三年四月二十日, 教育界消息

3月8日、教育部が留日学生補助規程を公布した。全国定員312名と定めた。

○浙省對於留日学生舞弊之筋查, 18-7, 民国十五年七月二十日, 教育界消息

五校特約が廃止された後、浙江省の私費生が官費を申請した際、学歴、成績偽造など諸問題が指摘された。それらの人がもし官費生になったら、国家の留学生派遣目的に反すると主張している。

○留日学生之空前党獄21-11, 民国十八年十一月二十日, 教育界消息

10月17日、申報・中央社東京支社の報告によると、東京警視庁は日本共産党の主宰した中東鉄道事件ロシア応援デモに参加という理由で、中国人留学生130人を逮捕した。これをめぐって、日中双方が外交交渉を開始した。

○吾国留日学生之最近概況, 22-4民国十九年四月二十日, 教育報告

各省留日女子学生の国内学歴、来日時期、年齢、在籍学校、専門別、入学及び予備状況、費用源、専門別の男女比較、官費生の男女比較、全国留日学生の統計

○留日学生之輟学帰国, 22-7, 民国十九年七月二十日, 教育界雑訊

時報東京からの発信によると、銀価暴落で、官費生の70元の月額官費は実質30元に落ちた。また、戦争のせいで、官費仕送りが中止された人は2800人に達した。留日生の生活が苦しくなる。そのため、4000人の内500人が既に帰国した。

留日学生之近況, 3-12, 民国元年三月十日, 学事一東

留学日本蒙古女学生卒業, 4-4, 民国元年七月十日, 学事一東

留学生補助費継続, 4-4, 民国元年七月十日, 学事一東

駐日經理留学生事務兼学務調査員陸規亮上江蘇省巡按使書, 7-12, 民国四年十二月十五日, 学事一東

留日学生全体帰国, 10-6, 民国七年六月二十日, 学事一東

設立留日学生監督之経過, 10-7, 民国七年七月二十日, 学事一東

修正管理留日学生事務規程, 13-2, 民国十年二月二十日, 法令

留日学生補助費之規程, 6-4, 民国十三年四月二十日, 教育界消息

留日官費正之乞援, 17-6, 民国十四年六月二十日, 教育界消息

浙省對於留日学生舞弊之筋查, 18-7, 民国十五年七月二十日, 教育界消息

留日士官学校華学制之退学宣言, 19-1, 民国十六年一月二十日, 教育界消息

留日学生之空前党獄21-11, 民国十八年十一月二十日, 教育界消息

留日学生党獄之悲憤, 21-12, 民国十八年十二月二十日, 教育界消息

吾国留日学生之最近概況, 22-4民国十九年四月二十日, 教育報告

留日学生之輟学帰国, 22-7, 民国十九年七月二十日, 教育界雑訊

②日本教育及び調査

計26点

○日本北海道教育調査記, 9-2, 民国六年二月二十日, 特別記事

日本北海道教育調査記, 9-3, 民国六年三月二十日, 特別記事

陸規亮の調査報告書。北海道で行った義務教育の特徴は郷校を中心として進んでいると指摘した。それは中国農村義務教育普及の手本とも言える。

○日本秋田県立師範付属小学校記, 9-6, 民国六年六月二十日, 特別記事

陸規亮の調査報告書。日本の小学校はわが国の国民性及び現況に合って、モデルになれる。都市部では大阪育英高等小学校を参考すべきであり、農村部では秋田師範学校附属郷村小学校を参考すべきであると主張した。その長所は①経費を節約しても、効果が変わらない。②少数の教員で学校を運営している。③生徒個性の開発を重視している。団体訓練では軍隊主義で、個人訓練では家族主義的方法を採用している。

○視察日本補習教育記,9-7, 民国六年七月二十日, 特別記事

庄余の視察報告書。日本では補習教育が義務教育制度に導入された。その方法はすべてドイツを模倣しているが、その目的はドイツより達成しやすい。特に、理化学教育及び精神教育を重視することは中国の補習教育の普及にモデルを提供していると指摘している。

○考察日本東京学校筆記,9-8, 民国六年八月二十日, 特別記事

民国6年5月、北京高師教職員30人の東京学校考察報告書。視察学校は：万年小学校、私立共立女子職業学校、東京府立工芸学校、東京女子高等師範学校附属小学校附属高等女学校附属幼稚園、東京高等師範学校附属小学校、東京聾啞学校、教育博物館である。

○調査日本職業教育報告, 10-5, 民国七年五月二十日, 付録

調査日本職業教育報告, 10-6, 民国七年六月二十日, 付録

江蘇省立第二師範学校附属小学校職業科主任李延の視察報告書。視察学校は横浜商業学校、大阪府立職工学校、東京共立女子職業学校、神戸市立兵庫実業補習学校、東京万年小学校である。日本の普通教育学校においても職業教育を重視し、学校教育の実用性や社会との連絡が中国職業教育の発展に示唆を与えると指摘した。

○考察日本教育玩具感想, 12-11, 民国九年十一月二十日, 雜纂

日本は第一次世界大戦後、世界第二の玩具輸出国と成長した。玩具は教育の補助品である。日本の玩具生産者は全員工芸学校卒である。中国も日本の経験に鑑み、師範生の他、工業学校卒業生も教育界に吸収すべきだ。

○北京国立八校赴日視察団の消息, 16-4, 民国十三年四月二十日, 教育界消息

対支文化事業交流の一環として、北京国立八校が抽選で日本視察団を組織した。北京大学の陳大斉ら14人、美術専門2人、女高師4人、高師7人、工業専門6人、医学専門2人である。

○日本図書館参観記, 19-1, 民国十六年一月二十日, なし

日本図書館参観記(続完), 19-3, 民国十六年三月二十日, 調査報告

杜定友の調査報告である。日本の図書館事業成立の背景、現況を調べた上で、その建築の壮かさ及び科学設備、豊富な蔵書、熱心な読者を紹介した。特に中国関係資料収集を中心とする東洋文庫及び民生関係資料を中心とする大原社会問題研究所に注目している。

③日本教育家の来華

計5点

○日本教育家之中日親善論, 13-5, 民国十年五月二十日, なし

錦城中学校教諭七理紫水の「中日親善と教育者の覚悟」という論文を翻訳し、日本の日中親善の背景について、次のことを指摘した。①日貨ボイコット運動、②日米関係の悪化、③留日学生の減少である。

○中日文化交換講演, 15-12, 民国十二年二月二十日, 教育界消息

今年の春、帝国議会で対支文化事業案を議決した。毎年、40万元で留日生の補助及び学術交流の費用に充当する。10月13, 14日、九州医学大会で東京日防疫督弁(ママ)伍連複博士らが来日講演した。一方、東京医科大学教授林春雄及び講師原海氏が11月3日、北京医学専門学校で講演した。

○日本帝大教授来滬之任務17-1, 民国十四年一月二十日, 教育界消息

東大文科教授吉村讚次は昨年11月に上海に到着した。目的は①対支文化事業の教授交換、②大震災のため損失した帝大文庫資料の補欠、③中国歴史実績の考察、である。7月から朝鮮を経由して満州・蒙古・直隸山東を考察した。10月、北京大学で「文化への環境影響及び中国南北仏教」、北京師範で「中国文化の特色」・「儒教と文学文字」、民国大学で「中国共同心の統制力」を講演し、反響が大きかった。次に、広東基督教大学、金陵大学で講演する予定である。北京で1万冊以上の本を集めた。

江蘇省第二師範学校旅行日本撮影, 5-4, 民国二年七月十日, 図書

派赴日本考察校務報告, 5-10, 民国三年一月十日, 雑纂

派赴日本考察校務報告, 5-12, 民国三年三月十日, 雑纂

参観早稲田大学三十年紀年会, 6-2, 民国三年五月十五日, 雑纂

七月二十五日教育部 委遊歴員考察日本学校, 6-6, 民国三年九月十五日, 大記事

参観日本学校筆記, 6-6, 民国三年九月十五日, 雑纂

大正博覧会参観筆記, 6-7, 民国三年十月十五日, 調査

参観日本小学筆記(続), 6-7, 民国三年十月十五日, 雑纂

大正博覧会参観筆記(続), 6-8, 民国三年十一月十五日, 調査

記参観日本奈良高等女子師範学校及附属高等女校並借野尻校長之談話, 7-4, 民国四年四月十五日, 雑纂

記参観奈良女高師附属女学及借藤堂主事の談話, 7-5, 民国四年五月十五日, 雑纂

参観日本東京高等師範附属小学校擬戦記, 7-10, 民国四年十月十五日, 雑纂

調査日本郷村小学校日記, 8-9, 民国五年九月十五日, 特別記事

日本北海道調査記, 9-1, 民国六年一月二十日, 特別記事

日本北海道教育調査記, 9-2, 民国六年二月二十日, 特別記事

日本北海道教育調査記, 9-3, 民国六年三月二十日, 特別記事

東京第一高等学校茶話会記, 9-5, 民国六年五月二十日, 特別記事

日本秋田県立師範付属小学校記,9-6, 民国六年六月二十日, 特別記事
視察日本補習教育記,9-7, 民国六年七月二十日, 特別記事
考察日本東京学校筆記,9-8, 民国六年八月二十日, 特別記事
調査日本職業教育報告, 10-5, 民国七年五月二十日, 付録
調査日本職業教育報告, 10-6, 民国七年六月二十日, 付録
考察日本教育玩具感想, 12-11, 民国九年十一月二十日, 雜纂
北京国立八校赴日視察団の消息, 16-4, 民国十三年四月二十日, 教育界消息
日本図書館參觀記, 19-1, 民国十六年一月二十日, なし
日本図書館參觀記(続完), 19-3, 民国十六年三月二十日, 調査報告

③日本教育家の中国訪問 計5点

日本小西博士之北京教育談, 7-11, 民国四年十一月十五日, 学事一束
中日大学交換教授, 11-7, 民国八年七月二十日, 学事一束
日本教育家之中日親善論, 13-5, 民国十年五月二十日, なし
中日文化交換講演, 15-12, 民国十二年二月二十日, 教育界消息
日本帝大教授来滬之任務17-1, 民国十四年一月二十日, 教育界消息

④対支文化事業 計15点

○日議会關於中国教育案之問答, 10-5, 民国七年五月二十日, 学事一束

帝国議会では、中国人留日学生の減少及び中国国内における日本語教育の廃止は反日思想の浸透であると認定し、欧米の在華教育勢力の成長に鑑み、国庫補助で対華教育活動を援助すべきだという意見が出た。

○日本対華文化事業計画, 16-3, 民国十三年三月二十日, 教育界消息

1924年12月の対支文化事業に関する日中非正式交渉の経過を報じた。

○教育學術団体對於日本対華文化事業之宣言及与論界之觀察, 16-6, 民国十三年六月二十日, 教育消息

中国側は対支文化事業の実施を通して中国への西洋科学の導入に促進すると期待したが、日本の目的は自国の中国研究を深めることにあった。それは文化侵略であると指摘した。

○日本対華文化侵略政策之行動与反抗, 17-5, 民国十四年五月二十日, 教育界消息

1925年、朝岡健が来華した際の対支文化事業の交渉をめぐる日本政府の態度及び中国全国教育会連合会の反抗を報道した。

○日本対華文化侵略政策之勝利, 17-6, 民国十四年六月二十日, 教育界消息

北洋政府と日本側が対支文化事業について条約を結ぶことに反対する。

○日本対華文化侵略政策勝利後之中国委員之争執, 17-11, 民国十四年十月二十日, 教育界

消息

対支文化事業日中共同委員会が成立した後、中国側常務委員の設置問題をめぐって、内部の対立様相を報道した。中国側の内部の個人利益をめぐる争いが文化事業の前途に影を投じていると指摘した。

○日本対華文化侵略之勝利, 18-9, 民国十五年九月二十日, 教育界消息

日中の秘密交渉に反対し、各教育団体の反対の動きを報じた。

○日本対華文化侵略勝利後之糾葛, 18-10, 民国十五年十月二十日, 教育界消息

対支文化事業の交渉が成立した後、中国側の反対の動きを報じた。特に、江蘇省教育会及び全国教育会連合会、中華平民教育促進会など4団体の反対宣言に注目している。

○日本新任之対華文化委員, 220-2, 民国十七年二月二十日, 教育界消息

日本の新任対華文化事業調査会メンバー名を掲載している。岡実、入沢達吉、服部宇之吉、山崎直力、狩野直喜、佐藤寛次、入河内正敏、小田切万之助、下村宏、小村俊三郎、江口定条、白岩竜平、門野重九郎、米山梅吉

○日本対於庚款津貼華生案之変更, 20-4, 民国十七年四月二十日, 教育界消息

日本文部省が發布した中国人留学生補助案十ヶ条。補助者定員は320人を400人に変更し、補助金の月額を60元を60, 50元の二種類に変更している。

○中日文化事業協定委員会之撤廃, 22-8, 民国十九年八月二十日, 教育界消息

対支文化事業の会計が日本側に握られて、実質、留日学生が援助を受けたのは220人程度である。そのため、教育部は共同側委員会を撤退し、公・私留学を問わず、援助を一切受けずと決定した。

○教部再請中央廢止中日文化協定之呈文, 22-12, 民国十九年十二月二十日, 教育界消息

10月31日の申報から。対支文化事業は日本の対華文化侵略の道具であると認め、教育部の留学生補助費を受けずという方針を報告した。また、義和団賠償金を全額中国側に返却し、対支文化事業部の廃止を外交機関によって交渉することを要求した。

日議会關於中国教育案之問答, 10-5, 民国七年五月二十日, 学事一束

中日交渉後之教育觀, 7-8, 民国四年八月十五日, 言論

日本対華文化事業計画, 16-3, 民国十三年三月二十日, 教育界消息

教育學術団体對於日本対華文化事業之宣言及与論界之觀察, 16-6, 民国十三年六月二十日, 教育消息

日本対華文化侵略政策之行動与反抗, 17-5, 民国十四年五月二十日, 教育界消息

日本対華文化侵略政策之勝利, 17-6, 民国十四年六月二十日, 教育界消息

日本文化侵略政策之發展, 17-9, 民国十四年九月二十日, 教育界消息

日本対華文化侵略政策勝利後之中国委員之争執, 17-11, 民国十四年十月二十日, 教育界

消息

日本弁理中日文化事業の真面目， 17-12， 民国十四年十二月二十日， 教育界消息
日本對華文化侵略之勝利， 18-9， 民国十五年九月二十日， 教育界消息
日本對華文化侵略勝利後之糾葛， 18-10， 民国十五年十月二十日， 教育界消息
日本新任之對華文化委員， 220-2， 民国十七年二月二十日， 教育界消息
日本對於庚款津貼華生案之變更， 20-4， 民国十七年四月二十日， 教育界消息
中日文化事業協定委員會之撤廢， 22-8， 民国十九年八月二十日， 教育界消息
教部再請中央廢止中日文化協定之呈文， 22-12， 民国十九年十二月二十日， 教育界消息

⑤抗日教育

a) 滿州 計9点

日人在奉擴張教育， 6-4， 民国三年七月十五日， 学事一束
間島朝鮮人之教育， 7-12， 民国四年十二月十五日， 学事一束
日本人在奉之教育事業， 12-3， 民国九年三月二十日， 記事
南滿「日本化」的教育， 14-4， 民国十一年四月二十日， 教育界消息
中国遼東半島之日本之教育， 18-11， 民国十五年十一月二十日， 教育界消息
奉張統治下之日本文化事業， 19-3， 民国十六年三月二十日， 教育界消息
日警越境捕華韓學生之暴行， 22-5， 民国十九年五月二十日， 教育界雜訊
日本在東三省の文化侵掠， 21-4， 民国十八年四月二十日， 教育報告
日本在東三省の文化侵掠（統）， 21-7， 民国十八年七月二十日， 教育報告

b) 山東 計9点

日人在魯所立学校調查票一， 14-8， 民国十一年八月二十日， 補白
日人在魯所立学校調查票一（統）， 14-8， 民国十一年八月二十日， 補白
日人在魯所立学校調查票二， 14-8， 民国十一年八月二十日， 補白
日人在魯所設校調查表三， 14-10， 民国十一年十月二十日， 補白
日人在魯所設校調查表四， 14-10， 民国十一年十月二十日， 補白
日人在魯所設校調查表四（統）， 14-10， 民国十一年十月二十日， 補白
日人在魯所設学校調查表五， 14-12， 民国十一年十二月二十日， 補白
日人在魯所設学校調查表六， 14-12， 民国十一年十二月二十日， 補白
日人在魯所設学校調查表六（統）， 14-12， 民国十一年十二月二十日， 補白
青島日本學生之蠻橫， 22-11， 民国十九年十一月二十日， 教育界消息

c) 朝鮮・台灣 計5点

朝鮮青年教育現狀， 18-1， 民国十五年一月二十日， 外国青年教育現狀
日本統治下之台灣教育， 18-10， 民国十五年十月二十日， 世界新潮
朝鮮教育的現狀， 20-5， 民国十七年五月二十日， 世界教育新潮

朝鮮, 21-12, 民国十八年十二月二十日, 世界教育雜訊

朝鮮學生革命之怒潮, 22-2, 民国十九年二月二十日, 教育界消息

d) 他の地域 計2点

日本暴行發生後之全國教育界, 20-6, 民国十七年六月二十日, 教育界消息

日政府擴充滬僑教育, 20-8, 民国十七年八月二十日, 教育界消息

3 その他

① 日本人の欧米教育視察 計2点

一個日本學者の歐美教育視察觀, 15-5, 民国十二年五月二十日, なし

日本尾島氏の歐美教育視察談, 16-6, 民国十三年六月二十日, 世界教育新潮

② 欧米人の日本教育認識 計1点

愛利渥特對於日本教育, 4-10, 民国二年一月十日, 雜纂

③ 文化一般 計6点

日本人与羅馬字, 4-4, 民国元年七月十日, 実験

日本東京大正博覽會出品目錄, 5-9, 民国二年十二月十日, 付録

述棚橋源太郎之談話与弁法, 6-9, 民国三年十二月十五日, 談話

記日本印刷物之加価, 10-2, 民国七年二月二十日, 付録

4 『中華教育界』における日本教育関連記事

当時の雑誌として、国家主義派の拠点となった『中華教育界』も参考として調査した。

(1) 日本教育の紹介

① 学校教育

日本教育界一年来的觀察, 民国十六年三月, 16-9報告

一個日本小学校の概況和特殊設施, 民国十六年五月16-11, 小学研究

上中実小低年級日本研究教学大綱, 民国十八年十二月, 17-12, なし

② 実業、社会教育

日本農業教育之新方針, 民国三年四月, 十六号, 記事一外国之部

日本実業教育之進歩, 民国三年四月, 十八号, 記事一外国之部

③ その他

試口今日之台湾, 8-6, 教材

日本, 民国十五年一月, 15-7, 国外教育新聞

日本教育近況, 民国十六年一月, 16-7, 報告

日本民族的特徴, 民国十八年十二月, 17-12, なし

第九局遠東運動會記略, 民国十九年六月, 18-6, なし

中日德三国師範教育比較觀, 民国二十一年六月, 19-12, 研究

(2) 日本教育に関する研究

新式教科書与日本、民国八年, 8-1, 特別記載

近代日本教育与国家主義，民国十四年七月，15-1

日本教育家之体育目的觀，民国十七年六月，17-6，なし

從欧美日本的教育研究方法說到中国的教育研究法的現状与趨勢，民国二十一年六月，19-12，論述

(3) 日本視察及び留学

①視察

視察日本教育日記（続八卷第三期），8-4，教育實際

視察日本教育日記（続八卷第五期），8-6，教育實際

北大組織遊日本学生団，民国九年六月，9-6，教育界消息

②留学

留日学生組織連合会，8-6，教育界消息

留学教育的批判与今後的留学政策，民国十五年三月，15-9

日本留学問題，民国十五年三月，15-9

中国留日学生学科統計，民国十九年十月，18-10，なし

(4) 日本教育への批判

各団体反対日本对支文化事業，民国十六年二月，16-8国内教育新聞

為対日問題告教育界，民国十七年六月，17-6，なし

帝国主義最近的文化侵略，民国十九年十一月，18-11，批判与主張

8. 韓国人留学生の日本教育観

—留学生団体機関誌・学会誌【1905-1910】より—

佐藤 由美 (青山学院大学)

はじめに

韓国と日本の教育交渉史は、1876年に朝鮮政府が修信使一行を派遣したところから始まる。1881年の紳士遊覧団の派遣では趙準永(1833-1886)が文部省を視察しており、その見聞記録を『日本聞見事件草』、『日本文部省視察記』⁽¹⁾等にまとめ朝鮮政府に提出している。紳士遊覧団のなかからは、日本に留まって勉学を続ける兪吉濬(1856-1914)・柳定秀・尹致昊(1865-1945)が出て、日本留学の嚆矢となり、教育交渉史の中心は視察から留学へと移っていく。その経緯は次のとおりである。

- 1876年 金綺秀ほか修信使一行の日本視察。視察記録『見聞事件』『日東記遊』献上。
- 1880年 金弘(宏)集ほか修信使一行の日本視察。『朝鮮策略』を持ち帰る。
- 1881年 紳士遊覧団62名の日本視察。趙準永が文部省を視察。各種学校など教育視察。随員のうち3名が慶応義塾(兪吉濬・柳定秀)・同人社(尹致昊)に留学。
- 1883年 朴泳孝ほか修信使の派遣。翌年、新式軍隊創設と科学技術習得のため約60名が日本留学。慶応義塾で日本語を学んだ後に陸軍戸山学校・逓信省などで研修。
- 1894年 「朝鮮政府委託留学生」約200名が慶応義塾に留学。
- 1903年 「韓国皇室特派留学生」50名が東京府立一中に留学。

ところで、こうした日本視察者や留学生に日本の教育はどのように映ったのであろうか。そして、どのような日本教育観が形成され、その後の彼らの思索や活動の展開に影響を及ぼしたのであろうか。本稿は、この研究課題を考える一助として、留学生団体の機関誌や学会誌に掲載された教育論、日本の教育に関する記事を取り上げ、その解題に努めることを目的としている。

但し、その際に留意しなければならないのは、当時、朝鮮政府が視察先、留学先としていたのは日本だけでなく、アメリカと中国からも強い影響⁽²⁾を受けていたこと、各誌に掲載された教育論が必ずしも日本視察・留学経験者によるものではないこと、仮にそうである場合も、その主張が日本の教育の影響を受けたものであるとは言い切れないことである。さらに、1905年から1910年にかけての時期は、相次ぐ日韓協約の締結で韓国における日本の利権が拡大していく途上であり、留学生団体も学会もそれに反発して教育救国運動の一翼を担っていく状況にあった。こうした背景から彼らの「日本教育観」にも変化が生じるようになる。当初は、彼らが日本で見聞した、日本人に行なわれる教育を指していたが、徐々に日本の権力が韓国政府を通じて行なった、後の植民地支配に通じる親日的な教育を指す比重が高まっていくからである。本稿では、日本で行なわれている教育について論じた記事を中心に取り上げる。対象とするのは僅か数年間であるが、この時期は朝鮮政府委託留学生をはじめとする日本教育経験者が帰国し、韓国において民衆の啓蒙活動に活躍する時期であると同時に、日本には私費による韓国留学生が増加し、出身地別の留学生団体

が誕生する時期に当たっている。

取り上げた留学生団体機関誌・学会誌は次のとおりである。いずれも韓国学文献研究所による復刻版『韓国開化期学術誌』（垂細垂文化社，Seoul，1976～1978年）を使用している。

留学生団体機関誌・学会誌一覧

雑誌名	創刊	終刊	編集代表
太極学報	1号 (1906.8.24)	26号 (1908.11.24)	張膺震・金洛永
大韓留学生会学報	1号 (1906.3.3)	3号 (1906.5.25)	崔南善
大韓学会月報	1号 (1908.2.25)	9号 (1908.11.25)	金淇驩
大韓興学報	1号 (1909.3.20)	13号 (1910.5.20)	趙鏞段
大韓自強会月報	1号 (1906.7.31)	13号 (1907.7.25)	金相範・沈宜性 他
大韓協会会報	1号 (1908.4.25)	12号 (1909.3.25)	洪弼周
西友	1号 (1906.12.1)	17号 (1908.5.1)	金明濬・金達河
西北学会月報	1号 (1908.6.1)	19号 (1910.1.1)	金達河
湖南学会月報	1号 (1908.6.25)	9号 (1909.3.25)	李沂
畿湖興学会月報	1号 (1908.8.25)	12号 (1909.7.25)	李海弼

尚、本稿は、本文と注記のほか、「留学生団体機関誌・学会誌にみられる日本教育観 記事一覧」と【資料1】・【資料2】で構成されている。「留学生団体機関誌・学会誌にみられる日本教育観 記事一覧」では、日本の教育の影響が感じられる記事を少し広い範囲で収集した。また【資料1】【資料2】は日本教育観の事例として収録したものである。

1. 留学生団体機関誌にみられる日本教育観

(1) 「朝鮮政府委託留学生」と『親睦会会報』

朝鮮からの日本留学の嚆矢は既に述べたが、それに引き続き明治後期には政府レベルの留学生派遣が3度あった。上記の略年譜のとおりである。このうち最も規模の大きな派遣となった「朝鮮政府委託留学生」⁽³⁾（以下、「委託留学生」と略す）は、「親睦会」という名の留学生団体を組織し、大朝鮮人日本留学生親睦会の名で『親睦会会報』⁽⁴⁾を編纂・発行した。同会報は1号が1895年10月、2号が1896年6月、3号が同年10月、4号が1897年3月、5号が同年9月の発行である。1号の構成は会旨、社説、論説、雑報、演説、文苑、内報、外報、会事記、会事日記になっており、他の号も概ねこれに倣っている。おもな寄稿者は委託留学生とその関係者になるが、例えば、崔相敦「教育論」（3号論説欄掲載）に代表されるように、この時期にはまだ、留学生としての使命感に燃えた、教育の必要性を

訴える論説が多く、日本の教育について論じたものは殆どなく、1号の外報欄に「日本文部大臣の教育談」が『時事新報』より転載されている程度であった。

「委託留学生」は慶応義塾で日本語や基礎的な教科を学んだ後、専門学科が学べる上級学校や官庁、民間会社に進み、1901年から1902年にかけて帰国したという。帰国後の進路は様々であるが、留学生監督であった申海永が普成学校⁽⁵⁾の校長に就任したことに伴って、元「委託留学生」12名が同校の教師となっている。普成学校関係の機関誌には、『親睦』、『夜雷』、『法政学界』⁽⁶⁾などがあり、数多くの論稿が発表されたことが推察される。

(2) 1905-1910の留学生団体とその機関誌

1905年以後、韓国における日本の利権が拡大した時期であることは既に述べた。1904年7月の顧問政治の開始に始まり、1905年11月には保護政治の開始が決定し、1906年2月1日に統監府が開庁、さらに1907年7月には次官政治が開始され、軍隊の解散が決まった。このような日本の一方的な支配力の強化が韓国民衆の反感を買ったことは想像に難くない。私立学校や愛国啓蒙団体である学会が次々と設立され、教育救国運動の中心となっていた。そして留学生団体もその影響を受け、教育救国運動の発信地の一つとなっていくのである。

官費による留学生の派遣は、1903年に「韓国皇室特派留学生」50名が東京府立一中に留学したのを最後に終わったが、この時期には私費による留学生が増加し、いくつかの留学生団体が新たに誕生している。例えば、太極学会、洛東親睦会、共修会、漢陽会などである。これらの団体が「委託留学生」の親睦会と異なるのは、その設立目的が留学生相互の親睦や学術研究にとどまらず、「民族主体意識の確立」や「国家観念・民族観念の扶植」⁽⁷⁾を目指しており、政治的色彩を強く帯びた学会の分派、または日本支部として留学生の出身地域別に創設された点である。例えば、太極学会は朝鮮半島のなかでも関西地方出身の留学生が集う団体であった。張膺震が中心となって1906年8月24日には機関誌『太極学報』が創刊されている。このうち、日本教育観が記されているものとしては、11号に掲載された李東初の論文「精神的教育の必要」がある。李は日本の教育の進化は、「神儒仏が混化した武士道を産出し、それが「国民魂」＝「大和魂」として上流社会から下層社会にまで浸透していることによってもたらされたものであると述べている。

しかしながら地縁を中心に結成された団体には短命に終わるものも多かった。やがてこれら個別の団体は、1906年末に創設の大韓留学生学会、次いで1908年1月創設の大韓学生会、さらには1909年3月創設の大韓興学会へと統合されるようになっていく⁽⁸⁾。それぞれの団体の機関誌は、順に『大韓留学生学報』、『大韓学会月報』、『大韓興学報』であるが、日本教育観について記された論稿として特筆すべきものには、まず『大韓学会月報』4号に掲載された碧人の驩「教育界諸公に献ぐ」がある。「碧人の驩」氏は、日本の文明進歩は陸海軍の制度や政治法制にあるのではなく、英語を重用した教育によってもたらされたも

のであると主張する。他にも同誌7号には「日本」、尹定夏「日本人観」、8号には友洋生「日本文明観」、9号には同「日本文明観（続）」等がある。いずれも日本の近代における発展がどこに起因するのか、韓国がそこから何を学ばよいかに言及した論調になっている。

次いで『大韓興学报』をみると、1号、2号に『大韓学会月報』9号から引き続き連載の崔錫夏（友洋生）「日本文明観（続）」がある他、3号の姜邁「学校の概説」（後掲【資料1】）では日本の学校教育制度の紹介がなされている。さらに6号の李承瑾「列国青年および韓国青年談」は、著者が鹿児島の一学者と出会い、世界列国の青年の歴史について談話した内容をもとに執筆されており、なかでも日本の青年について詳述されている。異色なところでは具岡が「日本苦学生の情形を挙げ我本邦同学諸君に告ぐ」において、自立自活する苦学生の職業を新聞配達、牛乳配達、人力車夫など具体的に挙げて紹介している。最後に、13号に掲載された編輯人こと趙鏞段の「日本教育界思想の特点」（後掲【資料2】）は、日本の過去40年間の教育思想を振り返りながら、欧化・啓蒙期の福沢諭吉の実利主義教育に始まり、実利主義・政治主義・宗教主義の3派が擁立した時代、森有礼が先導した国家主義教育の時代、そして日露戦争後の昨今では異なる分野の各種学校が設立され国民教育が充実していると、教育界の思想的リーダーの存在を評価している。

2. 学会誌にみられる日本教育観

学会は私立学校とともに、韓国に対する日本の支配・統制力が強まるのに対抗して、武力ではなく教育の力で国の独立を守ろうと教育救国運動を展開してきた。1905年以後に設立された学会の数は約20団体⁽⁹⁾で、政治結社的な色彩を漂わせながらも教育の振興を第1の目的に置いていた。学会の構成員のなかには日本留学経験者も多く、彼らはかつて先進制度や技術を学んだ日本から支配されるという苦渋の経験を強いられる。ここではそれぞれの学会が発行した機関誌のなかから日本教育観が読み取れる記事を取り上げ、その特徴をみていきたい。

(1) 『大韓自強会月報』と『大韓協学会報』

『大韓自強会月報』は1906年4月に創設された大韓自強会⁽¹⁰⁾の機関誌である。大韓自強会は、「自強」という文字が示すとおり、日本の侵略から国家の独立を守るためには、殖産興業と教育の振興によって自らを強化するしかないという決意のもとに立ち上げられた。日本人大垣丈夫が、顧問として教育の効果や義務教育について演説するなど、自強会の運営に参加していたことも特徴的である。

『月報』には「教育部」という所収欄が設けられ、そこでは柳瑾により『教育学原理』が6号から13号にわたり8回連続で訳述・掲載されたほか、梁啓超の『教育政策私議』も張志淵によって訳述されていた。教育部に限らず長文の訳述記事が多いのは、『月報』が名

著を広く紹介することで啓蒙書の役割を果たしていたことを意味している。

また、日本教育観が述べられている記事としては、民族運動家で後に西北学会の会長となる鄭雲復の「教育の必要」についての演説記事や、「教育部」に数多くの論説を掲載している金成喜の「教育の宗旨と政治の関係」を挙げることができる。

『大韓協会会報』は、大韓自強会の後身である大韓協会⁽¹¹⁾の機関誌である。後身とはいえ、政治色の強かった大韓自強会が統監府権力によって解散させられたのであるから、その目的も活動も抗日・独立団体から愛国啓蒙団体へと縮小化せざるを得なかった。そして、その一連の動きのなかで顧問の大垣丈夫が暗躍したという。

会報には「教育」欄が設けられ、『学校総論（氷集節略）』が洪弼周によって訳されるなど引き続き梁啓超が啓蒙書として取り上げられていた。日本の教育が論じられた記事としては、世界主要諸国の教育状況を数値で紹介した「世界列強の教育実況調査表」や、同じく数値を用いた呂炳鉉の「我国学界の風潮」がある。前者では大学・中学校・小学校の学校数、教師数、生徒数、学費が、後者では学齡児童中の就学者の割合が示された。

(2) 『西友』と『西北学会月報』

『西北学会月報』は1908年6月に創刊された西北学会⁽¹²⁾の機関誌である。西北学会は、そもそも1906年10月に設立された西友学会と、同年11月に設立された漢北興学会が統合されて誕生した最大規模の学会である。両学会は設立の趣旨や活動の目的がほぼ同じであったため、より組織を強大にして教育救国運動に臨むことになったのである。初代会長には鄭雲復が就いたが、幹部には大成学校の安昌浩（1878－1938）、五山学校の李昇薫（1864－1930）、『大韓毎日申報』の朴殷植（1859－1925）など錚々たる民族指導者が名を連ねていた。

ここでは『西北学会月報』の前誌の一つである『西友』と『西北学会月報』のなかから日本教育観が読み取れる記事を挙げていくことにする。まず、『西友』には朴殷植による「学校の制（世界進化論中抄訳）」および「師範養成の急務」がある。そこには、明治維新以後の日本の教育制度（帝国大学、小学校、師範学校）やそれぞれの段階にける教育内容（教科）が示され、韓国におけるその必要性が説かれている。

『西北学会月報』では、おもに松南春夢こと金源極が教育についての発言を重ねている。「委託留学生」にその名はないが、氏名のうえに「東京遊客」と付しているのも、実際に日本に滞在した際の見聞をもとに書かれた記事と推測できる。金源極は、「教育方法必随其国程度」のなかで、韓国に必要なのは精神の教育であると説き、イギリスの精神は英国の自治性であり、日本の精神は「大和魂の精神」であるという。そして韓国の精神は国と自由、独立、団体、自強不拔、言語文字、同族を愛することであるため、それに必要な殖産興業と教育の振興を、西北学会のある平壤周辺地域の人々呼びかけている。

(3) その他の学会誌

その他の学会誌として『湖南学会月報』と『畿湖興学会月報』を挙げておきたい。『湖南学会月報』は、韓国南西部の湖南地方を中心に誕生した湖南学会⁽¹³⁾の機関誌であり、『畿湖興学会月報』は、ソウル周辺の京畿道と忠清南北道を中心に誕生した畿湖興学会⁽¹⁴⁾の機関誌である。『湖南学会月報』は李沂(1848-1909)によって編集・発行された。李沂は大韓自強会の結成にも参加した人物であるが、もともと実学者で、漢城師範学校で教鞭を執った経験もある。『月報』掲載の「教育宗旨」では、日本人の教育は「尊王尚武」を以ってその宗旨と為していると述べている。

『畿湖興学会月報』には「学海集成」という所収欄があり、2本の教育論文が連載されている。鄭永澤の「教育学」と李膺鍾の「学典」である。前者は教育の目的、教育の必要、教育の限界で構成されており、後者は教育、教育の制度、教育の主義、学校で構成されている。いずれも総合的な教育論となっているが、『月報』の終刊により未完で終わっている。

おわりに

この小論では、1905年から1910年という短い期間を対象に、日本で発行された留学生団体の機関誌、韓国で発行された学会誌のなかにみられる「植民地教育観ではない日本教育観」を抽出する作業を行ってきた。しかしながら、「はじめに」で書いたとおり、それはいくつかの点で困難だった。教育に関する記事は各誌に複数存在していたが、その殆どが独立のためには殖産興業と教育の振興が必要であると訴える、悲壮かつ切迫した論調になっていた。また、記事のなかには、諸外国の学校制度や学齢人口を紹介ものもあり、そのなかには日本の事例も引用されていたが、全体として教育観を示す記事は少なかった。その後、留学生団体機関誌・学会誌は、1907年7月の「新聞紙法」や「保安法」、1908年8月の「学会令」、1909年2月の「出版法」など、日本権力の相次ぐ取締り法令によってともに廃刊されるに至った。

今後の課題としては、例えば「委託留学生」が日本で何をどのように学び、帰国後どのような職業に就いたのか、そして留学経験がどのようなかたちで生かされていったのかというような、人物の活動を通じての日本教育観の形成を追っていきたいと考えている。

(1) これらの資料はソウル大学校奎章閣に所蔵されている。

(2) 日本に修信使が送られたのと同様に、アメリカには報聘使、中国には領選使が派遣されていた。

(3) 「朝鮮政府委託留学生」については、阿部洋「福沢諭吉と朝鮮留学生-1895年「朝鮮政府委託慶応義塾留学生」の場合を中心にして-」(福沢諭吉協会編『福沢諭吉年鑑』(2)1975年61~85頁)が詳しい。

(4) 『親睦会会報』は6号まで刊行されている。所蔵が確認できるのは5号までで、国内では早稲田大学中央図書館(1~5号)、国立国会図書館(1~3号)で閲覧することができる。

(5) 普成学校については、金泰勲『近代日韓教育関係史研究序説』(雄山閣1996年146頁)

～157頁)に詳しい。

(6) 『親睦』は、前掲の金泰勲著書 152 頁図 17「普成学校最初の学生会誌『親睦』」によれば、普専親睦会の発行で 1907 年 10 月 15 日に 8 号が刊行されている。普成学校の後身にあたる高麗大学校には、図書館の蔵書目録に掲載されているものの実物は未確認。『夜雷』は 1907 年 2 月 5 日、夜雷報館から創刊。構成は論説、寄書、時事評論、学術、歴史地理、文芸、実業、外国事情、内国彙報から成る。高麗大学校所蔵の 1 巻 2 号は総頁数 48 頁。『法政学界』は 1907 年 5 月 5 日創刊。普成専門学校の発行で編輯は校友会。構成は論説、散録、雑報、記事、新法令から成る。平均 70～80 頁、新法令は改頁になっている。高麗大学校図書館に 1・2・6～9・14～24 号が所蔵されている。(尚、高麗大学校図書館での史料調査は 2000 年 9 月 23 日に行なわれた。)

(7) 白淳在「『太極学報』解題」vii 頁(韓国学文献研究所『韓国開化期學術誌・太極学報』壺巻所収。Seoul 亜細亜文化社 1978 年)。

(8) この辺りの事情は、阿部洋「『解放』前日本留学の史的展開過程とその特質」(韓国研究院『韓』59 号 1976 年 30～32 頁)に詳しい。

(9) 金根洙「旧韓末救国団体小考ーとくに資料を中心にしてー」(韓国研究院『韓』48 号 1975 年 3～70 頁)にこのうち 13 の学会のプロフィールが紹介されている。また、李鉉淙「旧韓末政治・社会・学会・会社・言論団体調査資料」(韓国研究院『韓』45 号 1975 年 76 頁～111 頁)にも詳しい。

(10) 大韓自強会については、李鉉淙「大韓自強会について」(韓国研究院『韓』48 号 1975 年 71～108 頁)がある。

(11) 大韓協会については、李鉉淙「大韓協会に関する研究」(韓国研究院『韓』48 号・49 号 1975 年 109～150 頁・116～144 頁)がある。

(12) 西北学会については、金泰勲前掲書 176～187 頁に詳しい。

(13) 湖南学会については、李鉉淙「湖南学会について」(韓国研究院『韓』45 号 1975 年 43～75 頁)がある。

(14) 畿湖興学会については、李鉉淙「畿湖興学会について」(韓国研究院『韓』45 号 1975 年 3～42 頁)がある。

留学生団体機関誌・学会誌にみられる日本教育観 記事一覧

著者	タイトル	掲載誌名	号	年月日	所収欄
鄭雲復	(教育の必要)	大韓自強会月報	1号	1906.7.31	—
尹孝定	(女子教育に必要な問題)	大韓自強会月報	1号	1906.7.31	—
張膺震	我国教育界の現象を觀て普通教育の急務を論ず	太極学報	1号	1906.8.24	講壇
大垣丈夫	(義務教育の本義)	大韓自強会月報	3号	1906.9.25	本会会報
—	義務教育の現況	大韓自強会月報	3号	1906.9.25	海外記事
張膺震	我国々民教育の振興策	太極学報	3号	1906.10.24	講壇
朴殷植	学校の制 世界進化論中抄訳	西友	1号	1906.12.1	教育部
柳東作	女子教育	西友	2号	1907.1.1	教育部
松堂 金成喜	教育説	大韓自強会月報	5号	1907.1.25	—
松堂 金成喜	知耻と自信力の主義	大韓自強会月報	6号	奥付なし	論説
晩堂 李鍾濬	教育論	大韓自強会月報	7号	1907.1.25	論説
松堂 金成喜	教師の概念	大韓自強会月報	8号	1907.2.25	教育部
柳東作(訳述)	岡田朝太郎談話 子女教育に就いて	西友	4号	1907.3.1	教育部
松堂 金成喜	教師の概念(続)	大韓自強会月報	9号	1907.3.25	教育部
朴殷植	師範養成の急務	西友	5号	1907.4.1	論説
松堂 金成喜	教育の宗旨と政治の関係	大韓自強会月報	11号	1907.5.25	教育
李東初	精神的教育の必要	太極学報	11号	1907.6.24	論壇
松堂 金成喜	教育宗旨続説	大韓自強会月報	12号	1907.6.25	教育
沈宜性	精神の教育	大韓自強会月報	12号	1907.6.25	教育
松堂 金成喜	教育宗旨続説	大韓自強会月報	13号	1907.7.25	教育
沈宜性	論師範養成	大韓自強会月報	13号	1907.7.25	教育
朴聖欽	普通教育は国民の用務	西友	9号	1907.8.1	教育部
鄭錫迺	教育行政	太極学報	13号	1907.9.24	講壇学園
張膺震	教授と教科に対して	太極学報	13号	1907.9.24	講壇学園
—	日本洪沢家の家訓	西友	11号	1907.10.1	教育部
朴相穆	教育精神	西友	11号	1907.10.1	教育部
張膺震	教授と教科に対して	太極学報	14号	1907.10.24	講壇学園
張膺震	教授と教科に対して	太極学報	15号	1907.11.24	講壇
金鎮初	国家と教育の関係	太極学報	16号	1907.12.24	論壇
金河	女子教育の急先務	西友※	15号	1908.2.1	教育部
勸学子	小学教員の注意	太極学報	18号	1908.2.24	論壇
張道斌	教育の盛衰は国家勝敗の原因	西友※	16号	1908.3.1	教育部
浩然子	教育界の思潮	太極学報	19号	1908.3.24	論壇
呂炳鉉	義務教育の必要	大韓協会会報	2号	1908.5.25	教育
碧人に驩	教育界諸公に献ぐ	大韓学会月報	4号	1908.5.25	演壇

松南春夢	金源極	教育方法必隨其国程度	西北学会月報	1号	1908.6.1	教育部
白星煥		学人不学人の關係	大韓協會會報	3号	1908.6.25	教育
初子		世界列強の教育実況調査表	大韓協會會報	3号	1908.6.25	教育
松南春夢	金源極	実業奨励為今日急務	西北学会月報	2号	1908.7.1	教育部
呂炳鉉		我国学会の風潮	大韓協會會報	4号	1908.7.25	教育
朴漢榮		警告閔北一路	西北学会月報	3号	1908.8.1	教育部
松南春夢	金源極	敬告我平南紳士同胞	西北学会月報	3号	1908.8.1	教育部
卞榮晚		大呼教育	畿湖興学会月報	1号	1908.8.25	興学講究
鄭永澤		教育の目的	畿湖興学会月報	1号	1908.8.25	学海集成
編輯者		日本	大韓学会月報	7号	1908.9.25	雜纂
尹定夏		日本人觀	大韓学会月報	7号	1908.9.25	雜纂
石井居士		敬告我平北諸友	西北学会月報	5号	1908.10.1	教育部
友洋生		日本文明觀	大韓学会月報	8号	1908.10.25	雜纂
東京遊客	金源極	告我海西同胞	西北学会月報	6号	1908.11.1	教育部
鄭永澤		教育学 教育の必要	畿湖興学会月報	4号	1908.11.25	学海集成
友洋生		日本文明觀(続)	大韓学会月報	9号	1908.11.25	雜纂
呂炳鉉		国民自存性の培養	大韓協會會報	9号	1908.12.25	教育
鄭永澤		教育学 教育の限界	畿湖興学会月報	5号	1908.12.25	学海集成
嵩陽山人		教科書検定に関する忠告	大韓協會會報	10号	1909.1.25	論說
鄭永澤		教育学 教育の限界	畿湖興学会月報	6号	1909.1.25	学海集成
李沂		教育宗旨統説	湖南学会月報	8号	1909.1.25	教育弁論
—		学課の要説	西北学会月報	9号	1909.2.1	教育部
鄭永澤		教育学 教育の限界	畿湖興学会月報	7号	1909.2.25	学海集成
—		学課の要説 地理科	西北学会月報	10号	1909.3.1	教育部
崔錫夏		日本文明觀(続)	大韓興学报	1号	1909.3.20	雜纂
呂炳鉉		兵士教育の概要	大韓協會會報	12号	1909.3.25	教育
嵩陽山人		教育普及に対し発展の方法を先究す	大韓協會會報	12号	1909.3.25	教育
崔錫夏		日本文明觀(続)	大韓興学报	2号	1909.4.20	雜纂
李膺鍾		学典の叙	畿湖興学会月報	9号	1909.4.25	興学講究
金永基		教育の新潮	大韓興学报	3号	1909.5.20	演壇
姜邁		学校の概説	大韓興学报	3号	1909.5.20	学海
李膺鍾		学典 教育・教育の制度	畿湖興学会月報	10号	1909.5.25	学海集成
李膺鍾		学典 教育の主義	畿湖興学会月報	11号	1909.6.25	学海集成
李膺鍾		学典 学校	畿湖興学会月報	12号	1909.7.25	学海集成
松南		今日は吾人の活動時代	西北学会月報	17号	1909.11.1	論說
春夢子		教育家の職分	西北学会月報	17号	1909.11.1	論說
編輯人(趙膺段)		日本教育界思想の特点	大韓興学报	13号	1910.5.20	論著

※タイトルのない記事には適宜、仮題を付し括弧で示した。

學校의 概説

姜 邁

大抵學校의 起原은 此를 大分 三 種의 別이 有호니 其 最古호는 者는 社會의 特別階級으로 起因호는 者는 上古 埃及 及 印度에서 호는 僧侶의 子弟를 一定호는 處所에 集合호야 (은이 神殿) 其 階級의 必要호는 業務를 教授호야고 希臘에서 호는 學問 一道호는 特別호는 人格에 從屬호는 事호는 思惟호는 事호는 然호는 希臘의 人은 性格이 活潑호는 事호는 知識을 求호는 事호는 傾向이 強硬호는 事호는 此等 精神의 業務호는 特別호는 個別的의 卓高호는 事호는 不喜호는 事호는 自由의 歸着호는 事호는 計圖호는 事호는 是호는 自由호는 事호는

第二種 卽 個人 又호는 自由의 私團體도 由호는 事호는 設立된 學校를 見호는 事호는 至호는 事호는 第三種의 學校호는 一國의 主權者 或 公共團體가 國民의 知德을 啓發호는 事호는 社會의 進就호는 事호는 計圖호는 事호는 特別히 教師를 招聘호는 事호는 相當호는 設備를 經營호는 事호는 至호는 事호는 也

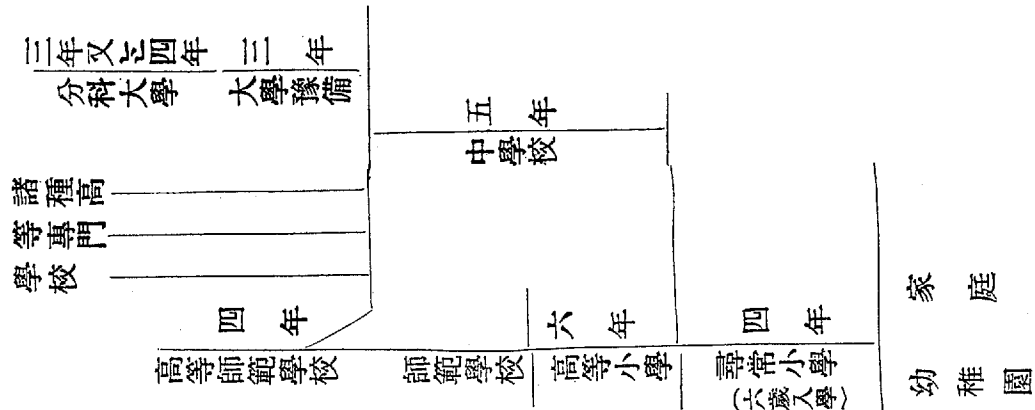
以上과 如호는 歷史的의 觀念으로 論호는 事호는 學校호는 或 階級의 必要에 應호는 事호는 設立호는 事호는 現世에 在호는 事호는 其 不可호는 事호는 感覺호는 事호는 事호는 又 或은 言호는 事호는 學校호는 但 一時에 急호는 事호는 爲호는 事호는 設立호는 事호는 者호는 一 稱호는 事호는 此호는 不當호는 事호는 誤解라

蓋 知識의 進歩를 隨호는 事호는 教材의 選擇과 教授方法에 就호는 事호는 特別의 研究를 要호는 事호는 自然호는 趨勢며 又호는 各 家庭에서 各 其 兒童을 爲호는 事호는 個別的의 專務者를 得호는 事호는 至호는 事호는 難호는 事호는 人인 是호는 是호는 因호는 事호는 一定호는 位置에 學校를 設置호는 事호는 必要호는 器具를 供給호는 事호는 特殊호는 規條를 設定호는 事호는 再히 贅說호는 事호는 無호는 事호는 也

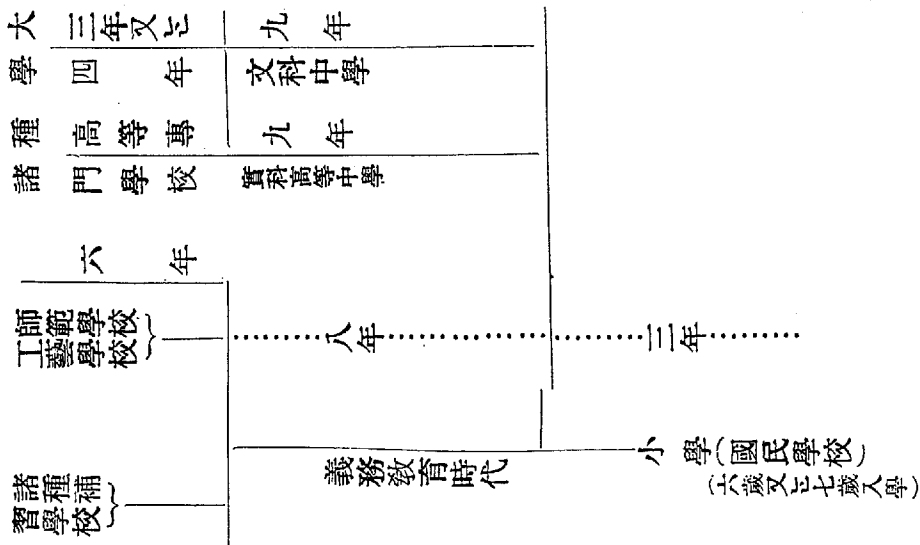
要컨디 學校호는 時勢의 必要에 基因호는 者이며 又호는 社會的의 發達上에 重要호는 機關이라 故호는 學校호는 卽 一般 社會의 精神의 財産을 分配호는 事호는 源泉이라 可謂호는 事호는 也 凡 人은 物質的의 財産에 도호는 事호는 戀호는 事호는 事호는 熙호는 事호는 往호는 事호는 穰호는 事호는 來호는 事호는 事호는 精神的의 財産이 리오 然호는 事호는 其 精神의 財産을 傳播호는 事호는 且 進就호는 事호는 學校호는 其 貴重호는 事호는 可知호는 事호는 也 然호는 事호는 人의 道德과 知識의 狀態은 恒常專一호는 事호는 不能호는 事호는 階級의 差를 生호는 事호는 又호는 土地形勢에 從호는 事호는 種々相異호는 事호는 不無호는 事호는 學校도 自然호는 事호는 種々의 區別리 有호는 事호는 不免호는 事호는 也 日本及 獨逸의 學校系統을 概述호는 事호는 我韓 教育界에 參考를 作호는 事호는 也

日本의 教育始期호는 幼稚園으로 起點을 作호는 事호는 此호는 學齡以前의 兒童을 教育호는 事호는 處所호는 及其 學齡에 已達호는 事호는 尋常小學에서 六年(義務教育)과 高等小學에서 四年으로 一般國民의 知德을 養成호는 事호는 其次에 中學校 五年으로 社會中等의 地位를 訓練호는 事호는 實業과 及 各科學을 專修호는 事호는 爲호는 事호는 種々의 專門學校가 有호는 事호는 高等學術를 研究호는 事호는 爲호는 事호는 各大學의 設置가 有호는 事호는 左表와 如호는 事호는 也

日本의學校系統表



獨逸學校系統의一例(教育主意는日本과畧同)



以上과如히其系統을判別함은엇지徒然히事이리요蓋如此其組織이無을진디教育은頗히其効를奏키甚難호所以라噫라支那中古의周官法度를暫考스건디庠序學校의制가井然具備호야州國民을導率함으로治平의風化를馴致스야고今日西球의所謂文明云々者도또호此改良의教育에實在함이니此는我韓人士의一般知了함은비라所以로比年以來에我國學校가驟增스야學校設立이日新月盛스호傾向이有을지라雖然이는及其內容을觀察스면據히系統的組織이欠乏함으로其混濟拉雜함을不勝호야課程은一定호方向이無호고學級은錯雜이無常호야小學々齡에在호者도外國語를徒習호야自國의精神을抹殺호며及其教鞭을執호者는摠히其選擇함이適當함을不得호야法學을修호者는敎理의課程을擔任호며農工을學호者는師範을講호며日語는粗解스면空然히化學物理를說호야至使純粹호青年으로聽災迷惑을成劑호는評論이喧藉호지라엇지效果의圓滿함을得호리요此는當今我韓教育家諸公이淵然深思호야教鞭의招聘과教材의選擇을紀律的進行호기를是務호야如此호病根를拔去호기로戮力호면猶可호려니와만호此와反호진디비록村々에學校와家々에覺藝이有호야滿入域教育教育호지라도其效果는半歩를前進키不能호리니唯我教育界諸公이여

日本教育界思想의 特點

編輯人

今에 日本國文化의 進運을 論評하는 者一 輒曰 日本은 東洋의 先進國이라 日本은 世界의 一等國이라 하는 야 그 一 船이 堅고 砲가 利함에 畏靚하며 그 一 將이 練고 兵이 強함에 驚續하여 吾國은 奈何 오 吾國은 奈何 오 하는 야 狂奔하는 者도 有하며 痛哭하는 者도 有하며 甚하는 者은 自身을 犧牲하여 赤血을 揮灑하여 도다 嗟呼々々라 彼船堅砲利하며 將練兵強함이 엇지 無故히 致호니 리오 彼四十年間 幾多志士의 心血을 注하여 全國人民의 覺醒을 促키 所以니 此는 余의 今 日 持論하는 바 日本의 四十年來 文明의 步武은 即 日本의 四十年間 教育의 效果라 可謂호니 리오 다 雖然이 나 教育이라 는 것은 또 엇지 空然히 致호니 바 이 리오 반다 시그 一 教育界 思想 如何에 在호니 지라 此는 또 호니 余가 日本 教育界 思想을 論述호니 의 眷々함이 르다

大抵 日本 教育界의 思想 變遷은 그 一 久함이 四十餘年에 跨고 그 一 遷移함이 가장 複雜하여 數頁의 論文으로 綜詳키 難호니 나 今의 다만 그 一 全般 思想界를 支配하여 影響이 家國의 普及하는 者를 概括的으로 論述하여 我韓 教育界에 紹介코져 호니 노라

第一 實利主義教育 (啓蒙時代, 歐化鼓吹)

大抵 明治維新의 改革은 開國進取의 國是를 斷行하얏스니 當時의 一般 思想界의 知々潮流는 一派는 即 實學尊重에 在호니 도다 今에 實學主義 教育派의 急先鋒을 作키 曰 福澤氏의 事를 略記호니 曰 氏는 豐前의 人이라 初에 緒方洪庵에 就키야 蘭學을 修고 安政五年頃에 江戸에 來호니 야 (今, 日本東京) 英學을 研究하얏시며 安政六年에 幕府의 使節을 隨호니 야 北米에 渡航하얏고 慶應三年에 다시 米國에 漫遊호니 야 文物制度를 精詳히 視察하고 歸國하얏더라

時는 中히 佛蘭西에 革命이 起호니 야 民權自由平等의 思想과 個人的 功利思想이 隆盛호니 時라 福澤氏는 다만 泰西文明의 物質的 方面만 視察호니 에 不止하고 更히 精神的 文明思想을 感受호니 야 文明開化의 一大化身을 作호니 야 昂然호니 意氣로 本邦에 歸來하얏더라

氏가 歸國후 後 軒冕에 念을 絶棄호니 고 後進을 誘導호니 야 國民思想을 開拓키로 專心從事호니 시 먼저 (西洋旅行案内)를 刊行하얏시며 明治二年頃에 (世界國盡) 及 (西洋事情)等의 著書를 公表호니 니 就中 (西洋事情)의 內容은 (四海一家, 五族兄弟, 蒸氣濟人, 電氣傳信)等의 文字 一 然 整然호니 西洋諸國의 文物制度를 極히 簡單히 一書에 排置하얏다 當時 一般 思想界을 傾動호니 야 實學思想의 潮來호니 는 導線을 作호니 지라 故로 此書는 當時 一般 國民의 歡迎을 受호니 야 二十五萬餘部를 刊出호니 의 至호니 야 더라 記者 此事를 論호니 시 多少 感想에 襲來호니 음을 不覺호니 것노니 二十年前에 我國이 비로소 歐洲

에 玉帛을 通하 以來로 처음으로 西歐事情을 記述한 一書를 見하 았나니 卽 俞吉濬氏의 西游聞見錄이 是라 그 一立論음이 偏倚치 안이 하고 그 一敘事음이 甚히 綜詳하야 有志人士의 一讀하 價値가 確有하 았거늘 歡迎은 姑捨하 고 甚至於 排斥하 는 者도 不無하 았으며 余는 該書을 購覽코자 苦心하 았으나 不得하 았나니 엇지 人民의 思想이 이가 正反對를 示하 았단고 故로 今日에 口으로 鄰邦의 富強을 能言하 거나 全般人民의 思想如何를 研究하 야 改進或奮發케 하 지 못하 진대 一日의 新事業은 一日에 止할而已니 엇지 社會에 波及하 는 好果을 得호리오)

福澤氏는 更히 明治五年頃에 (學問의 勸)이라 는 著書를 公表하 니 그 一主旨는 自來日本의 虛文을 一掃하 고 日用常行에 必要하 實學를 主唱하 았시며 更히 人權平等의 原理를 道破하 야 平民의 覺醒을 促하 았으며 福澤氏는 眞實의 獨立自尊의 一平民으로 眼中에 政府도 無하 며 貴族도 無하 았고 尙 慷慨烈氣의 雄健思想으로 應病授藥하 야 機宜에 投合하 았도다 이에 平民의 自覺이 日衆하 며 實學의 思想이 膨脹하 야 西歐崇拜하 는 氣風이 滔々히 一般思想界에 倒蕩하 니 政府는 機를 利用하 기에 汲々하 야 明治五年에 實利主義教育에 學制를 頒布하 았도다 其 要旨는

- 一 小學校教育을 尊重하 事
- 一 師範學校를 開設하 事
- 一 女子教育을 男子와 同히 하 事
- 一 商法學校를 開設하 事
- 一 反譯을 急히 하 事 (以外畧)

等이 오수에 當時學制의 大要를 學하 건디 全國의 學校는 此를 文部省이 統轄하 고 全國教育을 八大學區에 分하 며 每大學區 一區에 三十二中學區를 置하 야 每區에 中學校 一所를 置하 고 (全數 二百五十六校) 每中學區 一區에 小學區 二百十區를 置하 야 每區에 小學校 一所를 置하 고 (全數 五萬二千七百六十校) 其他工業學校、農業學校、商業學校等은 中學의 一種으로 하 야 強硬하 態度로써 實施키를 斷行하 고 文部省은 更히 同五年三月에 東京에 師範學校와 六年八月에 大阪에 七年二月에 愛知、廣島、長崎、新潟에 師範學校와 同年三月에 東京에 女子師範學校를 開設하 야 人民의 模範을 表示하 였더라 (此外各學校는 畧) 眼을 一轉하 야 私立學校方面을 觀察하 건디 (慶應義塾、同人舍、共立學舍、三漢學舍、攻玉塾、等中學程度學校와 佐原純一의 共學舍와 鳴門義民의 鳴門塾과 高橋秀雄의 弘道學舍와 江原素六의 集成舍等이 驟然并起하 야 一時勢力을 飛揚하 였도다 雖然이나 當時教育主義는 甚히 完全라 謂키 難하 야 官私의 別도 無하 고 高等初等의 別도 無하 야 總히 實利主義教育으로써 實用知識을 養成하 기에 在하 였도다 時에 新島襄은 耶蘇敎의 精神을 輸入하 야 平民頭腦의 一點光明을 興하 는 지라 이에 平民의 覺醒이 益々奮發하 야 在野黨派의 民權運動이 猛烈하 야 天賦人權、民權自由의 思想이 一世를 震撼하 는 지라 이에 志士의

視線이法律學校에注集을여도다文部省에서明法寮와東京開成學校의開設이(現今帝國大學)有하고私立에係호는者는明治十三年에京橋에專修學校와(今移于神田區猿樂町)十四年에麴町區有樂町에明治法律學校와(岸本辰雄、宮城浩造等設立明治十九年移于神田區駿河臺更名爲明治大學)十二年에神田區駿河臺에和佛法律學校와(今法政大學)十五年十月에東京專門學校(此校는大隈重臣及小野梓等の設立이니爾來變遷을更호야早稻田大學이된者一라)等이爭起호야法政을標榜함에至호니當時學界는政治熱이熾盛호야其蔓延함을抑遏키不能호겟더라故로當時全般教育界의思潮는大學三派의分호有호니

一、實利主義 二、政治主義 三、宗教主義等이라

蓋實利主義의教育이漸々其步武을趨進호는同時에政治的의教育又는宗教的의教育이亦是其頭角을現호은自然의變勢라可謂호리로다然호나當時以上三派의共通流行호는思潮는即自由을謳歌호며社會平衡을唱道호야其極度에達호는즉이에國家主義教育이必要함을高叫함에至호여도다

一 國家主義教育(國粹尊重 國是標榜)

大抵明治教育史上教育의行政이大히整頓호야學校의系統이齊々히其成績을奏호은明治十九年間으로써嚆矢를作호지니當時에가장大功績이有호야一指를指屈호는者는森有禮가其人이라

森有禮는鹿兒島人이니幼少時로부터天才穎悟호야神童의稱號를得호였시며慶應元년에藩命으로써英國에留學호였고明治元年頃의還國호는者一니森氏은思想이急進호고議論이風發호야當時의一個快活男兒라그一斬新호知識과遠大호抱負호는時人의호호야吾驚服호은不已호였더라彼가文部大臣의位에拔擢되을時는自由民權主義의思想이一般社會의膨脹호던時라彼の爛眼은能히國粹保存을唱導호야國家主義教育을高叫호였도다明治十九年에먼저帝國大學令을頒布호고翌年에師範學校令과及小學校令、中學校令、諸學校通則을發表호야秩序가整然호學校系統을見호에至호였시며森有禮의教育方針은가조師範教育振興에注力호였시며徹頭徹尾히國家主義를不忘호였나니其帝國大學令第一條에云호였시되帝國大學은國家의需要에應호만호學術技藝를教授호다호였도다然호나彼森氏는歐化主義에心醉호는者一라明治六年頃에明六社를創起호야時勢를痛論호야一世를震蕩호였고男女同權을絶叫호야明治八年에契約的自由結婚으로廣瀨常子(森氏의妻)를娶호였시며明治十二年에特命專權公使의使節로英國에赴호시名字의東洋印을嫌惡호야モリ(모리)라改稱호였나니후에其教育行政을觀호진디그一平日持論과懸絶호야氏의思想은善히時機에投호호야崢嶸玲瓏호을賞讚호겟도다當時에만일彼森氏의風飛蠶落호는行政이無호였호진디日本의社會는又破綻崩解호야底止호를바르不知호였쓰리니 비록井上哲次郎과如호는者一

讜論을發揮하시나 (井上氏은宗教와教育의衝突이라 논(論文을發表하시야國家主義를唱導하시) 엇지狂瀾의奔放을隻手로挽回하시리오然을즈森氏는日本教育界의大勳됨이不愧하겠도다眼을更轉하시야最近教育界狀況을觀察하시진디日露戰雲이初齋에國民의思想은國民教育의普及이戰勝의原因을作하시었다하시야教育熱이益々熾盛하시야各種學校가陸續增加하시의至하시니京都에帝國大學文科大學과仙臺에高等工業學校와鹿兒島에高等農林學校와小樽에高等商業學校와新瀉에醫學專門學校와金澤에高等工業學校와奈良에女子高等師學校等을增設하시며安川敬一耶은三百萬圓을投하시야福岡에私立專門學校를設立하시며古河虎之助는百六十萬圓을寄附하시야福岡醫科東北大學理科及農科大學의建築을贊助하시었다近日小松原英太郎이文相의位에居하시以來로學制改革을斷行코자하시야全國社會에議論이沸騰하시거니와該案의結局은後日을俟하시야報道하겠노라

觀하시어다帝國今日에在하시야教育이先務에先務를作하시것은誰가不知하시리오만은能히全般社會의向背를察하시며思想潮流의標幟를定하시야教育이社會를改良하시며教育이國家를發展하시의注力하시는者一幾人이有하시고만일人이教育々々한잇가我도教育々々하시며人이教材를選擇하시잇가我도選擇하시며人이數學物理를講하시잇가我도數學物理를講하시야一定하시主意가無하시고盲從하시의不過하시진디比루百年千年萬年을教育하시라도國家의는조금도有益하시無하시니속에日本教育界의思想變遷과教育行政을詳察하시진디我의今日地位도甚明하시것이오今日我帝國教育界는何者를尊崇하시는지도可知하시지라도속에帝國教育界現象을以上에對照하시야取措코자하시진디果然如何하시고今日我帝國教育界는實學을尊重하시야理化及農工等을孜孜研究하시時라雖然이나我國의地位는日本明治初와大異하시지라그一實學을尊崇하시야實利를講求하시는同時에不可不歷史地理及法制經濟의教材를選擇하시야公民的의教育을施하시最急하시니此意를能知하시는者一幾人이有하시고惟我帝國教育界諸公이여

9. インド「国民教育」史上の日本教育論

弘中 和彦 (筑紫女学園大学)

1. 日本の教育への関心

(1)一世紀半の歴史

日本の教育は19世紀の最後の四半世紀頃からインドの知識人の注目するところとなる。その受け止め方は今日までの間変転を遂げるが、ともかく、強烈なインパクトをインドの教育界を含む各界に与え続けてきたといっても過言ではないであろう。

現代においてもその高い評価が存在していることは独立インド初代首相ジャワハルラール・ネルーの後掲の日本教育論のなかに読み取ることができるし、また、1998年にノーベル賞を受賞したインドの経済学者アマーティア・セーン教授の次の発言のなかに明確に示されるであろう。「過去一世紀半の間に日本が体験した経済、社会、そして文化面での著しい成功は、教育における先見の明と知的な創造性によるところが大きく、そして少なからず倫理的な責任感という社会的特質によるものと思われます。」(朝日新聞2000年10月18日号『未来にむけて—大江健三郎氏との往復書簡—』)

ここでは日本の教育のインドへの影響の様態を究明する基礎的作業の一助とすべく、各界の代表的なインド人の手になる日本教育論あるいはそれに関わる論を取り上げ、その主内容と思われる部分を紹介するものである。後述するように、日本教育論はしばしば同時代に並行的に起こった「国民教育」論との内的関連を有し不即不離に展開されてきたと言える。そこでこの問題は広く「国民教育」の樹立の問題とも接合し看過し得ない意味を内包している。

日本の教育に最初に注目したインド人は多分、ベンガル教育局 (Department of Education) の上級職の任にあり多くの著作を残したムコパッダエ (Bhudev Mukhopadhyay 1827-1894) であろう。インドの教育学者K. クマール氏はこれについて、「ブーデーウ・ムコパッダエはインドに西洋の知識を導入することを主張し、1875年の著書で、インドの統治者が300人のインド人を西洋に派遣し西洋の学問を学ばせ、同数の西洋人を雇ってインド人の教育に当たらせることを提案している。明治日本の指導者たちの採用した戦略を明らかに意識したものであった。」と述べている⁽¹⁾。

(2)関心の背景

ムコパッダエのこの行動は年代的には明治5年(1872年)の学制からほどなくのことで、日本の教育が早くも外部世界に刺激を与え出したことを示している。以後、日本の教育への関心はインドで雪だるま式に大きく膨らんでいくのである。

それは民族意識の興隆と無関係ではない。インドに西洋的な教育がもたらされるのは16世紀に開始されるカトリック・ミッション、続く18世紀以降のプロテスタント・ミッションの活動においてであるが、そのことに触発されあるいはその活動への牽制の狙いを込めて、教育政策としての取り組みとその普及が開始されるのはイギリスのインド支配権の確立を見てからである。その支配地であるベンガル、ボンベイ、マドラスの三管区において

19世紀初め頃から、統治上の人材の確保を主眼とする英語による西洋的教育が積極化する
のである。

イギリスはその導入した教育を近代教育 (modern education)、またインド在来の伝統教
育を土着教育 (indigenous education) と呼称した。このような歴史的概念に規定される
性格の近代教育というものを名実共に備わる近代教育に脱皮せしめる運動が、19世紀後半
来、主として宗教改革運動を通して展開する。

ブラフマ協会 (Brahma Samaj 1828 年立)、アーリヤ協会 (Arya Samaj 1875 年立)、ラー
マクリシュナ・ミッション (Ramakrishna Mission 1895 年立)、神智協会 (Theosophical
Society 1879 年立) 等、当時の主要な宗教教団は一様に伝統宗教・社会の改革を押し進め、
その一翼としての、いなその最重要手段としての、教育の改革と普及を極めて重視する。
この運動は植民地教育の矛盾と密接に絡んでもいた。

(3) 植民地教育の特質

ここに、これら宗教教団の意識にも窺われその後の民族運動の興隆のなかで厳しい批判
糾弾の対象となる、またそのこととの関係において日本の教育への関心度が高じる背景と
もなる、いわゆる植民地教育の特質について言及しておこう。

インドの近代学校制度は 1854 年に発足している。それは、イギリスの産業革命の進展に
伴うインド市場化の要請に基づく統治政府の鉄道、電信、幹線道路の建設をはじめとする
社会的諸分野の大々的な開発並びに行政機構の拡充整備の一環あるいはこの事態への対応
であった。本国の当局の現地総督に与えた近代学校制度の樹立を命ずる通達に示されるよ
うに、その主目的は「有用な知識を広め――責任のともなう職務に安んじて任かせ得る
誠実な雇員を得る」ことであつたのであつて、畢竟、教育を植民地支配の道具とすること
にほかならなかつた。

すなわち、それは行政上の人材確保の見地から高等教育に比重をかけ、大衆のための初
等教育、また女性、不可触民、少数民族等社会的被抑圧者の教育をネグレクトし、さらに
伝統文化の発揚や民族意識の成長を許さないものであつた。爾来、インドの教育政策は基
本的にこの通達の方針のもとに展開するのである。

2. 「国民教育」運動における国際比較と日本の教育の位置

(1) 国際比較の必然性

上記宗教教団の活動は民族意識の興隆にも寄与し、19世紀末頃からの政治運動に引き継
がれる歴史的意義を有し、民族運動の一環、いやその核としての相貌すら帯びる「国民教
育」運動を台頭させる。今世紀初頭において激化したそれは、政府認可のあらゆる教育機
関のボイコットと国民学校・国民大学を建設する運動となつて展開するが、その主調はイ
ンド諸民族に対する国民意識の作興並びに西洋のそれと比肩し得る近代教育の要求であつ

た。この背景においてその「国民教育」概念の形成の上に西洋諸国の教育との、いや、しばしばアジア、近東、ラテンアメリカのそれとの対比が登場するのは避けがたいことでもあった。

換言すれば、「国民教育」は単純に民族側の内なる願望・要求の投影といった大まかな認識では把握し切れないものがあり、海外の教育理念や実際の摂取あるいは比較を通してその内実の検証、確認、あるいは将来的展望を行ってきた傾向がある。要するに、インドにおける民族側の教育運動には本来的に常に国際的モメント、国際比較の視点が入っており、また、自らの運動の必然性、妥当性、正当性をこの関係において求めたと見ることができると。この国際比較でとりわけ、重要な位置を占めるのが日本の教育であったと断言し得るであろう。

(2)日露戦争の意味

インド各界の日本に寄せる関心の理由は根本的には幕末のいわゆる不平等条約により日本がインドと同じ植民地的窮境に陥りながら、あらゆる困難を打破してそこから立ち上がりつつあるという認識に基づくものである。本稿で取り上げるインドの著名な民族主義者ラーラー・ラージパット・ラーイは1915年に日本に滞在しその体験に基づく書で次のように述べている⁽²⁾。「この50年のうちの25年いやそれ以上、日本は自国の関税権を行使する自由を奪われた国際条約に直面して苦しんだのである。この期間、日本にいる外国人は完全な治外法権を享受し政府と人民の上に君臨したのである。」

こうした認識のなかでインド人に衝撃を与えたのは日露戦争における日本の勝利で、それは文明史的出来事を意味するものであった。若き日のジャワーハルルール・ネルーはその時の感激を後に自叙伝に次のように記している⁽³⁾。「もう一つの重要なできごとで私に影響を及ぼしたものとして忘れることのできないのは日露戦争である。日本の戦捷は私の熱狂を沸き立たせ、新しいニュースを見るため毎日新聞を待ち焦がれた。――私の頭はナショナリスチックの意識で一杯になった。インドをヨーロッパへの隷属から、アジアをヨーロッパへの隷属から救い出すことに思いを馳せた。更に思いは迸り、私が剣を取ってインドのために戦い、インド開放の一助たらんとする英雄的行為を夢見るのであった。」

この意識を持続し自己形成したのはネルー一人にとどまらず多くのインド人に及んだ。期せずしてこの戦勝の原因の探究が全インド的に起こった。

(3)日本の興隆の源泉としての教育

インド人のその探究は多方面にわたり、例えば、近代西洋文明に否定的でそれを範とする日本の発展に対しても遂に、これを評価しなかった感のあるマハートマー・ガンディーですら後掲の論で次のように述べ日本の戦勝の意義を示している。「しからは、この勇壮なヒロイズムの秘訣は何か。我々はこの問題を繰り返し自問自答し答えを見出さなければ

ならない。その答えとは団結、愛国心、死をも恐れぬ行動の決意である。」ガーンディーとは思想を異にする他の多くのインド人も戦勝の奥にあるものへと関心を集中させ日本の教育に到達するのである。

西洋とインドとの落差の寄ってくることを「教育、教育、教育のみ！」⁽⁴⁾とする、本稿で取り上げる近代インド最高峰の宗教思想家とされるスワミー・ヴィヴェーカーナンダはもとより日本の教育に着目し、後掲の日本教育論に見るようにそれを最大限に評価するのであるが、同じく本稿で取り上げるインドの著名な土木技術者で政治家でもあったヴィシュヴェーシュワライヤーも後掲の日本教育論で次のように述べている⁽⁵⁾。「19世紀の終わり頃の私の日本旅行で深く印象づけられたのは教育であった。日本の指導者たちは教育があらゆる進歩の基礎であるという秘密を探り当てたのである。」同様な認識を先のラーラー・ラージパット・ラーイも後掲の日本教育論で示している。

インドの教育史家P. L. ラウト氏はこうしたインドに漲る当時の雰囲気や次のように描写している⁽⁶⁾。「日露戦争の結果はアジアの文明もまた、世界でユニークな位置を占めていることを明確に実証した。インド人の民族意識は強く呼び覚まされた。その結果、インド人は日本の教育制度を熱心に学び始めた。日本の教育制度に関する政府の報告書が出され、多くのインド人学生が教育を受けるために日本へ出かけた。この報告書のほかに1906年には『日本の教育制度』という定期刊行物もカルカッタで発刊された。これらの書はインドの青年に革命意識を鼓吹し、青年たちはこの国に教育革命をもたらすべきだと熱心に論じた。」

実際、この頃を境にインド人の日本留学が増大しました民族主義者の来訪も少なからず見られる。この時代状況は日本の外交当局によっても捕捉されていて、現地領事と日本外務省との間で取り交わされた幾つかの公文書を通して、インドにおける日本への広範な関心、日本語学習や日本留学の強い願望、が存在していたことを認め得る⁽⁷⁾。日本の興隆はインド人に教育こそが、国の解放と興隆の決定的な鍵であることを確信させる契機となったことを物語るものである。

(4)日本を範とするインド人の教育活動

勿論、日露戦争の二年前に締結された日英同盟にインド人が無関心でいたわけではないが、イギリスの対露政策に日本が屈服させられたという認識からか、同盟に規制される日本の国際的行動を含めそれへの批判的反応についての情報を入手し得なかった⁽⁸⁾。

当時の国際情勢は極めて厳しいものがあつたし、インドと日本は次の諸関係の発展によってこれを横断・凌駕して行つたと言うべきかもしれない。すなわち、原綿を中心とする貿易の飛躍的発展、先のスワミー・ヴィヴェーカーナンダやかの詩人ラビンドラナート・タゴールと岡倉天心や横山大観との交友に代表される両国知識人の盛んな交流、そして国の危機意識から専ら近代西洋を注視し学び取ることを主張する福沢諭吉の『脱亜論』(明治

18年)に象徴される脱亜入欧意識の奥底に潜在し、明治10年代の民権論などに顕現するアジア解放の思想、そして20年代に輩出する「基本的には善意の思想」で「どこことなく平和主義的ニュアンスをまとっている」南進論に横溢するアジアとの連帯感(矢野 暢:『[南進]の系譜』中公新書 昭和50年 64-65ページ)、更にそれを引き継ぐ岡倉天心の『東洋の理想』(明治35年、原文英語、ロンドンで出版)に代表されるアジアとの一体感の高揚等に見られる友好的感情、並びに来日のインド人革命家に対する支援あるいは官憲からの保護に当たる民間の次元の積極的対応である。

日本を範とする時代を彩るこの潮流を投影する究極の教育的例証と言うべき一つは、1906年から1913年にかけて帝国立法参事会の民選議員として活躍した本稿で取り上げるゴーパル・クリシュナ・ゴーカーの初等義務教育法の上程をめぐる同参事会を舞台とする活動であってその際、しばしば日本が引き合いに出されるのである⁽⁹⁾。二つは本稿で取り上げるドーンデー・ケーシャウ・カルウェーによるブネーにおける1916年の「インド女子大学」の創設であって、東京目白台の「日本女子大学校」(現「日本女子大学」)をモデルとしたのである。名称もそれに倣っているが、教科編成などの実際面で類似するところが少なくない。インド初の女子大としての同大は後、「SNDT女子大学」と改称しインド有数の大学に成長し今日に至っている⁽¹⁰⁾。

3. 日本の教育の認識の構造

(1) アイデンティティと近代化の問題

日本が教育によって国を興したと見る時、インド人はその教育の性格や機能をどのようなものと認識したのであろうか。概括すれば、その一つは自国文化の発揚と国の興隆を同時に進める媒体としてである。既述のごとく当時インドでは宗教・社会改革活動が展開し更に民族運動が活発化して次第に全局面を覆い始めていたが、その文脈においてそれがインドの進歩ないし近代化とどのようにかかわるのかという問題が焦眉の急として浮上していた。時あたかも西洋におけるインド文化の評価の高まりもあり、インド人としての自信と誇りを回復しつつあるなかで、日本がその答えを与えていると受け止められたのである。

明治の日本を文化面で特色づけるのは「和魂洋才」であった。先のヴィシュヴェーシュワライヤーが後掲の憂国の趣きをもつ『インドの再建』と題する書で、「インドの将来的モデルとしてカナダに、西洋文明を採用したアジアの国として日本に特に言及する。」と述べているのはこの間の事情を示している⁽¹¹⁾。また、後掲の諸論には日本が積極的に西洋文化を搾取しながら自己喪失に陥っていないことの評価が散見される。

その二つはインドの政治的自由、産業化、諸制度の近代化を迅速に達成する最も有効な手段としてである。ラーラー・ラージパット・ラーイは先の書で、西洋人はこれまで、インド人を性急に過ぎローマは一日にして成らずと批判するが、教育さえあればそれは可能であることを日本が示している、と次のように続ける。「実際の日本を見た者にせよ遠くか

ら日本について読んだ者にせよ、日本は 19 世紀の半ばまでほとんど何も持っていなかったという最も重要な事実を忘れがちである。日本の近代的体制は 1868 年に始まったのである。」⁽¹²⁾また、「天皇は国民の協力と支援のもとに第一級の陸軍と偉大な海軍を作った。しかしもっと驚くべきことは民主的議会制度と現代的教育制度の導入に成功したことである。」⁽¹³⁾

(2) 「和魂」の普遍性の問題

日本の興隆とその原動力としての教育は様々な波紋を投じ、まずそれはイギリスのインド統治機構にとっての新たな障害であった。インドをアジアにおけるイギリス帝国の拡張の基盤とすることを考える総督カーゾン（1899-1905 年在任）はことあるごとにこれを牽制し、例えば、カルカッタ大学卒業式（1905 年）の式辞で「真理の最高の理念はおよそ西洋の概念であると私が申しても、誤りでも尊大でもないことを希望する」と高言することなどに示される、ことさらな西洋的価値の賛美とアジアのその否定を繰り返してはばからず、インド人知識人・学生の反発を招くのはインド教育史の興味ある一齣である⁽¹⁴⁾。

他方、インド人にとってもまた、国を興すことの意味、またそのための教育についての本質的な省察に迫られる。その日本教育論もこうした問題意識を内在させ、次第に従来にない調子を帯びるに至る。詩人タゴールの後掲の論がその顕著な例であり、マハートマー・ガンディーにおいていっそう徹底した形で示される。ガンディーは西洋近代文明の厳しい批判者であり、日本をもしわばイギリスの垂流として退ける。

「もし日本が力を通して自らを治め守り拡大するなら隣国を征服せざるを得ない。これによって引き出される結論は、心から人々の真の幸福を願うならサティアーグラハ（真理把持）〔南アフリカに滞在中、インド人居留民への差別に対しガンディーが創始した非暴力的抗議行動一弘中〕の道に沿うほかはないということである。」⁽¹⁵⁾また、「私は諸君に思い出させよう。日本にはためいているのはイギリスの国旗であって日本のそれではないということである。」⁽¹⁶⁾また、「日本の政策をいつも残念に思っている。日本は確かにロシアに打ち勝った。しかし、日本はそれによって評価されるだけの価値ある政策を取るに至っていない。」⁽¹⁷⁾

民族運動の一環として 1920 年以降、ガンディーの指導する「国民教育」運動はこの観点を明確にし、いわゆる近代教育を暴力と搾取に拠るとし根底的に受け入れず、その脈絡において民衆の間に息づくインド本来の教育の実現を目指すことに向かう。必然的にそれは従来の「国民教育」論を止揚し新たな「国民教育」論を出現させることになる。そこに脈打つ思潮は今日のインドに依然、顕在していると言えなくもない。

ガンディーにおいて顕著であり教育場裡を覆うこの思想を支える要素として、第一次大戦を境に昂進したインド社会の近代西洋文明への幻滅ないし反発と、それに対蹠的に強まるインド文明の復権の意識の潮流を見落とせないであろう。

4. 日本教育論の特徴

(1) 論者の選定

日本教育論はそれが最初に現れてから今日までの一世紀以上の間相当な数に上ると考えられ、現在までのところ筆者が入手し得た情報・資料は極めて限られたものでしかない。ここではインド各界の指導的人物の手になり、注目すべき内容をともない、かつ日本の教育のイメージを作り上げる役割を果たしたと判断されるものを基準に選択することとした。勢いそれは日本教育論が最も多く出現した今世紀初頭に片寄ることを免れないにしても、各論を合わせその全体像が浮かび上がることを意図した。

対象者を8人に絞り、それは (i) 宗教、(ii) 文芸、(iii) 科学・技術、(iv) 教育、(v) 政治の各分野にわたるが、場合によっては幾つかの範疇に重複する可能性なしとしない。各論者の紹介は後掲の日本教育論の項に譲りここではその大まかな特色に触れることとする。

最初に取り上げるのは宗教改革者スワミー・ヴィヴェーカーナンダで、その日本教育論は原理面、倫理面を鋭く衝いておりインドの「国民教育」思想の深化発展に少なからず貢献した。続く近代インド最大の詩人・教育者ラビンドラナート・タゴール、女性解放や女子教育に偉大な貢献をしたドーンダー・ケーシャウ・カルウェー、著名な技術者モークシャグンダム・ヴィシュヴェーシュワライヤーの各日本教育論は、インドにおける陶冶理論の形成と実践の上に大きな影響を与えた。

続く民族運動史上に名をとどめるゴーパル・クリシュナ・ゴーカーレー、ラーラー・ラージパット・ラーイ、モーハンダース・カラムチャンド・ガンディー（マハートマー・ガンディー）、それにジャワーハルラール・ネルーの各日本教育論は、それらの人物がいずれも独立運動や国家建設の上での中心的政党であるインド国民会議の指導的メンバーで政策上の責任を担っていただけに、「国民教育」実現化の上に重要な意味を持ったと言える。このうち、ガンディーのそれについては既述のごとき世界観あるいは文明観に基づき「国民教育」の概念上、實際上極めてラディカルであり、その日本教育論についても他の政治的リーダーとは異なる響きがある。

政治家の場合について一言すれば、一般的にゴーカーレーはインド国民会議のいわゆる穏健派、ラージパット・ラーイは過激派に属する。その階級的、イデオロギ的立場の違いもあり一概には言えないにせよ、後者はつとに「社会的には反動」⁽¹⁸⁾であったとされる。例えば、その日本教育論を本稿では取り上げないが過激派に属するバル・ガンガダル・ティラク (Bal Gangadhar Tilak 1882-1949) はカルウェーの寡婦再婚活動や女子大学の創設には反対であったし⁽¹⁹⁾、また、ラージパット・ラーイはマハートマー・ガンディーの農民のもつ文化を根底に据える「国民教育」運動には批判的であった。しかし、その日本教育論に両派の見解の質的違いを見出せない。

なお、ゴーカレーとガーンディーの二人を除きいずれも来日の経験を有し、なかにはその回数を重ねたり長期間滞在をする者もいて、日本の教育についても観念的理解に止まっ
てはいない。日本及びその教育について独自の見解をもつガーンディーは日本について読
んだことがほとんどないと語っている⁽²⁰⁾。

(2) 日本教育論の多様性と一貫性

ここに取り上げる日本教育論はいずれもインドを代表する人物の手になるものであるが、
その数も限られている上に、各論者の論も各その一部に過ぎない。加えて、これらの論者
がその日本教育観を生涯のうちに変化させていることも否定できず、例えば日本をこよな
く愛したタゴールも日本が軍国主義に変貌するに至ってその忠告と批判を増大させている。
しかし、全体としてインド人の日本教育論には時代と人物の個性による多様性を内包しつ
つ、一貫して渝らぬものがあることを指摘しておかなければならない。

日本教育論の内容は、日本の教育発展の背景、国の興隆と教育との関係、教育理念、教
育政策、教育の実際等、にわたり多様であるが、論の展開においては日本を総体として評
価しそこから帰納的にその原動力としての教育の評価に至るものが多く、またそれらの評
価の決定因には明らかに日露戦争における日本の勝利が絡んでいると言えるであろう。

その論における具体的認識としては次の諸点に要約し得るであろう。すなわち、①愛
国心や団結心の形成、②科学・技術教育、③国民文化の発揚、④国民道徳の形成、⑤大衆
の教育、⑥国民すべてに平等な教育、⑦海外の知識の積極的吸収、⑧自国語による教育、
である。

また、何人かの論者は日本の教育の立脚点をかの明治5年の太政官布告「学事奨励に
関する被仰出書」に見ている。特にその「必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめ
ん事を期す」の文言の内容が複数の人によって触れられている。全体的にその日本教育論
には理想化ないし憧憬感がなくもないが、日本の教育の特質の一端を鋭利に捕らえ、他
方、自らインドの教育の特質の一端を表わしていると解釈できる。

終わりに

本稿は研究課題に即し、その基礎資料としてひとまずインドに現れた日本教育論に着目
し、その紹介を試みたものである。しかも、蒐集し得た情報・資料の数的制約もありイン
ド人の日本の教育についての関心の所在のほんの一部を明らかにし得たにすぎない。以下、
年代と分野を勘案し配列した上記各論者の日本教育論の内容を繙くこととする。取り上げ
順に改めてその名を記すと次の通りである。

1. スワミー・ヴィヴェーカーナンダ (Swami Vivekananda 1863-1902)
2. ラビンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore 1861-1941)
3. ドンドー・ケーシャウ・カルウェー (Dondo Keshav Karve 1858-1962)

4. モークシャグンダム・ヴィシュヴェーシュワライヤー (Mokshagundam Vishvesvaraya 1861-1962)
5. ゴパール・クリシュナ・ゴーカレー (Gopal Krishna Gokhale 1866-1915)
6. ラーラー・ラージパット・ラーイ (Lala Lajpat Rai 1865-1928)
7. モーハンダース・カラムチャンド・ガーンディー (Mohandas Karamchand Gandhi 1869-1948)
8. ジャワーハルラール・ネルー (Jawaharlal Nehru 1889-1964)

〔注〕

- (1) Krishna Kumar: Political Agenda of Education. 1991. Publications. P.152.
- (2) S.R.Bakshi: LAJPAT RAI, Swaraj and Social Change 1907-18. Volume- I .1990.H.K. Publishers and Distributors. "The Evolution of Japan. I, II, III" P.113.
- (3) ジャワーハルラール・ネルー著 磯野勇三訳『ネール自伝』(上巻).昭和30年.平凡社.18ページ.なお、女性のなかにも、例えば、サララ・デウィ (1872-1946) のごとき日露戦争に感銘を受け月刊誌『バーラティー(インド人)』の編集者となってインド人の自覚を促す論陣を張る者も出た。長崎暢子著『非暴力と自立のインド』狭間直樹/長崎暢子著『自立へ向かうアジア』.世界の歴史27.1999年.中央公論社.287ページ.
- (4) The Complete Works of Swami Vivekananda. Mayavati Memorial Edition. Volume IV. Advaita Ashrama. "The Education that India Needs".24th April 1897. P.483.「教育、教育、教育のみ！ ヨーロッパの多くの都市を旅して貧しい人々の間にさえ慰めと教育があるの見て、同胞の貧しい人々の状態が頭に浮かび涙を催したものである。その違いはどこにあるのか。私が得た回答は教育である。」
- (5) Sir M. Visvesvaraya: Memoirs of My Working Life. 15th April 1951. IX Developments in Education-Mysore University. P.68.
- (6) P. L. Rawat: History of Indian Education. 1959. Bharat Publications. P.303. 文中、政府の報告書とあるのは、ボンベイ大学で教鞭をとっていた英国人シャープ (Prof. W. H. Sharp)によるインド総督府の委嘱で1904年(明治37年)4月から半年かけて行った調査に基づく『日本の教育制度』(The Educational System of Japan)と題する報告書のこと

で、同報告書は1906年にインド総督府教育局(Bureau of Education)から出版されている。

⁽⁷⁾ 外務省記録文書旧記録。また、当時の教育誌『教育時論』もこれについて触れている。(明治37年7月5日号「印度大学の日本語教授」)。弘中和彦「近代インドにおける海外留学」『国立教育研究所紀要第94集』。昭和53年。250-253ページ。

⁽⁸⁾ 日露戦争終結後の1905年の日英同盟の更新、1911年の再更新によりインド人独立運動家の日本からの強制退去等の問題が生じなかったわけではない。山崎敏夫・高橋満編『日本とインド 交流の歴史』(三省堂選書 173)1993年。第3章「日本のアジア主義とインドの民族運動」(長崎暢子著。1.2.3.4.)70-101ページ。

⁽⁹⁾ 弘中和彦「インド教育史」.梅根 悟監修 世界教育史大系6 『東南アジア教育史』。昭和51年。講談社。260-261ページ。

⁽¹⁰⁾ 同女子大の創設に関しては、弘中和彦「インド女子大学の誕生—近代における日印教育交流の一断面—」『国立教育研究所紀要第121集』平成4年。及び弘中和彦「SNDT女子大学(インド)創設の思想」『女子大学論』女子教育研究双書。1995年。日本女子大学女子教育研究所編。ドメス出版。参照。

⁽¹¹⁾ Sir M.Visvesvaraya: Reconstructing India. P. S. King and Son. 1920. P.35.

⁽¹²⁾ 注(2)の資料に同じ。P.10.

⁽¹³⁾ 注(2)の資料に同じ。P.11.

⁽¹⁴⁾ S. Nurullah and J. P. Naik: A History of Education in India. Macmillan and Co. Ltd. 1951. PP.444-452.

⁽¹⁵⁾ The Government of India: The Collected Works of Mahatma Gandhi. Vol. 9. 1909.7.18. PP.424-425.

⁽¹⁶⁾ 同上: Vol.10. "Hind Swaraj". P.23.

⁽¹⁷⁾ 同上: Vol.49. 1932.4.3. P.263.

⁽¹⁸⁾ 松井 透「帝国支配の変遷と民族運動の発展」.山本達郎編『インド史』。昭和37年。山川出版社。288-289ページ。

⁽¹⁹⁾ SNDT女子大学元学長カマリーニ・バーンサリー博士は次のごとく述べている。「テイラクは教育を受けた女性の懐疑主義が幸福な家庭を壊すとして、カルウェーの女子大学の創設を支持しなかった。」Kamalini H. Bhansali: My Karmabhoomi. Three Decades at SNDT Women's University. SNDT Women's University. 1997. P.30.

⁽²⁰⁾ The Government of India: The Collected Works of Mahatma Gandhi. Vol.62. 1932.1.11. "ヨネ野口との対談". P.178.

〔日本教育論〕

1. スワミー・ヴィヴェーカーナンダ (Swami Vivekananda 1863-1902)

カルカッタ大学卒業後、修行の道に入る。1893年、シカゴで開催の世界宗教会議に参加し、あらゆる宗教の本質は根本において一つであるとする亡師ラーマクリシュナの教えに立つ宗教思想を提示し一躍脚光を浴びる。

1897年、ラーマクリシュナ・ミッション (Ramakrishna Mission) を結成し、同教団を通じて、インドの哲学・宗教の卓越性を主張し西洋文明との融合を説き、社会改革活動を展開する。その活動は文盲の撲滅、労働階級の福祉、女性の解放、不可触制度の廃止、教育の普及、医療援助などあらゆる分野に及んだが、特に重視したのは教育で既存の教育制度の厳しい批判の上に教団の手で学校を全国に多数設立する。

その教育思想の根本は、人の内面に具備されている‘完全’を表出させるのが教育の目的であり、その方法においては‘集中’が必要で、それにはブラフマチャリヤ（節制）が欠かせないとする。「生活のすべてを精神化する」主張など強い伝統文化回帰を特色とするが、注目されるのは民族繁栄の効果的道具としての科学・技術教育の重要性、そしてこの両者の統合を説いている点である。

日本を何度か訪問し岡倉天心をはじめ人々との交流を重ねている。数々の著書・論文を通じてのその主張は広く、インドの民族精神を鼓舞するところがあり民族運動のリーダーを含む各界に影響するところ極めて大きかったといえる。

ここに紹介する日本教育論はヴィヴェーカーナンダが1892年にアメリカに行く途次、日本に立ち寄った時の印象を帰国後の1897年にマドラスの新聞ザ・ヒンドゥーに寄稿したものの一部である。(Selections from Swami Vivekananda, Advaita Ashram, Mayavati, Almora, Himalayas, 1946) これについては中村 元氏著『東西文化の交流』第9巻、春秋社 昭和40年、に同氏の訳が載っており、ここではそれを借用する。

日本教育論

『問』インドが日本の進歩の跡に従い得るようなチャンスがあるでしょうか？

〔答〕全然ありません。——三億のインド人が一体となって一つの国民を形成するまでは。日本人ほどに愛国心がありまた芸術的な民族は世界中にいません。日本人について

の一つの特徴はこのことでもあります。——ヨーロッパでも他のところでも、芸術は一般に汚れをとまっていますが、日本の芸術は芸術プラス絶対の清浄です。若い人は誰でも一生のうちに少なくとも一回は日本を訪れることができるようにしたいものです。そこへ行くのはごく容易なことです。日本人は、インドのものはみな偉大であると考え、インドは聖地であると信じています。日本の仏教は、セイロンで見られる仏教とはまったく異なっています。それはヴェーダーンタと同じです。それは積極的なまた有神論的な仏教であり、セイロンの消極的・無神論的な仏教ではありません。

〔問〕日本が急激に偉大となった秘訣は何ですか？

〔答〕日本人が自分を信じ、自分らの国を愛するということです。自らの国のためにすべてを犠牲に供しようとし、しんまで誠実であるような人々が現れるときに、インドはあらゆる点で偉大となるでしょう。人間が国をつくるのです。国の中にそもそも何があるのでしょうか？日本人の社会道徳と政治道徳を体得し得るならば、あなたがた（インド人ら）は日本人のように偉大となるでしょう。日本人はかれらの国のためにすべてを犠牲に供する覚悟があり、彼らは偉大な民族となったのです。しかし諸君はそうではない。諸君は偉大な民族にはなれません。諸君らは自分らの家族と所有物のためにのみすべてを犠牲に供するのです。』

『まだ独身の大学院学生を幾人か日本へ送って技術的な教育を受けさせたい。そうして彼らはその知識を持ってインドへ帰ってきて最もインドの役に立つようにさせたい。それは何とすばらしいことでしょう。』

〔問〕イギリスへ行くよりも日本へ行った方が良いといわれるのは何故ですか？

〔答〕確かにそのとおりです。わたしの考えでは、裕かな教育ある人々が一度でも日本へ行って実際を見るならば、かれらの目は開かれるでしょう。

〔問〕どうしてですか？

〔答〕日本では知識が良く消化されています。ここで見られるような不消化はありません。かれらはすべてをヨーロッパからとり入れましたが、しかしかれらは依然として日本人なのです。ところがわが国（インド）では西洋化しようという恐るべき病気が疫病のように入れわれをつかまえています。』

『〔問〕ではインドが日本のようになるのを、師は希望していらっしゃるのですか？

〔答〕断じてそうではありません。インドは依然としてインドであらねばなりません。インドがそもそも日本のようになるのでしょうか？ そのことについては、どの国民でも日本ようになるのでしょうか？ どの国民にも、音楽におけると同様に、基調、中心のテーマがあります。どの国民でもテーマをもっています。それ以外のものは第二次的です。インドのテーマは宗教です。社会改革も、その他のすべてのことも、第二次的です。だからインドは日本のようになることはできません。・・・インドはインドです。われわれは日本人のようではありません。われわれはヒンズーです。インドの空気は心を鎮静させるのです。』

『かれら（日本人）は芸術の故に国民としても偉大なのです。かれらは、われわれと同じようにアジア人ではありませんか？われわれは殆どすべてを失ったけれども、われわれが依然所有しているものは、素晴らしいです。アジア人の心は芸術を織り込まれています。アジア人は芸術性のない物を決して用いません。われわれにとって芸術は宗教の一部であるということを知りませんか？』

『いまわれわれが必要とすることは、芸術と有用性との結合です。日本はそれを実に敏捷になしとげました。だから日本は巨大な歩みをもって進展したのです。いまや反対に日本人は西洋人に教えようとしています。』

「第七節 近代インドから日本への影響——ヴィヴェーカー
ナンダと岡倉天心——」

93-96 ページ

2. ラビンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore 1861-1941)

近代インド最大の詩人であり、教育者であり、文学、芸術等の分野で卓越の存在である。1913年、その詩『ギタンジャリ』（歌の捧げもの）によりアジア人として初のノーベル賞を受ける。カルカッタの名家に生まれる。14歳で学校に通うのをやめ、17歳の時、渡英しロンドン大学に入学するが中断し帰国、詩を発表したり家の所有地の管理に当たる。

1901年、家の所有地であるシャーンティニケタンに家族共々移り、わが子を含む5人の子供のため師弟同行の古代の森の草庵（タポーバナ）の理念に立つ学校を興す。その発展の上に1921年、根底に強い愛国心を持ちながら世界の諸文化の理解や大衆の福祉と村落再建を目的とする大学ヴィシュヴァ・バーラティ（世界の寄り集うところの意）を創設する。教育に関する論文を数多く発表している。

タゴールは日本を5度訪れている。日本文化や日本人についての鋭い洞察を加えた論文を幾つか発表している。日本への期待に基づく忠告的言動でタゴールを迎える日本側に複雑な面もあったが、岡倉天心等、当時の代表的知識人と親しい交友関係を結ぶ。注目されるのは日本女子大学（1901年設立 現日本女子大学）の創設者成瀬仁蔵と肝胆相照らす仲となり、成瀬亡き後もほとんど来日するごとに同校を訪れている点である。

タゴールは自由と喜びの教育、自然との結合による教育、心と体の一体性の教育、永遠なるものと合一する教育、等を唱え自分の学校で実践してきたが、これに対し、成瀬は「すべての宗教は真相において一致する」「人類は宇宙の靈性の分化結成して生じたるもの」「人間の主体形成の根本動力は宇宙の靈の一部」と主張するなど、両者の教育観、世界観に相通じるものが認められる。

1916年7月、同大学の修養場である軽井沢の三泉寮に招かれた際は、同校の教師や学生に対して自作の詩を読んだり一緒に樅の樹の下に座って瞑想するなどしている。タゴールがそのことに如何に歓びを覚えたかは同校の同窓会誌『家庭週報』によって知ることがで

きる。ここではその日本教育論を『タゴール著作集』、第八巻 人生論・社会論集、1981年、第三文明社、から採ることとした。翻訳文は高良とみ氏による。それは狭義における日本教育論ではないが、「和魂」の普遍性の考察など広く関係を持つと判断するものである。

日本教育論

『この国（日本）で私を最も感動させたのは、自然の秘密を、あなたがたが分析的知識によってではなく、共感によって知っておられるその確信であります。あなたがたは「自然の線」が語る言葉や、色彩のもつ音楽や、自然がもつ不規則の中の均整や、また自然の自由な動きの中にある韻律を、知ってこられたのであります。しかもそのおびただしい物たちがいかにして摩擦を避けているか、その創造物間の矛盾がいかにして踊りと音楽の中に導き入れられているか、その豊富さが、単なる浪費的な誇示ではなく、自己放棄の完全さを示しているかを、見てこられたのであります。

自然はその力を美の形の中に保持することを、あなたがたは発見されました。そしてこの美こそ、母のようにすべての巨人的な力をその胸に養い育てながらも、その力に動的な活力と休息とを与えているのです。自然が完全な優美さのこもった律動によって、そのエネルギーの消耗を防いでいること、そして自然がその曲線の優しさで、世界の筋肉から疲労を抜き去っていることを、あなたがたは見てこられたのです。

わたしには、あなたがた日本人が、こういう自然の秘密を日常生活の中に同化しえてきたこと、またすべてのものの美の中にある真理が、あなたがたの魂の中へ沁み透っていることを感じるのであります。事物についてのたんなる知識は、非常に短時間に獲得されえます。けれども、その精神は、幾世紀にもわたる訓練と自制とを重ねることによって、はじめて修得されるのであります。』

「日本の精神」（1916年、慶應義塾大学での講演） 467ページ

『日本文化の底には、「結合」への理想があるのです。——人と人との「結合」、そして自然との「結合」です。そしてこの愛の真の表現は、この土地にかくも豊富に、かくも普遍的に見られる美の表現の中に、見てとることができるのであります。このことが、わたしのような異郷からの旅人が、日本の美しさや、愛の創造物の前に佇んだ時にも、羨望や屈辱を感じることなく、あなたがたと共にかくも立派な人間の心の発露を悦び、その栄光を称えたく感ずる理由であります。

このことはわたしをして、ますます日本の文明を脅かしつつある変化を、私自身にとっての脅威であるように感知させることになってきたのであります。と申しますのも、現代の異常な不均衡が、有効性を唯一の共通の結び目として、つつましい美の権威とその隠れた力の前に、あさましいまでにその姿を曝している国は、今日の日本のほかにはないからであります。

しかし、真の危険は、次のような事実の中にあるのであります。組織化された醜悪さが、

人間の心に嵐のように襲いかかり、その量の大ききで毎日毎日を過ごさせ、その侵略的な執拗さと愚弄の力によって、人間の深い心情に逆らって勝利を得て行くことであります。その無作法な押しつけがましきは、力づくでわたしたちの前に立ちはだかり、わたしたちの感覚を圧倒しようとするのであります。不気味な姿をしているために力強く見える偶像に対して未開人がするように、わたしたちはその祭壇の前に犠牲を払わされてしまうのです。つつましく、深みをもち、生命の微妙な繊細さを具えているものに対するこの醜悪さのもつ競争力は、恐るべきものであります。』 同上 469-470 ページ

『日本はその芸術における自己表現、心情の細やかさを示す諸々の伝統、礼節と克己力、威厳に充ちた行為、それら不朽の価値をもつものを通して、時と所を問わず、世界に向かって招待状を出してきました。これらの素質を、日本の日常生活の中に見聞きし、感嘆する機会を得て、わたしは、私の国の人々もまた、何ら卑下することなく、それに感動し、啓示を受けることができるようにと、深く望んだのであります。まことに人間は借用者であります。わたしどもが他の民族から、永遠性のある良いものを借りるとすれば、それらをもつようになる生まれながらの権利を、わたしどもがもっているからであります。すべて真に偉大なものは、すべての国に属し、偉大な天才を持つ人々は、一つの民族、一つの国に分類され、規定されうるものではありません。傑出した天才たちは、世界の各地域に生まれていて、人類が同胞であることを告げています。その高さを支えている土地からは、はるかに高く聳え立ち、永劫の窮みに向かって聳え立っている山嶽のように、これら偉大な魂たちは、遙かな地平線を見渡して、その周囲の差異の中から、心の結び合いを生み出して行くのであります。この国（日本）にもそういう偉大な人々があり、その足はこの土地を歩みながら、その心は空高く——世界的な理想の世界に——あり、世界のあらゆる地方の偉大な魂から昇る彼らの理想は透明な空気の中に舞い、交わっていることを信じます。』

「東洋文化と日本の使命」（タゴール大学の機関誌

『ヴィシュヴァバラティー』1925年4月号） PP.495-496

3. ドンドー・ケーシャウ・カルウエー (Dondo Keshav Karve 1858-1962)

女性の解放と女子教育に生涯を捧げる。インド政府は1958年、カルウエーが100歳を迎えた時国の最高栄誉章バーラト・ラトナーを授与しその功績に報いる。ボンベイ大学を卒業後、古都ブネーにあるファーガッソン・カレッジに数学の教師として赴任し、インドの一般的な風習である幼児婚などにより若くして寡婦となり悲惨な運命をたどる女性を救うため、その地に寡婦結婚協会 (Widow Marriage Association) を設立する。しかしその険しい現実から女子教育の必要を痛感し女学校を設立し、更にその延長線上に1916年、イン

ド初の女子大学を創設する。

この女子大学は東京目白台の日本女子大学校（現日本女子大学。1901年創設）をモデルとしたものである。その契機となったのはカルウェーがさるインド人から贈られた日本女子大学校の発行したその活動に関する英文の冊子（Japan Women's University, It's Past, Present and Future. Japan Women's University. 1912）を読み、「電氣的ショックを受け、かつ新しい生命の躍動を覚えた」（Looking Back p.99）ことによる。その感銘ぶりは大学名も日本女子大学校に倣いインド女子大学（Indian Women's University）としたことに示されるであろう。同大は後、その財政難を救ったムンバイの財界人V. ターカルシーの母の名を冠しシュリーマティー・ナーティーバーイー・ダーモダル・ターカルシー・インド女子大学（Shreemati Nathibai Damodar Thackersey Indian Women's University）と改称、1949年、法的認可を得た際同名称のなかの‘インド’の語を省き今日に至る。同大は現在、ムンバイに本部を置き、11学部31学科、学生数4万5000人を擁するインド有数の総合大学に成長している。

カルウェーは男女は同じ樹の二本の枝のようなもので、両者相携え社会の創造に当たるべきで女性の進出で社会もその輝きを増すとした。女性の役割の重要さはむしろ男性以上で、良き妻、良き母、更に良き隣人としての任務をも有することから、その役割の決定要因は「自覚せる個性」にあるとした。日本女子大学校の創設者成瀬仁蔵の女性解放思想とも一脈通じるものがあり、両大学には女性の自立を目指すことやそれとの関連で専門・職業教育に力点を置くことなど多くの共通性がある。1929年、カルウェーは成瀬亡き後ではあったが念願の日本女子大学校を訪問している。

ここではカルウェーの『自叙伝』（D. K. Karve: Looking Back. Hingne Stree-Shikshan Samastha. 1936）に拠って、女子大学設立を公表した1915年開催の全国社会会議での挨拶から抜粋する。

日本教育論

『「女子のための中等・高等教育について皆様の前に私のおよその考えを披瀝しますと、それは基本的に次の二つの原則に基づいています。一つは最も自然で、従って効果的な教授用語は学習者の母語であるということです。二つは一つの階級としての女性は男性とは社会経済的に異なる機能を持っているということです。この二つの原則はあらゆる冷静な人々に要請され教育専門家の承認するところです。―― PP.103-104.

「これら中等・高等教育の教育課程を作成するに当たって私達は日本女子大学に導かれるでしょう。思慮深く实际的でもある日本の思想家・活動家の成瀬氏は、その大学のアイデアを抱き、計り知れない忍耐と粘り強さをもってそれを成功させ非常な国益をもたらしました。私達の女性に関するかぎり事情は日本のそれと極めて似通っています。そこで西洋の女子のスクールやカレッジよりも日本の人々によって運営される学校に導きを求めるのが理にかなっています。成瀬氏は日本の女性の状態を認識し自らの願望を高めたのです。

成瀬氏は次のように書いています。

“女子大学を作るわれわれの目的はアメリカやヨーロッパのそれを模倣することでもなければ、この国の男子の大学の教育課程と競うものでもない。われわれの目的は現在の女性の知的肉体的条件に適合する学習計画を作り、次第に一般的進歩に合わせてその水準を上げることである。”

「日本女子大学は時の経過とともに非常な人気を博しましたので、30歳から35歳の女性ですらその卒業生リストに登録される名誉を得るために入学することを求めました。そこで日本の足跡に倣い国中に広く女性のための日常語の大学を組織するなら、一般の女性の手の届く範囲に置くことになり、わが国に多大の貢献をすることができるでしょう。

P.106.

「日本女子大学の組織者達は、多くの女性が容易に接近できる範囲にもって行くため、最初はつましい学習プログラムで満足しましたが、高い目標をもって未来を見つめ思慮深く学生を導く健全な原則を設定しました。ここにそれを引用する誘惑に抗し得ません。

“女性を単に家事の従事か家系の継続かに向かう道具もしくは機械と見なす風潮があった。そこで、このような非道な風潮に反対しわれわれは女性を人間として教育する必要があるものである。われわれは大望と愛とをもって彼女たちの人間としての自覚を呼び覚ましたい。”

「女性を単なる道具と見なしてはならないと言う緊急のステートメントをなさねばならなかったという事実は、社会での女性の地位に関し日本人一般の感情を示しています。私達はこれらの人々の設定した仕事の足跡を追うのが良いでしょう。彼らはまさに一方で、狭量な保守的な人々に断固反対し、他方で、極端にラディカルな見解にも同様、断固反対しこの原則を明らかにしたのです。

P.107.

次いでカルウェーはこの英文冊子の内容の、例えば、女性にとって家庭生活は主要な領域で妻と母の役割があるが、同時に人道的及び国民的精神を共有しており、国の自由な個人である一員としての使命を理解させ、結婚しない女性にとって生活上の使命を認識させ、かつ個人的能力を活用させることを力説している箇所を引用し、更に次のように続ける。

「日本人は西洋の教育計画をいかなる形にせよ、ただ模写したりむやみに模倣はしなかったのです。彼らは根本原理を定めそれと一致する女子の教育計画を考究し女性の必要に応えたのです。われわれは男子向きの教育計画を持ってそれを女子の特別の必要も事情も考慮することなく強制していたのです。——」

P.108.

4. モークシャグンダム・ヴィシュヴェーシュワライヤー (Mokshagundam Visvesvaraya 1861-1962)

民族主義者で生涯をインドの産業開発に捧げる。ボンベイ大学を卒業後その地で技師と

して頭角を現わし、マイソール藩王国の主任技師、更に宰相に取り立てられ巨大なクリシユナラージ・サーガルダムを完成させる。後年、そこを訪れたマハートマー・ガンディーに強い感銘を与える。幾つかの藩王国のダム建設や灌漑事業に手腕を発揮し、教育の発展にも注意しマイソール大学の創設に尽力する。1941年、全インド工業会議所会頭となり、重工業化の推進を図り、またインドの計画経済構想を提案するなど、先見性に満ちたその活動は多方面にわたる。

インド独立後は中央や州の幾つかの経済・産業の委員会の長を務めるなどし国の近代化に貢献する。1955年、インド政府はその功績を称えインド最高栄誉章のバーラト・ラトナーを授与する。ニューデリーの国立教育研究所のモデル教科書（第4学年用ヒンディー語教科書.N.C.E.R.T. 1968年版）にも氏及びその偉業を紹介する一文が掲載されインドにおける氏の存在の大きさを知らされる。氏はたびたび外国を訪問し1898年と1919年には日本を訪れている。

ここでは同氏著『インドの再建』(Sir M. Visvesvaraya: Reconstructing India. P. S. King & Son. 1920.) 及び『私の在職時代の回顧録』(Sir M. Visvesvaraya: Memoirs of My Working Life. 1951.) から関係部分を翻訳する。

日本教育論

『大規模な再建は他の国よりインドでもっと緊急に必要です。なぜならこれまでの長い期間、政治、社会、経済にわたる開発が十分考慮されてこず、また、そうしたネグレクトの結果、文明社会で認められる品位を保つ生き方に欠かせない生活水準が、最低限をはるかに割った水準となっているからです。

50年前、日本政府は再建の総合的プログラムに着手しました。設定されたその時の目標が依然、力強く遂行されていまして、今日の日本の生活は自己改善に向っての不断努力です。そのため、すでに日本の生活水準は平均して現在のインドの3ないし4倍に達しています。インドは従属国であるため再建プログラムを持っていません。それ故にインドは日本がすでに達成に成功している仕事の多くを今から始めなければなりません。インドは平素の修繕を怠り荒廃してしまった建物の再建に取りかからなければなりません。』

Reconstructing India. PP.2-3.

『私は以前の外国旅行で、西洋諸国は教育に重要性を付しているという印象を持ち、マイソールの不満足な経済状態は主に教育のネグレクトによるものと確信していました。19世紀末の日本旅行で私はこのことに深く印象づけられました。日本の指導者達はあらゆる進歩の基礎に教育があるという秘密を発見していました。日本の文部省が堅持していた目標は自国人をヨーロッパ的思考様式と労働に向け訓練するというものでした。教育法の公布はこの方向での最初の行動の一つで、その目的はミカドの特別の命令により次のように国民に示されました。“日々の生活に必要な知識から、役人、農民、商人、職人、医者等の

職業に向かう教育に要する高度なそれに至る、あらゆる知識は学問によって得られる。そこで、村に無知な家庭があったりまた、家族に無知な者がいたりすることがないように教育の普及を図らなければならない。”

1877年、東京帝国大学が設立され、また商業その他実際の職業の資格を人々に与えるため外国語学校が幾つか発足させられました。

教育法はしばしば改正され、その際留意された原則は“道徳性の陶冶、忠誠心と愛国心の開発、実際の職業に必要な知識の獲得である”と説明されました。

軍事訓練は規律と健全な人格的特性を開発する目的で様々な学校で奨励されました。子供たちは最大限に活動的であるように、また忠誠心、愛国心、行儀、道徳、人間関係に意が用いられました。

私の関心を惹きました一つの点は、1900年頃までに達成された女子教育の進展です。日本では約150万人の女子が学校に行っているのに、インドでははるかに巨大な人口にもかかわらず僅か40万人でしかないことです。

私が初めて日本を訪問した1898年のことですが、東京と京都の教授から大学生は自分の本を買う必要がないと明確に告げられました。学生の大多数はそれに支出する余裕がなかったのです。教授たちは学生にノートを取らせ、また学生たちは図書館の蔵書からインフォメーションを得ていたのです。私は大学で行われている教育が極めて実際的なため、大学人に対する需要が非常に高く、学生たちは卒業と同時に政府か民間に採用されることに注目しました。

日本の大学の教授たちは質素に暮らし、愛国的動機でもって働いていました。資格のある人たちは民間に雇われれば政府で得られる以上のものを稼げるのですが、彼らにとっては高度な思想と簡素な生活こそ本質的なことでした。戸外で働く衣服は現代的かつヨーロッパ的ですが、仕事以外の家庭生活ではあらゆることが日本的で、習慣などは大体、伝統的なものでした。』

Memoirs of My Working Life. PP.68-70.

5. ゴパール・クリシュナ・ゴーカーレー (Gopal Krishna Gokhale 1866-1915)

民族運動における精神化を唱え、マハートマー・ガンディーによって政治上の師と仰がれる。ブネーのファーガッソン・カレッジの歴史及び経済学の教授を経て、民族運動を推進する主要な政党であるインド国民会議に参加しその指導的役割を演じる。自国人の経営により大衆の教育を促進する目的をもって1885年に創設されたデカン教育協会(Deccan Education Society)の終身会員となり、1905年、ブネーに宗教的精神を持って国に尽くすことを旨とするインド奉仕者協会(Servants of India Society)を設立する。

1910年、総督立法参事会のメンバーに選ばれ、1910年から1913年にかけて、同参事会に

において初等義務教育法の実現を目指し奮闘する。その努力は直接的には失敗に帰したが、後年のインド各州での初等義務教育法実現の道を開くこととなりインド教育史上に名をとどめる。なお、本稿で取り上げるドーンダー・ケーシャウ・カルウェーとはボンベイ大学在学中からの知己で上記カレッジに招聘した仲でもある。

ここに訳出した日本教育論はゴーカレーの教育に関する演説を収録した D. G. Karve & D. V. Ambekar Edit.: SPEECHES AND WRITINGS OF GOPAL KRISHNA GOKHALE VOLUME III -EDUCATIONAL. ASIA PUBLISHING HOUSE, 1967. から採ったものである。初等義務教育の決議や初等義務教育法案の上程等の活動における際の、ゴーカレーの一連の演説ではヨーロッパやアジアの国々との対比がしばしば登場し、日本の教育への言及もその関係で数多くなされている。

日本教育論

『さて、目を日本に転じますと、それは異なる条件のもとでの進歩の例証です。日本は西洋の方法を巧みに東洋の生活条件に応用しています。日本の近代教育制度はそのすべての近代の偉大さともども 1872 年に始まります。

その年、煥発された天皇の詔勅（「学事奨励に関する被仰出書」を指す。一弘中）には次の言葉が見出されます。“教育を普及させ、今後いかなる場合も無知な家族を有する村、あるいは無知な者を擁する家族がないようにする”と。シャープ氏〔インド総督府により日本の教育調査を命じられ、1906 年にその報告書を提出した。本文（注 6）参照一弘中〕も指摘していますが、何と野心的な言葉でしょう。

しかし、日本は約 30 年のうちにこの文言を実現しました。1872 年以前では、就学者は学齢人口の 28 パーセントにすぎなかったのです。この割合は世紀末までにすでに、90 パーセントを越えています。同時に巨大な陸海軍を創設するなど、日本はこれらすべてをこの期間に達成し、世界の惜しみない賞賛を浴びています。

日本では教育は今や事実上、義務となっています。義務というよりむしろ道徳的信念によってではありますが。初期では厳密には義務ではなかったのです。しかし、1890 年に学齢児の出席の確保の手段が取られ 1900 年には日本は教育を可能な限り無月謝にしました。』

（1910 年 3 月 18 日、帝国立法参事会に初等教育の無月謝義務化の決議案を上程した時の演説）P.78.

『この法案に反対する者たちは教育上の理由として、現在、初等学校で行われている類の教育を拡張するのは望ましくない、何故ならそれは何の益にもならないからと主張しています。――閣下、これら反対者たちは大衆教育の根本目的は何であるかを見失っています。大衆教育の根本目的はこの国から非識字を一掃することです。

教育の質は非識字が一掃された後に始めて取り組む重要問題です。非識字の一掃が根本

目的である以上、3R'sの単純なカリキュラムを教える教師及び学校当局の裁量で家主から借り受けるか任意の提供を受けるかする家屋が当面、必要になります。

日本では、義務教育を開始した時、個人の家の縁側を借りて開校したのでした。日本で自尊心を傷つける問題でなかったことがこの国でそうなるとは私には思えません。勿論、私は養成された教師や立派な校舎の価値や重要性を過小評価するものではありません。しかし、敢えて申し上げたいのはこの国から非識字問題を一扫することが先決で、これらの欠陥の全てが克服されるのを待てないと言うことであります。この国のために良い教師や校舎を確保することに努めながら、まずはこの仕事に敢然と取りかかろうではありませんか。』

(1911年3月16日、帝国立法参事会の会議において、初等教育の拡張のためのゴーカレーの手になる法案の上程の撤回を求められた時の演説) P.125.

『もっと狡猾な批判をする人々がいます。曰く、義務教育は西洋でこそ正しくてもインドには適さないし、それにその導入の時期も全く到来していない、と。彼らの議論は要するに、これは西洋のアイディアであり大衆の教育は東洋の国には適さないというものです。これに対する答として、日本では40年前に義務教育制度が採用され最も満足すべき形で行われていることであります。

1872年に義務教育が日本に導入された時、天皇は極めて注目すべき詔勅を渙発しました。それは天皇の志を示し、国に学校のない村も無知な者のいる家庭も存在させないというものでした。それから一世代のうちに日本はその言葉通りのものを達成しました。しかし、批評家達は日本は異なる種類の国だと言います。戦場での日本の偉業を見よ、平和の仕方の巧みさを見よ、日本のケースをインドに適用してはならない、と。

さて、皆さん、私にはこの見解が健全だとは思えません。しかし、議論を進めるためなら私は日本を取り下げても構いません。』

(1911年9月2日、カルカッタ市庁舎で開催の初等教育法案を考える市民集会での演説) P.234.

6. ラーラー・ラージパット・ラーイ (Lala Lajpat Rai 1865-1928)

インド独立運動の指導者でインド国民会議のいわゆる過激派に属し、運動を従来のイギリス統治政府に対する請願の形から、実際行動で戦うことに転換させたリーダーの一人である。イギリス当局によりミャンマーに追放されたこともある。

復古主義的性格を持つアーリヤ・サマージ (アーリヤ協会) の有力なメンバーであったが、ヒन्दウ文化至上主義の立場に立たず、過去への執着に反対し現実を直視し、教育の目的を個人や社会の進歩に置き、英語の学習や近代科学の知識、男女共学、子供への信

頼、自信と進取を強力に主張した。

注目されるのはインドの諸宗教教団の主張する「国民教育」を、各その創設者の思想を表象し宗教的枠組みにとどまり、真に国民的となっていないとする批判的見解を保持したことである。

イギリス人のメイヨー女史の著書『母なるインド』におけるインドに関する屈辱的内容に対抗し、イギリス統治の非を打ち鳴らし愛国的立場に立って『不幸なるインド』を著すなど、多数の著書・論文がある。1915年1月から9月まで日本に滞在し、大隈重信など要路と会見し、また在日インド人会会長を務めるなどする。滞在中の見聞を『日本の進化』

“The Revolution of Japan. I. II. III.” [S. R. Bakshi: LAJPAT RAI Swaraj and Social Change 1907-18. Volume-I. H. K. Publishers and Distributors. 1990. 所収] と題し発表している。ここでは日本の教育についての見解を同書及び LAJPAT RAI: THE PROBLEM OF NATIONAL EDUCATION IN INDIA. PUBLICATIONS DIVISION. MINISTRY OF INFORMATION AND BROADCASTING. GOVERNMENT OF INDIA. 1966. から採ることとする。

日本教育論

『日本は政治形態であれ、資源の開発であれ、一般的進歩であれ、今なお、その可能性の高みに到達してはませんが、過去 50 年以内に達成したものは不朽であり驚異的です。日本では憲法が政治的行動も人民の圧力も伴わず君主によって与えられた、と非難する者達へのそれはオブジェクト・レッスン（実物教授）です。日本は政府が民主的な制度を与えるならば、いかに民主的方法で人々を教育できるかの一例いや成功例です。近代日本は君主が憲法を与えることを決定し議会政治を承認するのに十数年と経っていませんでした。

現代の語感での思想の自由と言論の自由の何たるかをそれまで知らなかった日本人が、その両方を享受し始めた時、その近代教育は 20 年と経っていませんでした。日刊紙の英語版が出るのが通例の日本の新聞を翻訳で読みますと、言論や出版や思想の自由に関する限り日本の新聞と英米の新聞との間には何の違もないことに気づきます。日本は政党政治という議会政治の最終段階に入りつつあります。日本帝国の諸事項は君主の干渉も全くなく内閣の管轄するところのものです。

日本は責任と信頼で訓練されている民主主義の珍しい例です。それは初めは価値あることでも望ましいことでもなかったのです。子供が西洋諸国民の作った基準に適合することを証明する以前に、父が自分の信念を子供に示し自分の統制の下に置くことが重要でした。責任をもつ立場の人の与える教育ほど効果のあるものはないでしょう。日本の驚くべき発展は政府の国民に対する賢明かつ機敏な扱いと誘導によるものです。人々の民主的精神の開発、改善、またその資源や商工業の開発のために、あらゆる種類の援助が躊躇することなく無制限に与えられました。

もし日本が帰納法で進むことを選んでいたら、50 年足らずの間に得たものを達成するのに何世紀も要したことでしょう。しかも他方では、常に獲物を捜し求めている鮫の餌食に

なるあらゆる可能性もあったのです。日本は、人民に対し君主が置いた信頼と、教育や開発に要するあらゆる方策に対し政府が与える惜しみのない援助、によって救われたのです。』

The Evolution of Japan I 上掲書 PP.112-113.

『教師も親も子供を尊重、尊敬することを学ばねばなりません。日本人は誰も子供を叩いたりしませんが、それでも日本の子供達は聞き分けの良さにかけては手本です。日本人は子供に対して尊敬の態度を保持しています。彼らは子供達をいつも自分達と同等に扱い、話しかける時もそうするのです。決して激しく咎めたりしません。日本の家庭では笞は全く知られていません。子供に対して激しい言葉や怒りをぶつけることは極めて稀れです。

日本の生活規範はある点で極めて厳格で、全ての市民に対し厳しい服従と規律を要求します。日本の兵士達は高い義務感と厳しい規律で名を馳せました。しかしそれは愛国心と子供の独立心を尊重し幼児期に権柄ずくな罰しかたをしない伝統によるのです。つまり、教師や親の権威を強調するシステムというものは、人間性や人間の性向への疑問に基づくものであり、子供や青年への不信によるものであり、あからさまなコントロールや規律や服従を求めるものであり、体験的な教育の仕方に偏っているものであり、また少年、少女の天性を尊重しないものであり、新生インドが求める独立独行の、(進歩的なあまり)攻撃的な男女を作る理想のシステムではないのです。

そこで結論を申しますと、古代や中世の教育システムの広範な復興ということは問題外ということであります。それは私たちが何世紀も前に引き戻すもので、私はこの国がそれを採用することはないと確信しています。』

THE PROBLEM OF NATIONAL EDUCATION, P.18.

『その教育制度と日本の驚くべき発展には関連があります。近代戦における高度な技術と複雑な方策で日本が示した才能は全世界の認めるところです。戦いに敗れたクロパトキンはロシアの惨敗は、勇敢ではあったが教育のない軍隊の無知と日本の教育とによるものであると述べています。敗北の原因について書いて曰く、“日本軍の下士官はわれわれのそれより、もっと良い教育と日本人一般の高い知的発展の故にはるかに優秀であった。わが軍人達—正規兵であれ予備役兵であれ—の欠陥は全体として国民の欠陥である。農民達は知的に十分に開発されていず彼らから同じ欠点を持つ兵士が来たのである。わが兵士達の知的な遅れはわれわれに大きな不利益であった。なぜなら戦争は今や以前よりもはるかに知性とイニシャティブを兵士の側に要求しているからである。兵士達は一団となって、かなり密接な隊形を組んで勇敢に戦ったが、指揮官を失った時は前進より退却の方を好んだのである。(以下略)”』

THE PROBLEM OF NATIONAL EDUCATION, PP.96-97.

7. モーハンダース・カラムチャンド・ガンディー (Mohandas Karamchand Gandhi 1869-1948)

インドの民族運動の指導者でマハートマー・ガンディーとして知られ国父と称えられる。1888年、イギリスに留学し3年間、法学院に学び弁護士の資格を取得し帰国する。1893年、訴訟事件の依頼で南アフリカに渡り、インド人居留民の懇請によりその地にとどまり厳しい人種差別政策の撤廃のため、サティアグラハ（真理把持）を原理とする非暴力的運動を推進する。運動に参加するインド人居留民家族との生活共同体（フェニックス・セツルメント及びトルストイ・ファーム）でその子弟のため筋肉労働と結合した教育を行う。その教育の経験は、インド帰国後の「国民教育」運動に生かされる。

1915年、運動の一応の勝利を得て帰国する。1920年以降、民族運動の中心的政党であるインド国民会議の指導権を握って非暴力的非協力運動を進める。運動の一翼を担わせ政府認可の教育機関のボイコット並びに「国民学校」や「国民大学」の創設活動を展開する。その活動は広範な人口を抱える農村に主に向けられ、村人のもつ知識や技術に基づく教育を行う。また高等教育機関は農民に奉仕する人材の育成を目的とするとされる。

あくまで農民を主体とするその教育活動は、従来の「国民教育」概念の根本的変革を迫るものと言える。「1935年統治法」でインド人が内政権を手中にした事態において、1937年12月、中部インドのワルダールに「国民教育会議」を召集し、7年の無月謝義務教育、日常語による教育、手仕事をコアとするカリキュラム、その手仕事の収益による教師の給与の支弁等を中核とする「国民教育綱領」とでも言うべきものを決定する。それは翌38年の党大会で承認され党の正式の政策として推進される。

人格の基礎を築く、基礎的手仕事による、共通の基礎となる教育等の意味を込めベーシック・エデュケーションと命名されたこの教育は、インド独立後1960年頃まで国策として推進される。ここでは、THE COLLECTED WORKS OF MAHATMA GANDHI. THE PUBLICATIONS DIVISION, GOVERNMENT OF INDIA. 及び世界新教育運動選書30 弘中和彦：『万物帰一の教育 ガンディー、タゴール』、1990年、明治図書、によって関係論文を紹介することとする。

日本教育論

『日本は援助など当てにできなかったのです。日本は（日露戦争に）勝つことだけを固く決意しました。この決意こそ真の同盟であることを証明しました。この戦いで日本は敗北ということを知らなかったのです。』

では、この勇壮なヒロイズムの秘訣は何でしょうか。我々はこの問題を繰り返し自問自答しその答えを見出さなければなりません。その答えとは団結、愛国心、死をも恐れぬ行動の決意です。すべての日本人は同じ精神で活気にあふれています。誰もが他人より偉いとは考えてはいませんし、彼らの間にはいかなる分裂もありません。彼らは国に奉仕する

以外の何も考えていません。彼らは自分たちが生まれ育ち生を終えるこの国を、もし繁栄させることができれば自分たちも繁栄すると考え、もし国が興隆すれば自分たちも興隆し、もし国が政治権力を享受すれば自分たちもそのパートナーとなる、と母国と自分達とを一致させています。これが彼らの愛国心です。

この団結と愛国の精神は英雄的な生〔もしくは死〕への無執着と一体化し日本に世界のどこにも見受けられない雰囲気を作り出しています。死について彼らはいかなる恐れも抱いていません。国に尽くして死ぬことを彼らは至福と見なしています。結局、いつかは死なねばならないのですから、戦場で死のうと大したことはないのです。家にとどまり前線に行かなければ長生きするとは決まっています。それにたとえ、非常に長生きしたとしても隷属の民として生きることにはいかなる利益があるでしょうか。

このようなわけで日本人は死をものともしていないのです。そこでこのように自分の肉や血や骨を犠牲にする者が戦場で無敵であることを証明するとしても、なんら不思議ではないのではありませんか。しかし、どうしたら我々はこのような考えを持つことができるでしょう。彼らから何を学ぶべきでしょうか。我々は南アフリカで行っている小さな闘争においてさえ必要な団結を見出していません。毎日、分裂が起きています。我々は愛国心どころかむしろ利己主義に至る所で見えています。“私さえ救われれば他人が死のうと関係ない”という考えがいつも我々のなかにはあります。

我々は自分の人生こそ大切と思ひそれへの愛着をもって人生を終えるのです。この世で善を達成しないのに来世でそれを達成するあてでもあるのでしょうか。我々の大部分が陥っているのはこのような状況です。この日本の例を少なくともある程度評価できれば、日本の戦争記事を読んで有益でしょう。ただ読むだけでは（インド神話に出てくる英雄）ラーマの名を繰り返すことで天国には達し得ない鸚鵡のように、何も得ることがないでしょう。』

Indian Opinion. 10-6-1905. COLLECTED WORKS OF MAHATMA GANDHI, Vol. IV. PP.466-467.

『あなた方は日本、私には本質的に偉大な国とは思えませんが、西洋の優越に挑戦して成功しているという意味で、アジアでは偉大と見なされているその国に何が起きているのか知っておられるでしょう。日本の初等・中等学校及び大学の何千何万という男女生徒は、英語ではなく日本語を通してその教育を受けています。彼らの文字は難しいのですが、それを学ぶのに何の支障もなく、またローマ字の学習を優先し自国の文字の学習を放棄したりはしません。英語や他の西洋の言語をボイコットすることもしません。しかし彼らは自分たちのエネルギーを節約しています。

英語を学ぶ必要のある者は、日本の思想や西洋のみが与え得る知識を豊富にするためにそうします。彼らは西洋から取り入れるに値する一切のものを注意深く日本語に直しています。それは日本の青年の心が新鮮で鋭いからです。

このようにして得られる知識は国の財産となります。我々の野心はせいぜい政府機関の

書記や法律家や弁護士や判事になることにすぎず、破壊したい制度にすべての者がむなしく奉仕しています。しかも英語の習得にさえ成功していません。私は英語教育を受けた人達、彼らのある者は大学の最高の学位を取得していますが、からたくさん手紙をもらいます。しかし英語について情けないほどの無知を暴露しています。理由は簡単です。マラーヴィーヤ翁やラーダークリシュナン卿のような人は稀なのであって、多くの人は彼らの水準に達し得ないのです。』

HARIJAN. 1-2-1942. カーシー・ヴィシュワヴィドヤラヤ
(バナーラス・ヒンドゥー大学) での演説。
『万物帰一の教育 ガンディー、タゴール』 165 ページ

8. ジャワーハルラル・ネルー (Jawaharlal Nehru 1889-1964)

独立インド初代首相 (在任 1947-1964) として、議会制民主主義、言論の自由、政教分離主義など今日のインドを特色づける骨格を築きあげる。家庭で教育を受け 16 歳で (1905 年) 渡英し、パブリック・スクールのハロー校を経てケムブリッジ大学トリニティ・カレッジに進み化学、植物学等を学ぶ。7 年間の留学を終え弁護士資格を取得し帰国する (1912 年)。民族運動に参加しマハートマー・ガンディーから政治的後継者と見做される。『自叙伝』 (1936 年) やインド数千年の歴史を叙した『インドの発見』 (1946 年) 等、著書、論文多数に上る。自由と解放の闘士として内外の信頼も厚く、第二次大戦後の冷戦下、米ソいずれの陣営にも属さない非同盟政策を行使する。

ネルーは教育を極めて重視しまたその革命的一新を表明する。しかしマハートマー・ガンディーの教育観、その具体的表現でもあるベーシック・エデュケーションには否定的で、近代教育並びに科学技術教育を推進する。この二人の教育思想上の相違がインド独立後の教育政策に微妙に影響していると考えられる。

1957 年 10 月 4 日から 13 日までの 10 日間、ネルーは娘インディラー (後年、インド首相となる) を伴い日本を訪問し熱烈な歓迎を受ける。帰国後、その時の印象を纏めた日本訪問記を閣内相宛での形で公表する。全 16 ページの初めの約 3 ページを日本の教育に割くなど、ネルーの教育的関心の程を窺わせる。訪問記は、General Editor G. Parthasarathi: Jawaharlal Nehru Letters to Chief Ministers 1947-1964 Volume 4. 1954-1957. Government of India. 1988. に収録されている。ここに訳出した日本教育論はこの文献から採っている。

日本教育論

『街頭の大群衆では男女の学校生徒が特に目立っていました。佇むこれら多数の生徒を見て驚きましたのは、彼らがある種の制服を着用していて異彩を放っていたからです。私

はまがうことなくこのような生徒を何千何百人と見受けたのです。生徒達は大学、高校、小学校、時には幼稚園のそれでさえあり、あらゆる年齢、学年にわたっていました。義務教育が国に完全に行きわたれば、何と人口の大きな割合が様々な教育機関に行くことかと感動を覚えました。』 P.565.

ネルーは次いで、就学者数の表を掲げ、学校階梯、就学年限、公・私立校等に触れ、更にもう一度、制服の問題に言及する。

『制服はずっと昔からスクールやカレッジで、実際、明治時代には義務の一部と見なされ着用されてきたと聞かされました。そのアイディアは金持ちの生徒が優越感を抱かないように、生徒の間に平等感をもたらすことにあったというのです。すでに述べましたが、実際的に貧富を問わず誰もが同じ型の学校に行くのです。皆同じ教育を受けるのです。皆同じ制服を着用し、ことに小学校では昼には無料の給食が与えられるのです。』

このことは私には一定の平等感と仲間意識を育む上に、大きな効果があるに違いないように思われました。私達が富裕層の子供のための特別な学校を存在させている限り、子供の育成には確かに、心理的に実際的に常に差異が存在すると思います。そこで私達が教え方やその他の条件を等しくして全ての子供に与えることができた時、はじめてわが国の小学校は極めて貧弱なその水準を上げることが可能となるのです。

私は何百マイルの道路を自動車で移動しました。その間、カレッジやスクールの修学旅行生を乗せた何百台の大型バスとすれ違いました。恐らく、10月が特に生徒の修学旅行の月ということによるのでしょう。それにしても、何十万の生徒が美しい風景をもつあるいは歴史的関係をもつ日本の有名な場所を訪ねるのを見るのは驚きでした。生徒達はこれらの修学旅行の費用を負担し、その参加のため年間を通じてお金を積み立てているのだと聞かされました。

私はこれら全ての生徒が制服を着用していると述べましたが、男の子の場合、これは黒のズボンにボタンで留める上着で、夏は綿ですが、冬は恐らく幾分温かな素材で作られることでしょう。帽子は学校によって違いがありまた、肩には学校の識別票がついています。制服はそれほど魅力的ではなくインドの鉄道員のそれに似ています。女の子に関して言えば、スカートとショート・コートを着用していました。幼稚園児すらしばしば制服でした。

制服は如何に規律のみならず仲間意識の助長に役立っていることか、私は感銘を受けました。私達のスクールやカレッジも制服を導入できれば良いと思います。時が経てば、私達も初等学校の全生徒に一日一回、食事を無料で与えられるようになるでしょう。もしこれが可能になれば親達には救いとなり、同時に子供達の成長の助けとなることでしょう。』

PP.566-567.

ネルーはここでしばし、インドで行われている例に話を転じ、更に、教育からも話をそらし日本の文化について次のように論じる。

『生徒などの問題を論じて私は本題からそれてしまったようです。私の抱いていた日本人についての観念は有能で、勤勉で、真面目で、厳格で、余り笑ったりせず、非常に規律

正しく、上の人の命令に盲目的に服従するというものでした。私はこの見方をやや修正しました。

日本人は、特に若い人達は、冗談好きですぐに笑います。私は古い帝国主義的体制の崩壊後、日本人の間に著しい変化が起こったのではないかと想像します。日本人は、特に大都市ではアメリカ的生活様式を、言語やドレスを含むその外面的表象の多くにわたり取り入れましたが、従前通り、驚くべき慇懃さと礼儀正しさを保ち続けています。その全文化は極端なまでの慇懃さで貫かれそれは人を喜ばせはするものの、時にはやり過ぎの感すらします。

私は言語に言及しましたが、日本人は言語が苦手です。英語を必修とし今や第二言語になっています。興味深いのは英語を教えるずっと以前に子供達にラテン語のアルファベットを教えるという奇妙な事実です。これは後の英語学習への第一歩と考えられているようです。日本語は中国に由来する表意文字とある種の表音文字という変わった取り合わせとなっています。タイプライターにはとても厄介な言語です。

私達は日本の産業の偉大な発展についてあらゆることを知っています。日本人が満州を13年の短期間で高度に発達した産業地帯に変えたやり方は、急速な進歩の見本としてしばしば引き合いに出されます。故に私は高度に発達した産業を期待しておりました。事実は全体として私の期待を凌ぐものがありました。勿論、私達は日本人がそれを7、80年でなし遂げたことを覚えておかねばなりません。

日本人は注目すべき多くの資質を持っています。日本人の極端な慇懃さについてはすでに述べました。勤勉であり、規律があり、とても正確に事を運びます。私の日程表はびっしり詰まっていたのですが、あらゆることが寸秒違わず遂行され、私が食事をし終えるのさえ一二分の遅滞も許さないほど急ぎ立てられました。日本人は列車の一秒の狂いもないスケジュールでの運行に誇りを抱いています。しかし、私達には日本人について二つの印象が拭い難く心に残っています。一つはそのバイタリティーで、他の一つはその素晴らしい芸術性及び審美性です。

私は日本人のこの美的感覚、花や家具や絵画や全ての庭園に実に調和的な意匠を凝らすその驚くべき才能を見せつけられ、何時も賛嘆し歎びを感じたものでした。日本人の調和的な色彩感覚には並みはずれたものがあります。』 PP.567-568.

終

10. 書誌および解題範囲について

平田 諭治 (鳴門教育大学)

日本班が主資料としてもちい、本解題の原拠とする書誌は、ヴェンクシュテルン (Wenckstern, F.v.) が編纂した『大日本書史』 (*Bibliography of the Japanese Empire*) 全二巻と、ナホッド (Nachod, O.) らによる『日本帝国書誌』 (*Bibliographie von Japan*) 全六巻である。

ヴェンクシュテルンとナホッドは、戦前のドイツ人日本研究者として知られる。ヴェンクシュテルンは、第五高等学校で教鞭をとった外国教師であった。『大日本書史』はヴェンクシュテルンの帰国 (1908年) によって終刊したが、その続編がかれと親交のあったナホッドの手になる『日本帝国書誌』である。『大日本書史』の正式なタイトル“A Bibliography of the Japanese Empire: Being a Classified List of all Books, Essays and Maps in European Languages Relating to DAI NIHON [GREAT JAPAN], Published in Europe, America and in the East” からわかるように、ヨーロッパ言語による日本関係出版物をはばひろくカバーしている。実際のところ遺漏はあるものの、各分野の単行書・小冊子から雑誌論文・地図にいたるまで、各種のメディアを網羅している。これまで声価が高いわりには、従来日本人研究者のあいだで十分に活用されてこなかった貴重なビブリオといえる。ちなみに両書誌の訳題は、それぞれ原本表紙に付されているものである。

これらの書誌のなかには、当然のことながら、当時日本人が内外で発表した外国語文献が数多く集録されている。日本班はこの点に注目し、編者の分類にしたがいながら教育関係文献をリスト化するとともに、その一点一点について解題を付すことを試みた。未見のものや収集できなかったものも含まれるが、いつだれが、どのようなかたちで、いかなるコンテンツを異言語で表現しようとしたのか、ひとまず確認することができよう。

両書誌各巻の収録年代および刊行年は、つぎのとおりである。

	収録年代	刊年
『大日本書史』 1	1859-1893	1895
// 2	1894-1906上半期	1907
『日本帝国書誌』 1	1906下半期-1926	1928
// 2	//	//
// 3	1927-1929	1931
// 4	1930-1932	1935
// 5	1933-1935	1937
// 6	1936-1937	1940

『大日本書史』は、その1巻が幕末から日清戦争前まで、2巻が日清戦争期から日露戦争後

までを対象時期としている。その後をひきついだ『日本帝国書誌』は、1、2巻が「昭和」にはいるまでの二十年間を対象としているが、3巻から5巻までは三年ごとを対象とし、日中全面戦争に突入する1937年が下限となっている。なお3巻以降の各巻には、1906年以後の補遺が逐次追録されている。

両書誌の目次をみると、『大日本書史』は1、2巻とも全23章からなり、14章が「教育」(Education)にあたる。『日本帝国書誌』では、「教育」についての独立した章がなくなり、全17章のうち、9章「文明」(Civilisation)の「知的生活」(Intellectual Life)の下位項目として、“Teaching and Education”が設けられている。このことは件数の増減とは対応しないが、全体構成のなかの位置づけの変更をみてとることができる。なお「教育」をあつかった文献でも、他領域・他分野に重複しているものも想定されるが、それについては参照番号が付されているので、フォローが可能である。以下のリストおよび解題においては、これらが対象範囲となる。

なお、今回の解題作業を通した通時的な分析や全体的な考察は、本科研の最終報告においておこなう予定である。

11. 日本人・機関による日本教育関連の
英語・ドイツ語・フランス語文献リスト

大林 正昭 (広島大学)

平田 諭治 (鳴門教育大学)

○楠本 恭之 (広島大学)

高谷 亜由子 (広島大学大学院)

(○は作成責任者)

発行年	番号	著者	題名	個人執筆書籍類	雑誌名、副題など	巻号	発行	ページ数	担当者
1877	A-1	Nagasaki, Michinori S.	Women education: their social privileges and their civil rights in Japan				London	10p.	平田
1896	A-2	K. Okakura, Braquehaye, C.A. Arrivet	L'enseignement des beaux-arts au Japon				Bordeaux	24p.	
1902	A-3	Omura, Jutaro	Die deutsche Sprache in Japan				Berlin		高谷
1906	A-4	Miyamori, A. & T. Miwa	Round year. Student diaries in English and Japanese language				Tokyo & Osaka	155&160p.	平田
1906	A-5	Yoshida, K.	Ueber japanische Erziehung und den Moralunterricht in den Schulen Japans				Minden	23p.	高谷
1909	A-6	Kikuchi, Dairoku	Japanese Education (Lectures Delivered in the U. of London)				J. Murray	398p.	平田
1911	A-7	Mishima, M.	Japanische Schulhygiene.			III	Unterrichtsministerium	113p.	高谷
1911.07	A-8	Noda, Yoshio	L'enseignement de la morale laique au Japon. Les Documents du Progres.						
1917	A-9	Mizuno, Tsunekichi	The Kindergarten in Japan. Its Effects upon the Physical, Mental and Moral Traits of Japanese School Children				Stratford Co.		平田
1926	A-10	Sasaki, H.	Moral-Erziehung in Japan. Geschichtliches, Theoretisches, Praktisches.				Akademische Verlagsanstalt	160p.	高谷
1928	A-11	Sata, Ahiko	Neue Reform und modernen Entwicklung des japanischen Unterrichtswesens, insbesondere des Universitaetswesens.				Freiburg, Speyer u. Kaerner	30p.	高谷
1929	A-12	Takemaya, Riataro	Die Modernisierung des japanischen Erziehungswesens in den letzten 50 Jahren. (Phil. Diss. Jena 1929)				Jena, Peuvag-Filiale	87p.	高谷
1932	A-13	Hatsukade, Itsuaki	Die Bildungsideale in der japanischen Kultur und ihr Einfluss auf das Erziehungswesen in der Yedo-Zeit. (Diss.)				Wuerzburg, Konrad Tritsch	87p.	高谷
1934	A-14	Murakami, Komao	Das japanische Erziehungswesen.(Diss.)				Tokyo, Verl. Fuzambo	286p.	高谷
1935	A-15	Ito, Yuten	The Fundamental Characteristics of the Japanese Educational System				Autor. Verl.	8p.	平田
1935	A-16	Miyajima, Mikinosuke	Teacher and Pupil			2	Tokyo	44p.	楠本
1936	A-17	Kunieda, M.	Summary Report on Present Tendencies in the Development of Mathematical Teaching in Japan		(Gleichzeitige dt. u. franzoese. Ausg.)		Tokyo, Univ. of Literature and	49p.	平田
1936	A-18	Kunieda, M.	Divisional Reports on Present Tendencies in the Development of Mathematical Teaching in Japan. Prepared by the Japanese National Commission of the Teaching in Japan				Tokyo, Univ. of Literature and Science	174p.	平田
1936	A-19	Oshikawa, Josui & Gorham, Hazel H.	Manual of Japanese Flower Arrangement. With a Preface by Gaku Matsumoto				Nippon Bunka Renmei, Stechert	322p.	平田
1936	A-20	Yamamoto, Yuzo & Yoshino, G.	How should One Live?				Shin-cho-sha for the Nippon Shonen Bunko		平田
1937	A-21	Hasegawa, Nyozeikan	Educational and Cultural Background of the Japanese People				K. B. S. Publications	16p.	平田
1937	A-22	Kuvhiki, Kotaku (Hr.)	Guide to Otani Univ.				Otani Univ.	54p.	平田
1937	A-23	Yoshino, Yoza	Japanese Abacus Explained				Kyo Bun kwan	240p.	平田
1937.10	A-24	Kobayashi, Yoshio	Wanamaru. Suedseefahrt japan. Pfadfinder. Mit e. Geleitw. an d. dt. Jugend v. Graf Hutara. Fuehrer d. japan.				Pfadfinder. Freiburg:Herder	175p.	高谷
1937	A-25	Yoshida, Kenryu & Kaigo, T.	Japanese Education				Board of Tourist Industry.	99p.	平田

発行人	番号	著者	題名	雑誌名、副題など	巻号	発行	ページ数	担当者	
				個人執筆雑誌記事類					
1877	B-1	K. Mitsukuri	The Early Study of Dutch in Japan	Transactions Asiatic Society Japan	5(1)	Tokio	207-216	楠本	
1885	B-2	S. Tegima	Education in Japan	Education	6	Boston	141	楠本	
1897	B-3	Minami, P. H.	Deutsche Philosophie in Japan	The Far East	2	Tokyo	393-399	高谷	
1897	B-4	I. Yamagata	The Tokyo School for the Blind and Dumb	Hansei Zasshi	12(7)	Tokyo	21-24	楠本	
1898	B-5	Konoe Atsumaro	Education of Women in Japan	Hansei Zasshi	13	Tokyo	470-474	楠本	
1898	B-6	Jinzo Naruse	The Education of Women in Japan	Far East	3	Tokyo	27-32	楠本	
1898	B-7	Tetsuzo Okada	The Department of Philosophy in the Imperial University of Tokyo	The Japanese Evangelist	5	Tokyo	273-280	楠本	
1899	B-8	Nagao Ariga	The Future of Political Studies in Japan	The Orient	14(1)	Tokyo	4-8	楠本	
1899	B-9		Some Defects in Our Educational System	The Orient	14(11)	Tokyo	1-3	楠本	
1901	B-10	Shimoda, J.	Die Maedchenerziehung in Japan	Die Maedchenschule	4-5	Bonn	69-82	高谷	
1901	B-11	Tokiwo Yokoi	Education in Japan	International Journal of Ethics	11	Philadelphia	187-200	楠本	
1902	B-12	Zensaku Sano	Commercial Education in Japan	Special Reports on educational subjects	7	London, The British Board of Education	555-567	楠本	
1903	B-13	Sato, K.	The Education of Japanese Naval Officers	Nature	69	London	490	楠本	
1904	B-14	Chokuro Kadono	The Bringing up of Japanese Girls	Transactions and Proceedings Japan Society (TPJS)	6	London	308-322	楠本	
1904	B-15	Sanji Mikami	On the historiographical Institute in the Imperial University of Tokyo	Verhandlungen des 13ten Internationalen Orientalisten Congresses in Hamburg in 1902		Leide	186-188	平田	
1904	B-16	Okuma, Graf.	Entwickelung der Erziehung in Japan	Allgemeinen Zeitung	212	Muenchen	513-515	高谷	
1904.03	B-17	Noguchi, Y.	English Books Known in Japan	Bookman		New York		楠本	
1904.03	B-18	Naohide Yatsu	Imperial University of Tokyo	Popular Science Monthly	64	New York	466-473	楠本	
1905	B-19	Inouye, T.	Commentaire du rescrit imperial sur l'education	Melanges (a quarterly review)	2(6.7)	Tokyo	185-217	楠本	
1905	B-20	K. Suyematsu	Japanese Education	Independent Review	6	London	191-200	楠本	
1905	B-21	Sakaki, Y.	Ermuedungsmessungen in vier japanischen Schulen	Internationales Archiv f. Schuhygiene		Leipzig	53-100	高谷	
1906	B-22	Makino	Japanese Education (Quoted from Mr. Makino)	Open Court	20		573	楠本	
1906	B-23	Murasaki, A.	Peeresses School in Tokyo	The Girls' Realm	8	London	695-705	楠本	
1906	B-24	Sakaki, Y.	Japanische Literatur aus dem Jahre 1905, welche das schulhygienische Gebiet beruehrt.	Internationales Archiv fuer Schuhygiene	3(1)			高谷	
1906	B-25	Tsuji, T.	Japanisches Schulwesen.	Reins Enzyklopaedisches Handbuch der Paedagogik		H. Beyer & Soehne	57	高谷	
1907	B-26	Dairoku Kikuchi	Female Education in Japan	TPJS	7		420-432	楠本	
1907	B-27	Makiyama, E.	Fragen betreffend die japanische Volksschule.	Allgemeine Deutsche Lehrerzeitung	12		137-139	高谷	
1907	B-28	Suyematsu,	Japans Erziehung und Unterricht.	Katholische Zschr. fuer Erziehung und Unterricht			204-213	高谷	
1907	B-29	Tsuji, T.	Japanisches Bildungswesen.	Deutsche Schulerziehung, herausgegeben von W. Rein	Bd.2		567-579	高谷	

発行年	番号	著者	題名	雑誌名、副題など	巻号	発行	ページ数	担当者
1910	B-30	Seiichi Teijima	Higher Technological School (Tokyo)	Japan Magazine	1		432-437	楠本
1911	B-31	Sekiji Nishiyama	The Christian Contribution to Japanese Education	Open Court	25		432-434	楠本
1912	B-32	Naruse, Jinzo	Das Geistesleben der Japanerinnen	Uebersetzt von S. O. Japan und China	3		484-486	高谷
1912	B-33	Jiro Shimoda	Need of Educational Reform in Japan	Japan Magazine	3		745-749	楠本
1913	B-34	Viscount Kaneko	The Japanese Student	Japan Magazine	4		372-374	楠本
1913	B-35	G. Masuda	Waseda University	Japan Magazine	4		496-501	楠本
1916.06	B-36	K. Sakamoto	Japanese Education of Today	Educational Review	51/52	N. Y.	1-9	楠本
1918	B-37	Kato Naoshi	The Educational System of Japan	TPJS	16		132-145	楠本
1918	B-38	Tsuji, T.	Japanisches Bildungswesen.	Deutsche Schulerziehung, herausgegeben von W. Rein			558-580	高谷
1920	B-39	Yoshitaka Fujii	Woman's Education in Japan	The Japan Magazine	11		267-271	楠本
1921	B-40	Yohei Itsuka	Education in Japan	TPJS	18		80-91	楠本
1922	B-41	H. Katayama	The Language Question as it Affects Education in Japan	TPJS	19		54-74	楠本
1923	B-42	Hirai, Yasutaro	Die Handelsuniversitaet in Japan	Zschr. fuer Handeissenschaft und Handelspraxis	16		266-270	高谷
1923	B-43	Katayama, S.	Der Volkunterricht in Japan	Na putiach k nowoj shkole	4-5		180-191	高谷
1923	B-44	Naoshige Konishi	Education in Japan	Japan Magazine	14(6/7)		199-201	楠本
1925	B-45	Baigyo Mizuno	Chinese Students in Japan	The Young East	1		76-80	楠本
1926	B-46	Tsuboi, S.	Japanese Language School Teacher	Journal of Applied Psychology	11		160-165	楠本
1929	B-47	Hayashi, Graf Hiroto	Neuer Reformplan der Mittelschulen(Ecoles secondaires) in Japan.	Paedagogisches Zentralblatt	9(10)		597-600	高谷
1929	B-48	Mitobe, T.	Volkshbildung in Japan.	Paedagogisches Zentralblatt	9(1)		33-35	高谷
1929	B-49	Y. Tanaka	Proposed Changes in the Curriculum of the Middle Schools	Japan Christian Quarterly	Jan.		36-39	楠本
1930.01	B-50	Kojima, Gunzo	[Ein japanischer Student] ueber das Deutsche Hochschulleben.	Bayerische Hochschulzeitung (Semester 22)	7		1-6	高谷
1931	B-51	Abe, S.	Education in Formosa and Korea	Educational Yearbook		Teachers College, Columbia U.	681-701	楠本
1931	B-52	Osada, A.	Hauptstroemungen der Paedagogik im moderne Japan.	Internat. Zs. f. Erziehungswiss	257-270		257-270	高谷
1931	B-53	Yasuda, M.	Significant Aspects in the Progress of School Hygiene and Physical Culture in Japan	(World Federation of Education Associations. Health section Report)			79-81	楠本
1931.01	B-54	Mizuno, Yoshiyuki	Die Erziehung durch den Film in Japan.	Internet. Lehrfilmschau	3		5-10	高谷
1931.10	B-55	Obara, Kuniyoshi	Vortrag ueber sein Schulheim "Tamagawa Gakuen". Gehalten Winter 1930/31 in Hamburg, Wien, Zuerich, Stuttgart, Berlin, uebers. von Werner Zimmermann.	Tau. (Mbl.)	90		1-19	高谷
1931.11	B-56	Teruoka, Gito	Das Institut fuer Arbeitswissenschaft Kurasiki, Japan.	Berufsbildung u. Berufsbildung (Beil. zu: Jugend u. Beruf)	6		86-87	高谷
1932	B-57	K. Ashida	Japan	Educational Yearbook		Teachers College, Columbia U.	315-329	楠本
1932.04	B-58	Washio, S.	Thought Control Investigation Emphasizes Difficulties of Task	Trans-Pacific	21		4	楠本
1932.06	B-59	Washio, S.	Corruption of Private Schools Investigated by Authorities	Trans-Pacific	20		4	楠本
1933	B-60	Hokuseki Imai	Teaching "National" History	Contemporary Japan	2		330-331	楠本

発行年	番号	著者	題名	雑誌名、副題など	巻号	発行	ページ数	担当者
1933	B-61	Mantaro Kido	What is Wrong with Our Education?	Contemporary Japan	2		462-472	楠本
1933	B-62	Ichita Kobashi	Independence of Spiritual Education	Contemporary Japan	2		163-165	楠本
1933	B-63	Shigeharu Moriguchi	Academic Freedom and the Takikawa Case	Contemporary Japan	2		327-330	楠本
1933	B-64	Muto, Chozo	Dr. Ph. Fr. von Siebold und sein erstes Projekt einer Schule fuer Handelswissenschaften in Nagasaki, Japan.	Jubilaumsbd d. Dt. Ges. f. Natur- u. Voelkerkunde Ostasiens	2		192-195	高谷
1933	B-65	Kumaji Yoshida	Education in Japan	Yearbook of Education			733-744	楠本
1933.01	B-66	Tsuchii, E. und J. Schroeder	Aus der modernen Frauenbildung Japans. Jiyu Gakuen, eine eigenartige Maedchenschule in Tokio.	Illustr. Ztg.	4585	Leipzig	102-103	高谷
1933.07	B-67	S. Washio	Educational Program Hits Private Schools	Trans-Pacific	21		5	楠本
1933.07	B-68	S. Washio	Takikawa Case Means Academic Freedom is Placed in Corruption in Primary Schools [of Japan] Linked with Municipal Politics	Trans-Pacific	21		5	楠本
1933.12	B-69	S. Washio		Trans-Pacific	21		5	楠本
1934	B-70	Kuribayashi, Uti	Intelligenzpruefung von Volksschulkindern, Mittelschuelern und -schuelerinnen in der Stadt Sendai.	Tohoku psychologica folia.	1		169-233	高谷
1934	B-71	Y. Yamada	Educational System of Japan	Japan Magazine	24(1)		12-15	楠本
1934.02	B-72	M. Arikawa	Centennial Celebration of the Birth of Yukichi Fukuzawa	Japan Magazine	24		48-52	楠本
1934.04	B-73	Yoneji Miyagawa	Medical Education in Japan, with Suggestions for Its Future Progress	Japanese Journal of Experimental Medicine	12		105-109	楠本
1934.05	B-74	Chigerou Yamamoto	Moral Lecture (Translated by R. T. House)	Christian Century	51		594-595	楠本
1934.06	B-75	S. Washio	Professional Clique is Strong against Reforms in Education	Trans-Pacific	22		4	楠本
1935	B-76	T. Yasui	Imperial Invention Society	Japan Magazine	25(1)		60-61	楠本
1935.01	B-77	Inouye, Tetsujiro	Die Anfrage des Studiums der deutschen Sprache in Japan	Nippon	1	Berlin	18-32	高谷
1935.04	B-78		Kyoiku Chokugo. Japan u. Engl. The Imperial Rescript on Education			The Toho Cultural Society	21,22	楠本
1935.05	B-79	Fukuda Ipppei	Some Faults of Japanese Education	Japan in Pictures	3		158	楠本
1935.10	B-80	Yasaka Takaki	Hepburn Professorship of American Constitution, History and Diplomacy at the Tokyo Imperial University	Institute of International Education News. Bulletin	11		4-5	楠本
1936	B-81	Hayashi Tsuruichi	On the Mathematicians in the Tokai-do Districts, Excluding Yedo and Its Surroundings	Tohoku Mathematical Journal	42		1-31	楠本
1936.02	B-82	Kuribayashi, Uchi	Intelligenzpruefung von Volksschulkindern, Mittelschuelern und -schuelerinnen, sowohl in einer kleinen Stadt, als in einem kleinen Dorf in der Provinz Miyagi.	Tohoku Psychologica Folia	4		71-92	高谷
1936.04	B-83	Minouchi, Teruko	Entwicklung und gegenwaertige Lage der medizinischen Frauenhochschule in Tokyo	Die Aerztin	12		75-84	高谷
1936.07	B-84	Nakamura, Murao	Ayako Tanahashi, die aelteste Lehrerin in Japan	Nippon			31	高谷
1936.09	B-85	Tamiya, Hiroshi	Das Tokugawa Biologische Institut.	Der Biologe	5		303-306	高谷
1936.12	B-86	Hachisaburo Hirao	Novel Education for Youth	Japan Magazine	26(3,4)		2-4	楠本
1937	B-87	Kurahashi Sozo	Primary School in Japan	Travel in Japan	3(1)		10-17	楠本
1937	B-88	Nasani, Fujito	Was ruetzt mir die Kenntniss der deutschen Sprache innerhalb und ausserhalb meines Berufes?	Japan.-Dt. Geistesaustausch.	8		21-25	高谷
1937.01	B-89	Hirose Chiyo	New Worlds	Japan in Pictures	5(1)		28-29	楠本
1937.02	B-90	Mita	Technische Erziehung in Japan.	Rdsch. Techn. Arbeit	17		2	高谷
1937.03	B-91	Nyozekan Hasegawa	Characteristics of Education in Japan	Contemporary Japan	5(4)		586-598	楠本
1937.03	B-92	Hasegawa, Nyozekan	Maedchenerziehung in Japan	Nippon	10		4-9	高谷

発行年	番号	著者	題名	雑誌名、副題など	巻号	発行	ページ数	担当者
1937.03	B-93	Tomoda, Y.	Organisation de la recherche chimique au Japon	Chimie et Industrie	T37	Paris	602-603	楠本
1937.04	B-94	Morikawa Masao	Doshisha University	Pan-Pacific	1937		18-19	楠本
1937.05	B-95	Jiro Tsuji	Scientific Progress in Japan. The Scientific Exhibits in the World Exposition at Paris	Nippon	11		16-19	楠本
1937.06	B-96	Kitayama, Junyu	Die Organisationen der japanischen Jugend.	Wille und Macht.	5		21-22	高谷
1937.07	B-97	Shigetaka Abe	Education in Japan	Nippon	12		6-13	楠本
1937.07	B-98	Akira Ikeda	Some Fundamentals of the Japanese Education	Cultural Nippon	5(2)		103-116	楠本
1937.07	B-99	Michiji Ishikawa	Family Education in Japan	Cultural Nippon	5(2)		53-80	楠本
1937.07	B-100	Jikichiro Kawahara	The Organs of Social Education in Japan	Cultural Nippon	5(2)		91-102	楠本
1937.07	B-101	Gaku Matsumoto	The Education of Tomorrow	Cultural Nippon	5(2)		1-5	楠本
1937.07	B-102	Mushakoji, Graf Kintomo	Austausch von Schuelerarbeiten zwischen Japan und Deutschland. Ansprache des japan. Botschafters	Die zeitgemaeesse Schrift	42		3-4	高谷
1937.07	B-103	Hidejiro Nagata	On the World Education Conference	Nippon	12		4-5	楠本
1937.07	B-104	Toyoo Ohgushi	Japanese State and Education	Cultural Nippon	5(2)		47-52	楠本
1937.07	B-105	Joji Sakurai	Beginning of Western Science in Japan	Nature	140		205-206	楠本
1937.07	B-106	Saju Tase	An Outlined History of Japanese Education	Cultural Nippon	5(2)		7-46	楠本
1937.08	B-107	Tokuo Doi	The Hundred-year-old Teacher of Geisha	Asia	37(8)		547-548	楠本
1937.08	B-108	Hatai, I. H.	Life Begins at Eighteen	Japan in Pictures	5(8)		276-277	楠本
1937.12	B-109	Hachisaburo Hirao	The Present Situation and Education	Contemporary Japan	6(3)		507-510	楠本
諸機関執筆物								
1873	C-1	Department of Education	Report (Annual), of the Minister of State for Education			Tokio	18p. など	大林
1873	C-2	Kobu-Dai-Gakko	Calender of the Imperial College of engineering, Session					大林
1876	C-3	Tanaka Fujimaro	Outline History of Japanese Education (for the Philadelphia Exhibition in 1876)			New York	202p.	平田
1877	C-4	Kobu-Dai-Gakko	Catalogue of books contained in the Library					大林
1877	C-5	Kobu-Dai-Gakko	Catalogue of its Museum to illustrate Jap. product and manufactures					大林
1877	C-6	Kobu-Dai-Gakko	Catalogue of physical apparatus in the Museum					大林
1877	C-7	Kobu-Dai-Gakko	General Report by the principal and professors for the period 1873-77				62p.&72p.	大林
1877	C-8	Kobu-Dai-Gakko	Preliminary Catalogue of the models, tools etc. contained in the Museum					大林
1878	C-9	Tokio Daigaku	Catalogue of the officers and students of the Departments of Law, Science and Literature with a statement of the course of instruction				27p.	大林
1880	C-10	Tokyo Ecole des langues etrangeres	Catalogue des livres et du material scientifique			Tokio		
1881	C-11	Department of Education	Code (Japanese) of Education, promulgated the 29th of the 9th month of the 12th year of Meiji (1877)			Tokio, Department of Education		大林
1884	C-12	Bureau of General Business of the Department of Education	Outlines General of Education in Japan. Specially prepared for the International Health Exhibition in London.			London	29p.	平田

発行年	番号	著者	題名	雑誌名、副題など	巻号	発行	ページ数	担当者
1884	C-13		Catalogue with explanatory notes of the Department of Education of the Empire of Japan in the International Health and Education Exhibition held in London 1884			London	33p.	平田
1886	C-14	Imperial Cabinet: Section of Archives	Katalog der deutschen Buecher				293p.	
1886	C-15		Education Society. A short History of the Japanese Education Society and its present condition			Tokio		平田
1886.03	C-16	Department of Education	Ordinance, Imperial, relating to the Imperial University			Tokio, Department of Education	5p.	大林
1886.08	C-17	Department of Education	Ordinance, Imperial. General Regulations for Schools			Tokio, Department of Education	2p.	大林
1886.08	C-18	Department of Education	Ordinance, Imperial, relating to Elementary Schools			Tokio, Department of Education	4p.	大林
1886.08	C-19	Department of Education	Ordinance, Imperial, relating to Middle Schools			Tokio, Department of Education	3p.	大林
1886.08	C-20	Department of Education	Ordinance, Imperial, relating to Normal Schools			Tokio, Department of Education	3p.	大林
1886.08	C-21	Department of Education	Regulations as to the Admission to ordinary Normal Schools of Pupils from Various Districts of Fu and Ken	Ordinance of the Department of Education	No.10	Tokio	10p.	大林
1886.08	C-22	Department of Education	Regulations relating to the Performance of Duties by the Graduates of Ordinary Normal Schools	Ordinance of the Department of Education	No.11	Tokio	3p.	大林
1886.08	C-23	Department of Education	Relating to Subjects of Study and the Standard to be attained in Elementary Schools	Ordinance of the Department of Education	No.8	Tokio	8p.	大林
1886.08	C-24	Department of Education	Relating to Subjects of Study and the Standard to be attained in ordinary Normal Schools	Ordinance of the Department of Education	No.9	Tokio	8p.	大林
1886.09	C-25	Department of Education	Regulations as to the Licensing Elementary School Teachers	Ordinance of the Department of Education	No.12	Tokio	8p.	大林
1886.09	C-26	Department of Education	Regulations concerning the Examination and Approval of Schoolbooks and Charts	Ordinance of the Department of Education	No.7	Tokio	10p.	大林
1886.09	C-27	Department of Education	Subjects of Study and the Standard to be attained in Higher Middle Schools	Ordinance of the Department of Education	No.16	Tokio	5p.	大林
1886.09	C-28	Department of Education	Subjects of Study and the Standard to be attained in Ordinary Middle Schools	Ordinance of the Department of Education	No.14	Tokio	7p.	大林
1886.12	C-29	Department of Education	For Regulations as to Instruction in the Simpler Elementary School Course	Instructions of the Department of Education	No.1	Tokio	2p.	大林
1886.12	C-30	Department of Education	Notification of the Department of Education No3, for the Limits within which Higher Middle Schools are to be			Tokio, Department of Education	2p.	大林
1886.12	C-31	Department of Education	Ordinance, Imperial, relating to the Official Regulations for the Higher Normal School, the Higher Middle School, and the Tokio Commercial School			Tokio, Department of Education	3p.	大林
1886.12	C-32	Department of Education	Regulations as to the Admission to the Higher Normal School of Pupils from Various Districts	Ordinance of the Department of Education	No.18	Tokio	2p.	大林
1886.12	C-33	Department of Education	Subjects of Study and the Standard to be attained in Higher Normal School	Ordinance of the Department of Education	No.17	Tokio	12p.	大林

発行年	番号	著者	題名	雑誌名、副題など	巻号	発行	ページ数	担当者
1886.12	C-34	Department of Education	Regulations relating to the Performance of Duties by the Graduates of Higher Normal Schools	Ordinance of the Department of Education	No.19	Tokio	2p.	大林
1887	C-35	Tokyo Imperial Cabinet: Section of Archives	Catalogue des livres francais					
1887.06	C-36	Department of Education	A short history of the Department of Education. Translated and published by the Department of Education			Tokio	52p.	平田
1887.07	C-37	Department of Education	For Appendix to Subjects of Study and the Standard to be attained in Elementary Schools	Ordinance of the Department of Education	No.21	Tokio	2p.	大林
1887.07	C-38	Department of Education	For Particulars as to the Military Exercise under "Gymnastics" in ordinary Middle School Course	Instructions of the Department of Education	No.6	Tokio	2p.	大林
1887.07	C-39	Department of Education	For Regulations as to the Adoption of Books and Charts for Public and Private Elementary Schools	Instructions of the Department of Education	No.3	Tokio	5p.	大林
1887.07	C-40	Department of Education	For the principal items as to the Disbursement of the Educational Expenses of Male Pupils in Ordinary Normal	Instructions of the Department of Education	No.4	Tokio	4p.	大林
1887.07	C-41	Department of Education	Ordinance, Cabinet, relating to the Titles and the Manner of the Treatment of Public School Officials			Tokio, Department of Education	1p.	大林
1887.07	C-42	Department of Education	Ordinance, Imperial, relating to Degrees			Tokio, Department of Education	2p.	大林
1887.07	C-43	Department of Education	Ordinance, Imperial, relating to the Ranks of the Officials in the Imperial University			Tokio, Department of Education	2p.	大林
1887.07	C-44	Department of Education	Ordinance, Imperial, relating to the Official Regulations for Ordinary Normal Schools			Tokio, Department of Education	4p.	大林
1887.07	C-45	Department of Education	Regulations as to licensing Instructors for Ordinary Normal Schools, Ordinary Middle Schools and Higher Female Schools	Ordinance of the Department of Education	No.21	Tokio	8p.	大林
1887.07	C-46	Department of Education	Regulations concerning the Examination of Schoolbooks and Charts	Ordinance of the Department of Education	No.2	Tokio	4p.	大林
1887.07	C-47	Department of Education	Table showing the Amount of Salaries of Officials in Ordinary Normal Schools	Instructions of the Department of Education	No.8	Tokio	1p.	大林
1887.08	C-48	Department of Education	Detailed Rules relating to Degrees	Ordinance of the Department of Education	No.4	Tokio	6p.	大林
1887.09	C-49	Department of Education	Outline Descriptive, of the Various Schools in Japan			Tokio, Department of Education	31p.	平田
1888	C-50	Department of Education	Outlines of the modern education in Japan			Tokio	184p.	平田
1891	C-51		Law relating to the directors of Fu and Ken Normal Schools			Tokyo	9p.	大林
1891	C-52	Department of Education	Ordinance, Imperial, dated October 6th 1890 relating to the Elementary Schools etc.			Tokio	8p.	大林
1891	C-53	Department of Education	Regulations, General, relating to Local Education etc.	(Law No.89)		Tokio, Department of Education	6p.	大林
1891	C-54	Doshisha Preparatory Collegiate, Science and Theological Schools	Calender for the year 1890-91			Kyoto		大林
1891	C-55	Imperial University of Japan	Author's Catalogue				621p.	大林

発行年	番号	著者	題名	雑誌名、副題など	巻号	発行	ページ数	担当者
1893	C-56	Department of Education	Catalogue of objects exhibited at the World's Columbian Exposition Chicago			Tokyo	112p.	平田
1893	C-57	Imperial Diet	Catalogue of English, French, German and Italian books in the House of Peers				57p.	平田
1894	C-58	Patent Bureau	Catalogue of books in foreign languages in the library					大林
1896	C-59	Dai-san Koto Gakko	Classified Catalogue of the books of the library with an alphabetical index					大林
1896	C-60	Imperial University of Japan	Classified Catalogue	2 vols.			291p.&266p.	大林
1898	C-61	Imperial Library	A Catalogue of Books in European languages				108p.-201p.	大林
1898	C-62	Tokyo Higher Commercial School	Annuaire de l'Ecole Supérieure de Commerce pour					
1899	C-63	Department of Education	Catalogue of books in European languages				560p.	平田
1899	C-64	Tokyo Fine Art School	Notice sur l'Ecole des Beaux-Arts			Tokyo		
1899	C-65	Tokyo Imperial Univ.	Resume du Calendrier de l'Universite Imperiale de Tokyo pour l'annee					
1899	C-66		Notice sur l'Ecole des Beaux-Arts dans l'Ueno Park a Tokyo				30p.	
1899.08	C-67	Department of Education	Regulations relating to the Private School Ordinance No.38	Japan Weekly Mail		Yokohama	191	大林
1900	C-68	Department of Education	Laws, Ordinances and Regulations relating to Technical Schools issued between 1893-99			Tokyo	8p.	大林
1900	C-69	Tokyo Blind and Dumb School.	Rapport sommaire sur l'Ecole des aveugles et sourds-muets de Tokyo			Tokyo	41p.	
1900	C-70	Tokyo Higher Normal School	Notice sur l'Ecole Normale Supérieure de Tokyo			Tokyo		
1900	C-71	Tokyo Industrial School	Resume historique et statistique			Tokyo	21p.	
1900.07	C-72	Department of Education	Regulations relating to foreign students in Japanese schools	Japan Weekly Mail		Yokohama	37	大林
1900.09	C-73	Department of Education	Revised Rules relating for the preparatory Department of High School of Sept. 33rd year Meiji	Japan Weekly Mail		Yokohama	252	大林
1901	C-74	Department of Education	Regulations for the admission of students to the Government High Schools (Koto-gakkos) issued in May 1901	The Japan Evangelist	8	Tokyo	169-170	大林
1901	C-75	Higher Commercial School	Calendar of the Tokyo Higher Commercial School and of the Commercial Teachers' Training Institute fo 1901				12 plates	大林
1902	C-76	Imperial Museum	Catalogue of books in languages in the library				80p.	大林
1902	C-77	Tokyo Higher Normal School	Catalogue of European books in the library				264&36p.	大林
1903	C-78	Department of Education	Annual Report of the Minister of State for Education					大林
1903	C-79	Imperial Cabinet: Section of Archives	Catalogue of books in foreign languages: Books in the English language (Classified according to subjects with an alphabetical author's index at the end of each part)				573p.	大林
1903	C-80	Kyoto Imperial Univ.	Katalog der fremdsprachlichen Buecher in der Bibliothek der Juristischen Fakultät der kaiserlichen Universitaet zu Kyoto			Kyoto	952p.	
1903	C-81	Peer's College Library	Catalogue vol. 1 English books				230p.	大林
1903	C-82	Tokyo Blind and Dumb School	Short account of it. with numerous illustrations			Tokyo	71p.	大林

発行年	番号	著者	題名	雑誌名、副題など	巻号	発行	ページ数	担当者
1903	C-83	Waseda University	Classified Catalogue of foreign books in the library				278p.	大林
1904	C-84	Department of Education	Education in Japan; prepared for the Louisiana Purchase Exposition at St. Louis, U.S.A. 1904. with numerous illustration of the interior and exterior of school-buildings				380p.	平田
1904	C-85	Higher Technical School	Circular of information			Tokyo	29p.	大林
1904	C-86	Imperial Education Society of Japan	Historical Summary, with rules and regulations				32p.	平田
1904	C-87	Imperial Library	Annual Report. An extract of the same in English language				4p.	大林
1904	C-88	Ohashi's Library	The annual report					大林
1904	C-89	Tokyo Higher Technical School	Classified Catalogue of European books in the Library				122p.	大林
1904	C-90	Yokohama, United Club	Catalogue of its Library					大林
1905	C-91	Japan Women's	Calender for 1904-05			Tokyo	35p.	大林
1905	C-92	Kyoto Library	Finding list of European books				108p.	大林
1905	C-93	Osaka Library	Classified Catalogue of foreign books with an author's index				125&8p.	大林
1906	C-94	Department of Education	Annual Report of the Minister of State for Education (for the school year 1903-04)		No.36	Tokyo	174&77p.	大林
1906	C-95	Kyoto Imperial University	Calender, last volume issued for 1905-6 with a plan of the University buildings				140p.	大林
1906	C-96	Tokyo Imperial University	Calender, last volume issued for 1905-6 two plans of the buildings				128&51p.	大林
1907	C-97		Summarized Catalogue of Waseda University (1907/08)				37p.	大林
1910	C-98		Education in Japan Prepared for the Japan-British Exhibition			Department of Education	172p.	平田
1921	C-99	Department of Education	Annual Report of the Minister of State for Education					大林
1926	C-100		A General Survey of Education in Japan			Department of Education	88p.	平田
1930.02	C-101		Reconstruction Album. Containing the Final Report in the Rec. of the Tokyo Imp. Univ. Library 1923 to 1929			Imperial Univ. Library	26p.	大林
1932	C-102		The Keiogijuku Univ. A Brief Account of its History Aims and Equipment			Keiogijuku Univ.	87p.	大林
1933	C-103		Nanzaddos Neuester Lehrstoffskatalog 1933				44p.	
1934.06	C-104	Hiroshima Imperial Univ. of Literature and Natural Sciences	University is Torn by Dispute on Dean	Trans-Pacific	22		14	大林
1935	C-105		A General Survey of Education in Japan			Dep. of Japan	75p.	平田
1936	C-106	Katei Gakko	Reformatory, Founded by the Late Rev. Kosuke Tomeoka	Dai Nippon	1936		138-142	大林
1936.03	C-107	The Keiogijuku Univ.	A Brief Account of its History, Aims and Equipment				104p.	大林
1937	C-108		A General Survey of Education in Japan			Dep. of Education	123p.	平田
1937	C-109		Education in Japan under the Department of Education: Administration and Work			Department	43p.	平田
1937.03	C-110		Kyoto Imperial Univ. Prospectus					大林
	C-111	Imperial Education	Catalogue of foreign books					大林

12. 個人執筆英語文献の解題（書籍類）

平田 諭治 （鳴門教育大学）

A-1

■Nagasaki, Michinori S., *Women Education: their Social Privileges and their Civil Rights in Japan*, London, 1877, 10 pp.

■ナガサキ・ミチノリ『女子教育－日本における女性の社会的権利と市民権－』

【目次・見出し】不明

未見。

(平田)

A-4

■Miyamori, A. & Miwa, T., *Round Year. Student diaries in English and Japanese Language*, Tokyo & Osaka, 1906, 155 & 160pp.

■『日記にみる学生の一年間』

【目次・見出し】不明

未見。

(平田)

A-6

■Kikuchi, Dairoku, *Japanese Education. Lectures Delivered in the University of London*, London, J.Murray, 1909, 398pp.

■菊池大麓『日本の教育－ロンドン大学講義録－』

【目次】

第1章 日本歴史の梗概－太古から幕府体制まで、第2章 日本歴史の梗概（続）－幕府体制から維新まで、第3章 日本歴史の梗概（続）－明治時代、第4章 行政システム、第5章 明治時代の教育の史的概観、第6章 教育システムの全般、第7章 監督・管理・視学全般、第8章 学校全般、第9章 初等教育Ⅰ、第10章 初等教育Ⅱ（続）、第11章 初等教育Ⅲ（続）、第12章 初等教育Ⅳ（続）、第13章 初等教育Ⅴ（続）、第14章 小学校教員、第15章 中学校、第16章 中学校における諸学科目の教授の詳細、第17章 中学校における諸学科目の教授の詳細、第18章 女性の地位、第19章 高等女学校、第20章 師範学校、第21章 中学校教員、第22章 高等師範学校、第23章 教科書、第24章 体育および学校衛生、第25章 実業教育、第26章 高等教育、第27章 各種学校・私立学校など、第28章 家庭教育、索引

1907（明治40）年菊池大麓がロンドン大学において行った日本の教育に関する講義をまとめたもの。全28章からなる本文は386頁におよび、イギリス大手の出版社ジョン・マレー社から1909年5月に刊行され、正価5シリングで市販された。当時貴族院議員であった菊池は、青少年期に二度イギリスに留学しており、東京帝国大学総長や文部大臣などを歴任した。出版にいたるロンドン大学での講義のいきさつについては、目次にさきだつ緒言に略

述されている。それによれば、同講義はマーティン・ホワイトの寄付にかかる社会学教育事業の一環として実施されたものであり、本書は日本の教育行政、教育学的見地からみた初等・中等教育を中心とする日本の教育という、二つのコースの講義内容を一本化し、講義期間中もしくはその後の制度改正に関する記述を付加している。単行書としての公刊は当初から予定されていた。ロンドン大学からの講義依頼による、日本政府からの派遣講師が菊池大麓であったわけだが、このとき公式に教育勅語が英訳され、官定英訳版として紹介されている。本書の内容は、菊池が開講演説で披露した教育勅語から説き起こし、皇国史観にもとづいて日本の歴史を概観するとともに、学校教育を中心とする公教育体制の各論へと展開している。明治末年における日本の教育に関する公式報告書の性格を帯びたもので、教育勅語を日本の教育の基本理念としてアピールし、日英同盟下のイギリスにおいて少なからず反響を喚起した。

(平田)

A-9

■ Mizuno, Tsunekichi, *The Kindergarten in Japan. Its Effects upon the Physical, Mental and Moral Traits of Japanese School Children*, Boston, Stratford Co., 1917, 62 pp.

■ 水野常吉『日本の幼稚園—学童の心身および道德特性におよぼす影響—』

【目次】

第1章 序論、第2章 各国の幼稚園の状況、第3章 日本の幼稚園、第4章 日本の学童の心身および道德特性に幼稚園課程がおよぼす影響

1917(大正6)年アメリカ滞在中の文部省普通学務局囑託水野常吉が著した、幼稚園に関する調査研究報告書。福島県に生まれた水野は、1908年広島高等師範学校本科英語部を卒業し、その後研究科に進学、本書公刊をへてのち横浜高等工業学校教授となる。本書における著者肩書きは、「1908年広島高等師範学校文学士」であった。巻頭には水野の指導にあたったと思われる、イリノイ大学教育学部のW.C.Bagleyが緒言(Preface)を寄せている。本書は幼稚園の教育実践と、それを基礎づけている教育理論・学説の影響関係を調査しているが、緒言においては、その科学的・実証的な教育研究の方法論が高く評価されている。世界(史)的な幼稚園の位置関係を明らかにするため、12か国にわたる幼稚園事情を概観、比較検討したり(第2章)、統計的な手法を用いながら日本の幼稚園の実態を考察している(第4章)ところに、学術研究書としての本書の特長がうかがわれる。

(平田)

A-15

■ Ito, Yuten, *The Fundamental Characteristics of the Japanese Educational System*, Autor. Verl., Tokyo, 1935, 8 pp.

■伊藤猷典『日本の教育システムの基本的特質』

【目次・見出し】不明

未見。1935（昭和10）年開催された汎太平洋新教育会議（Pan Pacific New Education Conference）において、台北帝国大学教授であった伊藤猷典が講演したものの。詳細は不明だが、みずからの発表原稿を自費出版したもののようである。新教育協会編『汎太平洋新教育会議報告書』（刀江書院、1936年）には、第一編の「総会に於ける講演」に、「日本教育の根本特徴」と題する日本語文が収録されている。同報告書の序（野口援太郎）によれば、「総会の講演は、外国の人々に、日本の国情並に教育の状況を知らせることを主として行はれたものであるし、従つて彼処で発表されたものは、みなさう云ふ考へで起草せられたものである」という。

（平田）

A-16

■Miyajima, Mikinosuke, *Teacher and Pupil*, Gleichzeitige dt. u. franzoese. Ausg., 2, 1935, 44 pp.

■宮島幹之助『師弟』

【目次・見出し】不明

未見。英語版の他にフランス語版、ドイツ語版の存在を確認している。書誌中には北里柴三郎教授を追憶するための小冊子と紹介されている。著者の宮島幹之助は1872（明治5）年に生まれ、東京帝国大学理科卒業後医学博士となった。1914（大正3）年に北里研究所部長となり、国際連盟保健委員会帝国代表委員などでアメリカやドイツ、アフリカなどに派遣された。1924（大正13）年に衆議院議員となった。

（楠本）

A-17

■Kunieda, Motoji, *Summary Report on Present Tendencies in the Development of Mathematical Teaching in Japan*, Tokyo, University of Literature and Science, 1936, 49 pp.

■国枝元治『日本における数学教育最近の傾向に関する摘要報告』

【目次】

1. 序、2. 日本現行の学校制度、3. 小学校の数学教育、4. 中学校の数学教育、5. 高等女学校の数学教育、6. 実業学校の数学教育、7. 青年学校の数学教育、8. 高等学校の数学教育、9. 単科大学・専門学校の数学教育、10. 総合大学の数学教育、11. 師範学校の数学教育、12. 数学教員の養成、13. 数学関係学会・協会・出版物、14. 結、15. 付記

1936（昭和11）年7月に開かれた第10回国際数学者会議（於オスロ）の国際数学教育委員会の部会において、東京文理科大学教授の国枝元治が発表し、提出した調査報告書の梗概版。1932年の前回大会（於チューリッヒ）で同委員会が決議した、各国の「数学教育最近

の傾向」に関する報告提出の求めに応じたもの。国枝は文部省より出張を命じられ、第10回大会に日本代表の一人として出席、委員会への加入を手続きした。本報告書は、その約三か月前の4月中旬に原稿を脱稿、翻訳・印刷のうえ翌月末東京文理大から出版（売捌は丸善、定価一円）され、国枝は百部携行したという。緒言によれば、前年の秋、国際数学教育委員会幹事長のフェール（H.Fehr）教授から、学術研究会議の数学部主任であった高木貞治に報告書提出の依頼が寄せられ、11月中旬、国枝が高木よりその起稿を委嘱された。文部省とも協議を遂げた結果、その調成のため翌1月はじめ、国枝を長とする数学教科調査委員会が東京文理大内に設けられる。ただちに同委員会で分担しながら、短日月のあいだに草稿が仕上げられるのだが、各々報告の要点を国枝のもとでまとめたものが本書である。ちなみに、各委員の稿本をそのまま集録したのが「各部報告」（A-18）である。内容は緒言につづき、上掲の15項目からなるが、その構成は「各部報告」と同一である。全49頁、各項平均して三頁ほどの簡略な説明だが、分量的には小学校および中学校をあつかった3ならびに4が多い。序の冒頭には、「故藤沢利喜太郎博士が国際数学教育委員会の総会に提出した、日本の数学教育に関する二つの報告が発表される1912年までのあいだ、日本において数学教育改造運動は、なんら実際上の影響をもたらさなかった」と記されている。ここにある藤沢を中心に作成された報告書は、1912年の第5回国際数学会議（於ケンブリッジ）にさいしてのもので、本書においてもたびたび参照されている。そのひとつがかれの名で文部省から出版された、*Summary Report on the Teaching of Mathematics in Japan*（1912）であって、本書はその後の数学教育改造運動影響下の動向を跡づけた、同報告の続編として位置づくものとみてよい。日本語の原文にあたる「日本ニ於ケル数学教育最近ノ傾向 摘要報告」は、『日本中等教育数学会雑誌』第18巻第5号（1936年9月）に掲載されており、書誌にも収録されている。

（平田）

A-18

■Kunieda, Motoji, ed., *Divisional Reports on Present Tendencies in the Development of Mathematical Teaching in Japan. Prepared by the Japanese National Commission of the Teaching of Mathematics*, Tokyo, University of Literature and Science, 1936, 174 pp.

■国枝元治編『日本における数学教育最近の傾向に関する各部報告』

【目次】

I. 日本現行の学校制度（委員 下村市郎 文部省督学官・臨時委員 津田一夫 文部省図書局勤務）、II. 小学校の数学教育（委員 塩野直道 文部省図書監修官・臨時委員 安東寿郎 東京高等師範学校教諭兼教授・臨時委員 津田一夫）、III. 中学校の数学教育（委員長 国枝元治・臨時委員 松尾正夫 東京高等師範学校教諭・幹事 鍋島信太郎 東京高等師範学校教諭兼教授）、IV. 高等女学校の数学教育（委員 岩間緑郎 東京女子高等師範学校教授・

臨時委員 中澤伊與吉 東京女子高等師範学校教授)、V. 実業学校の数学教育(委員 渡辺孫一郎 東京工業大学教授・臨時委員 水内金太郎 東京府立実科工業学校教諭)、VI. 青年学校の数学教育(委員 堀口きみこ 文部省督学官)、VII. 高等学校の数学教育(委員 渡辺秀雄 第一高等学校教授)、VIII. 単科大学・専門学校の数学教育(委員 渡辺孫一郎 東京工業大学教授)、IX. 総合大学の数学教育(委員 杉村欣次郎 東京文理科大学教授)、X. 師範学校の数学教育(委員 阿部八代太郎 東京高等師範学校教授)、XI. 数学教員の養成(幹事 鍋島信太郎)、XII. 数学関係学会・協会・出版物(同前)

1936(昭和11)年の第10回国際数学会議における国際数学教育委員会の部会に、日本代表として出席した東京文理科大学教授の国枝元治が提出した調査報告書。「摘要報告」(A-17)の解題をあわせて参照されたい。国際数学教育委員会から要請のあった報告書作成のため、文部省との協議のうえ、国枝を長とする数学教科調査委員会が東京文理大内に設けられたが、本書はそのメンバーの各報告をそのまま集録したものである。本報告書は、「摘要報告」と同じく4月中旬に原稿を脱稿し、翻訳・印刷して翌々月上旬にやはり東京文理大から出版(売捌は丸善、定価3円50銭)された。「摘要報告」のほうは国枝が持参しているが、本報告はかれが帰国ののち、国際数学教育委員会の本部(ジュネーブ)に五十部送付している。本書の場合においても、第5回国際数学会議で文部省を代表して藤沢利喜太郎が提出した、*Report on the Teaching of Mathematics in Japan*(1912)が先蹤となり、参照材料となっている。日本語の原文にあたる、数学教科調査委員会編『日本に於ける数学教育最近の傾向』は、1936年8月目黒書店から出版されている。

(平田)

A-19

■Oshikawa, Josui and Gorham, Hazel H., *Manual of Japanese Flower Arrangement*, Tokyo, Nippon Bunka Renmei (The Nippon Cultural Federation), 1936, 322 pp.

■押川如水、ヘーゼル・H・ゴーハム『日本の生け花の手引き』

【目次】

口絵、緒言、はしがき、生け花の歴史的背景、日本の暮らしのなかの花、日本人の自然愛、日本の生け花の秘訣、池坊一生け花の伝統的流儀、松風流盛花、松風流投入、日本のことばの用語解説

1936(昭和11)年、松風流家元の押川如水がヘーゼル・ゴーハムとともに著した、日本の生け花の英文手引書。日本文化の海外紹介を推進した日本文化連盟から、同年9月発行され、同会長松本学が緒言を寄せている。国内定価は15円。緒言ならびに著者によるはしがきによれば、本書は日本独自の生け花を、諸外国とりわけ英語圏の人々にひろく知ってもらおうとしたもので、生け花の基本的なルールを解説し、海外におけるその学習を動機づけ、促進することをねらいとする。自然のもっとも美しい状態をつかみとらせるとともに、

人々の魂を浄化し美しくするというこの生け花は、世界に発信すべきユニークな日本文化ととらえられ、その理解・普及が意図されている。広範な一般読者を対象としていることがうかがわれ、口絵のほか挿絵も豊富である。

(平田)

A-20

■Yamamoto, Yuzo & Yoshino, G., *How should One Live ?*, Tokyo, Shin-cho-sha for the Nippon Shonen Bunko, 1936.

■山本有三・吉野源三郎『きみたちはどう生きるべきか』

【目次・見出し】不明

未見。

(平田)

A-21

■Hasegawa, Nyozeikan, *Educational and Cultural Background of the Japanese People*, Tokyo, K.B.S. Publication (Kokusai Bunka Shinkokai), 1937, 16 pp.

■長谷川如是閑『日本国民の教育的・文化的背景』

【目次・見出し】不明

未見。

(平田)

A-23

■Yoshino, Yozo, *Japanese Abacus Explained*, Tokyo, Kyo Bun Kwan, 1937, 240 pp.

■ヨシノ・ヨウゾウ『日本の算盤の解説』

【目次】

第1章 算盤、第2章 たし算、第3章 ひき算、第4章 かけ算、第5章 わり算、店員のために
1937（昭和12）年教文館から刊行された算盤（そろばん）の英文解説書。著者については未調査。出版の目的やいきさつに関しては、著者のはしがきに明記されている。それによれば、著者はアメリカを旅行したとき、多くの友人が日本の算盤に関心をもっていることを知ったという。教育的価値の高い算盤であるにもかかわらず、役に立つテキストがないため、外国人が算盤を理解し、使いこなせるようになることを期待して、著者は本書を執筆した。算盤は驚くべきスピードで計算ができ、指の動作を通して知能向上にも寄与する。本書はこの算盤について、イラストを用いながら平易な英語で説明しており、『日本の生け花の手引き』（A-19）に類する実用的な性格を備えている。

(平田)

■Yoshida, Kumaji & Kaigo, Tokiomi, *Japanese Education*, Tokyo, Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways, 1937, 99 pp.

■吉田熊次・海後宗臣『日本教育』

【目次】

I.日本の教育の歴史的概観、II.日本の教育方針と教育組織の概観、III.子どもの教育、IV.初等教育、V.中等教育、VI.高等教育、VII.教員養成、VIII.社会教育、IX.特殊教育、X.思想善導、XI.教育刷新の問題

1937（昭和12）年教育学者の吉田熊次と海後宗臣が著した、訪日外国人のための日本の教育に関する英文案内書。国際観光協会からツーリスト・ライブラリー第19巻として同年8月発行され、丸善ならびにジャパン・ツーリスト・ビューロー（日本旅行協会）より発売。目次にさきだつ国際観光協会による編集記によると、この国において長年のあいだ培われてきた、ユニークなさまざまな日本の文化について、同協会は正確で豊富な情報を海外からの観光客に提供しようとしており、そのツーリスト・ライブラリーのシリーズは、全百巻を超えることが予定されていた。巻頭には教育勅語の英訳があり、本編には多数の写真図版が掲載されている。

（平田）

13. 個人執筆英語文献の解題（雑誌記事類）

楠本 恭之 （広島大学）

B-1

■K. Mitsukuri, The Early Study of Dutch in Japan, *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, 5-1, 1877, pp.207-216.

■箕作佳吉「日本における初期のオランダ研究」

【目次・見出し】なし

この記事は日本アジア協会における1877（明治10）年2月14日の講演原稿である。イニシャルなどから推測すると講師は箕作佳吉である可能性が高いように思われる。箕作佳吉は1858（安政4）年に生まれた。1873（明治6）年からアメリカ、イギリスで動物学を学び、帰国後東京帝国大学の講師となった。掲載誌は同協会の紀要で、1872（明治5）年に創刊された。

題名のとおり日本における蘭学研究の歴史が、江戸時代の鎖国政策による蘭学の禁止から説き起こされている。蘭学は温度計などの流入とともに日本に広がり、特に医学など自然科学の分野で興味が持たれた。

杉田玄白の『解体新書』が発行されたのもその頃で、杉田と原本との出会いや人体解剖までの経緯、また翻訳時の苦勞などが3ページ半にわたって記されている。その本が認められることによって蘭学は日本中に広まり、大槻や宇田川などがかれらの継承者となった。

箕作は蘭学を日本の医学の土台となったと評価している。さらに蘭学における自然法や世界史の知識を通して、近代の思想形成に寄与したとし、福沢諭吉や村田蔵六などは蘭学生であったことに触れている。

B-2

■S. Tegima, General Outlines of Education in Japan, *Education*, 5(?), 1885.5, pp.474-485. 6, 1885.11, pp.144-155.

■手島精一「日本の教育の概略」

【目次・見出し】地理 地域区分 政治体制 文部省 教育史の概略 幼稚園 小学校 中学校 大学（ここから6号） 師範学校 専門学校 農業学校 商業学校 工業学校 高等女学校 その他の学校 教科書 図書館と博物館 外国留学 教育会議 教育の推進 教育基金 学校土地

著者の手島精一は1849（嘉永2）年生まれで、1870（明治3）年にはアメリカに留学し、建築や農業などを学んだ。1876（明治9）年のフィラデルフィア万博にも随行した。その後ワグネルなどと交流し、日本近代の工業教育の発展を支えた。

掲載誌は1880（明治13）年にボストンで創刊された。ヴェンクシュテルンがとりあげて

いたのは6号掲載の後半の記事のみであったが、ここでは前半部分も扱うこととする。

記事の内容は題名のとおり日本における教育の概略を示したものである。冒頭に手島は1884(明治17)年のロンドン国際保健博覧会(Health Exhibit)における日本のコミッショナーと紹介されており、この記事はそのときのパンフレットの全部もしくは一部ではないかと推測されるが、真偽は確かめられていない。

上掲23項目について扱っており、特に文部省、小学校、大学、師範学校の記述が多くなっている。例えば師範学校に関しては、根拠となる法令から始まりその教科目やコースの説明、学校数などが記されている。加えて附属小学校や高等師範学校との関係も述べられている。

他の項目における記述パターンも類似しており、手島の意見と思われる部分はない。

B-4

■I. Yamagata, The Tokyo School for the Blind and Dumb, *The Hansei Zasshi*, 12-7, 1897, pp.21-24.

■「東京盲啞学校」

【目次・見出し】なし

著者は特定できない。東京盲啞学校の一覧に掲載されている旧職員一覧には、「やまがた」という名字は見あたらない。

この雑誌は「欧文反省雑誌社」が出版していた。創刊は1886(明治19)年で、『反省会雑誌』(後に『反省雑誌』)と時を同じくしており、出版社の所番地も同じである。しかし *The Hansei Zasshi* と『反省雑誌』の内容は全く違っている。

記事は生徒の作った展示物の紹介や教室の様子など日常の学校生活を描くことから始まっている。続いて学校の歴史をひもとき、ルーテル教会による慈善事業として始まったこと、また楽善会や山尾庸三との関わりについて述べられている。

1887(明治20)年の創立まで述べた後は、生徒数の移り変わりやコースの説明、授業内容など、一般的な学校の説明がなされている。著者の意見としては、同学校に資金を投入する必要性が説かれているが、慈善事業の一環という捉え方にとどまっている。

B-5

■Konoe Atsumaro, Education of Women in Japan, *The Hansei Zasshi*, 13-?, 1898, pp.470-474.

■近衛篤磨「日本の女子教育」

【目次・見出し】なし

著者である近衛篤磨は1863(文久3)年に生まれた。1884(明治17)年にドイツに留学し、帰国後は貴族院議長、学習院長等をつとめる傍ら高等教育会議にも参加した。執筆当

時は帝国教育会会長であった。

記事について、署名の下に A Translation とあることから、近衛自身が英語で執筆したのではなく、編集者の側で近衛の日本語論文を英訳したとも考えられるが、元となった記事は不明である。

内容としては、まず日本の女子教育で特に高等教育分野での意識の高まりを指摘しながら、それが権利などの概念と結び付いていないとし、歴史をふまえて教育について考察するとしている。

最近 30 年間で教育における男女差は広がっているが、その面での西洋との違いはキリスト教と儒教の違いで説明されている。また女性の権利が無視されてきた歴史を西洋と比較しながら、それが服装などにも表れていると指摘した。

そのような状況を解消するために、女性もしくは女子教育に対して独立、積極性、国への忠誠などが必要であると主張している。

B-6

■ Jinzo Naruse, *The Education of Women in Japan*, *The Far East*, 3, 1898, pp.27-32.

■ 成瀬仁蔵「日本の女子教育」

【目次・見出し】なし

成瀬仁蔵は 1858（安政 5）年生まれでキリスト者であった。1890（明治 23）年にアメリカに渡り女子教育を学び、1896（明治 29）年に『女子教育』を出版した。文末にある成瀬の紹介文に「現在は女子の大学を計画している」とあるとおり、記事発表から 3 年後の 1901（明治 34）年には日本女子大学校を設立した。

この雑誌は『学術雑誌総合目録』によると、『国民之友』という雑誌の英訳版とされている。しかし『国民之友』のなかに、元となった日本語の記事を見つけることはできなかった。内容的には先に触れた『女子教育』の第 2 章「知育」の第 2 節「本邦の高等女子教育の方針」と第 3 節「本邦女子教育の程度」と重なるところが多い。

内容について、女子教育の歴史を押さえて現状を分析し、女子教育の今後について提案をしている。日本における女子教育は道徳規律を教えることが主であり、知識の教育は欠けていたことを指摘した。開国後はキリスト宣教会による女子高等教育が始められたが、日本社会のニーズや歴史的背景に対する理解不足からあまり成功しなかったと評した。

今後の女子教育について、まずそれは国家的精神と時宜にあっていなければならないとした。多くの日本人は近代的教育が女性を不従順で女性的でなくしたと思っているが、成瀬は高度のトレーニングが足りないせいだと考え、大学程度の女子教育の必要性を訴えた。具体的には経済、家庭衛生、看護学などを学ぶ家政学部、社会学、心理学、児童学などを学ぶ教育学部、英文学、歴史学、哲学史などを学ぶ文学部、その他音楽学部、芸術学部などの学部を構想していた。

B-7

■Tetsuzo Okada, The Department of Philosophy in the Imperial University of Tokyo, *The Japan Evangelist*, 5-9, 1898.9, pp.273-280.

■岡田哲蔵「東京帝国大学の哲学科」

【目次・見出し】(序文) 哲学科 教授と講義 哲学科のカリキュラム 関連団体 結語
(大学における哲学の傾向は? 日本主義が学生に与えた影響は? 哲学科の宗教観は?
大学でキリスト教が教えられる日は来るのか?)

岡田哲蔵は1869(明治2)年生まれで、東京帝国大学哲学科卒業後陸軍大学教授となった。英文学に関する著書が多くある。

この雑誌は、1893(明治26)年に横浜で創刊された。後に、B-49掲載誌である *The Japan Christian Quarterly* と改題された。元となった記事については不明。

記事の目的は日本における哲学もしくは思想の歴史を述べることにあり、その手段として東京帝大哲学科を紹介すると冒頭に記されている。以下見出しどおりの内容が記され、「教授と講義」では井上哲治郎と大瀬甚太郎が比較的詳しく紹介されている。「哲学科のカリキュラム」を3ページにわたって詳細に説明しており、特に井上の講義内容を項目ごとに整理して示している。

結語は上掲の疑問に答える形で記述されており、例えば最後の疑問については一学部で教えられることはないであろうが、神学の一部として教義や教会の歴史などが教えられる可能性は高いとした。

B-8

■Nagao Ariga, The Future of Political Studies in Japan, *The Orient*, 14-1, 1899, pp.4-8.

■有賀長雄「日本の政治研究の将来」

【目次・見出し】

未見。

著者の有賀長雄は1860(万延元)年に生まれた。1882(明治15)年に東京帝国大学哲学科を卒業後ドイツに留学し法律学などを学んだ。1898(明治29)年には『外交時報』を創刊し、後のオランダでの万国平和会議に国際法顧問として派遣された。

この雑誌は *The Hansei Zasshi* の後継誌で、その表紙には『東亜』という日本語題も記されている。なお同時期に『反省雑誌』も『中央公論』に改められ、出版者の名前も「反省社」に統一された。*The Hansei Zasshi* の時と同じく、掲載された内容は欧文雑誌のそれと違った。

B-9

■Some Defects in Our Educational System, *The Orient*, 14-11, 1899.11, pp.1-3.

■「我々の教育制度の欠点」

【目次・見出し】なし

無署名記事である。誌名と同じ "The Orient" という欄に掲載されていることから、編集者による論説文であると推測される。

題名のとおりに教育制度の欠点と思われる事柄が挙げられている。まず文部省の予算の少なさが指摘され、特に日本の発展に大きく影響を与えるであろう教員の給料が十分でないことによって、教員志望者が減ることに危惧の念を示している。具体的には人力車夫の給料と比較するなどしている。

B-11

■Tokiwo Yokoi, Education in Japan, *International Journal of Ethics*, 2, 1900.1, pp.187-200.

■横井時雄「日本の教育」

【目次・見出し】なし

横井時雄は 1857（安政 4）年生まれでキリスト者であった。1889（明治 22）年、1894（明治 27）年と渡米して哲学等を学び、1897（明治 30）年に同志社社長（現在の総長）となった。この記事はその在職時に書かれたものである。なお同誌は欧米の倫理運動の広まりに伴ってアメリカで創刊された雑誌である。

内容としては日本の教育に関する歴史を押さえて、現状を分析して提言をしている。歴史叙述は分量的に少なく、多くの分野に関して提言をなしている。例えば中等教育について、進学要求が高まったことを評価し、その欲求に応えるために新たに学校を創設する必要性を指摘している。

また、より喫緊の問題として普通教育をあげ、特に教員の質の低さ、具体的には無資格教員の存在を問題視している。その大きな原因を低賃金として国の補助が必要不可欠だとした。その他にも私立学校、産業教育、国際教育などに関する提言をなしている。

最後に道徳教育について、宗教と教育との関係に対する注意を喚起しながらも、社会思想の変化とともに倫理教育も変わらなければならないとし、前時代の遺産を大切にしながら新しい秩序を教える必要を訴えている。

B-12

■Zensaku Sano, Commercial Education in Japan, *Special Reports on Educational Subject*, 8, 1902, pp.555-567.

■佐野善作「日本の商業教育」

【目次・見出し】なし

佐野善作は 1873（明治 6）年生まれで、高等商業学校卒業後アメリカ、イギリスに留学した。帰国後は東京高商教授を経て 1914（大正 3）年から 20 年間以上東京高商校長をつとめた。この記事は 1900（明治 33）年 2 月にロンドンにおいて執筆された。またこの雑誌はイギリス教育院の特別調査広報局によって編纂されたものである。

記事の主旨は商業教育、特に高等商業学校の必要性を訴えることであった。その歴史について外国人教師を招聘し、また留学生を多数送るなどして国外から知識を吸収することで成果が上がったと評価している。

次に高等商業学校のカリキュラムについて、外国では商業教育における道徳性にあまり注意が払われていないのは不思議なことだとし、道徳教育によって商業が私利に基づくものでなく、帝国に利することが目的であることを教える必要があるとした。

B-13

■The Education of Japanese Naval Officers, *Nature*, 69-1795, 1904.3, pp.490-491.

■「日本の海軍の教育」

【目次・見出し】なし

帝国海軍の大尉、佐藤某の講演内容をまとめ、記者がそれにコメントをつけた形の記事である。

佐藤の講演のポイントは日本海軍軍人の養成にあたって、それぞれの分野で専門家は必要だが、それとともに広い知識を持たせることが重要だと主張することにあつた。記者はそれに対して自国の海軍では型にはまった専門家養成しかしていないと指摘している。

B-14

■Chokuro Kadono, The Bringing-up of Japanese Girls, *Transactions and Proceedings of the Japan Society (TPJS)*, 6, 1904, pp.308-322.

■門野重九郎「日本の女子のしつけ」

【目次・見出し】なし

この記事は倫敦日本協会における講演の筆記であり、掲載誌は同協会の機関誌である。同誌は 1893（明治 26）年にロンドンにおいて創刊され、主に協会における講演の内容が掲載された。以下誌名はカッコ内のように略記する。

講師は以下の経歴を持ち、記事発表時にロンドンに在住していた門野重九郎ではないかと思われる。門野は 1867（慶応 3）年に生まれた。1891（明治 24）年に東京帝国大学工科を卒業後アメリカの鉄道会社につとめた。1898（明治 31）年には大倉組のロンドン支店長として渡英し、1907（明治 40）年に帰国している。

図版 10 枚、いずれも絵画で、「幼稚園」、「琴の演奏」、「踊りの稽古」などが掲載されて

いる。内容は女子のしつけについて近世の歴史を概観し、現在の状況や展望について述べている。考察の対象を旧士族に多く存在する中間層に限定するとしている。

門野は女子のしつけについて、それぞれの家の家訓や女性に対する訓戒を著した書などによってなされてきたとし、女大学や女孝経などを紹介している。それらの内容は差別的である点から外国人には残酷なものに思われるかも知れないが、門野は性別による役割分担として肯定している。さらに現在の女性のしつけは以前と変わっていないとする。

なお講演に続いて行われたであろう、門野と聴衆との質疑応答も掲載されているが、その内容は結婚や衣装に関する単純な質問が多い。

B-15

■Mikami, Sanji, On the Historiographical Institute in the Imperial University of Tokyo, *Verhandlungen des XIIIten Internationalen Orientalisten Congresses in Hamburg in 1902. IVth Section; Central Asien*, Leiden, 1904, pp.186-188.

■三上参次「東京帝国大学史料編纂掛について」

【目次・見出し】不明

未見。1902（明治 35）年ハンブルクで開催された第 13 回国際東洋学会議において、東京帝国大学文科大学教授・史料編纂掛事務主任であった三上参次が報告したもの。翌々年にライデンで出版された同会議議事録の第 4 部（アジアの主要地域）に収録されている。1895 年文科大学内に史料編纂掛が設置されて以来、三上は中心的なスタッフとして『大日本史料』『大日本古文書』などの出版を推進、史料編纂事業の基礎を築いた。本報告はその組織や事業の梗概を紹介したものと推察される。

（平田）

B-17

■Noguchi Y., English Books Known in Japan, *Bookman*, ?, 1904.3, p.?.

■野口援太郎「日本で知られるイギリスの書籍」

未見。雑誌はニューヨークで発行されていたことがわかるのみである。

著者は野口援太郎であると推測される。野口は 1868（明治元）年に生まれ、高等師範学校卒業後、1901（明治 34）年から約 18 年間姫路師範学校長をつとめた。後に教育の世紀社を結成し、児童の村小学校を創立した。

B-18

■Naohide Yatsu, Tokyo Teikoku Daigaku (Imperial University of Tokyo), *Popular Science Monthly*, 64, 1904.3, pp.466-473.

■谷津直秀「東京帝国大学」

【目次・見出し】なし

著者の谷津直秀は1900（明治33）年に東京帝国大学理科を卒業し、その翌年から約6年間アメリカとイタリアに留学し、その後慶応大学医学部教授を経て、1923（大正12）年から東京帝大理学部動物学科教授。つまり記事執筆時点では海外にいたことになる。

この雑誌は1872（明治5）年に創刊され、ニューヨークで発行されていた。元となった記事は見あたらない。一概にはいえないが、外国で発行されていた雑誌の記事に関しては、日本語の記事を翻訳して掲載した可能性は低いと思われる。

記事には東京帝大の赤門など7つの図版が掲載されている。日本の高等教育の歴史と現状について叙述しており、後半3分の2は東京帝大の概要説明になっている。谷津は日本の高等教育機関として、高等学校、師範学校、貴族学校、軍学校、工業などの産業学校、法律学校、東京の女子大学、東京と京都の帝国大学の8つを挙げている。

東京帝大についてはその成り立ちを述べた後、学部構成や学生数などを紹介している。また同大学で盛んな学問として地震学や人類学などを挙げ、世界的には海綿動物のコレクションなどで有名であるとした。

B-20

■K. Suyematsu, Japanese Education, *The Independent Review*, 6, 1905, pp.191-200.

■末松謙澄「日本の教育」

【目次・見出し】なし

著者の末松謙澄は1855（安政2）年に生まれた。ケンブリッジ大学で学位取得後1890（明治23）年には衆議院議員となった。1904（明治27）年にロンドンに派遣され、日露戦争における政府のスポークスマンとして働き、*The Rising Sun*などの日本を紹介した書を英文で著している。

この雑誌は1903（明治36）年にロンドンで創刊された。

主旨は日本の教育制度、主に初等教育のそれについて述べることで、冒頭2ページ半の歴史記述においては近世の学校として藩校や私塾、寺子屋を取り上げ、私塾における助教生制度や寺子屋の字義などを紹介している。

次に明治以降の学校の発達において、西洋諸国と違い日本では中央政府の指導力が非常に強かったことを、職業資格などの有り様から説明している。また日本の初等教育の特徴として言語の習得に時間がかかること、貴賤によって学校に差がないことなどを挙げている。

特に強調されているのは明治以前からの道德教育の重視が変わっていないことである。それが教育勅語を基として、宗教色を排除された形で行われていることを示している。なお道德教育について末松による“Moral Teaching of Japan” (*The Nineteenth Century and After*) を参考として掲げている。ただこの記事は両書誌のどちらにも採られていない。

B-22

■Japanese Education, *The Open Court*, 20, 1906, pp.573-574.

■「日本の教育」

【目次・見出し】なし

この記事は時の文部大臣牧野伸顕の演説の引用で、西洋の文物を受け入れることによって近代国家へ成長した日本において起こっている道徳的規範の揺らぎに対する懸念を表明している。演説の対象や日時は不明。

牧野伸顕は 1861 (文久元) 年生まれで 1879 (明治 12) 年にはロンドン公使館に勤務した。1891 (明治 24) 年に福井県知事となり、1901 (明治 34) 年には文部大臣をつとめた。その後も農商務大臣や外務大臣を経験した。

この雑誌は倫理や宗教を科学的に考究しようとするもので、1887 (明治 20) 年にシカゴで創刊された。

この演説において牧野は、青年の間に無気力や不道徳が広がっていることを指摘し、その原因として学校での空理に流れた学問状況や出版物などを挙げている。特に社会主義思想を危険であるとし、その流入を防ぐよう求めている。

B-23

■Murasaki A., *Peeresses School in Tokyo, The Girl's Realm*, 8, 1906, pp.695-705.

■「東京の華族女学校」

【目次・見出し】不明

未見。雑誌についても不明。

著者は特定できない。

B-26

■Dairoku Kikuchi, *Female Education in Japan, TPJS*, 7, 1907, pp.420-432.

■菊池大麓「日本の女子教育」

【目次・見出し】なし

1907 (明治 40) 年 4 月 10 日にロンドンで行われた倫敦日本協会主催の講演の筆記である。講師の菊池大麓は 1855 (安政 2) 年に生まれ、10 代のほとんどをイギリスで過ごした。帰国後の 1881 (明治 14) 年には帝国大学の理科大学長となり、1898 (明治 31) 年には東京帝大の総長、後に文部大臣も務めた。1909 (明治 42) 年にはロンドン大学での講演をまとめた *Japanese Education* がロンドンで出版された。

講演のなかで菊池は、日本の教育における男女の扱いの差について、女性は結婚して家事に従事するものと考えられて教育されているが、女性の果たす社会的役割という観点か

ら疑問があるとした。

女性について考える際に必要な要素として家制度についてその歴史を述べ、それによって女性は常に男性に従属するものとして扱われてきたことを指摘した。しかし市民思想の流入によって女性が主となる可能性が開けたとし、そのような教育が必要としながらも、従来のような良妻賢母の教育を否定することなく、寧ろ両者を融合させるような方向を望んだ。

演説の後質疑応答などがあったようだが、その内容は詳しく書かれていない。

B-30

■Seiichi Tejima, Higher Technological School, *The Japan Magazine*, 1, 1910, pp.432-437.

■手島精一「東京高等工業学校」

【目次・見出し】なし

著者についてはB-2で説明した。この記事は手島が東京高等工業学校校長であった時に執筆された。各学部の写真など7つの図版が掲載されている。またこの雑誌は東京で発行されたものである。元となった記事については不明。

内容としてはまず東京高等工業学校の場所や建物、また学部構成などの概要を説明している。その後卒業生の進路について触れ、彼らが工学に関する専門知識とともにきちんとした道德の教育を受けていることによって社会に歓迎されているとした。

工業教育一般については、日本人の技術者には独創力がないといわれていることをとりあげる。その原因は近代科学の導入が始まって間がないからであり、近い将来には日本でも盛んに新しい発明がなされるという。

結論として、外国との友好関係構築のためにも貿易は促進されるべきであり、東京高等工業学校はエンジニアを養成することでそれに貢献することができるとした。

B-31

■Sekiji Nishiyama, The Christian Contribution to Japanese Education, *The Open Court*, 25, 1911, pp.432-434.

■西山哲治「日本教育へのキリスト教信者の貢献」

【目次・見出し】なし

著者の西山哲治は1883（明治16）年生まれで、東洋大学卒業後ニューヨーク大学にて教育学博士号を取得した。1912（大正元）年には私立帝国小学校を設立した。

記事執筆の経緯は1910（明治43）年5月の『教育学術界』第21巻第2号に掲載された「米国に於ける菊池男の講演」によって知ることができる。同年2月に菊池大麓がニューヨークで「新日本の知的及道德的進歩」と題する講演を行った。そのなかで菊池が、日本

の近代化に果たしたキリスト宣教会の役割について否定的な発言をしたことについて自身の意見を求められた西山が、ニューヨーク女子美術協会で「基督教の日本教育に与へし貢献」と題して講演したのである。その講演を「紐育大学教科長バーレット博士の勧めに従ひ米国の一雑誌に寄稿せり」とある。

講演において西山は、差別によって教育を受ける機会が少なかった女性に対して、宣教会は日本各地に女子の学校を作り、それが女子教育に進展をもたらしたと評価した。具体的には、女子教育の必要性を世に知らしめたことと、女性の地位向上をもたらしたことが重要であったとした。

B-33

■Jiro Shimoda, Need of Educational Reform in Japan, *The Japan Magazine*, 3, 1912, pp.745-749.

■下田次郎「日本における教育改革の必要」

【目次・見出し】なし

著者の下田次郎は 1872（明治5）年生まれで、東京帝国大学哲学科を卒業した。1899（明治32）年に留学して教育学を学び、帰国後 1936（昭和11）年まで東京女子高等師範学校の教授をつとめた。1904（明治37）年には『女子教育』を発行するなど、女子教育における権威であった。なお元となった記事については不明である。

内容は、エリオット（C. W. Eliot）による日本教育批判を引き合いにして、教育において改革の必要がある事柄を3点挙げている。

まず一つはカリキュラムの画一性の問題で、コスト面などから考えて一番簡単なのは中等学校の種類、特に実業系のそれを増やすこととした。次に、法学に偏っている官僚試験の改革を訴え、大学において自然科学と人文科学のバランスをとるよう望んだ。

最後に女子教育について、精神的な独立を得ることができるよう方向に持っていかねばいけないとした。ただし従来の女子教育を全否定しているわけではなく、下田自身も西洋と東洋の思想のバランスをとるのは難しいとするように、確たる思想を描けてはいなかったようである。

B-34

■Viscount Kaneko, The Japanese Student, *The Japan Magazine*, 4, 1913, pp.372-374.

■金子子爵「日本の学生」

【目次・見出し】なし

この記事は第一高等学校の学生に対する金子堅太郎子爵の演説である。その内容は日本が国際社会で指導的立場に立てるよう学生を鼓舞するものであった。演説の日時や元になった記事は特定できない。

講師の金子は 1853（嘉永 6）年生まれで、1871（明治 4）年に法律学専攻で欧米留学した。1898（明治 31）年に農商務大臣となり、以後司法大臣、貴族院議員などをつとめた。海外における数多くの外国人との交渉を担当した経験が表れている演説である。

金子は大日本帝国憲法の制定、日清戦争によって日本が対外的に認められ、日露戦争によって西洋諸国と同じ位置に立てたとの認識を示し、今後日本は国際社会の舞台に上がらなければいけないとしている。そしてそのためには英語を使いこなせるようにならなければならないと学生達に訴えている。

B-35

■G. Masuda, Waseda University, *The Japan Magazine*, 4, 1913, pp.496-501.

■増田義一「早稲田大学」

【目次・見出し】なし

著者は以下の経歴を持つ増田義一である可能性が高い。増田は 1869（明治 2）年生まれで、後の早稲田大学である東京専門学校卒業後、読売新聞社を経て、1900（明治 33）年に実業之日本社社長となった。その後欧米で見聞を広め、衆議院議員となった。

この記事は単なる早稲田大学の紹介ではなく、日本の教育の発展に寄与した私立大学の業績をたたえ、よりいっそうの振興の必要を訴えたものである。早稲田大学に関わる図版が 7 つ示されている。なお元となった記事については不明。

明治前期において私立学校は国家の規制を受けない組織であり、若者にとって危険なものとしていたが、早稲田大学の創始者大隈重信は教育に自由が必要であると信じていた。明治天皇の早稲田講堂来訪について増田は、大隈と早稲田の勝利であり、自由な教育の勝利であったと評価した。

早稲田大学に関して、現状の文、経済、商、工、理の 5 学部に加えて、医学部が構想中であること、予備学校や中国人留学生のための学校などを持っていること、卒業生は重要な地位で活躍し、特に報道関係には強いと述べている。

早稲田大学に続いて慶応や明治、中央などが実績を挙げてきているが、まだ十分ではなく、本当の意味での自由な教育、若者の持っている能力を引き出し最も適する道に進ませるために私立大学が必要であると訴えている。

B-36

■K. Sakamoto, Japanese Education of Today, *Educational Review*, 51/52, 1916.6, pp.1-9.

■「今日の日本の教育」

【目次・見出し】教育勅語 小学校 中学校 師範学校 高等学校 大学 高等師範学校
女子教育 英語教育の方法

著者は特定できない。

雑誌は 1891 (明治 24) 年にニューヨークで創刊されたもので、後の *School and Society* である。元記事については不明。

小見出しの順に説明を加えているのだが、2 番目の小学校から 8 番目の女子教育まではいずれも半ページ程度で制度の概略を紹介しているに過ぎない。

「教育勅語」の項では、日露戦争の勝利の原因として勅語が学校で暗唱されるなどして普及したことを挙げて、勅語がなければ真の日本の教育はなされなかったという。この項では勅語の英訳が全文掲載されている。

また英語教育の方法について、文の構造などが日本語と全く違うことや、英語教師に外国人を雇っている学校が少ないことから英語教育が十分でないとする。そして ESS を組織することや、寮で日本語を一定時間禁止するなどを効果のある実践例として挙げている。

B-37

■Kato Naoshi, *The Educational System of Japan*, *TPJS*, 16, 1918, pp.132-145.

■加藤直士「日本の教育制度」

【目次・見出し】なし

この記事は 1918 (大正 7) 年 5 月 8 日にロンドンで行われた倫敦日本協会主催の講演筆記である。講師は『大阪毎日新聞』の編集者と紹介されている。詳しい経歴は不明だが、1924 (大正 13) 年に大阪毎日新聞社が出版した『ダルトン教育案 ヘレン・パーカスト講演』の翻訳をした加藤直士ではないかと推測される。

加藤は明治以来の日本の発展を教育の効果ととらえ、その歴史と現状の制度を紹介している。歴史については奈良時代から江戸時代までを概観し、明治維新以降になると学制序文(「被仰出書」)の内容を紹介するなど詳しくなる。

加藤が日本の教育について一番強調しているのは小学校が貴賤の別なく義務となっていることと、その就学率の高さである。また日本の学校制度について、高等学校など正系の学校のキャパシティが小さいことを批判している。

日本の教育の特徴として、宗教教育が学校に持ち込まれておらずその代わりに教育勅語を中心とする道徳教育が充実していることを挙げた。また外国語教育に力を入れていることも成功の要因とした。

日本の教育について個性が育たないといった批判があることに対して、統一的なカリキュラムが画一性をもたらすことは認めながらも、天才を作るような教育をしなかったという面を評価し、それが日本の成長につながったとする。

講演筆記の後に、参加者のコメントや若干の質疑応答の内容が記されている。

B-39

■Yoshitaka Fujii, Woman's Education in Japan, *The Japan Magazine*, 11, 1920, pp.267-271.

■藤井利誉「日本の女子教育」

【目次・見出し】歴史 高等女学校 日本における女性の地位

著者について断定はできないが、藤井利誉（トシカ）の綴り間違いではないかと推測される。藤井は1872（明治5）年に生まれた。1901（明治34）年に東京高等師範学校を卒業後に東京女子高等師範学校の教授となった。後に同校の附属小学校、附属高等女学校の主事を務めるなど、長く女子教育に携わり女子師範学校用の教科書などを多く著した。なお元となった記事は見いだせない。

小見出しからわかるように、中等教育における女子教育に焦点を当てている。したがって、歴史の項では主に高等女学校の発展を扱い、高等教育については3人の女性が東北帝国大学を卒業したことをトピック的に取り上げている。

1899（明治32）年の高等女学校令の目的に関する条文を取り上げ、良妻賢母の教育が目的であったとした。それが限定的であるとの批判や社会の複雑化などから、女性にも実用的な教育が必要だとされるようになったとし、現在の高等女学校におけるカリキュラムを紹介している。

続いて高等教育にも触れ、裁縫や家事の教師、看護婦などを養成するための教育が発達してきたと述べる。

最後に女性の地位について、外国人は日本の女性が卑下されているとするがそれは間違いで、従順であるということは最も高い徳の一つであり、また家庭内で女性の地位は高いと述べている。

B-40

■Yohei Iitsuka, Education in Japan, *TPJS*, 18, 1921, pp.80-91.

■飯塚陽平「日本の教育」

【目次・見出し】なし

この記事は倫敦日本協会で1921（大正10）年4月におこなわれた講演の筆記で、講師は第二高等学校の教授と紹介されている。断定はできないが、1929（昭和4）年に『和文英訳の学び方』を著した飯塚陽平と思われる。

日本教育の紹介を目的とした講演で、1916（大正5）年の『文部省年報』を参考とすると述べている。冒頭で簡単に歴史的経緯に触れた後、初等、中等、高等教育についてその費用負担や教師の数などについて紹介している。その中で講師の意見として高等学校入学の際の選抜が厳しすぎることを批判している。

その後、職業教育、女子教育、私立学校についても説明を加えている。この講演についての質疑応答の様子は記されていない。

B-41

■H. Katayama, *The Language Question as It Affects Education in Japan*, *TPJS*, 19, 1922, pp. 54-74.

■片山寛「日本の教育に影響を与える言語問題」

【目次・見出し】なし

この記事は倫敦日本協会で 1922 (大正 11) 年 2 月におこなわれた講演筆記である。講師と推測される片山寛は東京外国語学校英語科教授で、講演当時イギリスに留学していたことが同学校の一覧によって確認できる。

内容は日本における外国語教育が中心で、国語教育の難しさに関連させながらその必要性、特に英語教育のそれを訴えるものとなっている。

片山はまず中学校における英語教育を取り上げ、高学年になるほど実用から離れ、試験用のイディオムをひたすら覚えるようになることを批判している。また英語教員の少なさ、とりわけネイティブの教員の不足を指摘している。

高等学校における英語教育については、発音やリスニングの軽視を指摘する。しかし現状では英語は読んで理解するだけでなく、貿易などの場面において聞きまた話すことが求められているとして、その方面の教育に力を入れるよう求めている。

片山はさらに論を進め、小学校から英語教育を導入することを考えるが、それを妨げるのが国語教育、特に漢字の習得に時間がかかることだとする。続けて日本語の複雑さを説き、口語体への移行を歓迎している。

文末 6 ページにわたって講義の後の質疑応答について記されている。

B-44

■Naoshige Konishi, *Education in Japan*, *The Japan Magazine*, 14-6/7, 1923, pp. 199-201.

■小西重直「日本の教育」

【目次・見出し】なし

名前に「なおしげ」とあるが、京都帝国大学の教授と紹介されていることなどから、小西重直とみてよいであろう。小西は 1875 (明治 8) 年に生まれ、東京帝大卒業後に留学して教育学を学び、広島高等師範学校教授を経て、1913 (大正 2) 年から京都帝大教育学講座教授となった。『教育思想の研究』など著書多数。

この記事は、外国の教育制度と比較しながら日本教育の特徴を述べたものである。元となった記事については不明。

まず小西は日本の教育について、平等主義が確立していることを評価している。しかしそのことによって小学校において過大学級が生じ、結果として児童の能力を十分に引き出し得ていないとする。

続いて高等学校についてその定員が少なすぎる事、女子が高等教育を受ける機会が非常に少ない事、奨学金制度が貧弱である事、試験準備のために創造的な教育ができていない事などを指摘し、中、高等教育の拡大を喫緊の課題とする。

さらに、成人教育や補習教育についてもデンマークやドイツなどと比較して不足しているとす。師範学校については整備されているとしながらも大学レベルへの昇格の必要を示唆している。

B-45

■Baigyo Mizuno, Chinese Students in Japan, *The Young East*, 1, 1925, pp.76-80.

■水野梅暁「日本の中国人学生」

【目次・見出し】過去 現在の状況

著者の水野梅暁は 1878 (明治 11) 年に生まれ、哲学館や東亜同文書院で中国の研究に従事した。1924 (大正 13) 年には支那時報社を設立し、『支那時報叢書』全 10 冊を出版している。

雑誌については東京で出版されていたこと、後継誌では “Japanese Buddhist Quarterly” という副題が付されたことなどがわかっている。

水野はまず中国人の日本留学の歴史を以下のように概説する。日清戦争を契機に留学が始まり、日露戦争で盛んになった。特に官立の高等教育機関が多くを受け入れた。1908 (明治 41) 年頃から、中国国内の教育機関整備などに伴い留学生数が減り始め、1923 (大正 12) 年には官費留学生はいなくなった。

現状について、明治大学、東京高等工業学校、東京高等師範学校、東京帝国大学などに留学生が多く、また学問分野としては工業や農業、医学などが多いという。

まとめとして中国人の日本留学によって中国は西洋の技術を導入することができたとする。また今後について、日本で学んだ留学生の仲介で日本と中国が協調して極東の平和を構築することを求めている。

B-46

■Tuboi S., Japanese Language School Teacher, *Journal of Applied Psychology*, 11, 1926, pp.160-165.

■「日本語学校の教員」

未見。著者、雑誌についても不明。

B-49

■Y. Tanaka, Proposed Changes in the Curriculum of the Middle Schools, *Japan Christian Quarterly*, 1, 1929.1, pp.36-39.

■田中恭盛「中学校のカリキュラムにおける改革の提案」

【目次・見出し】なし

名前の頭文字しか分からないため断定はできないが、著者は田中恭盛ではないかと推測される。田中は1895（明治28）年に生まれ、日本大学法文科を卒業した。執筆当時は日本大学が設置母体である豊山中学校教頭であった。また雑誌はB-7でも述べたように *The Japan Evangelist* の後継誌である。

この記事は、なぜ文部省が中学校のカリキュラムを改革しようとしているのか検証したものである。著者はその最大の原因を、共産主義などの「危険思想」の蔓延を防ぐために公民思想を育成する必要性が増したことでありと解説している。

具体的な改革内容について、まず1年から5年まで「作業」科目を設けることについて基本的には賛同している。しかし実施のためには、現在の中学校制度を整理しなければならないとする。

また2年生終了時に生徒を実業系と進学準備系に分けることについては、時期が早すぎることや費用がかかることなどから反対しており、特に実業系コースにおいて英語や数学の時間が減らされることについて、中学校教育としてふさわしくないと強く反発している。

B-51

■Abe S., Education in Formosa and Korea, *Educational Yearbook*, ?, 1931, pp.681-701.

■阿部重孝「台湾と韓国の教育」

【目次・見出し】導入 台湾（概略 併合以前の教育 日本占領後の教育 教育行政 初等学校 中等学校 高等教育） 韓国（概略 併合以前の教育 日本占領後の教育 教育行政 初等学校 中等学校 職業学校 高等教育） 参考文献

著者の阿部重孝は1890（明治23）年に生まれ、東京帝国大学教育学科卒業後1923（大正12）年の万国教育会議に参加した。執筆当時は東京帝大教授であった。またこの雑誌はコロンビア大学のティーチャーズカレッジによる年次報告書である。

小見出しをみて分かるように、台湾と韓国での教育について網羅的に記したものである。導入部分で、台湾と韓国においては1922（大正11）年の各教育令によって日本と同様の皇民教育が施されているのであり、植民地教育として扱うことは適当でないと述べている。

以下両地域の教育について、『朝鮮学事年報』や『台湾学事年報』を参考にしながらその歴史と現状について記している。文中に示されている科目別時間数などの12の表は、それらから引用したものである。

B-53

■Yasuda M., Significant Aspects in the Progress of School Hygiene and Physical Culture in Japan, *World Federation of Education Associations Health Section Report*, ?,

1931, pp.79-81.

■安田守雄「日本における学校衛生と体育の特徴」

未見。掲載誌についても不明。

著者は安田守雄であると推測される。安田は1936（昭和11）年に出版された『師範大学講座』の3, 4巻に当たる『体育の医学的研究』で、「体育生化学」を分担執筆した人物である。

B-57

■K. Ashida, Japan, *Educational Yearbook*, ?, 1932, pp.315-329.

■芦田慶治「日本」

【目次・見出し】歴史的背景 初等教育 中等教育 私立学校

著者は芦田慶治であると思われる。芦田は1909（明治42）年から同志社大学で働き、1919（大正8）年には文学部神学科主任教授となった。専門は新約学で、1936（昭和11）年に死去している。同大学神学科の設立に多大な貢献をなした。また雑誌はB-51と同じであるが、芦田とコロンビア大学との関係については不明。

この記事は日本の教育と宗教の関わりについて述べたものであり、「歴史的背景」の項目に紙面の約7割を割いている。ここで芦田は以下のことを示している。すなわち、日本においては天皇が国の中心であり、教育においては天皇のことばである教育勅語がすべての中心になっていることである。

芦田は勅語について、世界的なヒューマニズムの思想や博愛主義を重視していると評価し、キリスト教に通じる点があることを示唆している。しかしこの記述や先の勅語の位置づけなどについては、「教育と宗教の衝突」以降のキリスト教弾圧の歴史があることをふまえて解釈する必要があるだろう。つまり、キリスト教を存続させるためには、キリスト教信者によって、天皇やその言葉とキリスト教が矛盾しないと主張されなければならなかったということである。

各段階の学校における宗教の扱われ方について、初・中等教育では法律によって宗教教育が排除されているが、一部のプロテスタント系私立学校では聖書を用いているという。そのことがなぜ許されているかについては、勅語にも表されているところの五ヶ条の御誓文における公平や公正の原則が生きているからだとする。

B-58

■Washio S., *Thought Control Investigation Emphasizes Difficulties of Task*, *Trans-Pacific*, 20, 1932.4, p.4.

■鷺尾祖鳳「思想統制調査は役割の難しさを強調する」

【目次・見出し】不明

未見。著者については鷺尾祖鳳ではないかと思われる。鷺尾は1884(明治17)年に生まれ、東京帝国大学国史科卒業後、花園中学校長を経て、1918(大正7)年に朝陽新聞社を設立した。

また雑誌は「極東の政治的、社会的、経済的展開について論ずる」目的で1919(大正8)年に東京で、Japan Advertiser(日本新聞社)が創刊した週刊誌である。

B-59

■ S. Washio, Corruption in Private Schools Investigated by Authorities, *Trans-Pacific*, 20, 1932.6, p.4.

■ 鷺尾「当局の調査による私立学校の汚職」

【目次・見出し】(序文) 他の学校も同じことをしている 証拠は明らか 選手達はセミプロフェッショナル

著者と掲載誌についてはB-58を参照されたい。

副題に、入学時の預け金に関する汚職への批判とある。私立学校、とりわけ医学校において入学時に卒業準備金として200~300円を支払うことが常識となっているが、それに対して文部省の調査が入ったことを扱った記事である。問題となっているのは、学位授与するかどうかとお金関わっている場合があることである。

次に問題とするのは、早稲田大学など東京六大学野球における観戦チケットの利権のことである。いずれの場合もモラリストであるはずの教育者が起こした事件として皮肉を込めて記している。

B-60

■ Hokuseki Imai, Teaching "National" History, *Contemporary Japan*, 2, 1933, pp.330-331.

■ 今井克積「国史教育の跳躍」(『社会及国家』?号、1933年8月、pp.20-28)

【目次・見出し】なし

この記事の元となったのは、『社会及国家』の記事であると明記されている。著者は上のように今井克積で、スペルミスである。今井についてその経歴などは不明。

掲載誌については、近衛文麿や幣原喜重郎などが名を連ねている The Foreign Affairs Association of Japan が編集したもので、1932(昭和7)年に東京で創刊された。

今井は国史教育の現状について以下の事実を指摘している。すなわち中学校令の改正によって、国史の教科書の内容が道徳的・倫理的なものとなったこと、危険思想排除を目的とした「思想対策委員会」(Thought Guidance Committee)の計画において、知育よりも徳育、科学教育よりも品性の陶冶の必要が強調されたことなどである。

英文記事は元の記事全6節のうちの第2, 3節を訳出したものである。英文記事のみを

みると今井は新しい国史教育を評価しているように読める。しかし元の記事の第4節以降をみると、「歴史科学」つまり科学としての歴史を教えることこそ重要だとされ、「新制の国史尊重は、歴史をさらに理解思考・動力の学として取り扱はしない限り、国史科をして時代的に事件的に整頓した一種の修身科化せしめる」と以後の国史教育に危惧を抱いている今井の姿が浮かび上がってくる。

以上のように英文記事は今井の主張の中心を扱っていない。このような例は同じ雑誌の掲載記事であるB-62や63のように、元の記事の著者と訳者が違うであろう場合に起こりうることであり、資料として取り扱う場合には注意を要する。

B-61

■Mantaro Kido, What is Wrong with Our Education?, *Contemporary Japan*, 2, 1933, pp.462-472.

■城戸幡太郎「私たちの教育の何が間違っているのか」

【目次・見出し】なし

著者の城戸幡太郎は1893(明治26)年に生まれ、東京帝国大学心理学科卒業後1922(大正11)年にドイツに留学した。1931(昭和6)年から『岩波講座教育科学』の編集に携わった。教育科学研究会の中心的人物の一人。

元となった記事については不明。

城戸は社会状況の変化に対応するために、教育において種々の変革を求めている。まず恐慌によって高等教育機関の存続、特に私立のそれが危機にあるとし、一方で一部の官立学校では激烈な受験戦争があることに関して、両者を同等のものとするよう訴えた。

また尋常小学校卒業者の進路のデータによってその6割以上が高等小学校に進学していることを示し、両者を統合する形での完成教育を目指すべきだとした。後の国民学校制度につながる考えである。

次に問題とするのは高等教育修了者の雇用が減少していることで、それによって危険思想を持つに至るのではないかと危惧している。

最後に以下のような学校制度を提案している。すなわち高等小学校を廃止して、小学校卒業後のコースを3年間の補習的な職業学校と7年間の中等学校の2つとし、そのうち3年間は義務教育とする。中等学校卒業者にあたる19歳頃の男性全員に1年間の従軍義務を与え、その後大学もしくは教員養成機関に入学する。またすべての教育機関で男女共学を実現する。

B-62

■Ichita Kobashi, Independence of Spiritual Education, *Contemporary Japan*, 2, 1933, pp.163-165.

■小橋一太「精神教育の独立」(『文芸春秋』11巻3号、1933年3月、pp.5-6)

【目次・見出し】なし

この記事は上記のように『文芸春秋』の記事を、要約ではなくほとんど全文を訳出している。著者自身による訳出かどうかは不明である。

著者の小橋一太は1870(明治3)年に生まれ、東京帝国大学法科卒業後、1908(明治41)年にはロシアでの万国道路会議に出席した。1920(大正9)年には衆議院議員となり、政友本党幹事長をつとめた。全国神職会長も経験している。

内容は「危険思想」の蔓延を危惧し、国民教育の重要性を訴えるものである。ただ小橋は経歴にもあるように教員の経験がなく、学校教育を一方向的に「詰込主義画一主義」に陥っていると断罪している。

小橋は学校教育に頼らずに「忠君愛国の大義」を子弟に教えるために、地域住民による共同の寄宿舎を経営し、そこで精神教育を実施するよう提案している。

B-63

■Shigeharu Moriguchi, Academic Freedom and the Takikawa Case, *Contemporary Japan*, 2, 1933, pp.327-330.

■森口繁治「京大事件の処置及び説明」(『改造』15巻7号、1933年7月、pp.131-138)

【目次・見出し】なし

著者の森口繁治は1890(明治23)年に生まれ、1919(大正8)年に京都帝国大学法学部助教授となった。専門は国法学。滝川事件において辞表を提出した教授の一人である。

この記事は上記のように『改造』の記事を訳出したものである。しかし英文記事は元のその要約であり、なおかつ原文にはない事件自体の説明も加えられている。

B-66

■Kumaji Yoshida, Education in Japan, *The Yearbook of Education*, ?, 1933, pp.733-744.

■吉田熊次「日本の教育」

【目次・見出し】初等教育 中等教育(中学校 高等女学校 実業学校) 高等教育(高等学校 専門学校 高等実業学校) 大学 教師教育(師範学校 高等師範学校) 社会教育 教育行政の現況 教育改革の諸問題(コースの短縮 単線適性度の廃止と実用的教育の再生 卒業生の雇用 女子教育の改善 青年の学校の確立)

著者の吉田熊次は1874(明治7)年に生まれ、東京帝国大学哲学科卒業後に女子高等師範学校教授として教育学研究のためヨーロッパに約3年間留学した。1916(大正5)年に東京帝大文科教授となり教育学講座を担当した。1932(昭和7)年には国民精神文化研究所員となった。

この雑誌はロンドン大学教育研究所が1932(昭和7)年に創刊したものである。元とな

った記事は見いだせなかったが、この時期に吉田が以下のような内容の著作をなしていないため、書き下ろしではないかと推測される。

小見出しからわかるように吉田はこの記事で、日本の教育制度について項目別に概説した後、必要と考える改革のポイントを上げている。各学校については教科や生徒数などが記されている。「社会教育」の項では青年団体、青年学校、図書館、実業補習学校について簡単に述べている。

吉田の主張の中心は、大学を頂点とした正系のコースへの進学熱に対する批判で、その点からコースの短縮やより多様で実用的なコースの増加などを提案している。

B-67

■S. Washio, Educational Program Hits Private Schools, *Trans-Pacific*, 21, 1933.7, p.5.

■鷺尾「教育プログラムが私立学校に打撃を与える」

【目次・見出し】(序文) 思想統制 反動主義の傾向

題には教育プログラムとあるが本文中では教育改革プログラムとなっており、教育改革案についての論説である。副題には「汚職の背景にある私立学校の悪」とあり、B-58に続いて私立学校の汚職についても触れている。

内容は、マルクス主義などの危険思想の広まりに対して権威筋は道德教育の改革などを声高に叫んでいるが、それが学校教育現場に反映されていないことに苦言を呈するものとなっている。鷺尾は学校では国の歴史とその固有の文化を教えなければならないとした。

また思想統制について、就職浪人を減らすために高等学校入学者を減らすという政府の方針に賛意を示している。最後に私立学校に対する統制強化に触れ、その商業主義的精神から統制強化は当然とした。

B-68

■S. Washio, Takikawa Case Means Academic Freedom is Placed in Jeopardy, *Trans-Pacific*, 21, 1933.7, p.5.

■鷺尾「滝川事件によって大学の自由は危機にさらされる」

【目次・見出し】不明

未見。

B-69

■S. Washio, Corruption in Primary Schools Linked with Municipal Politics, *Trans-Pacific*, 21, 1933.12, p.5.

■鷺尾「地方政治と癒着した小学校の汚職」

【目次・見出し】(序文) 出版社も含まれる 学習の援助 試験のための詰め込み

問題とされているのは小学校において用いられる試験を作成する出版社と小学校長との関係であり、地方の視学官も疑惑の対象となってきたとする。

鷺尾は補助教材の採用に伴う賄賂の授受などは小さい問題だとし、そのような不正によって小学校で適切な学習が行われなくなることをより問題視している。さらに中学校の入試問題が小学校の教科書レベルを超えて難しいものとなっており、そのために補助教材を用いなければならない状況があることを指摘し、日本の教育における試験の存在、特に中、高等学校入試における受験戦争を根元的な悪だとする。

時の文部大臣である鳩山(一郎)は中学校入試における試験の比重を減らすよう指示した。しかし鷺尾はその目指す方向を是としながらも効果については疑問視し、教育に携わるものの自覚を促している。

B-71

■Y. Yamada, Educational System of Japan, *The Japan Magazine*, 24-1, 1934, pp.12-15.

■「日本の教育制度」

【目次・見出し】教育の進歩 日本の教育方針 日本教育の3つの特徴 初等教育 中等教育(中学校 高等女学校 実業学校 実業補習学校) 高等教育(高等学校 大学) 文部省の中心人物(父 母 妻)

著者については特定できない。元となった記事についても不明。

内容は日本の教育を称揚するものである。著者は日本における急速な教育の拡大について触れ、教育勅語の影響を大とした。勅語の意義について、西洋と東洋の思想を教育において両立させた、学校から宗教教育を排除した、平等主義の教育を実現したことを挙げた。

続く各学校については、その目的や就学率、学校数や生徒数などについて簡単に扱っている。

最後に当時の文部大臣である鳩山一郎を賞讃する文章がある。なお記事冒頭にその写真が掲げられている。鳩山一郎については必ず未来の総理大臣になるという。さらにその父である和夫や母の和子、また妻についてもその業績や人格などを褒め称えている。

B-72

■M. Arikawa, Centennial Celebration of the Birth of Yukichi Fukuzawa, *The Japan Magazine*, 24, 1934.2, pp.48-52.

■「福沢諭吉生誕百年祭」

【目次・見出し】(序文) 彼の経歴 慶應義塾の略史

著者は特定できない。元となった記事についても不明。

内容は見出しのとおり福沢諭吉と彼が創設した慶應義塾について述べたものである。記

事冒頭には福沢の写真が掲げられている。ここでその経歴には触れない。著者が強調しているのは、福沢が一生涯を人々のために尽くしたことである。

慶應義塾については、1858（安政5）年の創設から説き起こし、所在地の移動や名前の変更、また学部の変遷などが記されている。

B-73

■Yoneji Miyagawa, *Medical Education in Japan with Suggestions for Its Future*, *Japanese Journal of Experimental Medicine*, 12, 1934.4, pp.105-109.

■宮川米次「日本の医学教育、未来のための若干の提案」

【目次・見出し】（序文） 日本の医学教育の現状 3年の大学予備教育は2年に短縮できないのか？ 医師免許は医学校か大学卒業の後に1, 2年の臨床だけで与えられるべきだ 予防薬の開発が求められている 研究機関その他の研究団体が求められている 共同研究の緊急必要性

著者の宮川米次は1885（明治18）年に生まれ、東京帝国大学医科卒業後、伝染病研究所長をつとめ、1934（昭和9）年からは東京帝大の教授を兼任している。

この記事は1934年3月の医学博士鶴見三三の出版記念に寄せたものである。掲載誌は東京帝大医科学研究所の紀要で、継続前誌は1922（大正11）年に創刊されている。元になった記事については不明。

宮川は序文でバーネット（Etienne Burnet）の著書（*Medical Education and the Reform of Medical Studies*）に感銘を受けたと記している。見出しのとおり論を進めている。

まず医学教育の現状について、大学の医学部や医学専門学校に比べて高等学校医科の卒業生のレベルが低いことを問題にし、後者をグレードアップする形で統合していく方向を示している。また医学準備教育において外国語、とりわけドイツ語に時間をかけることに反対している。また医学自体の状況については見出しのように、予防薬の開発、研究機関の充実、共同研究の推進などを求めている。

B-74

■Chigerou Yamamoto, *The Moral Lecture*, *The Christian Century*, 51, 1934.5, pp.594-595.

■「道徳の授業」

【目次・見出し】なし

著者は特定できない。掲載誌の創刊は1902（明治35）年で、シカゴで発行されていた数種の雑誌が統合されたものである。

ナホッドの書誌中には Translated by R. H. House とあるが、その人物については不明である。

これはある小学校における道徳の授業にまつわる出来事を記したもので、フィクションであるかも知れない。あらすじは以下の通りである。

若い教師がある日の道徳の授業でロシアについてその繁栄ぶりを語ったのに対して校長がクレームを付け、自分が代わりに授業をやるといった。校長は自己犠牲の精神を教えるために爆弾を背負って戦車に突進した肉弾三勇士の話をしたが、校長の意図に反して児童はその兵士達の親の悲しみを思った。

B-75

■ S. Washio, Professional Clique is Strong against Reforms in Education, *Trans-Pacific*, 22, 1934.6, p.4.

■ 鷲尾「教育改革に強硬に反対する専門家派閥」

【目次・見出し】(序文) 九州のスキャンダル

著者は鳩山文部大臣の下で起こった入学・進学試験に絡む汚職や滝川事件などに触れ、鳩山の採った対策を概ね評価した。なお小見出しになっている九州のスキャンダルについて、舞台が九州帝国大学医学部であったことしか記されていない。

また文部省における関屋龍吉社会教育局長と武部欽一普通教育局長とのライバル関係を指摘し、広島文理科大学の学長選出に際して文部省の意向と同大学の意見が対立した原因の一つとした。

B-76

■ T. Yasui, Imperial Invention Society, *The Japan Magazine*, 25-1, 1935, pp.60-61.

■ 安井豊太郎「帝国発明協会」

【目次・見出し】(序文) 協会の役割 政府の援助

著者は以下のような経歴を持つ安井豊太郎ではないかと推測されるが、帝国発明協会との関係は知り得ていない。安井は1885(明治18)年に生まれた。大阪高等商業学校卒業後、1918(大正7)年に講話使節としてフランスに渡るなど、20回近い海外渡航を経験している。日本綿花株式会社の取締役をつとめた。

この記事は1904(明治37)年に創設された帝国発明協会(前身は工業所有権保護協会)の歴史と現状について記したものである。安井は工業発明などを推進してきた機関として同協会を高く評価している。

B-79

■ Fukuda Ippei, Some Faults of Japanese Education, *Japan in Pictures*, 3, 1935.5, p.158.

■ 「日本の教育のいくつかの欠点」

【目次・見出し】

未見。著者は特定できない。

タイトルからすると写真雑誌ではないかと思われる。

B-80

■Yasaka Takaki, Hepburn Professorship of American Constitution: History and Diplomacy at the Tokyo Imperial University, *News Bulletin*, 11, 1935.10, pp.4-5.

■高木八尺「アメリカ憲法のヘップバーン教授－東京帝国大学における歴史と交渉－」

【目次・見出し】なし

著者の高木八尺は 1908 (明治 41) 年に学習院を卒業後、1918 (大正 7) 年から東京帝国大学で働き、1924 (大正 13) 年には教授となった。専門は米国憲法で、1919 (大正 8) 年から約 4 年半欧米に留学した。

雑誌は、ニューヨークにある Institute of International Education から出版されたもので、1925 (大正 14) 年に創刊された。

内容は、以前に東京帝大の教授職にあったヘップバーン (A. Barton Hepburn) によって始められたアメリカ憲法に関する講義の歴史について語ったもので、新渡戸稲造や美濃部達吉など著名な学者によって支えられてきたという。講義担当者等が執筆した叢書アメリカ講座 (*American Chair Series*) は、日本のアメリカ研究に多大な貢献をしたと評価している。

B-81

■Hayashi Turuichi, On the Mathematicians in the Tokai-do Districts: Excluding Yedo and its Surroundings, *Tohoku Mathematical Journal*, 42, 1936, pp.1-31.

■林鶴一「江戸周辺を除く東海道の数学者」

この記事について題名は英語で記されているが、本文はすべて日本語で記されていたので、著者について簡単に述べるにとどめる。

著者の林鶴一は理学博士で 1873 (明治 6) 年に生まれた。1897 (明治 30) 年には京都帝国大学助教授となり、後に東京高等師範学校、東北帝国大学の教授などを歴任した。数学者として数多くの著作がある。

B-86

■Hachisaburo Hirao, Novel Education for Youth, *The Japan Magazine*, 26-3/4, 1936.12, pp.2-4.

■平生鈺三郎「新しい青年教育」

【目次・見出し】(序文) 青年への義務教育の要素 日露戦争の影響 平時における戦争

準備教育 教育と移民 日本は自由貿易を確立すべきだ

著者の平生鈇三郎は1866（慶応2）年に生まれた。東京高等商業学校卒業後東京海上保険に入社し、ロンドン支店に勤務した。帰国後甲南学園を経営し、1936（昭和11）年からは文部大臣をつとめた。この記事はその任期中に書かれた。

元となった記事については不明。

内容は青年教育の必要性を訴えたもので、ドイツやイタリアにおける青年の義務教育制に触れ、同様の制度の導入を強く訴えている。記事掲載誌発行の1ヶ月前に結ばれた日独防共協定への意識が見える。平生はヨーロッパにおける国家間戦争を強く意識し、戦争準備のために教育を充実させなければならないとした。

また平生は日本が拡大路線をとる上で、移民を足場として貿易など経済面で他国と良好な関係を結ぶことが必要だとし、ブラジルへの移民を奨励した。また加工貿易国として成長するために自由貿易政策を採ることも提案した。

B-87

■Kurahashi Sozo, Primary School in Japan, *Travel in Japan*, 3-1, 1937, pp.10-17.

■倉橋惣三「日本の小学校」

【目次・見出し】不明

未見。雑誌についても不明。

著者の倉橋惣三は1882（明治15）年に生まれた。東京帝国大学哲学科を卒業後、東京女子高等師範学校教授となった。1919（大正8）年から約3年間欧米に留学し、帰国後同校の附属小学校の主事をつとめた。1934（昭和9）年から「児童教育問題」を進講するようになった。

B-89

■Hirose Chiyo, New Worlds, *Japan in Pictures*, 5-1, 1937.1, pp.28-29.

■広瀬ちよ「新世界」

【目次・見出し】不明

未見。著者は特定できない。雑誌についてはB-79に同じ。

B-91

■Nyozeikan Hasegawa, Characteristics of Education in Japan, *Contemporary Japan*, 5-4, 1937.2, pp.586-598.

■長谷川如是閑「日本の教育の特徴」

【目次・見出し】なし

著者の長谷川如是閑は1875（明治8）年に生まれた。東京法学院卒業後、1903（明治

36) 年に日本新聞社に入社し、後に朝日新聞社に移った。退社後は文筆活動に勤しみ、1932 (昭和7) に『日本ファシズム批判』、1938 (昭和13) 年に『日本の性格』を刊行した。

この記事は事実としての歴史を教えることについて書かれており、長谷川は日本の教育の歴史について紀元前の中国や朝鮮との文化的交流から説き起こしている。なお元の記事については不明である。

近世までの教育について7ページにわたって記した後に長谷川は、最大の疑問として小説や浮世絵、歌舞伎などの民衆文化がどのようにして育ったのかという点を挙げた。

その理由として第一に非識字者が少なかったこと、第二に家庭の教育力の高さを挙げた。そして現在の教育について、公的な教育制度は非常に整えられたが、家庭教育などの分野が衰えてしまい、結果として伝統的な文化が廃れたと指摘した。最後にことばなどの文化に対して公的な統制をかけることに対する危惧を表している。

B-94

■Morikawa Masao, Doshisha University, *Pan-Pacific*, ?, 1937.4, pp.18-19.

■森川正雄「同志社大学」

【目次・見出し】不明

未見。雑誌についてはホノルルで発行されていたことが知られるのみ。

著者の森川正雄については、同志社大学外事係や同大学総長牧野虎次の秘書をつとめたことが知られる程度である。いくつかの教育関係雑誌に「奈良女子高等師範学校教授」と紹介されているが、同一人物であるかどうか確かめられていない。

B-95

■Jiro Tsuji, *Scientific Progress in Japan :The Scientific Exhibits in the World Exposition at Paris*, *Nippon*, 11, 1937.5, pp.16-19.

■辻二郎「日本における科学の進歩 パリ万国博覧会における科学展示」

【目次・見出し】なし

著者の辻二郎は1896 (明治29) 年に生まれた。東京帝国大学工科を卒業した後に工学博士となった。理化学研究所を経て理研計器株式会社専務となった。1936 (昭和11) 年に岩波書店から『西洋拝見』という書を出版している。

辻はパリ万国博覧会の科学部専門委員として1937 (昭和12) 年3月から8月まで派遣されている (『一九三七年「近代生活ニ於ケル美術ト工芸」巴里万国博覧会協会事務報告』同協会、1939年、p.187)。つまり執筆時はパリに在住していたことになる。なお掲載誌は、近代日本の実際の姿を外国人に伝えることを目的として1934 (昭和9) 年に東京で創刊されたものである。

記事は題名のとおり、1937 (昭和12) 年5月に開かれたパリ万博の科学分野におけるに

おける日本の展示物に関する報告であり、掲載されている9つの図版にはそれぞれに英語、フランス語、ドイツ語の解説が加えられている。

扱っている展示物について制作者の名前とともに説明している。具体的には、ガス検出器やX線反射機などを扱っている。

B-97

■Shigetaka Abe, Education in Japan, *Nippon*, 12, 1937.7, pp.6-13,52-53.

■阿部重孝「日本の教育」

【目次・見出し】教育行政 学校制度 義務教育 初等教育 中等教育（中学校 高等学校 高等女学校 実業学校 青年学校） 高等教育（専門学校 大学）

著者の阿部についてはB-51の記述を参照されたい。

内容は日本の教育の概略で、2つの表と16の図版を使っている。特に図版については総ページの半分以上を費やしている。

記述は見出しにある事柄について順に大まかな解説を加えるというスタイルである。「教育行政」の項では文部大臣の権限や地方公共団体の学校設置義務などを扱い、「義務教育」の項では近年の義務教育延長の動きが紹介されている。

各学校については、その目的や就学年数、教科などを記している。阿部自身の意見は全く含まれていない。

B-98

■Akira Ikeda, Some Fundamentals of the Japanese Education, *Cultural Nippon*, 5-2, 1937.7, pp.103-116.

■「日本の教育の基礎」

【目次・見出し】(序文) 儒教 仏教 国学や国文学 キリスト教 哲学

著者については特定できない。雑誌は日本文化連盟が1933（昭和8）年から発行していた。同連盟については、1937（昭和12）年から叢書『時局と国民自覚大講演集』を発行したことで知られる。

記事冒頭で著者は教育勅語をたたえ、日本の目指す方向を示すもので、すべての教育の基礎であるとした。しかし教育は文化の一側面でしかないとし、日本の文化には雑多なものが入り混じっているという評を故なしとしないと述べた。そして日本の文化に影響を与えた思想や学問を小見出しにあるように5つ取り上げ、それぞれの歴史や顕れ方を以下のように述べている。

儒教については日本において一番重要な思想であるところの「忠義」をもたらしたものであるとした。また仏教は日本人を、そのナイーブさと相俟って、現実的でありながらそれを超越したところで思考するものとした。

国学は儒教の隆盛とともに成長し、科学的思考と愛国精神の醸成に寄与した。またキリスト教については、信者による明治初期からの活発な学校設立などの運動を通して、西洋の思想を受け入れる土壌を形成する役目を果たした。

B-99

■ Michiji Ishikawa, Family Education in Japan, *Cultural Nippon*, 5-2, 1937.7, pp.53-80.

■ 「日本の家庭教育」

【目次・見出し】序文 日本における家庭の概念 家庭と宗教 家庭と性 家庭と職業 教育機関としての家庭 家庭と地域 付録1, 2, 3, 4

著者は特定できない。

この記事は教育的影響を与える場としての家庭について分析したものである。本文 21 ページと付録から成っており、付録には高等女学校生徒への家庭に関するアンケート結果や離婚に関する統計表などがある。

本文ではまず日本の家庭について、家父長制の影響を残しながらも個人の権利、特に女性のそれが認められるようになったという。またその教育機能については、主に祖父母によって家の外での禁止事項が教え込まれるとし、結果的に個性がなくなり、官僚的になる傾向があるとする。

B-100

■ Jikichiro Kawahara, The Organs of Social Education in Japan, *Cultural Nippon*, 5-2, 1937.7, pp.91-101.

■ 川原次吉郎「日本における社会教育機関」

【目次・見出し】概略 青年の学校 若い男子の団体 若い女子の団体 少年の団体 成人教育のコース 市民教育 労働の教育 家庭教育と女性の団体

著者の川原次吉郎は 1896 (明治 29) 年に生まれた。東京帝国大学政治学科卒業後、欧米滞在を経て 1923 (大正 12) 年には中央大学教授となった。戦後も叢書『政治経済評論』に論文を書くなどしている。

この記事の目的は、広範な分野であるところの社会教育を担う諸機関を紹介することであるといえる。川原による批判や意見はあまりみられない。

川原は、まず社会教育という用語使用の歴史や社会教育局の仕組みなどの概略から始め、青年学校の設立経緯や青年団体としての若者組などを紹介している。また成人教育の分野についても同窓会や各種婦人団体があることに触れている。

B-101

■Gaku Matsumoto, The Education of Tomorrow, *Cultural Nippon*, 5-2, 1937.7, pp.1-5.

■松本学「明日の教育」

【目次・見出し】なし

著者の松本学は 1886 (明治 19) 年に生まれた。東京帝国大学法科卒業後、文官高等試験に合格し、静岡県や鹿児島県の知事をつとめた。日本文化連盟常務理事でもあった。

松本はこの記事で、日本以外の国を含めての教育の未来について記している。学校制度の改革のような具体的な論述ではなく、人生を豊かにするために人間性を高める教育が必要であるといった内容である。例えば物質主義の広がりとともに精神的なものが軽視されるようになる傾向について批判を加えたり、人間性の教育の目的は個人の独立を失うことなく世界の統一を目指すことであると述べたりしている。

最後に自身の属する日本文化連盟が上記のような教育を推進していると述べる。

B-103

■Hidejiro Nagata, On the World Education Conference, *Nippon*, 12, 1937.7, pp.4-5.

■永田秀次郎「世界教育会議」

【目次・見出し】なし

著者の永田秀次郎は 1876 (明治 9) 年に生まれた。文官高等試験合格後中学校長などを経て 1916 (大正 5) 年には三重県知事となり、後に東京市長もつとめた。記事掲載当時は帝国教育会会長であった。

この記事は、1937 (昭和 12) 年 8 月に東京で行われる予定の、第 7 回世界教育会議への興味を喚起するための記事である。永田は帝国教育会長として会議初日に「歓迎の挨拶」を述べている (『帝国教育』706 号、1937 年 8 月 1 日、pp.2-3)。

永田は、日本の教育について近代的な方法と伝統的思想の組合わさった独特なものであると、その進歩性を宣伝している。そして同会議に参加して直接日本の心を感じて欲しいと述べている。

B-104

■Toyoo Ohgushi, Japanese State and Education, *Cultural Nippon*, 5-2, 1937.7, pp.47-52.

■大串兎代夫「日本国と教育」

【目次・見出し】日本文化の理解の鍵 教育勅語 (Edict on National Education) 憲法一政治と教育 「国体」の字義の説明 国体の本義 家族国家と教育国家 国家、政府と教育

著者の大串兎代夫については、国民精神文化研究所員であったことが知られる。1938 (昭和 13) 年には同研究所の叢書の 41 冊目として『我が国体と世界法』を著した。

大串は日本の文化を理解するためには「国体」を理解しなければならないとし、その表れであるところの教育勅語の内容を紹介したり、言葉の成り立ちを説明したりしている。

さらに「古事記」などを引きながら日本が家族国家であると述べるなかで、ヨーロッパの全体主義国家や国民国家とは違う独自の国家体制であることを強調している。また家族国家に関連して、家族における「孝」が国家における天皇に対しての「忠」となることなどが説明されている。

B-105

■Joji Sakurai, Beginnings of Western Science in Japan, *Nature*, 140-3535, 1937.7, pp.205-206.

■桜井錠二「日本における西洋科学の端緒」

【目次・見出し】なし

この記事は1937(昭和12)年4月のロンドン大学における夕食会で、桜井錠二が乾杯の挨拶として述べたことばを紹介したものである。桜井は1858(安政5)年に生まれた。1876(明治9)年には化学研究のため同大学に留学し、1886(明治19)年には東京帝国大学教授となった。のちに同学長もつとめた。万国学術会議にも出席し、1926(大正15)年には汎太平洋学術会議会長となった。

挨拶の内容は、明治維新前後のイギリスと日本の交渉についてであり、1863(文久3)年の伊藤博文らのイギリス訪問と、科学教育のために招聘されたイギリス人お雇い教師などについて述べている。

B-106

■Saju Tase, An Outlined History of Japanese Education, *Cultural Nippon*, 5-2, 1937.7, pp.7-45.

■田制佐重「日本の教育の概略史」

【目次・見出し】I 日本の教育の理想

II 氏制度時代の教育

(1) 古代

(2) 大陸文化の流入期

(3) 聖徳太子

III 貴族期の教育(645-1183)

(1) 大化改新の前後

(2) 奈良時代(710-794)

(3) 平安時代

IV 武士教育の時代(1184-1602)

- (1) 武士道
 - (2) 二つの文化中心地
 - (3) 室町時代 (1392-1603)
 - (4) 民衆教育
 - (5) 日本における最初のキリスト教学校
- V 江戸時代の教育 (1603-1867)
- (1) 江戸文化の概略
 - (2) 教育制度
 - (3) 社会教育と家庭教育
 - (4) 種々の学校 (漢学、仏教、道德哲学、報徳教、蘭学、神道と国学)
 - (5) 尊皇と開国の叫び
- VI 明治時代 (1868-1912) - 平等を基礎とした国民教育 -
- (1) 明治時代の教育 (1868-1912)
 - (2) 明治時代以降の教育 (1913-1937)
 - (3) 結論

著者の田制佐重について詳しい経歴は不明だが、1928 (昭和3)年には『教育社会学の思潮』を著すなど、教育社会学分野の泰斗であった。また1935 (昭和10)年には『日本教育史潮概説』を著している。執筆当時は日本文化連盟の一員であった。

内容は題名及び目次のとおり日本の教育史をまとめたもので、「日本の教育の理想」以外の章においては教育に関わる制度や機関、また当時の状況などが述べられている。

第1章において田制は、冒頭に教育勅語を引用して日本の教育の固有性とその源泉である国作りの神話を扱っている。他の国との違いを強調するという点でB-103や104と共通しており、時代状況を感じさせる。

結論では、近年の努力によって西洋に肩を並べる国となったとし、以後はさらなるレベルアップのために日本の伝統に基づいた教育を作り上げなければならないとした。最後に、日本の精神文化を広める運動を拓げていくことを強く訴えている。

B-107

■Tokuo Doi, *The Hundred-year-old Teacher of Geisha, Asia*, 37-8, 1937.8, pp.547-548.

■「100歳の芸者の先生」

【目次・見出し】なし

著者は特定できない。雑誌については *Journal of the American Asiatic Association* の後継誌で、ニューヨークで発行されていたことがわかっている。

この記事は踊りの師匠である片山春子に焦点を当てて、京都における芸者の養成について述べたものである。著者による片山へのインタビューなどをもとにして記されている。

また冒頭には片山の写真が掲げられている。

片山とは京舞井上流の家元で Cherry Blossom Dance として海外でも知られた「都をどり」の創始者である。タイトルからすると芸者の先生としての片山に注目したように思えるが、本文ではその教え方などについては全く触れられておらず、片山の歌や踊り、また生き方そのものの賞賛に終始している。

B-108

■Hatai, I. H., Life Begins at Eighteen, *Japan in Pictures*, 5-8, 1937.8, pp.276-277.

■「人生は18歳で始まる」

【目次・見出し】不明

未見。なおB-79でも記したが写真雑誌と思われる。

著者は特定できない。

B-109

■Hachisaburo Hirao, The Present Situation and Education, *Contemporary Japan*, 6-3, 1937.12, pp.507-510.

■平生鈞三郎「時局と教育」(『中央公論』601号、1937年11月、pp.142-151)

【目次・見出し】なし

著者の平生についてはB-86を参照されたい。

この記事は上記のように『中央公論』の記事を訳出したものである。平生本人による英訳であるかどうかは不明である。その小見出しを以下に掲げる。

国家総動員と教育、義務教育八年制の沿革、義務年限延長の理由、国防上より見たる重要性、産業上より見たる重要性、教育の機会均等、年限延長と教育改善、諸外国との比較、結語

小見出しをみてわかるように、義務教育年限延長の必要性を主張する記事である。なお英語記事では「義務教育八年制の沿革」と「諸外国との比較」と「結語」が省かれている。

平生は義務教育年限の延長が必要な理由として、13,4歳が青年期の始まりであることや文化水準の向上によって義務とすべき教育内容が増えたことなどを挙げた。

<参考文献について>

記事執筆者の確定や元となった記事を調査するために、文中で掲げたものの他に以下の文献を用いた。

- ・唐沢富太郎編『図説教育人物事典』ぎょうせい、1984年。
- ・富田仁編『海を越えた日本人名辞典』日外アソシエーツ、1985年。

- ・教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成』日本図書センター、1986～1994年。
- ・『明治人名辞典』日本図書センター、1987年。『現代人名辞典』（中央通信社、1912年）の復刻。
- ・『大正人名辞典』日本図書センター、1987年。『大正人名辞典』（東洋新報社、1918年）の復刻。
- ・『昭和人名辞典』日本図書センター、1987年。『大衆人事録』（帝国秘密探偵社、1943年）の復刻。
- ・『教育人名辞典』日本図書センター、1989年。教育実成会編『明治聖代教育家銘鑑』（教育実成会、1912年）と『大日本現代教育家銘鑑』（教育実成会、1915年）の復刻。
- ・『国立国会図書館蔵書目録』（明治、大正、昭和版）

14. 諸機関執筆英語文献の解題

大林 正昭 (広島大学)

平田 諭治 (鳴門教育大学)

○大林執筆担当部分

C-1

■Department of Education, Report (Annual), of the Minister of State for Education, 1873

■文部省『文部省年報』

C-2

■Kobu-Dai-Gakko, Calendar of the Imperial College of engineering, Session, 1873

■工部大学校『明治六年工部大学校カレンダー』

C-4

■Kobu-Dai-Gakko, Catalogue of books contained in the Library, 1877

■工部大学校『蔵書目録』

C-5

■Kobu-Dai-Gakko, Catalogue of its Museum to illustrate Jap. product and manufactures, 1877

■工部大学校『博物館目録 工業及び製品図解』

C-6

■Kobu-Dai-Gakko, Catalogue of physical apparatus in Museum, 1877

■工部大学校『博物館目録 物理学実験器具』

C-7

■Kobu-Dai-Gakko, General Report by the principal and professors for the period 1873-77, 1877

■工部大学校『自明治六年至十年 校長教授報告工部大学校概況』

C-8

■Kobu-Dai-Gakko, Preliminary Catalogue of the models, tools etc. contained in the Museum, 1877

■工部大学校『博物館仮目録 模型器具等』

C-9

■Tokio Daigaku, Catalogue of the officers and students of the Departments of Law, Science and Literature with a statement of the course of instruction, 1878

■東京大学『法文理科職員学生名簿並びに各課程概要』

C-11

■Department of Education, Code (Japanese) of Education, promulgated the 29th of the 9th month of the 12th year of Meiji(1877), 1881

■文部省「教育令 明治12年9月29日公布」

C-16

■Department of Education, Ordinance, Imperial, relating to the Imperial University, 1886. 3

■文部省「帝国大学令」なお、帝国大学令は明治19年3月2日公布。

C-17

■Department of Education, Ordinance, Imperial. General Regulations for Schools, 1886. 8

■文部省「諸学校通則」なお、諸学校通則は同年4月10日公布。

C-18

■Department of Education, Ordinance, Imperial, relating to Elementary Schools, 1886. 8

■文部省「小学校令」。なお、小学校令は同年4月10日公布。

C-19

■Department of Education, Ordinance, Imperial, relating to Middle Schools, 1886. 8

■文部省「中学校令」。なお、中学校令は同年4月10日公布。

C-20

■Department of Education, Ordinance, Imperial, relating to Normal Schools, 1886. 8

■文部省「師範学校令」。なお、師範学校令は同年4月10日公布。

C-21

■Department of Education, Regulations as to the Admission to ordinary Normal Schools of Pupils from Various District of Fu and Ken; Ordinance of the Department of Education, 1886. 8

■文部省「尋常師範学校生徒募集規則」なお、明治19年5月28日公布。

C-22

■Department of Education, Regulations relating to the Performance of Duties by the Graduates of Ordinary Normal Schools; Ordinance of the Department of Education, 1886. 8

■文部省「尋常師範学校卒業生服務規則」。なお、同年5月28日制定。

C-23

■Department of Education, Relating to Subjects of Study and the Standard to be attained in Elementary Schools; Ordinance of the Department of Education, 1886. 8

■文部省「小学校ノ学科及其程度」。なお、同年5月25日制定。

C-24

■Department of Education, Relating to Subjects of Study and the Standard to be attained in ordinary Normal Schools; Ordinance of the Department of Education, 1886. 8

■文部省「尋常師範学校ノ学科及其程度」。なお、同年5月26日制定。

C-25

■Department of Education, Regulations as to the Licensing Elementary School Teachers; Ordinance of the Department of Education, 1886.9

■文部省「小学校教員免許規則」。なお、同年6月21日制定。

C-26

■Department of Education, Regulations concerning the Examination and Approval of Schoolbooks and Charts; Ordinance of the Department of Education, 1886.9

■文部省「教科用図書検定条例」。なお、同年5月10日制定。

C-27

■Department of Education, Subjects of Study and the Standard to be attained in Higher Middle Schools; Ordinance of the Department of Education, 1886.9

■文部省「高等中学校ノ学科及其程度」。なお、同年7月1日制定。

C-28

■Department of Education, Subjects of Study and the Standard to be attained in Ordinary Middle Schools; Ordinance of the Department of Education, 1886.9

■文部省「尋常中学校ノ学科及其程度」。なお、同年6月22日制定。

C-29

■Department of Education, For Regulations as to Instruction in the Simpler Elementary School Course; Ordinance of the Department of Education, 1886.12

■文部省「小学簡易科要領」。なお、同年5月25日制定。

C-30

■Department of Education, Notification of the Department of Education No. 3, for the Limits within which Higher Middle Schools are to be, 1886.12

■文部省 高等中学の設置区域に関する文部省告示。なお、明治19年11月30日付け。

C-31

■Department of Education, Ordinance, Imperial, relating to the Official Regulations for the Higher Normal School, the Higher Middle School, and the Tokio Commercial School, 1886.12

■文部省「高等師範学校高等中学校東京商業学校官制」。なお、同年4月30日公布。

C-32

■Department of Education, Regulations as to the Admission to the Higher Normal School of Pupils from Various Districts ; Ordinance of the Department of Education, 1886.12

■文部省「高等師範学校生徒募集規則」。なお、明治19年10月14日制定。

C-33

■Department of Education, Subjects of Study and the Standard to be attained in Higher

Normal School; Ordinance of the Department of Education, 1886.12

■文部省「高等師範学校ノ学科及其程度」。なお、同年10月14日制定。

■C-34

■Department of Education, Regulations relating to the Performance of Duties by the Graduates of Higher Normal School; Ordinance of the Department of Education, 1886.12

■文部省「高等師範学校生徒服務規則」。なお、同年10月14日制定。

C-36

■Department of Education, A short history of the Department of Education. Translated and published by the Department of Education, 1887.6

■文部省「文部省沿革」

C-37

■Department of Education, For Appendix to Subjects of Study and the Standard to be attained in Elementary Schools; Ordinance of the Department of Education, 1887.7

■文部省「小学校ノ学科及其程度」の改正に関する件。

C-38

■Department of Education, For Particulars as to the Military Exercise under "Gymnastics" in ordinary Middle School Course; Instructions of the Department of Education, 1887.7

■文部省 尋常中学校の徴兵令特例措置に関する件。

C-39

■Department of Education, For Regulations as to the Adoption of Books and Chart for Public and Private Elementary Schools; Instructions of the Department of Education, 1887.7

■文部省「公私立小学校教科用図書採定方法」。なお、明治20年3月25日制定。

C-40

■Department of Education, For the principal items as to the Disbursement of the Educational Expenses of Male Pupils in Ordinary normal; Instructions of the Department of Education, 1887.7

■文部省 尋常師範学校男子生徒の教育費支出に関する件。

C-41

■Department of Education, Ordinance, Cabinet, relating to the Titles and the Manner of the Treatment of Public School Officials, 1887.7

■文部省 公立学校公文書取扱いに関する件

C-42

■Department of Education, Ordinance, Imperial, relating to Degrees, 1887.7

■文部省「学位令」。なお、明治20年5月21日制定。

C-43

■Department of Education, Ordinance, Imperial, relating to the Ranks of the Officials in the Imperial University, 1887.7

■文部省 帝国大学職制。

C-44

■Department of Education, Ordinance, Imperial, relating to the Official Regulations for Ordinary Normal Schools, 1887.7

■文部省 師範学校規則に関する件。

C-45

■Department of Education, Regulations as to licensing Instructors for Ordinary Normal Schools, Ordinary Middle Schools and Higher Female Schools; Ordinance of the Department of Education, 1887.7

■文部省「尋常師範学校尋常中学校及高等女学校教員免許規則」。なお、明治20年12月22日制定。

C-46

■Department of Education, Regulations concerning the Examination of Schoolbooks and Cart; Ordinance of the Department of Education, 1887.7

■文部省「教科用図書検定規則」なお、明治20年5月7日制定。

C-47

■Department of Education, Table showing the Amount of Salaries of Officials in Ordinary Normal Schools; Instructions of the Department of Education, 1887.7

■文部省「尋常師範学校職員俸給規則」。

C-48

■Department of Education, Detailed Rules relating to Degrees; Ordinance of the Department of Education, 1887.8

■文部省 学位令の細則。なお、明治25年6月25日に「学位令細則」。

C-51

■Law relating to the directors of Fu and Ken Normal Schools, 1891

■「府県立師範学校長任命及俸給令」。なお、明治24年8月18日公布。

C-52

■Department of Education, Ordinance, Imperial, dated October 6th 1890 relating to the Elementary Schools etc., 1891

■文部省 明治23年10月6日付け小学校等宛。

C-53

■Department of Education, Regulations, General, relating to Local Education etc. (Law No. 89), 1891

■文部省「地方学事通則」。なお、明治23年10月3日制定。

C-54

■Doshisha Preparatory Collegiate, Science and Theological schools, Calendar for the year 1890-91, 1891

■同志社予科「明治23年度カレンダー」なお、同志社政法学校は1891(明治24)年の開校。

C-55

■Imperial University of Japan, Author's Catalogue, 1891

■帝国大学「著者目録」

C-58

■Patent Bureau, Catalogue of books in foreign languages in the library, 1894

■特許庁「洋書蔵書目録」

C-59

■Dai-san Koto Gakko, Classified Catalogue of the books of the library with an alphabetical index, 1896

■第三高等学校「蔵書分類目録 アルファベット順」

C-60

■Imperial University of Japan, Classified Catalogue 2 vols., 1896

■帝国大学「分類目録 第2巻」

C-61

■Imperial Library, A Catalogue of Books in European languages, 1898

■帝国図書館「欧文図書目録」

C-67

■Department of Education, Regulations relating to the Private School Ordinance No. 38; Japan Weekly Mail, 1899. 8

■文部省「私立学校令」なお、明治32年8月3日制定。

C-68

■Department of Education, Laws, Ordinances and Regulations relating to Technical Schools issued between 1893-99, 1900

■文部省「工業学校関係法規 自明治26年至明治32年」

C-72

■Department of Education, Regulations relating to foreign students in Japanese schools; Japan Weekly Mail, 1900. 7

■文部省「文部省直轄学校外国委託生に関する規程」。なお、明治33年7月4日制定。

C-73

■Department of Education, Revised Rules relating for the preparatory Department of High school of Sept. 33rd year Meiji; Japan Weekly Mail, 1900.9

■文部省「高等学校大学予科規則改正」。明治33年8月4日改正。▲

C-74

■Department of Education, Regulations for the admission of students to the Government High School(Koto-gakko)issued in May 1901; The Japan Evangelist, 1901

■文部省「明治34年5月の官立高等学校学生募集規則」▲

C-75

■Higher Commercial School, Calendar of the Tokyo Higher Commercial School and of the Commercial Teachers' Training Institute for 1901, 1901

■高等商業学校「明治34年度東京高等商業学校商業教員養成所カレンダー」

C-76

■Imperial Museum, Catalogue of books in languages in the library, 1902

■帝国博物館「蔵書目録」

C-77

■Tokyo Higher Normal School, Catalogue of European books in the library, 1902

■東京高等師範学校「欧文蔵書目録」

C-78

■Department of Education, Annual Report of the Minister of State for Education, 1903

■文部省「文部省年報」

C-79

■Imperial Cabinet: Section of Archives, Catalogue of books in foreign languages: Books in the English language (Classified according to subjects with an alphabetical author's index at the end of each part), 1903

■内閣文庫「外国語文献目録 英語文献(項目分類 著者索引付)」

C-81

■Peer's College Library, Catalogue vol.1 English books, 1903

■学習院図書館「目録巻1 英書」

C-82

■Tokyo Blind and Dumb School, Short account of it. With numerous illustrations, 1903

■東京盲啞学校「学校概略 絵図多数」

C-83

■Waseda University, Classified Catalogue of foreign books in the library, 1903

■早稲田大学「外国語蔵書分類目録」

C-85

■Higher Technical School, Circular of information, 1904

■高等工業学校「案内ビラ」

C-87

■Imperial Library, Annual Report. An extract of the same in English language, 1904

■帝国図書館「年報」

C-88

■Ohashi's Library, The annual report, 1904

■大橋図書館「年報」。なお、大橋図書館は現三康図書館の全身。

C-89

■Tokyo Higher Technical School, Classified Catalogue of European books in the Library, 1904

■東京高等工業学校「欧文蔵書分類目録」

C-90

■Yokohama, United Club, Catalogue of its Library, 1904

■横浜ユナイテッドクラブ「蔵書目録」

C-91

■Japan Women's University, Calender for 1904-05, 1905

■日本女子大学「明治37年度カレンダー」

C-92

■Kyoto Library, Finding list of European books, 1905

■京都図書館「欧文図書目録」

C-93

■Osaka Library, Classified Catalogue of foreign books with an author's index, 1905

■大阪図書館「外書分類目録 著者索引付」

C-94

■Department of Education, Annual Report of the Minister of State for Education (for the school year 1903-04), 1906

■文部省「文部省年報 明治36年度」

C-95

■Kyoto Imperial University, Calendar, last volume issued for 1905-6 with a plan of the University buildings, 1906

■京都帝国大学「カレンダー 最新版明治38年度 付大学建築計画」

C-96

■Tokyo Imperial University, Calendar, last volume issued for 1905-6 two plans of the buildings, 1906

■東京帝国大学「カレンダー 最新版明治38年度 付2校舎建築計画」

C-97

■Summarized Catalogue of Waseda University (1907/08), 1907

■「早稲田大学概要」

C-99

■Department of Education, Annual Report of the Minister of State for Education, 1921

■文部省「文部省年報」

C-101

■Reconstruction Album. Containing the Final Report in the Rec. of the Tokyo Imperial University Library, 1930.02

■「再建アルバム 東京大学図書館近着図書報告」

C-102

■The Keiogijuku University, A Brief Account of its History Aims and Equipment, 1932

■慶應義塾大学「沿革・理念・施設概要」

C-104

■Hiroshima Imperial University of Literature and Natural Sciences, University is Torn by Dispute on Dean; Trans-Pacific, 1934.6

■広島文理科大学「学長論争に大学は混乱」

C-106

■Katei Gakko, Reformatory, Founded by the Late Rev. Kosuke Tomeoka; Dai Nippon, 1936

■家庭学校「矯正 前校長留岡幸助によって創設」

C-107

■The Keiogijuku University, A Brief Account of its History, Aims and Equipment, 1936.3

■慶應義塾大学「沿革・理念・施設概要」

C-110

■Kyoto Imperial University, Prospectus, 1937.3

■京都帝国大学「案内」

C-111

■Imperial Education, Catalogue of foreign books

■帝国教育「外書目録」

○平田執筆担当部分

C-3

■ *An Outline History of Japanese Education, for the Philadelphia Exhibition in 1876*. Prepared by Tanaka Fujimaro of Monbusho, New York, Appleton Co., 1876, 202 pp. Reprinted for the Paris Exhibition in 1878, Tokyo, 1877, 194 pp.

■ 『日本教育史略』

【目次】

序章 (デイビッド・マレー)、第I章 概略 (那珂通高・大槻修二)、第II章 旧時代の教育 (同前)、第III章 幕府下の教育 (同前)、第IV章 維新後の教育 (同前)、第V章 日本の言語と学問 (榊原芳野)、第VI章 日本の芸術と科学 (同前)、付録 (妻木頼矩)

1876 (明治9) 年フィラデルフィアで開催された米国独立百年記念博覧会のため、文部省が用意したのは初めての日本教育紹介の英文書。表紙には“JAPANESE EDUCATION, PHILADELPHIA EXHIBITION 1876”のタイトルに「日本教育」と外題が付されており、同年8月ニューヨークのアプルトン社から出版された。フィラデルフィア万博における教育関係出展を指揮した文部大輔田中不二麿と、学監としてかれに協力したお雇い外国人デイビッド・マレー (モルレー) は、本書の発案・編纂からアメリカでの上梓にいたるまで、深くかかわっている。編纂のいきさつは「緒言」に略記されており、上掲各章の執筆担当者も明らかとなる。英文への翻訳は、第I章から第IV章までが乙骨太郎乙、第V章と第VI章が鈴木惟一ならびに乙骨がおこない、元老院雇のフルベッキが校閲した。付録中の文部省出品目録をみると、都合二百五十余品目の筆頭にその稿本とおぼしき三点があがっている。5月に開幕した博覧会の会場には、当初三篇の稿本が陳列され、その三か月後上梓にいたった本書が出陳されたと推定することができよう。古代にさかのぼる本書の内容は、狭義の教育沿革史にとどまらず、ひろく文化史・社会史的な記述をもちこんでいるのが特徴的である。よく知られているように、本書の日本語版が翌1877年文部省の刊行した『日本教育史略』であって、日本教育史書の嚆矢として位置づけられており、師範学校などの教科書としてひろく使用された。万博出陳を当面の目的として、お雇い外国人の参画のもと、はじめて日本教育史テキストがまとめられたことは、日本の教育の近代化そのもののありようを刻印しているといえる。書誌情報からわかるように、本書はフィラデルフィア万博につづく1878年のパリ万博にも、再版のうえ出展されている。若干の修訂をくわえ、1877年今度は東京で上梓したものである。

C-12

■ Bureau of General Business of the Department of Education, *Outlines General of Education in Japan. Specially prepared for the International Health Exhibition in London*, London, 1884, 29 pp.

■文部省庶務局『日本教育概覧』

【目次】

1. 地理、2. 邦制、3. 政治、4. 文部省、5. 教育沿革概略、6. 幼稚園、7. 小学校、8. 中学校、9. 大学校、10. 師範学校、11. 専門学校、12. 農学校、13. 商業学校、14. 職工学校、15. 高等女学校、16. 各種学校、17. 教科書、18. 図書館及教育博物館、19. 海外留学生、20. 教育会、21. 学事奨励、22. 学資金、23. 学校地

1884（明治17）年ロンドンで開催された万国衛生博覧会のため、文部省が用意した英文の日本教育報告書。当時の文部省庶務局において編述した『日本教育概覧』を翻訳し、ロンドンで印刷したもの。原本にあたる日本語版は同年2月、その英訳版は3月にできあがった。序文や緒言はなく、詳細は明らかでないが、その年の5月の開催にもかかわらず、わずか四か月前の1月に開催の報が寄せられ、参加を決定しているため、急ぎよ起稿したものともみることができる。内容的には、ひろく日本の概観から書きおこし、学校種別ごとの現状説明に力点を置いている。前後の万博出陳用の報告書にくらべて、もっとも簡略に記述された小冊子であるが、短日月の間に脱稿しなければならないという如上の事情が関係しているか。本博覧会における日本からの出品物は、積送の途次ほとんどが烏有に帰したといわれているが、『英国倫敦万国衛生博覧会日本文部省出品説明』（C-13）によると、本書をふくめ実際の展示にいたった文部省の出品物は少なくないし、本書の日本語版も出展されたようである。本報告はまた、万国衛生博の報告書である*Health Exhibition Literature, Vol.XVII (1884)* に収録されている。なお本書には、補遺（Addendum）を追録した版も存在し、同じ年に出ている。八頁にわたるその追加内容は、脱稿した3月から同年6月までの教育・学術関係の動向について、制度的側面を中心に記述するとともに、東京所在の関係諸団体を列記している。

C-13

■*Catalogue with Explanatory Notes of the Exhibits from the Department of Education of the Empire of Japan in the International Health and Education Exhibition held in London 1884,* London, 1884, iv + 30 pp.

■『英国倫敦万国衛生博覧会日本文部省出品説明』

1884（明治17）年ロンドン万国衛生博覧会における文部省出品物の解説付き目録。東京教育博物館長兼農商務省御用掛であった手島精一による序言につづいて、出品区分

（Division-Group-Class）ごとに出品物の名称が列挙され、主要なものに解説が加えられている。手島は博覧会の事務官に任命され、文部省の出品を差配したが、その序言には本書の趣旨と出品の経緯が略述されている。短時日の間に準備しなけりなかつたため、日本の教育システムを十全に展示すべき収集がかなわなかつたと述べてあり、とりわけ近時体系化されたばかりという、会場の注目を集めたにちがいない実業教育については、そ

の不十分さを惜しんでいる。また日本の教育システムに関するさらなる情報として、日本の陳列区にて入手することのできた、同省庶務局編『日本教育概覧』（C-12）についてもふれてある。さらに注という形で、搬送途中の出品物の事故損失にも言及されており、本目録に掲載されながら展示されなかったものには印が付けてある。この目録もまた『日本教育概覧』とあわせて、万国衛生博の報告書*Health Exhibition Literature, Vol.XVII* (1884) に収録されている。万博の出品目録はその都度編纂されたが、文部省の単独のカタログとしては、本書が最初のものと思われる。

C-15

■ *A Short History of the Japanese Education Society and its Present Condition*, Tokyo, 1886.

■ 『大日本教育会の略沿革とその現状』

【目次・見出し】不明

未見。

C-36

■ *A Short History of the Department of Education*. Translated and Published by the Department of Education, Tokyo, Japan. June, 1887, 52 pp.

■ 文部省『文部省沿革略記』

【目次・見出し】なし

1887（明治20）年文部省総務局が編集・発行した『文部省沿革略記』の英文版。原本にあたる日本語版は同年5月、その翻訳版は6月に出された。編纂・出版の経緯や意図は明記されていないが、冒頭において「文部省ハ明治四年七月建置スル所ニ係ルト雖モ其初旧大ニ学校及大学ノ制度ニ因襲スルコトヲ免レサルヲ以テ今筆ヲ此ニ起セリ、流ヲ逐ヒテ源ニ遡ル勢止ムコトヲ得サレハナリ。直轄学校ノ廃置沿革等ハ文部省年報ニ詳ナレハ宜シク省キテ載セサルヘシト雖モ学校ハ省務ノ要トスル所ナルヲ以テ亦其概略ヲ此ニ録ス」と記してある。「文部省沿革略記」はもともと、1876年のフィラデルフィア万国博覧会にさいし、文部大輔田中不二麿の指示によって、同省の妻木頼矩が辻新次とともに編述したものであり、日本の教育に関する対外公式報告書の先駆けである、『日本教育史略』（C-3）に付録として収録されたものである。上引の巻頭言も、そこに記載されているものとほぼ同一である。英訳者はつまびらかでないが、そのときの訳題は“Chronicle of Events in the Recent History of the Department of Education”であった。本書はこれを原版として、1868（明治元）年から1886（明治19）年末までの教育政策の歩みや文部省機構の変遷を記録・紹介したものである。編年体で月単位の記事を集成している。日本語版の『日本教育史略』が発行された1877年5月までの記事内容は、原版とほとんど同じだが、文章表現や表記方法は異なり、自国本位に改められている。原版のほうは西暦を用いているが、本書ではたとえば“the 1st

year of Meiji”のように元号本位としているし、固有名詞についても、たとえば昌平黉は“College of Confucius”もしくは“Shoheiko (College of Confucius)”と記してあったのを、たんに“Shoheiko”と表記するようになっていく。なお書誌情報にはないが、原本の日本語版が1890年に三十頁近く増補されたのにもない、英文版の本書も1892年に増補版が出されている。

C-49

■ *Descriptive Outlines of the Various Schools in Japan*. Translated and Published by the Department of Education, Tokyo, Japan. September, 1887, 31 pp.

■ 文部省『日本諸学校概説』

【見出し】幼稚園、小学校、中学校、学習院および華族女学校、大学、師範学校、専門学校

1887（明治20）年文部省が編集・発行した英文の教育現状報告書。『文部省沿革略記』（C-36）の三か月後に上梓されており、省内の担当部局は同じく総務局と考えられる。原本にあたる日本語版の存在がうかがわれるが、判然としない。趣旨や意図についても明記されておらず、冒頭「一般に学校は、つぎのように分けられる。すなわち小学校、中学校、専門学校、そして大学である。これらの学校にくわえて、学齢以下の男女の幼児には幼稚園がある」とはじまっている。内容は前年の1886年、初代文部大臣森有礼のもとで制定された諸学校令にもとづく学校種別ごとの概説である。幼稚園からはじまるが、それぞれに目的や入学資格・修業年限、教育課程および内容、管理運営のことなどが簡略に記述されている。森文相の改革によって国家主義的な学校体系が基礎づけられるが、本書は『文部省沿革略記』そして『日本近世教育概覧』（C-50）とあわせ、かかる近代的な国家教育制度の整備状況を記述し、国内外にひろく知らしめることを意図したものではないだろうか。

C-50

■ *Outlines of the Modern Education in Japan*. Translated and Published by the Department of Education, Tokyo, 1888, 184 pp. Reissued for the World's Columbian Exhibition, Chicago, 1893, 218 pp.

■ 文部省『日本近世教育概覧』

【目次】

1. 総論、2. 小学校、3. 中学校、4. 大学校、5. 師範学校、6. 専門学校、7. 女学校、8. 各種学校、9. 幼稚園、10. 盲啞教育、11. 書籍館および教育博物館、12. 学資、13. 教科書、14. 学士会院、15. 学事職員および俸給附雇外国人、16. 学事監督・奨励、17. 海外留学生、18. 教育会、附

1887（明治20）年文部省総務局が編集・発行した『日本近世教育概覧』の英文版。書誌情報からわかるように、正確には二種類ある。ひとつは、翌1888年に翻訳・出版した全184ページのもの、もうひとつは、1893年5月、シカゴでの世界コロンビア博覧会にむけて増訂・再版した、全218ページのものである。ともに、編纂や出版の経緯をしるした「緒言」などはない。1888年の原版は、上掲のように構成されているが、シカゴ万博のために改訂した英文版では、「総論」「文部省」「小学校」「師範学校」「中学校」「大学校」「専門学校」「女学校」「各種学校」「盲啞学校」「幼稚園」「学士会院」「教育会」「書籍館および教育博物館」「学位」「教師」「教科書」「海外留学生」「学資」「他省庁直轄学校」の順に、あらたな立項をふくむ都合二十項目が配列されている。前者の原著が維新後二十年間を対象としているのにたいし、万博出陳用の後者は、脱稿にいたる明治二十年代前半のあゆみまであつかっており、したがって教育勅語に関する記述も含まれる。『文部省第十六年報』によると、1888年版はこの年4月、英訳して印刷にまわし、三百部を発行、改訂版は、シカゴ万博における文部省の出品目録（C-56）によると、五百部用意されている。

C-56

■Department of Education, *Catalogue of Objects Exhibited at the World's Columbian Exposition Chicago, U.S.A.*, Tokyo, 1893, 112 pp.

■文部省『世界コロンビア博覧会出品目録』

1893（明治26）年、シカゴでの世界コロンビア博覧会における文部省の出品目録。翻訳・発行者は、文部大臣官房報告課。シカゴ万博への参同は、日本の万博参加史上、はじめて帝国議会の賛同のもとに追加予算を組んで達成されたものである。

C-57

■Imperial Diet, *Catalogue of English, French, German and Italian Books in the House of Peers*, 1893, 57 pp. *Catalogue of Books in Foreign Languages, Supplement No.1*, 1895, 31 pp.

■帝国議会『貴族院英仏独伊書籍目録』

未見。書誌情報からわかるように、1895（明治28）年に収録範囲をひろげた追加版が出ており、その後も増補を重ねたことが察せられる。

C-63

■Department of Education, *Catalogue of Books in European Languages in the Library of the Department of Education*, 1899, 560 pp.

■文部省『文部省書庫洋書目録』

未見。書誌にはないが、1901（明治34）年12月に追加版（Supplement）が出ている。

C-84

■Department of Education, *Education in Japan; Prepared for the Louisiana Purchase Exposition at St. Louis, U.S.A.*, 9 parts, 1904, 380 pp.

■セントルイス万国博覧会用文部省『日本の教育』

【目次】

第1部 概論、第2部 初等教育、第3部 中等教育、第4部 高等教育、第5部 芸術教育、第6部 実業教育、第7部 盲聾啞教育、第8部 図書館・博物館・教育会・教科書ほか、第9部 台湾および北海道の教育

1904（明治37）年のルイジアナ買収百周年を記念したセントルイス万国博覧会のため、文部省が準備した英文の日本教育報告書。文部省文書課において編纂され、同年3月印刷・発行された。書誌情報にあるように、本報告は上掲の九分冊からなり、都合380ページにおよぶ。第1部の概論は、日本教育略史—制度と組織—、現行の日本教育制度、教育行政機関の三節に分かれる。執筆者はつまびらかでなく、編纂過程をあきらかにした緒言などはとくにないが、日露戦争にさしかかる時期に作成されており、前後の万博向けの日本教育報告書に比してもっとも大部なものである。学校建築や授業風景などの写真版が多数掲載されるようになったことも、テキストで占められていた従前の報告書にみられない特色である。

C-86

■Imperial Education Society of Japan, *Historical Summary, with Rules and Regulations*, 1904, 32 pp.

■『帝国教育会沿革概要 附規則および条文』

【目次・見出し】不明

未見。

C-98

■Department of Education, *Education in Japan; Prepared for the Japan-British Exhibition*, 1910, 172 pp.

■日英博覧会用文部省『日本の教育』

【目次】

第I部 日本教育総説（吉田熊次 東京女子高等師範学校教授兼東京帝国大学文科大学助教授）、第II部 初等教育（森岡常蔵 文部省図書審査官兼東京高等師範学校教授）、第III部 中等教育（大瀬甚太郎 東京高等師範学校教授）、第IV部 師範教育（小泉又一 文部省視学官兼東京高等師範学校教授）、第V部 高等教育（専門学務局）、第VI部 実業教育（黒沢次

久 文部省参事官)、第Ⅶ部 女子教育(下田次郎 東京女子高等師範学校教授)、第Ⅷ部 芸術教育(正木直彦 東京美術学校長・湯原元一 東京音楽学校長)、第Ⅸ部 盲啞教育(小西信八 東京盲啞学校長)、第Ⅹ部 図書館・博物館・教育会ほか(普通学務局)

1910(明治43)年ロンドンにおける日英博覧会のため、文部省が準備した英文の日本教育報告書。文部大臣官房文書課において編纂され、同年1月印刷・発行された。最初の国際相互博覧会とされる日英博は、イギリス民間の博覧会会社と日本政府が主催した、興行的色彩の強いもので、日本からの出品・余興がほとんどを占めた「日本博覧会」というのが、その実体であった。本書は、編纂の趣旨および目的、内容構成と執筆者ならびにその所属・職名を記した緒言につづいて、上掲の全十部が分担記述されている。すなわち、となっている。吉田熊次が担当した第Ⅰ部は、日本の教育の発達、現行の日本の教育制度、日本の教育行政機関、日本の教育の特質、台湾および北海道の教育、の五章構成であり、教育勅語の説明が中心的な内容を占めた第4章「日本の教育の特質」には、この種の文部省対外報告書としてははじめて、その全文英訳が掲載された。また第Ⅴ・第Ⅹ部以外は、個人による叙述となっているわけだが、このような方式は、匿名性の高い従前の文部省報告書にみられない特徴であって、各執筆者が関心の深い、もっとも詳しい分野を論じていることが、緒言に明記してある。さらに緒言によると、本書は、「日本の教育の歴史概論」にたいして、「日本の教育の現状全般」をしめすことを意図しているが、その歴史的な概観、すなわち「太古期」から「近世期」にいたる教育沿革史の大要については、姉妹編というべき *A History of Japanese Education* が編纂・出陳されている(書誌には不載)。こちらのほうは、文部省の委嘱によって、学習院教授であった白石正邦が原稿を用意し、同省において編述・翻訳したものであって、その日本語版『日本教育史』が日英博の年、文部省著作として弘道館から出版されている。

C-100

■ Department of Education, *A General Survey of Education in Japan*, Tokyo, 1926, 88 pp.

■ 文部省『日本教育概覧』1926年版

【目次】

序論、教育行政のシステム、学校教育(総説・初等教育・中等教育・高等教育・その他の教育)、教員養成、教員の資質向上のための方策、教員の待遇、学校衛生、社会教育、前途有望な青年に与えられる援助、植民地教育と外国人教育、教育事業の保護と奨励、科学・芸術振興事業、教育費

1926(昭和元)年文部省が編纂・発行した英文の日本教育報告書。担当部局は不詳だが、同年3月脱稿し、印刷は東京のヘラルド・オブ・アジア・プレス。タイトルページにつづいて、「日本における学校教育の進歩」と題する統計表と四枚の写真図版が巻頭に掲載されている。目次と本文に先だっては、「はしがき」(Prefatory Notes)および「解説」

(Explanations)がある。「はしがき」には、「本小冊子の目的は、外国人に日本の教育についての一般理解を与えることにある。本文の叙述の典拠は、主として文部省年報と同省の各部局による統計である。しかしながら学校の分類などは、その年報に厳密にしたがわない点もある。なお本冊の統計表には、植民地に関する数値は含まれない」と明記されている。「解説」は、“Technical Schools”（実業学校）と“Special Schools”（専門学校）の概念を区別するための用語説明。序論には、古代にさかのぼる教育の歴史的概観が含まれるが、その前提にあるのは、「たまたま日本を観察した者は、かくも急速に教育が進歩したことに驚くかもしれないが、この国がヨーロッパやアメリカと接触するようになったのは、ほんの半世紀以上前のことにすぎない。日本は古い国であり、西洋文明をとりいれるときには、それを受容し消化する素地が十分にそなわっていたことを忘れてはいけない」ということであった。以下の本論においては、昭和に入るこの時期までの教育領域の普及と拡大に照応して、「学校教育」以外の記述が過半を占めており、統計や写真図版は随所に載せてある。管見の範囲では、文部省によるこの種の公式報告書は、1915（大正4）年のパナマ太平洋万国博覧会のための『日本の教育』（*Education in Japan; Prepared for the Panama-Pacific International Exposition*）をもって途絶えており（ただし同書は、書誌には不載）、なぜあらためて本書が編まれるにいたったのか、その詳細については目下のところ定かでない。

C-105

■Department of Education, *A General Survey of Education in Japan*, Tokyo, 1935, 75 pp.

■文部省『日本教育概覧』1935年版

【目次・見出し】不明

未見。1935（昭和10）年文部省が編纂・発行した英文の日本教育報告書。同題の1926年版（C-100）、1930年版、1933年版（両版とも書誌には未採録）につづく改訂版。

C-108

■Department of Education, *A General Survey of Education in Japan*, Tokyo, 1937, 123 pp.

■文部省『日本教育概覧』1937年版

【目次】

序論、教育行政のシステム、学校教育（総説・初等教育・中等教育・高等教育・その他の教育）、外国人教育、教科書、外地の教育、教員養成、教員の資格、教員の待遇、教員の資質向上のための方策、教育費、社会教育、成人教育の方策、教学刷新と思想善導、教育制度調査、教育事業の保護と奨励、教育団体、体育、学校建築の構造、科学・芸術振興事業、文化財や史跡の保護・保存策、宗教行政

1937（昭和12）年文部省が編纂・発行した英文の日本教育報告書。同題の1926年版（C-

100) 以来四回目の増補改訂版であり、これまでの版に比べて格段にボリュームアップしている。やはり担当部局は不詳だが、1937年7月脱稿し、印刷は東京のヘラルド・プレス。タイトルページのあとの英訳教育勅語の掲載は定着しており、「はしがき」「解説」そして「目次」とつづく。従前の版と同様、「はしがき」は本書の目的やレファレンスを明らかにし、「解説」は概念整理のための用語解説である。目次の後には、文部省の組織図と1937年時点の学校系統図がそれぞれ見開きで掲載されている。序論も基本的にはそれまでの版と同じであり、教育の歴史的展開を概観しているが、その最後には1934年4月3日の全国小学校教員精神作興大会における国民道徳振興に関する勅語にふれている。以下の本論においては、日中全面戦争へと突入するこの時期の教育・学術・文化の現状と動向が、豊富な図版・統計とともに紹介されている。なお書誌には未採録だが、翌年の1938年にはさらに本書の改訂版が出ている。

C-109

■Department of Education, *Education in Japan under the Department of Education: Administration and Work*, Tokyo, 1937, 43 pp.

■文部省『文部省下の日本の教育—行政と事業—』

【目次・見出し】不明

未見。

15. 個人執筆ドイツ語文献の解題

高谷 亜由子 (広島大学大学院)

A. 個人執筆書籍類

A-3

■ Omura, Jutaro :Die deutsche Sprache in Japan., Berlin 1902.

■ 小村寿太郎「日本におけるドイツ語」

【目次・見出し】不明

著者小村寿太郎(1855-1911)は明治時代の外交官。

A-5

■ Yoshida, K. :Über japanische Erziehung und den Moralunterricht in den Schulen Japans., Minden 1906(In: Sammlung pädagogischer Vorträge, Bd. 16, H. 4, S. 93-115).

■ 吉田賢龍「日本の教育と日本の学校における道徳」

【目次・見出し】1. 序文 2. 1868年の維新前の日本の教育 3. 1868年の維新後の日本の教育 4. 日本民族の倫理的意識 5. 日本の学校における道徳教授 参考文献一覧

著者吉田賢龍は東京女子高等師範学校の教授。

著者はかつてのスイスでの滞在経験から、日本には長い歴史はあるものの、文化面に於いて未だに未熟であると分析。また、日本について書かれたドイツの雑誌記事の不正確さを指摘し、日本文化に対する過大評価も過小評価も誤解を生じさせるものだと主張している。以上の問題意識から、本論では古代から明治維新に至るまでの教育、またそれ以後の教育について歴史的に紹介している。さらに、日本民族の倫理的意識についても触れ、儒教が長く倫理的意識の主要ファクターとして機能してきたと説明している。他のファクターとして仏教や神道にも言及している。そして、現在の倫理的基準を担っているものとして1890(明治23)年の教育勅語を紹介。学校における道徳教授についても歴史的に考察している。

A-7

■ Mishima, M. :Japanische Schulhygiene., 3, Unterrichtsministerium(Tokyo) 1911.

■ 三島通良「日本の学校衛生」

【目次・見出し】

I. 国家の問題としての学校衛生

1. 法規における学校衛生
2. 学校衛生委員会
3. 学校衛生の監督

II. かつての身体的訓練

1. 愛国心の伴った身体的訓練と産業
2. 武術
3. 女子の身体的訓練

4. 美的身体的訓練としての「舞踊」
5. あそびとスポーツ
6. あそびの中でのしきたり・作法教育
7. 清潔保持の習慣

III. 新たな時代の学校衛生

1. 校舎
2. 生徒用椅子
3. 学校での体操
4. 衛生教授

IV. 生徒の健康状態

1. 校医の調査
2. 日本の児童の身体的発達の進歩
3. 身体的状態の改善
4. 中学生と小学生の発達の相違

V. 学校病と生徒の病気

1. 脊椎湾曲
2. 児童の病気
3. 学生の病気

VI. 校医

1. 歴史
2. 校医の成果と作用

三島通良 (1866-1925) : 医者で、学校衛生の創設者。文部省学校衛生課勤務。枢密顧問官でもあった。著書に『学校衛生学』(博文館、1893年11月)がある。

本論は1911(明治44)年のドレスデンにおける「国際衛生博覧会」用に、日本の学校衛生の概観を提示する試みであり、1891(明治24)年以来日本で重視されている学校衛生の一般的な状況を提示することを目的としている。まず、第1章では学校衛生の問題に対する国家のとりくみが考察されており、第2章では過去の身体的訓練の考察が展開されている。ここでは、武術、舞踊、あそびを通じた身体的訓練等について個別に詳述されている。第3章では、新時代の学校衛生のあり方や衛生教授の方法について、具体的に紹介している。第4章では、生徒の身体的発達から生徒の健康状況が述べられている。第5章では、生徒の病気について触れられており、脊椎湾曲等の身体的疾病が主として考察されている。第6章では、校医がテーマとなっており、その歴史や成果について触れられている。

A-10

■ Sasaki, H. :Moral-Erziehung in Japan. Geschichtliches, Theoretisches, Praktisches.,

Akademische 1926.

■ 「日本の道徳教育、その歴史、理論、実践」

【目次・見出し】

緒言

第1部 歴史的事項

- I. 日本の教育の特性
 - A. 明治維新前の教育
 - B. 明治維新後の教育
- II. 明治維新後の日本の道徳教育
 - A. 道徳教育の組織
 - B. 小学校における道徳教授科目
 - C. 小学校修身科教授用のマニュアルー修身教科書の内容例
 - D. 様々な徳の学年配当
- III. 日本の道徳教育の一般的方法論
 - A. 学校生活の実践的指導
 - B. 様々な科目における教授
 - C. 中学年の学校生活の教授と指導
- IV. 日本の小学校の道徳教授科目における方法論
 - A. 根本目的
 - B. 題材
 - C. 狭義の方法論
 - D. 中学年の学校における方法論

第2部 理論的事項

- I. 道徳教育方法論のための理論的基盤
 - A. 日本の道徳教育科目に対する批判
 - B. 道徳教育に対する様々な展望
 - C. 道徳教育方法論の一般的な方向性
 - D. これからの道徳教育
- II. 道徳教育の目標
 - A. 道徳目標に関する従来論議
 - B. 倫理的本性についての思想
 - C. 子どもの倫理的本性
 - D. 小学校の倫理的本性の育成から何を期待するか
- III. 道徳教育の方法論
 - A. 精神的発達のための一般的条件

- B. 精神の内実の発展
- C. 倫理的本性の発達
- D. 道徳教育方法論の大綱

第3部 実践的事項

I. 環境の準備

- A. 環境
- B. 環境としての学校

II. 自由生活の指導

- A. 自由生活の目的
- B. 自由生活の多様性
- C. 自由生活の統一性

III. 様々な教授科目における教育

- A. 様々な教授科目における倫理性の育成
- B. 個々の教授領域の教育的価値

IV. 道徳教授科目における教育

- A. 道徳教授の表現
- B. 道徳教授科目の目的
- C. 道徳教授科目の方法論
- D. 宗教的訓練について

著者は東京高等師範学校教授。

論文は歴史的事項、理論的事項、実践的事項の3部から成る。歴史的事項では日本の道徳教育の発展について概述し、その現状を紹介している。理論的事項では、道徳教育の方法論の理論的基盤や道徳教育の目標、また方法論自体について考察し、将来的な道徳教育のあり方について言及している。実践的事項では、環境、自由生活に視点を絞って学校内外の機能について考察しており、また他の教授科目における倫理性養成の可能性や方法について述べている。

A-11

- Sata, Aihiko :Neue Reform und moderen Entwicklung des japanischen Unterrichtswesens, insbesondere des Universitätswesens. / Über das Sportwesen des alten und neuen Japans., Freiburg 1928.
- 佐多愛彦「日本の教育制度、特に大学制度における新たな改革と現在の発展/ 古今の日本における体育制度について」

【目次・見出し】なし

著者佐多愛彦は大阪府立医学専門学校長などを歴任。本論文執筆の30年以上前にドイツへ

の留学経験を持つ。

本論第1部では江戸期以降の日本の教育制度を、歴史的体系的に考察している。まず、江戸期の教育の特徴として、朱子学、陽明学派をキーワードに儒教主義の学校が普及していたことを挙げ、また、徳川光圀の大日本史、本居宣長の国学も紹介している。次に、明治期の教育の特徴を分析するにあたり、医学校の制度的発展が考察されている。そこでは、明治期に創設された多くの医学校が、当初はオランダ、イギリスのものをモデルとしていたこと、そして後にドイツをモデルにするようになったことについて触れられている。さらに、大学、高等学校、中学校、小学校の制度組織についての概観が行われている。また、女子教育制度についても言及されている。本論第2部では、日本の体育制度についての歴史的考察が展開されており、かつて日本の体育が身体訓練のみならず、武士道的精神修養の教育手段として発達したと分析されている。また、若年層の精神の変化、現代女性の身体訓練についても言及。

A-12

■ Takemaye, Rirotaro :Die Modernisierung des japanischen Erziehungswesens in den letzten 50 Jahren (Phil. Diss.), Jena 1929, Peuvag-Filiale.

■ 「過去50年における日本の教育制度の近代化(学位論文)」

【目次・見出し】不明

A-13

■ Hatsukade, Itsuaki :Die Bildungsideale in der japanischen Kultur und ihr Einfluss auf das Erziehungswesen in der Yedo-Zeit (Diss.), Würzburg 1932.

■ 「日本文化の陶冶理想とその江戸期の教育制度に与えた影響(学位論文)」

【目次・見出し】

第一部 概観

1) 江戸時代の特徴と日本文化史における江戸期の位置

2) キリスト教の伝道とその教育制度

第二部 主要部

A. 江戸時代初期(1603-1679)

初代将軍家康から4代将軍家綱まで
慶長および寛永時代

B. 江戸時代中期(1680-1786)

5代将軍綱吉から10代将軍家治まで
1) 元禄および宝永時代
2) 享保および宝暦時代

C. 江戸時代末期(1787-1868)

家斉から慶喜まで

1) 天明・寛政時代

2) 文化・文政時代

3) 天保から明治時代初期まで

第3部 結語

参考文献

著者については不詳。

本論はライプツィヒ大学哲学部における学位論文(博士)。本論文は2部に分かれており、第1部ではまず江戸期の特徴と日本文化史における江戸期に位置について、またキリスト教の伝道とその教育制度について論じている。第2部では第1部での問題関心を歴史的に実証すべく、江戸期の陶冶状況や思想を文化状況と関連させながら考察している。具体的には、江戸期を3つの時期、すなわち初期、中期、後期に分け、初期(家康時代[1603]—家綱時代[1679])の考察では、家康下の精神的陶冶、朱子学者や山鹿素行の陶冶理想等が扱われている。また、中期(綱吉時代[1680]—家治時代[1786])の考察では、水戸家による教育制度の助成、吉宗下の精神的陶冶、石田梅岩の陶冶理想等が、そして後期(家斉時代[1787]—慶喜時代[1868])の考察では、松平家の学校制度の助成、江戸末期の学校制度、鎖国精神の放棄と天皇崇拜の高揚といった事項が取り扱われている。

A-14

- Murakami, Komao :Das japanische Erziehungswesen (Diss.), Hrsg. vom Japanisch-Deutsche Kultur-Institut, Tokyo 1934 (Verl. Fuzambo).
- 「日本の教育制度(学位論文)」
- 【目次・見出し】不明

A-24

- Kobayashi, Yoshio :Wanimaru. Südseefahrt japanischer Pfadfinder., Freiburg 1937. 10.
- 「わに丸。日本のボーイスカウトの南洋旅行」
- 【目次・見出し】

第1章 さらば東京

第2章 船と我々自身についてのいくつかのことば

第3章 どのように計画が立ったか

第4章 伊勢神社

第5章 聖なるものの軌跡

第6章 島国民族

第7章 海賊のパラダイス
第8章 動揺するな
第9章 嵐
第10章 さらに危険な夜
第11章 日本の恐るべき水泳選手
第12章 困難な浅瀬
第13章 白い像
第14章 南方を指す羅針
第15章 シンガポール
第16章 日誌
第17章 バタビアとその心配
第18章 孤独な島々
第19章 途中で引き返す
第20章 帰途
航路概略
旅路の地図

著者については不詳。

この著作は海軍のボーイスカウト船「わにまる」による南洋旅行の様子を記したエッセイであるが、少年たちにボーイスカウトの精神を分かりやすく伝える手引き書的な役割も持ち併せている。少年用に挿し絵を多く取り入れる等の工夫がなされている。「わにまる」の名は、わにを自在に操って島を渡ったある男の話に由来している。つまり、この「わに」は古代日本の船を意味している。ボーイスカウトには10万人の構成員がおり、そのうち5千人が海のボーイスカウトに所属している。彼らは乗組員として168トン225馬力の帆船「わにまる」に乗船し、勇敢さやパイオニア精神を培うことが期待される。これらによって、ボーイスカウトたちは祖国のためにいつでも身体や命を捧げる覚悟をなし、また危険な冒険に身をさらせるほどの自信を身に付けることができる。

B. 個人執筆雑誌記事類

B-3

■ Minami, P. H.: Deutsche Philosophie in Japan., In: The Far East, 2, Tokyo 1897, S. 393-399.

■ 「日本におけるドイツ哲学」

【目次・見出し】なし

著者はふきゅう福音教会（一般プロテスタント協会）の牧師。

本論では、日本におけるドイツ哲学および思想の影響について歴史的に概説している。オランダの医学と兵学が、日本で最初に導入されたヨーロッパの科学であった。この傾向は、後にドイツ医学とフランス兵学の習得へと変化していった。憲法もまたドイツのものをモデルとして編まれ、その後思想界でもドイツ語が哲学言語として高く評価されるようになっていった。日本では古来、哲学は儒教や仏教との関係において取り扱われてきた。本論では、その代表的人物として空海、伊藤仁斎、荻生徂徠、平田篤胤らを紹介している。また、哲学的新体系を構築するためには、西洋哲学のみならず、このような古来の思想にも基づくべきだと主張し、その偉業を成し遂げた人物を具体的に紹介している。日本へのキリスト教思想の影響についても言及している。

B-10

■ Shimoda, Jiro. : Die Mädchenerziehung in Japan., In: Die Mädchenschule, 4-5, Bonn 1901, S. 69-82.

■ 下田次郎「日本における女子教育」

【目次・見出し】なし

著者の下田次郎は、1896（明治29）年に東京帝國大学文科哲学科を卒業後、1899（同32）年より3年間、女子教育及び教育学研究のため、文部省留学生として独仏英米に在留。

女子教育の現状を評価するにあたり、日本における女性とその教育の歴史に目を向けることが必要である。こうした問題意識から、本論では女性および女子教育の歴史が考察されている。古代では男女は同じ立場にあり、天照大神の神話や光明皇后の史実において明らかのように、大きな権力を有する場合もあった。しかし、6世紀中頃、仏教と儒教が伝来して以来、男女の関係が変化し始めた。すなわち、それ以来、女性の活動領域は家庭に限定されていった。そして、女性はその中で訓育を受け、しきたりを習得していった。本論では、女子教育についての具体的な考察は、江戸期以降を中心として行われている。江戸期の項では、男女別学、貝原益軒の女大学の儒教的理念について、そして明治期の教育の項では、制度改革、女子教員養成について述べられている。

B-16

■ Okuma, Graf: Entwicklung der Erziehung in Japan., In: Allgemeinen Zeitung, 212, München 1904, S. 513 - 515.

■ 大隈重信「日本における教育の発展」

【目次・見出し】なし

著者は大隈重信(1838 - 1922)。

本論では、まず日本の教育史についての概観がなされている。その際、日本の思想、文学への中国、韓国の影響について言及。西洋の歴史も織り交ぜながら日本の教育の歴史の変遷

を考察している。明治期の教育に関しては、抜本的な教育制度改革が行われ、古い学校が早急に改善されたことなどを評価し、子どもの就学率 85%という現状に一応の満足を示している。また、日本の文学（思想）が中国のそれから発展していて、両者がとても緊密な関係にあるという事実や、日本に確固たる道徳的基盤がないことが、日本における教育の遂行を困難にしていると、独自の視点から分析している。さらに、女子教育についても言及している。

B-21

■ Sakaki, Y. :Ermüdungsmessungen in vier japanischen Schulen., In: Internationales Archiv für Schulhygiene, Leipzig 1905, S. 53-100.

■ 榊保三郎「日本の4学校における疲労測定」

【目次・見出し】はじめに 方法論 資料の選択 生理学的基準（Ⅰ. 女子小学校 Ⅱ. 男子小学校 Ⅲ. 高等女学校 Ⅳ. 高等学校） a) 生理学的基準と子どもの父の職業との関係 b) 身体的疲労と生理学的基準 c) 睡眠時間と生理学的基準のための感覚能力測定間隔 Aesthesiometerabstände との関係（Ⅰ. 女子小学校 Ⅱ. 高等女学校 Ⅲ. 男子小学校 Ⅳ. 高等学校） 個々のクラスでの測定 (a)女子小学校 b)男子小学校 c)高等女学校 d)高等学校) 疲労値 補遺（女子小学校/高等女学校/男子小学校/高等学校） 結語

著者榊保三郎は大学の精神医学教授であり、文部省学校衛生課の監督官を兼任。本論の執筆と同年に、万国学校衛生学会の創立委員及び日本代表を務める。

本論では、1903（明治 37）年 4 月 22 日より 1 年にわたって行われた疲労測定の調査方法や調査結果についてまとめている。調査対象は、裕福な家庭の子ども（男女）が通う小学校、高等女学校、高等学校の生徒たち 191 人である。測定方法には、グリースパッハ法の応用したものがより精確な結果を導きうるとして用いられた。個々のクラスでの測定結果については学校別に詳細に分析されており、またそれぞれの疲労値も図表において明らかにされている。最後には結果分析の結論として、以下のようなことを報告している。11 歳 7 ヶ月の子どもには 1,500m の道のりは回復的に作用したのに対し、それ以上の道のりは疲れとして作用し、1,500m 以内の道のりは子ども眠気を誘った。午後の授業の疲れは午前中の授業の 2 時間分の疲労に匹敵する。1 時間の昼休みは多少なりとも回復をもたらす。小学校では算数と読書と書き取りは大きな疲れをもたらす。また、習字、物理学は、そして午前中にするのであれば博物学も回復的に作用する、等々。

B-24

■ Sakaki, Y. :Japanische Literatur aus dem 1905, welche das schulhygienische Gebiet berührt., In: Internationales Archiv für Schulhygiene, 3(1), Leipzig 1906.

■ 榊保三郎「学校衛生領域に関連した 1905 年の日本の文献」

【目次・見出し】不明

B-25

■ Tsuji, T. :Japanisches Schulwesen., In: Reins Enzyklopädisches Handbuch der Pädagogik, H. Beyer & Soehne, 1906, S. 57.

■ 「日本の学校制度」

【目次・見出し】

I. 歴史的概観

1. 1868年の維新前の学校制度
2. 1868年の維新後の学校制度

II. 現在の学校制度

1. 学校庁と学校府
2. 小学校制度
3. 高等学校制度
4. 大学とその予科
5. 専門学校制度
6. 教員養成制度

著者については不詳。

本論は教育学事典の一項目として書かれたものであり、日本の教育制度について体系的且つ、個別的に詳述されている。「現在の学校制度」の項目では、幼稚園から大学、また音楽学校、商業学校等の専門学校に至るまで、それぞれの制度について詳細な説明がなされている。さらに教員養成の箇所では、教員ゼミナールや教員試験、教員の立場といった事柄について触れられている。

B-27

■ Makiyama, E. :Einige Fragen in betrifft der japanischen Volksschule., In: Allgemeine Deutsche Lehrerzeitung, 12, 1907, S. 137-139.

■ 槇山栄次「日本の小学校の諸問題」

【目次・見出し】問1. 人格原理もしくは行為原理 問2. 礼儀作法についてのいくつかの問題 問3. 大文字あるいは小文字書き 問4. 鉛筆あるいは毛筆

著者の槇山は東京高等師範学校の教授。1905（明治 38）年9月に教育学研究のため、欧米に留学。

日本の小学校制度はドイツをモデルに築かれ、ドイツの教育的思考の流れもかなり早くに日本の教員世界に伝わり、学校実践に大きな影響を与えた。にもかかわらず、日本の学校制度・学校経営は独自の特徴を有しており、それだけに多くの疑問も生じるであろう。こうした関心から、またそうした疑問に対するドイツの学校教師の意見を聞くために、著者は本論

においてそうした疑問のいくつかに言及している。第1に、日本の人格原理と行為原理を問題にしている。日本の学校には倫理的教育として道徳教授はあるものの、宗教の授業がない。宗教に依らずして、いかに道徳教授を行いうるのかについて著者独自の意見が述べられている。第2に、礼儀作法について取り上げており、その倫理的意義について述べている。第3に、綴り方における文字表記の大きさに言及している。小学校低学年では文字を大きく書くように指導しているが、それは子どもの運動衝動に合っているから等と分析している。第4に、鉛筆書きについて述べている。ここでは、毛筆で書くことと鉛筆で書くことについて、それぞれの短所・長所が分析されている。

B-28

■ Suyematsu :Japans Erziehung und Unterricht., In: Katholische Zeitschrift für Erziehung und Unterricht, 1907, S. 204-213.

■ 末松謙澄「日本の教育と教授」

【目次・見出し】なし

著者は内務省参事官、枢密顧問官を歴任した末松謙澄(1855-1920)。

この論文は、日本の教育についていくつかの説明、とりわけ日本の小学校の構造についての説明を与えるものとして位置づけられている。主として江戸期と明治期の教育について考察されている。江戸期の考察では、封建主義すなわち武士道に基づく諸学校が各地にあり、そこに武家の子どものみならず下層階級の子どもも通っていたことが紹介されている。寺子屋の名前の由来や制度についても言及されている。明治期の教育に関しては、大学、高等学校、中学校、予備学校、小学校についてそれぞれ考察している。さらに、考察は小学校における教授、教員の養成、軍隊式訓練といった事項にも及んでいる。

B-29

■ Tsuji, T. :Japanisches Bildungswesen., In: Deutsche Schulerziehung, Hrsg. von W. Rein, Bd. 2, 1907, S. 567-579.

■ 「日本の教育制度」

【目次・見出し】不明

B-32

■ Naruse, Jinzo :Das Geistesleben der Japanerinnen., Übersetzt von S. O. Japan und China, 3, 1912, S. 484-486.

■ 成瀬仁蔵「日本人女性の精神生活」

【目次・見出し】不明

著者の成瀬仁蔵(1858-1919)は、アメリカ留学中に女子高等教育機関設立を志し、後に日本

女子大学校（現日本女子大）を設立したことで知られる。

B-38

■ Tsuji, T. :Japanisches Bildungswesen., In: Deutsche Schulerziehung, Hrsg. von W. Rein, 1918, S. 558-580.

■ 「日本の教育制度」

【目次・見出し】不明

B-25 の Tsuji, T. :Japanisches Schulwesen（「日本の学校制度」）., In: Reins Enzyklopädisches Handbuch der Pädagogik, H. Beyer & Soehne, 1906, S. 57. の後版と思われる。

B-42

■ Hirai, Yasutaro :Die Handelsuniversität in Japan., In: Zeitschrift für Handelswissenschaft und Handelspraxis, 16, 1923, S. 266-270.

■ 「日本の商業大学」

【目次・見出し】 I. 西洋の影響以前の時代における日本の教育についての概略 II. 現在の一般的な学校組織 III. 大学システム IV. 商科大学 V. 大学-商科大学間の比較

著者については平井安太郎か。本論はフランクフルト滞在中に執筆されたものと推察される。

本論では日本の教育制度や大学システムについて幅広く論及。その延長線上で商業大学の制度的発展について歴史的考察がなされている。まず、西洋の影響を受ける前すなわち維新前の日本の教育や、論文執筆当時の学校一般および大学の組織が考察されている。次に商業大学の歴史的発展-商業大学はその母体を 1875（明治 8）年に創設された東京商法講習所とし、1884（明治 17）年に最初の単科大学として改組、さらに 1920（大正 9）年には商業総合大学へと改組された-について考察されている。さらに、本論では商業大学と総合大学との比較考察がなされており、それぞれの制度を比較した図表も添付されている。

B-43

■ Katayama, S. :Der Volksunterricht in Japan., In: Na putjach k nowoj shkole, 4-5, 1923, S. 180-191.

■ 「日本の民衆教育」

【目次・見出し】不明

全文ロシア語。

B-47

■ Hayashi, Hirotao Graf :Neuer Reformplan der Mittelschulen (Ecoles Secondaires) in Japan., In: Pädagogisches Zentralblatt, 9(10), 1929, S. 597-600.

■ 林博太郎「日本の中等教育に関する新改革案」

【目次・見出し】なし

著者の林博太郎は1899(明治32)年に東京帝国大学文科哲学科を卒業した後、1903(同36)年に教育学研究のため、欧州に留学している。本論文と同年に「中等学校改革案について一口す」(『帝國教育』563号、1929年7月1日)が同著者によって著されている。

1928(昭和3)年、日本政府は文政審議会に中等学校制度改革を提案。同年10月以来、この改革案が文政審議会の特別委員会で審議されてきた。改革案では1890(明治23)年の教育勅語に基づく教育が目指され、労働への愛による国民の修養や、また努力、共通意識、責任感の育成が重視された。全課程5年の中等学校では、4年から能力に応じて2グループに分けられ、両グループとも主専攻として公民教授が必修とされる。公民教授は道徳教授とは区別され、そこでは法に対する理解と注意を養い、軍人のための知識へと導くことが求められる。道徳教授は演繹的方法と帰納的方法の二通りで行われ、数多くの子どもに行うときおよび上級生徒に対しては前者の方法で、下級生徒に対しては後者の方法で施される。

B-48

■ Mitobe, T. :Volksbildung in Japan., In: Pädagogisches Zentralblatt, 9(1), 1929, S. 33-35.

■ 水戸部寅松「日本における国民教育」

【目次・見出し】なし

水戸部寅松の著作として本論文以外に『晩近歐米國民教育詳説』(厚生閣書店、1931年9月)がある。

近代日本の国民教育制度の成立とその発展・普及について概説。教育を重視していた明治天皇は、大規模な政治改革を行うとともに、フランスの制度に倣って学校制度改革にも着手した。当初は実用主義的な知識や識字教育が重視され、国民の一律性が目標とされたが、やがて地方行政に教育を一任するようになった。しかし、地方行政の自由裁量を認めすぎたため失敗。これを機に、プロイセンの国民教育の基盤が導入されることになった。それ以降、国民は就学義務を負うことになり、教育は帝国政府の直轄となった。小学校の維持と創設は市町村や自治体に委任され、教師の給料の半分を国が負担した。これにより、すべての県で就学義務制度が普及し、就学率は90%を越えた。初等教育では健全な人間理解・必要な日常生活の知識を発展させることが、その原理として重視され、その際教師は子どもの精神的身体的発達にも配慮することが求められた。教科書については1902(明治35)年以来、文部省の管理下で作成されている。教員養成については、94の教員養成所で28,993人が教師として養成されているが、教員数は未だ不十分である。

B-50

■ Kojima, Gunzo :Über das Deutsche Hochschulleben., In: Bayerische Hochschulzeit, 7, Bayern 1930.01, S.1-6

■ 「ドイツの大学生活について」

【目次・見出し】なし

著者については不詳だが、本論文はドイツの大学生という立場から執筆されたものである。

ドイツの大学は文化、宗教、政治、技術等々と密接にかかわっており、それゆえに意義深く、またこのことはドイツの大学生活において顕著である。以上の問題関心にに基づき、本論では文化水準の高いドイツの学生の大学生活について、考察が展開されている。ドイツの学生たちはあらゆる分野で自由を享受している。例えば、講義選択の際の自由、社会的学生運動の自由と学生の完全な自立、そしてゼミナールでの活発、且つ、自由なディスカッションといったものを彼らは享受している。学生同士の結びつきに関しては、それはいわゆる閉じられた共同体（ゲマインシャフト）であり、そこにはいくつかのしきたりと伝統が介在している。著者はこの点を日本と比較して、日本にはそのような共同体組織がないので理性的に意見を戦わせることはほとんど無理であろうと分析している。

B-52

■ Osada, Arata :Hauptströmungen der Pädagogik im moderne Japan., In: Internationaler Zeitschrift für Erziehungswissenschaft, 1, 1931, S. 257-270.

■ 長田新「現代日本の教育学における主な潮流」

【目次・見出し】なし

著者は広島文理大学教授の長田新(1887-1961)。過去 70 年の欧化は、日本によるヨーロッパ文化克服の過程であった。日本の教育学もこの欧化を基調として発展してきた。ヨーロッパ、特にドイツへ数多くの日本人たちが留学し、その結果ドイツ本国では哲学の副次的学問領域でしかなかった教育学が、日本では主要学問領域として確立され、その専門化が図られた。それに対する京都帝国大学の小西教授の貢献は特に大きい。また、彼の学徒たちによっても日本の教育を積極的に研究していこうとする運動が起こされ、日本の教育学はますますの発展を遂げるに至った。論者長田新は、こうした日本教育学の構築の試みが、東洋的なものである体験文化と西洋的なものである認識の文化との弁証法的止揚の途上でのみ行われうるものと分析している。また、日本におけるペスタロッチー研究の西洋以上の普及・発展についても言及し、東洋精神を顧みないペスタロッチー教育学の真なる理解はもはやありえないと指摘している。

B-54

■ Mizuno, Yoshiyuki :Die Erziehung durch den Film in Japan., In: Internationale Lehrfilmschau, 3, 1931.1, S.5-10.

■ 「日本の映画を通じた教育」

【目次・見出し】 不明

B-55

■ Obara, Kuniyoshi :Vortrag über sein Schulheim "Tamagawa Gakuen". Gehalten Winter 1930/31 in Hamburg, Wien, Zürich, Stuttgart, Berlin, übers. von Werner Zimmerman., In: Tau (Monatsblätter für Verinnerlichung und Selbstgestaltung), 90, 1931.10, S.1-19.

■ 小原国芳「ドイツ各地における玉川学園に関する講演」

【目次・見出し】 玉川学園 我々の学校での労作の可能性 我々の日常生活 教師 財政

玉川学園についての紹介記事。執筆者は創設者の小原国芳(1887-1977)。

玉川学園では先に創設された成城学園と比較して、次の5つのことを特徴としている。1. 貧しい人々のための学校(成城はそうではない)。2. 国による干渉がない(この点に関して、玉川は成城の本来的な理想を実現できるものと見なされている)。3. 塾と呼ばれる、5人から10人の生徒が男女混合で教師やその家族と生活を共にするといういわゆる生活共同体。これは、真の教育は朝8時前と夕方3時以降、つまり学校外でこそ行われうるという理念に基づいている。4. 世界包括的文化観—理想、道徳、知の中で人類と未来に対する広い眼差しを養うこと。5. ペスタロッチー、フレーベル、ケルシエンシュタイナーの理念に則った労作教育の重視。これは、労作によってのみ、真の教育は行われえ、子ども独自性が培われる、また労作こそが高次の目的や労働の喜びを覚醒させるといった理念に基づくものである。

B-56

■ Teruoka, Gito :Das Institut für Arbeitswissenschaft Kurasiki, Japan., In: Berufsbildung und Berufsumschulung (Beilage zu: Jugend und Beruf), 6, 1931.11, S.86-87.

■ 「倉敷労働科学研究所」

【目次・見出し】 不明

B-64

■ Muto, Chozo :Dr. Ph. Fr. von Sieboldt und sein erstes Projekt einer Schule für Handelswissenschaften in Nagasaki, Japan., In: Jubiläumsbd d. Ges. für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 2, 1933, S.192-195.

■ 武藤長蔵「シーボルトと彼の商学学校の初めての計画」

【目次・見出し】 不明

著者武藤長蔵は長崎高等商業学校の教授。

B-66

■ Tsuchii, E., Schreoder, J. :Aus der modernen Frauenbildung Japans. Jiyu Gakuen, eine eigenartige Mädchenschule in Tokio., In: Illustrierte Zeitung, 4585, Leipzig 1933. 01, S. 102 - 103.

■ 「日本の近代女子教育から。自由学園、東京の独特な女子校」

【目次・見出し】 なし

著者については不詳。

自由学園は1921(大正11)年に埴夫妻によって東京に創設された女学校である。そこでは、自由の中で教育され、それを通して成長する人間のあらゆる能力の実際的な発展が、訓育、実践的活動、友愛、独立性、健康、学問といった面において保証される。創設時で生徒数は30名、1931(昭和6)年の時点で300名にもものぼる。学園内部は共同体システムで運営され共同作業が重視されている。300名の生徒は48のファミリーを構成し、それぞれのクラスは6つのファミリーから成っている。また、ひとつのファミリーは5人か6人の生徒から形成されている。月に一度、生徒がクラスのリーダーを、また週に一度、生徒がファミリーのリーダーを、その責任と共に任せられる。学園に懲罰はなく、その代わりに誓約、学校に対する愛、共同作業といったものが学校生活を統制している。

B-70

■ Kuribayashi, Uichi :Intelligenzprüfung von Volksschulkindern, Mittelschülern und -schülerinnen in der Stadt Sendai., In: Tohoku Psychologia Folia, 1, Sendai 1934, S. 169 - 233.

■ 栗林宇一「仙台市の小中学生の知能検査」

【目次・見出し】

はじめに

I. 方法論

II. 受検者

III. 検査官

IV. 検査の実施

V. 資料の取扱い

VI. 結果

著者栗林宇一は、東北帝国大学の心理学研究所に所属。本論文の出版年と同年に日本国内では、同著者によって「仙台市内小学校並に中等学校に於ける智能検査に関する報告」(齋藤

報恩会編『学術研究報告』第18巻、1934年6月)が著されている。

知能検査によって、子どもの知識レベルを教育の際に行うことができる、また基本的な教授計画を設定することができる、さらに確実に子どもの将来を決めることができるといった観点から、1932(昭和7)年2月、仙台の15の小学校、5つの男子中等学校、8つの高等女学校の総数18,659名に対して知能検査が行われた。知能検査では、得られた諸結果をあらゆる角度から比較・分析することによって、すなわちデータの一般化によってその科学的価値を高めることが目指されている。本論では「学年ごとの知能指数」、「年齢ごとの知能指数」、「学年に応じた知能分布」、「年齢順の知能分布」、「男子生徒と女子生徒の比較」、「知能検査と学校成績との関係」といった項目が設けられ、データが詳細図表化されている。

B-77

■ Inouye, Tetsujiro :Die Anfänge des Studiums der deutschen Sprache in Japan., In: Nippon, 1, Berlin 1935.01., S.18-32.

■ 井上哲次郎「日本におけるドイツ語研究の端緒」

【目次・見出し】なし

著者井上哲次郎(1855-1944)は哲学者で東京帝国大学の教授。

日本でドイツ語研究に初めて従事したのは、市川兼恭(1818-1899)と加藤弘之(1836-1916 国法学者)である。前者は蕃所調所教授職、後者はドイツ語研究の創設者として知られている。それまでオランダやイギリスから文化等が輸入されていた関係から、オランダ語研究や英語研究が主流だったのが、彼らを端緒としてドイツ語研究が活発化していった。その背景には、加藤自身が東京帝国大学の総長であったこと、また憲法の体系をドイツで学んだ伊藤博文がドイツの科学的研究を高く評価したことがある。とりわけ医学界でのドイツ語研究は大きな発展を見せた。お雇い教師としてあるドイツ人医師が招聘されたのを契機に、その後も常にドイツ人医師が呼ばれるようになった。この傾向はその後、医学以外の分野にも浸透していった。海外留学もイギリス留学からドイツ留学へとその形式を変えていった。

B-82

■ Kuribayashi, Uichi :Intelligenzprüfung von Volksschulkindern, Mittelschulern und -schlerinnen, sowohl in einer kleinen Stadt, als in einem kleinen Dorf in der Provinz Miyagi., In: Tohoku Psychologia Folia, 4, 1936.02, S.71-92.

■ 栗林宇一「宮城県付近の小中学生の知能検査」

【目次・見出し】

I. 目的

II. 方法論

III. 受検者

IV. 検査官

V. 実施

VI. 結果

栗林宇一：東北帝国大学心理学研究所所属。本論文の出版に数ヶ月先立って、日本国内では同著者による論文「宮城県下一小村及び小都市の小学校並に中等学校に於ける智能検査に関する報告」（齋藤報恩会『学術研究報告』第21巻、1936年12月）が出版されている。

1932（昭和7）年の仙台での知能検査（B-70）と同様の観点・目的から、1934（昭和9）年2月に小中学校の総数2,349名の男女に対して知能検査が行われた。検査結果は、「学年ごとの知能指数」、「年齢ごとの知能指数」、「学年標準と年齢標準との比較」、「学年に応じた知能分析」、「年齢ごとの知能分布」、「知能検査と学校成績の関係」といった項目に分けられ、データもそれぞれ詳細にデータ化されている。データの比較・検討の方法は前回のものとほぼ同じだが、今回は前回の仙台市でのデータもその対象として取りいれられており、市町村の比較が行われて、図表化されている。

B-83

■ Minouchi, Teruko :Entwicklung und gegenwärtige Lage der medizinischen Frauenhochschule in Tokyo., In: Ärztin, 12, Berlin 1936.04., S.75-84.

■ 「東京女子医学専門学校の発展と現状」

【目次・見出し】

A. 日本の女子医学生の歴史についての概説

B. 東京女子薬専門学校の起源と発展

1. 第1期 東京における女医学校 1900-1912
2. 第2期 東京における女医学校 文部省認可前 1912-1920
3. 第3期 東京における女医学校 文部省認可後
4. 大学登校のための規則およびそれ以外の規則と施設
5. 学問上の暦年
6. 医学部の時間割
7. 受入条件
8. 研究費
9. 外国の女子学生の入学許可に関する規定
10. 学期末試験と卒業
11. 自由な研究のための学部
12. 臨床実験所
13. 奨学金の貸与
14. 実践的な研究の可能性

15. 女学生の組織

16. 大学生の戦略

著者は京都帝国大学医学部女医。

本論ではまず日本の女子医学生の歴史についての概説がなされている。この考察は、大宝律令において女医の存在がすでに認められることから、奈良時代に始まり明治時代にまで至る。維新後の女医については、女性で第一号の医籍登録者となった荻野吟子(1851-1913)や医学校への女子入学の道を開拓した高橋瑞子らを紹介。次に、東京女子医学専門学校の起源と発展について考察している。まず、その起源として東京の女医学校が、それから東京女子医学専門学校の制度が考察されている。後者の考察では、医学校の規則と施設、カリキュラム、受入条件、外国人女子学生の入学許可に関する規定、学期末試験と卒業、臨床実験施設、奨学金、附属施設、女子学生の組織等々と多岐にわたって詳述されている。

B-84

■ Nakamura, Murao :Ayako Tanahashi, die älteste Lehrerin in Japan., In: Nippon, 1936. 07, S. 31.

■ 「日本最初の女性教師、棚橋あやこ」

【目次・見出し】 不明

著者は雑誌「新潮」の編集長、中村武羅夫(1886-1949)と推察される。

B-85

■ Tamiya, Hiroshi :Das Tokugawa Biologische Institut., In: Der Biologe, 5, 1936. 09., S. 303-306.

■ 田宮博「徳川生物学研究所」

【目次・見出し】 細胞学研究 生理学研究 微生物および病理学研究

田宮博 (1903-84) : 東京帝国大学植物学研究所および徳川生物学研究所所属。細胞生理化学者。

徳川生物学研究所は日本唯一の独立した生物学の科学的研究に貢献している施設である。本論では、まず当研究所の変革、発展の歴史が概観されている。当研究所は植物生理学者徳川義親によって 1917 (大正 6) 年に設立され、翌年には大規模の研究所へと改変、そしてそのもとで多くの研究者たちが植物学、動物学、細胞学、微生物学を研究した。1931 (昭和 6) 年には抜本的な改革が行われ、図書館や博物館といった附属施設が設置された。研究所ではその成果として「徳川生物学研究所報告」と「徳川研究所の研究」が発行された。本論では、さらに細胞学研究、生理学研究、微生物学・病理学研究について、それぞれの成果についても詳述されている。

B-88

■ Nasani, Fujito :Was nützt mir die Kenntnis der deutschen Sprache innerhalb und außerhalb meines Berufes?, In: Japanisch-Deutscher Geistesausch, 8, 1937, S. 21-25.

■ 「職内外でドイツ語の知識は何に役立つのか？」

【目次・見出し】 不明

B-90

■ Mita :Technische Erziehung in Japan., In: Rundschau Technische Arbeit, 17, 1937.02., S. 2.

■ 「日本の技術教育」

【目次・見出し】 技術学校 技術単科大学 高等学校組織と結びついた大学および単科大学 技術研究所

著者については不詳。

1936 (昭和 11) 年 12 月 5 日、ベルリンで日独技師共同会議が開催され、日本大使の武者小路公共伯が参加、また神戸商船大学の著者が日本の技術教育の構造について発表した。本論文はそのときの講演内容を著者みずからが記したものである。ここでは、明治期に創設された諸学校、つまり技術学校、技術大学、単科大学、技術研究所等がそれぞれ制度的な側面から紹介され、また海外へ派遣された 3,000 人もの教養人についても言及されている。

B-92

■ Hasegawa, Nyozeikan :Mädchenerziehung in Japan., In: Nippon, 10, 1937.03, S. 4-9.

■ 長谷川如是閑「日本の女子教育」

【目次・見出し】 不明

B-96

■ Kitayama, Junyu :Die Organisationen der japanischen Jugend., In: Wille und Macht, 5, 1937.06, S. 21-22.

■ 「日本の青年組織」

【目次・見出し】 不明

B-102

■ Mushakoji, Graf Kintomo :Austausch von Schularbeiten zwischen Japan und Deutschland. Ansprache des japanischen Botschafters., In: Die zeitgemesse Schrift, 42, 1937.07., S. 3-4.

■ 武者小路公共「日本とドイツ間の生徒作品による交流。日本大使のスピーチ」

【目次・見出し】なし

著者は武者小路実篤の実兄で、外交官であった武者小路公共。本論を執筆のときは大使。ドイツ側の興味に応じて、東京国際文化振興会によって日本の生徒作品の展示会が開催された。また、ベルリンの日本研究所でもドイツ人生徒の作品が展示された。本論では、このような交流に対する著者の理念や意見が記されている。著者は次のように述べている。思考の柔軟な若い間に、互いにそれぞれの文化にかかわり、知ることが重要であり、この展示会は両国の訪問者にそのような熟考のきっかけを与える、つまり日独間のすばらしい関係をより信頼の大きいものとして、また親しみ深いものとして構築するのに貢献するという点で重要であると。また、このような交流を密にしていくことによって、国家もまた大きく成長すると述べている。